
薔薇のマリア
X.黒と白の果て
Ao Jyumonji 十文字青
A BRAVE HEART OF RED ROSE
Even in the transient reality, we all have our own lives worth loving, protecting, and respecting.
角川スニーカー文庫


chapter.6
告白の理由
ふと右に顔を向けたら、憑き物が落ちたようなまっすぐで透明なアジアンの眼差しにぶちあたって、思わずたじろいでしまいそうになった。
何だろ、これ。
すっごくやりづらいかんじなんですけど。
A BRAVE HEART OF RED ROSE
Even in the transient reality, we all have our own lives worth living, protecting, and respecting.
薔薇のマリア
X.黒と白の果て



サンランド無統治王国首都エルデン
アンダーグラウンドD8
〝怪虫の坩堝ガンズゲイル〟
僕は他のみんなと違って何か特別なことができるわけじゃないし、口だけ達者で、生意気なだけが取り柄のガキにすぎないかもしれないけど、会わせてあげたい。きみは僕のせいで大切な人を失った。でも、その罪滅ぼしなんかじゃない。何かをすれば、それで帳消しになるとも思わない。
ただ、会わせてあげたい。
すぅ、と息を吸う音がした。
アジアンは前に向きなおった。
「ベティ、ヨグ」
このタイミングで名を呼ばれるとは予想していなかったのか、二人とも意表を突かれたような顔で振り返った。
「ボクはこの手に握りしめているものを捨てたりしない。そのすべてを。決して。何があろうとも、ネ。そうしようと考えることも金輪際ない。そんなことはできないとわかったんだ。ようやくわかった」
それからアジアンは、頼む、と力強く言って、あとはもう振り返ることも立ち止まることもなく、まっすぐ歩いていった。
その手には何が握られているのだろう。
昼飯時(ランチタイム)と、あとは何が――

chapter.10

あふれて止まらぬこの思い



肩に手がふれた。
どこまでもやさしい手だった。
その手をぎゅっと握って頬をよせた。
なんで自分がそんなことをしたのか
わからない。
でも、そうしたかった。
ただそうしたかった。

薔薇のマリア

X．黒と白の果て

十文字　青

角川スニーカー文庫

A BRAVE HEART OF RED ROSE X

–Black × White—"GAME OVER"–

Ao Jyumonji

First published 2008 in Japan

By

Kadokawa Shoten Publishing Co.,Ltd.

illustration : BUNBUN

design work : design CREST

A BRAVE HEART OF RED ROSE

X

CONTENTS

CONTENTS

A BRAVE HEART OF RED ROSE

X

MAIN CHARACTERS



Azian
アジアン

参加者(プレイヤ)——【鍵 アトル】



Mariarose
マリアローズ

参加者(プレイヤ)——【目 カル】



Betty
ベティ

参加者(プレイヤ)——【杖 エル】



Yurika Snow-white
ユリカ白雪

参加者(プレイヤ)——【竜 ラル】



Fei Yang
飛燕(フェイヤン)

参加者(プレイヤ)——【大剣 ハイアル】



Yog Floo-Yo Maid'orf Psychengren'Meiselch
ヨグ・フローヨ・メイドルフ・サイケングレンマイセルヒ

参加者(プレイヤ)——【玉 ナル】



Jin Wang
荊王(ジンワン)

参加者(プレイヤ)——【星 フル】



Pimpernel
ピンパーネル

参加者(プレイヤ)——【双剣 サイアル】



Katari
カタリ

観戦者③



Safinia
サフィニア

観戦者②



Tomatokun
トマトクン

観戦者①



Molly Lips
モリー・リップス

タオル一枚。



Aczel
アクゼル

ゲイム進行係。



Ruvy Bloom
ルヴィー・ブルーム

ゲイム主催者。

and the others

Rogan
ローガン

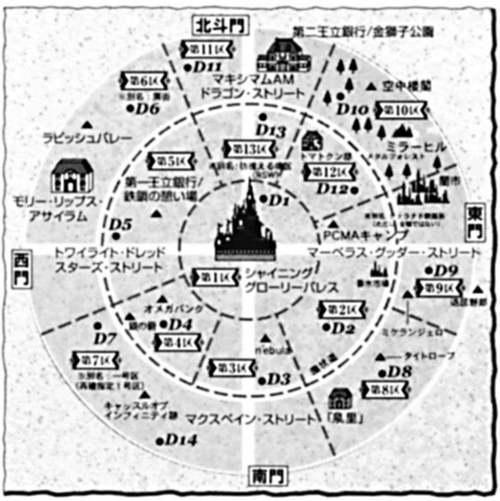
Beatrice
ベアトリーチェ

Naji
ナジ

and etc.

The World of "A BRAVE HEART OF RED ROSE"





Elden : the Metropolitan area of Sunland Unreign Kingdom

サンランド無統治王国 首都エルデン

MAP製作／On Graphics

Omenage 897 12th revolution 6th day

サンランド無統治王国首都エルデン・アンダーグラウンドD8

〝怪虫の坩堝ガンズゲイル〟

chapter.1

還らざりし者の詩

　名を呼ばれた瞬しゅん間かん、全身の細さい胞ぼうが一いつ斉せいに震ふるえだして、その振しん動どうで脳がとけ、血液は沸ふつ騰とうして、それまで遥はるか彼方かなたで明めい滅めつしていた光ともつかない光が大きく、とてつもなく大きくなって、その光はあっという間におれを包みこんだ。ああ、これだ、これだったんだ、と理解した。そのことを全世界に知らしめるために、叫さけびたくて叫びたくて、どうしようもなくなった。

　きみはおれに似ている。見た目はもちろんまったく似ていないし、似ていない部分のほうがずいぶん多いかもしれない。それでも、やっぱり似ている。似ている部分がある。おれはそれを感じていたし、ひょっとしたら、きみも同じかもしれない。

　きみはそれをひた隠かくしに隠している。おれもそうだ。誰だれにも知られたくないことがあって、嘘うそをつかないと生きていけない。おれの生しよう涯がいがまともな人の目にはどう映るか。それくらいおれにもわかっている。おれが手にかけた人数や、その顔ぶれ、その方法をつまびらかに語ったら、大半の人間は顔をしかめるだろう。いや、それだけじゃとてもすまないだろう。

　八歳のときに初めて近所の女の子を殺して細切れにしてばらまいてから、おれはたくさん、それはもうたくさんの人間を殺してきた。正直に、正直に言おう、どうして殺したのか、なぜ殺さないといけなかったのか、おれにはわからない。さっぱりわからない。ただ、それはおれにとって正しいことだった。とても正しいことのように思えて仕方なかった。誰も理解してくれないかもしれない。たぶん、無理だろう。おれも、これはあくまでおれにとっての正しさで、他ほかの人たちにとっての正しさとは重ならないことを知っている。喜んでおれに殺された者は一人もいなかった。きっと殺されたくなかったんだろう。死にたくなかっただろう。わかっている。わかっているのに、どうしておれは殺さないといけなかったのか。何がおれにそうさせたのか。ここに圧あつ倒とう的な闇やみがあるとして、でも、それが自分にとっては唯ゆい一いつ無二の光だとしたら、どうすればいい？　いったい、どうすれば……？　おれは—つまり、おれはね、おかしいんだよ。おれの、おれのような人間は、死なないと治らないね。いや、死んでも治らないだろうね。だからね。消えるしか、消えるしかないんだよ。そうだろう？　ねえ、そう思うだろう、クラニィ？　自分ではどうしようもない。どうしようもないんだ。わかってはね。いるんだけどね。おれのやり

方が一いつ般ぱん的じゃないってことは。相手が望んでいないってこともね。望まれていないこともね。誰も、誰も、おれを望んでいないこともね。おれの正しさを。だとしたら、それは正しいことじゃないのかもしれない。おれだってそう思うよ、でもね。おれには見えるんだ。いつも、いつもちらついてるんだ。消えてくれない。どうやっても消えてくれないんだよ。あの風景が。あの場面が。あの赤黒い死し屍し累るい々るいの荒こう野やが。

　手を引かれて歩いていた。

　どこかから、どこかへ、逃にげている最中だったのかもしれない。

　あれは本当にあったことなのか、どうか。

　わからない。

　でも、おれは歩いていた。

　人間がいっぱい死んでいた。いっぱい、いっぱい死んでいた。蠅はえがそこらじゅうで渦うずを巻いていた。蠅以外の虫も飛び交かい、這はいまわっていた。鳥や獣けものが屍し肉にくをついばんでいた。鳥や獣を追い払はらって死体を漁あさる人間もいた。とてもくさくて、曲がりそうになった鼻はそのうち麻ま痺ひした。おれは疲つかれていた。かわるがわるおれの手を引く父親と母親も飢うえ、渇かわき、疲ひ弊へいしきっていた。おれは何度も足首をつかまれた。まだ死んでいない死体の仕し業わざだった。おれが叫ぶと、父親がおれの足首をつかんでいるまだ死んでいない死体の手を蹴けった。ときには踏ふみにじった。呻うめいたり悲鳴をあげたりするまだ死んでいない死体もいた。何人かのまだ死んでいない死体は、それきりぐったりしてちゃんとした死体になった。

　空は晴れていた。

　晴れ渡わたった空をうつろな目に映して、今まさに息絶えようとしているまだ死んでいない死体が、単なる裂さけ目のような唇くちびるを動かした。

　声は聞こえなかった。今も聞こえない。

　やがて瞳どう孔こうが開ききった眼球に蠅がとまった。蠅はさかんに両手をこすりあわせた。

　自分ではどうしようもないんだよ。我が慢まんしようとはするんだ。だけど、そのうちこらえきれなくなる。

　もっと我慢しろ。

　抑おさえきれないんだ。

　甘ったれるんじゃねえ。やり抜ぬけ。我慢しとおせ。阿あ呆ほうが。くだらねえことをぬかすんじゃねえ。やばくなったら自分の手でも足でも切り落とせ。本当に我慢したいっていうなら、限界になったら自分で腹かっさばいて死ね。今、死にたいか。やっぱりおれには無理だとあきらめるか。いいぞ。死にたいなら、殺してやらんでもない。

　ああ、でも、きみは、クラニィ、きみはもういない、どこにもいない。

　仲間だった。友だちだった。きみのおかげで、おれは変わることができた。変わったつもりだった。変わったつもりになれた。おれはおれを騙だますことができた。クラニィ、きみがいたからだ。どうしてか、わかるかい。ねえ、アジアン。アジアン。アジアン。きみならわかってくれるはずだよ。そんな気がするんだ。おれたちは似たもの同士だからね。クラニィはね、知っていた。ちゃんとわかってたんだ。おれは変われない。本質から徹てつ底てい的に変えてしまうことなんてできっこない。おれは我慢していただけなんだ。抑えていたんだ。おれは必死におれを殺していた。クラニィは知っていたんだ。そのことを知っていた。だからといって、おまえは汚きたならしいおぞましい醜みにくい手の施ほどこしようのない改善の余地がないこの世にいないほうがいい人殺しだなんて言わなかった。そんな目でおれを見なかった。知っていたはずなのに。

　クラニィはおれを受け容いれてくれたんだ。だから、それがどうしたんだ、という態度だった。べつにいいじゃねえか。お前さんはお前さんなりにがんばってるんだ。そう言って肩かたを叩たたいてくれる男だった。肩を抱だいてくれさえする男だった。自分の娘むすめを抱かせてくれた。この殺さつ人じん鬼きに。かわいい娘を抱かせてくれたんだ。何もかもわかった上で。覚かく悟ごの上で。おれはだから、期待に応こたえようとした。だからがんばれたんだよ。クラニィ、きみがいたからなんだ。

　そのきみがいなくなってしまった。

おれは失ってしまったんだ。

大事なものをなくしてしまった。

しょうがないことだ。しょうがない。

おれは恨うらんでいるわけじゃないんだ。ただ、事実なんだ。おれはきみを失った。きみがいなくなった途と端たん、おれのこの目に映ったのは、愛いとしくて愛しくてたまらない、おれを信じきっているか、信しん頼らいはしていなくても油断している、無防備な、かぎりなく無防備に近い、仲間たち、もしかしたら友と呼びうるのかもしれない者たちだった。

世界が一変した。いや、世界が変わったわけじゃない。変わったのはおれだ。違ちがう。おれは変わってなんかいない。剝はぎとられただけだ。仮面を。もしくは、全身を覆おおう皮を。おれはそれを押さえつけて、しっかりと縫ぬいつけて、自分の一部にすることができていたのに、突とつ然ぜんできなくなった。それだけなんだ。おれはだから、恨んでなんかいない。誰も憎にくくない。ただどうしようもないんだ。どうにもできないんだ。アジアン、きみならわかるだろう？

おれは知っているんだ。

きみの中にいるもう一人のきみ、本当のきみ、きみの一部分、きみの側面、何でもいい、呼び名なんかどうでもいい、とにかくおれは知っているんだ。

得物は何でもよかった。斬きれ味にも興味がない。手に馴な染じむものであれば何でもいい。用意した四振ふりのモトロール刀はどれもだいぶ血を吸っている。何人も殺したからだ。それはそれはたくさん殺した。無む軌き道どうに殺した無計画に殺した無む慈じ悲ひに殺した無む邪じや気きに殺した。この何日か何十日か何巡じゆん月げつかで無む闇やみやたらにだいぶ殺した。こんなに殺したことはない。こんなに殺すことしか頭になかった日々はかつてない。理由なんか考えなかった。考えなくてもわかっていた。おれは殺したくて殺したくて殺したくてたまらなくて、でも、殺したくなくて殺したくなくて、愛する仲間たちを、もう仲間と呼ぶことはできない彼らを、彼女らを殺したくなくて、それだから殺して、殺して殺して殺して殺した。おれは幻まぼろしのベティを殺して幻のダリエロを殺して幻のリキエルを殺して幻のカイを殺して幻のナツコを

ヴィクトリアをリー・ブラックをシャマニをリョーヨルカをロロをトトをオーノをジャン・スタンバックをドルゲイをヘンドリクをメツェルディをラギィをキューレイを寂星ジヤクセイを雷切ライキリを祝花ノリカを毛モウをボダダグをチェリーをシュトレーハウゼンをアンガルセンをポーをクルガイスをボンドをミョーチをアルバートを白妙シロタエをレイジ兄妹をクララをサイケングレンマイセルヒをそれからギャンガーをコリンをデ・ペドロを殺して、それから、それから、クラニィ、きみはもう死んでしまっているから殺せなくて、ああ、アジアン、きみを、アジアン、きみを何度も何度も殺そうとした。

　ダメだ。殺せない。きみは殺せない。アジアン。おれは悟さとったんだ。殺せない。おれにはできない。なぜなら、どうしてかといえば、きみは強い。アジアン。おれはもっと強くならないといけない。こんなことを思ったのは初めてだ。強く、強く、強く、強くならないといけない。強くなりたい。きみを殺せるほど強く。そうしてきみをきみをアジアンをアジアンをアジアンをアジアンアジアンアジアンを殺したい殺したい殺したい殺したい殺したい殺したい！

　声をかけられたんだ。

　天てん啓けいみたいだった。

　黒くて赤くて金色に輝かがやく目をした男が、誰だれかを、ああ、あいにく、誰か、としか言えない、覚えていないから、その誰かを殺して殺して殺している最中に声をかけてきたんだ。アジアンを知っているのかい。アジアンを殺したいのかい。どうしてそう思うんだい。だってアジアンアジアンアジアンアジアンとつぶやいていたからね。あはははは。そうか。そうか。そうだったんだね。そうだよ。そうだ。おれは殺したいんだ。アジアンを殺したいんだ。だって、殺すしかないじゃないか。それ以外にどうしろっていうのさ。他ほかにどんな道があるっていうのさ。あるなら教えてくれよ。どうか教えて欲しい。もうおれのすべてはそっちを向いているんだ。走りだしているんだ。止まらないんだ。止めようがないんだよ。見て。見てよ。この身体からだ。恐おそろしいほどよく動くんだ。自分でも信じられないんだ。おれはこんなに速かったんだ。おれにはこんなすごい力があったんだ。これならやれるかもしれない。アジアンを殺せるかもしれない。そのことを考えるとおれはもう、もうたまらなくてたまらなくてたまらないんだ。

　会いたかったよ。会いたかったよ、アジアン。会いたくて会いた

くて会いたくてさ。きみに会いたくて会いたくて仕方なかったよ。

　おれは右手に長いモトロール刀を、左手に短いモトロール刀を持って、この喜びを歓かん喜きを喜き悦えつを胸むねーいつ杯ぱいの愉ゆ悦えつを歓かん楽らくをどうやって表現したらいいかと思い、わくわくどきどきしている。その方法はでも、もう決まっている。おれは正直、そのことばかり考えていたんだ。ずっと考えていたんだ。おれはもう頭の中でなんべんきみを殺したか知れないし、おれも何度となくきみに殺されたし、その過程や結果の妥だ当とう性について何回も何回も検討したし、結局やってみないとわからないなんてあたりまえの結論しか出せなくて、おかげでおれの胸はこんなにも躍おどっているんだ。ようやくだ。やっとだ。このときがきたんだ。嬉うれしいよ。涙なみだが出そうだよ。

「さあ、やろうかアジアン」

「ああ」

「行くよ」

　一気に距きょ離りを狭せばめて、アジアンに肉にく薄はくして、おれは刀を使うことなんてまったく忘れていた。おれは嚙かみつこうとした。アジアンの鼻はな面づらに嚙みつこうとした。アジアンはほんの少しだけ下がって紙かみーひと重えでおれの歯を、上の歯と下の歯をかわした。おれがその瞬しゅん間かんに覚えたのは間ま違ちがいなく食欲だった。アジアン、ああ、アジアン、きみはなんてうまそうなんだ。おれは舌なめずりして両手の刀を振りまわした。アジアンは後退した。アジアンが飛びさがったぶん、おれは進んだ。近づいて刀を振った。振って振って振った。飽あかずに振りまくった。

「──ローガン！　あんた……！」

　聞き覚えのある声がした。おれは刀を振っていた。いいかんじで振っているのに、そうとういいかんじでビュンビュン振れているのに、アジアンにはかすりもしない。アジアンは無表情で、どこを見ているのかすらわからないような顔つきで、おれの刀をよけている。そうか。こんなものじゃダメなんだね。わかってるよ。わかってるさ。そこで、おれは速度を上げる。威い力りよくを上げる。踏ふみこみを速くして、深くして、斬ざん撃げきの一振り一振りにもっと力を、鋭するどさを加える。アジアン。どうだい、アジア

ン。おれの右手と左手が別々の生き物みたいにぐねぐねと自由自在に動きだしただろう。おれは考えなくていいんだ。何も考えなくても、こいつらは動いてくれるんだ。限界なんかないんだ。おれは倒たおれこむようにしてアジアンに突つっこんでゆく。右手の刀が、左手の刀が、同時にアジアンに襲おそいかかる。上から下から右から左から斜ななめから襲いかかってゆく。右手の刀が地面をガガガガ削けずる。左手の刀がグルグル回っている。下から跳はねあげてそこから打ちおろした右手の刀が、アジアンの頬ほおをスッとかすめた。その白い頬に赤い線が走った。赤い、線が。その瞬間だった。その瞬間、アジアンがほんの少しだけ目を見開いて、薄うす青あお色の瞳ひとみにある光が宿った。

　ああ、ああ、きれいだ。

　それは残ざん酷こくな光だ。とても冷れい酷こくな光だ。そして喜びの光だ。

「ローガン……！」

「そうこなくっちゃ」

　おれは受け止めていた。アジアンがぐっと前に出てきて短たん剣けんを突きだしてきた。その剣身を左手の刀で防いでいた。アジアンの短剣はあっという間におれの刀の鍔つばに食いこんだ。なんて鋭い突きだろう。おれは失禁しそうになった。嬉しくて、嬉しくて、漏もらしてしまいそうだった。きみの身体は細いのに、すごい力だ。すごい力だよ。おれは左手の刀を捨てて、右手の刀できみの胴どうを払はらおうとした。きみは下がってよけた。おれはその間に地面に突き刺さしておいた別の刀を左手で抜ぬいた。きみにつめよって両手の刀を繰くりだした。

「亞！　亞！　亞！　亞！　亞！　亞！　亞！　亞！　亞、亞、亞、亞、亞、亞……！」

　一ひと振ふりごとに、一ひと突つきごとに、おれはきみの動きに慣れていった亞ぁ！　きみの動きに目がついてゆけるようになってきた亞ぁ！　おれの刀はきみが着ている服をかすめるようになった亞ぁ！　きみの髪かみの毛を何本か、いや、何本も何本も斬きった亞ぁ！　おれはでも、きみがこんなものじゃないことを知っている。ちゃんと知っている。きみの息がちっとも乱れていないことを知っているんだ亞ぁぁぁ！　おれはだから、もっと速く、もっと力

強く、もっともっと厳しくアジアン、きみを攻せめたてるんだ亞ぁ亞ぁ亞ぁぁぁ！　きみは逃にげている。まだ逃げようとしている。逃がさない。逃がさないよ。逃げないでくれよ。アジアン、逃げないで。

　逃げ場なんてないんだよ。

　どこにもないんだよ。

　そうだろう。

　そうだろう、亞亞亞亞亞亞亞亞ぁぁぁァァアジアン。

「亞、亞、亞、亞、亞、亞、亞、亞、亞、亞、亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞ぁぁぁ……！」

「──くっ……！」

　おれの右手の刀がアジアンのこめかみをカッと削った。アジアンはそれでようやく決断したようだった。遅おそい遅い遅い遅いよ。決めてしまうと、でも、アジアンは速かった。消えた。見えない。どこだ。そう思った次の瞬間、おれの身体からだは回転した。足を払われたみたいだ。おれはそれでも刀を振ふりまわした亞ぁ亞ぁ亞ぁぁぁ……！　ぜんぜんあたらなかった。かすりもしなかった。おれが尻しり餅もちをついてすぐに立ちあがると、アジアンは距離をとっていた。短剣を左手に持ちかえている。その切っ先を、自分の右みぎ掌てにズブリと突き刺した。そう、そう、それだよ。それくらいしてくれないとさァァ。短剣が苦く悶もんしはじめた。短剣の柄つかに浮うきでているいくつもの顔がＧＹＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＨＹＵＵＵＵＵＵＵＵＵＵＵＵＵＵＨと呻うめいている。やつらはアジアンの血をすすって、それを養分として、形を変える。ほとんどアジアンの右手と同化して、剣身はのび、どんどんのびて、二メーテル以上になって、しかもその毒々しい深紅色クリムゾンに染まった刃はは何節にも分かれ、節ごとで自在に折れ曲がり、もはや剣とは呼びえないようなものへと化す。

「断末魔デスクライの剣・ソードかぁ」

　おれは笑う。

　にやりと笑う。

　これが笑わずにいられるだろうか。

「ようやくちょっとだけ本気を出してくれるみたいで、嬉しいよ」

「まだだヨ、ローガン」

　アジアンが右手を振った。

　断末魔の剣がやたらとすばしっこい蛇へびのように飛んできておれの右手の刀に絡からみついた。

　刀は簡単に粉こな微み塵じんになった。

「まだボクは本気じゃない」

「そうかい」

　おれは楽しくなって、楽しすぎて、あはははははと大笑いしながら飛びさがり、地面に突き刺してあった刀の最後の一本を右手で抜いた。抜くなりアジアンに向かって突とつ進しんした。おれはまだ、もっともっと速くなれるはずだし、力もたくさん残っているはずだから、そうした。おれはどんどん解放されてゆくようで、どんどん自由になって、本来のおれを取り戻もどそうとしていた。そう。これがおれだ。本当のおれだ。おれは、でも、本当のおれのままではしあわせになれないと思っていたけど、とんだ勘かん違ちがいだった。おれは、だって、しあわせだった。今のおれはとてつもなくしあわせだ。きっと、この地上でおれほどしあわせな者はいないだろう。少なくとも今、この瞬しゆん間かん、おれほど幸福を感じている者はどこにもいないだろう。クラニィ、おれは間違っていたよ。我が慢まんなんかするべきじゃなかったんだよ。おれは解き放つべきだったんだよ。何もかもを解き放って自由になるべきだったんだよ。そのために捨てないといけないものがあるのなら、捨てるべきだったんだよ。すべてを失ってもよかったんだよ。

　実際、おれはもう何もかもを失ったのだし、ぜんぶ失ったおれは自由で、どこまでも自由で、こんなに身体が軽くて、おれは速くて、しなやかで、抜け目がなくて、襲おそいくる断末魔の剣を両手の刀で打って、打って、打ち払って、アジアンに迫せまって、アジアンの回し蹴げりを横っ面つらに叩たたきこまれても、おれは強いから、ぜんぜん怯ひるまなくて、おれは突つきだすんだ刀を、両手の刀を、二振りの刀を、アジアン、アジアン、アジアン、アジアン

に突きだして、突きだして、アジアンはそれを間かん一いつ髪ぱつでよけて、かわして、右手を振りあげると、断末魔の剣が唸うなりをあげて猛もう然ぜんと、下から突きあげるように、猛もう襲しゅうしてくるその剣とは言えない剣を、おれは回かい避ひしない。そんな無ぶ粋すいなことはしないんだ。おれは両手の刀で受け止めた。断末魔の剣は曲がるから、受け止めた部分で折れ曲がっておれの顔面に襲いかかってきた。おれはそれをガッチリ噛かんでやった。顔を横に向けて、上の歯と下の歯でガッチリガチガチ噛み止めてやった。唇くちびるの両りよう端たんが、ちょっと、いや、かなりザクザク斬れたけど、おれは気にしなかった。気にならなかった。これくらいどうしたっていうんだ。

「ふがふがふが」

　そうしておれは何か言いながらアジアンに頭ず突つきを見み舞まうべく体当たりしていった。さしものアジアンも、自分の右手とつながっている断末魔の剣を封ふうじられているものだから身動きがとれなかった。それが断末魔の剣の弱点だということはわかっていた。わかっていたんだ。おれはそのことを何度も考えていた。アジアンを、アジアンを、アジアンアジアンアジアンを殺す殺す殺すために、考えて考えて考え抜いていた。知っていたかい、アジアン？

　自分の額をアジアンの顎あごにぶちあててやったその瞬しゅん間かん、おれは気持ちよくて気持ちよくてたまらなかった。こんなに気持ちいいことが世の中にあったのか。その直後、アジアンの右みぎ膝ひざがおれの顎にぶちこまれて、おれはやっぱり気持ちよかった。だって、すごい衝しよう撃げきだった。途と方ほうもない膝蹴りだった。おれはそれで両手の刀を取り落としてしまったけど、断末魔の剣だけはくわえたまま放さなかった。おれはアジアンを押し倒たおした。組み敷しいた。そうなるとかえって刀なんて邪じや魔まなだけだし、ちょうどよかったと思い、おれは笑った。とても嬉うれしくて楽しくて、ふがふがふがふが笑った。笑いながら、おれは殴なぐった。アジアンの顔面を殴った。

　殴った。

　殴った。

　殴った。

　殴った。

　殴った。

　殴った。

　おれは容よう赦しゃなく殴った。全身全ぜん霊れいの力をこめて殴った。ふがふが言いながらとにかく殴った。何発殴ったか覚えていないけど、ひたすら殴りつづけた。最初のうちはなんだか手て応ごたえが硬かたいというか、抵てい抗こうされている、反発があるというかんじだった。すぐになくなった。アジアンは人形みたいだった。もしかしてもう死んだんじゃないかと思った。だとしたら拍ひよう子し抜ぬけだ。がっかりだ。ひどい話だ。もちろんそんなことはなかった。ありえなかった。

　ちょっとだけ、おそらくほんの少しだけ、気が抜けたのだと思う。その隙すきをアジアンは見み逃のがしたりしなかった。急に右目が見えなくなった。右半分の視界が消し飛んだ。何をされたのか、おれはすぐに理解した。おれは一も二もなくアジアンから飛び離はなれた。断末魔デスクライの剣・ソードも口から放した。なんとか体勢を立てなおしてから、右目のあたりをさわってみた。おれの手はすでにアジアンの血やら何やらでぐしょぐしょにぬれていたけど、それでもおれの右目が大変なことになっているのはわかった。眼球がなかった。

　アジアンはもう起きあがっていた。

　その左手で握にぎり潰つぶしたものが何かなんて、考えるまでもなかった。

　おれの右の眼球に違いなかった。

「いやあ」

　おれはぐじゃぐじゃに汚よごれている両手で髪かみの毛の薄うすい頭頂部あたりを撫なでた。

「あぶなかったよ。もう少しで脳までやられるところだったね」

「ああ」

　アジアンは血のかたまりのようなものを吐はきだして、袖そでで顔をぬぐった。

　ひどいね。

　ひどい有様だ。

　いい男が台無しだね。

　でも、おれが思うにさ、今のほうがずっといい男だよ。

「──あんたたち……」

　また聞き覚えのある声がした。おれはそっちのほうを見た。

「あんたたち、何やってるのよ！　自分たちが何をしてるか、わかってるの……！」

「そりゃあ」

　おれは唇を舐なめた。眼球が抉えぐりだされた眼がん窩かから流れでる液体は苦かった。

「わかってるよ。殺しあいさ。そう見えないかい？」

「──ローガン……どうして……」

　ベティ。ああ、ベティ。きみらしくないな。そんな悲しそうな、つらそうな顔をするなんてきみらしくない。きみはとんでもなく頭がよくて、何でもお見通しで、いつも冷静で、取り乱したりなんかめったにしない、そういう女のはずだ。見たくないな。そんなきみは見たくない。だって、そう、胸が痛むからね。こんなおれでも胸を痛めることはあるんだからね。おれのせいできみがそんなふうになっているなんて、やっぱりつらいよ。今すぐ殺してやりたいくらいつらいよ。でも、その前にアジアンを殺さないとね。何よりもまずアジアンを、アジアンアジアンアジアンアジアンアジアンアジアンアジアンアジアンを殺して殺して殺して殺さないとね。

「アジアン」

　おれはやさしくそう呼びかけてアジアンに飛びかかった。アジアンは油断なんてしていなかった。断末魔の剣が放たれておれに絡からみついてきた。断末魔の剣はおれの背中から胸から腹にかけての皮ひ膚ふに肉にがっちりと食いこんだ。食い破りそうだった。おれはかまわなかった。

どうでもよかった。痛くはなかった。もう痛くなんかない。おれは断末魔の剣にがんじがらめにされたままアジアンに突つっこんでいった。アジアンの左ひだり拳こぶしがおれの鼻柱をぶん殴って、鼻骨が砕くだけて、おれは鼻で呼吸することができなくなったけど、それがどうしたというかんじだった。おれはアジアンに突っかかっていった。アジアンを突き倒そうとしたけど、そうさせてもらえなかった。アジアンは身体からだを捌さばいておれをかわして、断末魔の剣をぐっと引いた。おれの全身が悲鳴をあげた。でも、おれは悲鳴をあげなかった。おれは地面に倒れこんで、転がりながら断末魔の剣を手づかみにして引き剝はがしにかかった。悠ゆう長ちようにそんなことをしているおれを、アジアンが蹴けった。顔と言わず肩かたと言わず背中と言わず腹と言わず股こ間かんと言わず蹴って蹴って蹴りまくった。おれは痛くなかった。もう痛くなんかない。とうとう断末魔の剣を自分の身体から引っ剝ぱがして、剣身をわしづかみにして、その拍ひよう子しに指が何本か斬きり落とされてしまったので抱かかえるようにして、思いきり引いた。アジアンがバランスを崩くずして転びそうになった。そうだ。転べ。おれはもっと引っぱってやった。アジアンがとうとう転んだ。チャンスだと思った。おれは四つ足の獣けものみたいに、獰どう猛もうな肉にく食しよく獣じゆうみたいに、アジアンに食らいつこうとした。それが誘さそいだとは気づかなかった。本当にまったく気づかなかった。いやはや、たいしたものだよ、アジアン。きみってやつはすごいよ。すごすぎるよ。きみはおれほど得意じゃないんじゃないかと思っていたんだけどね。こういう泥どろくさい、めちゃくちゃな、技わざもへったくれもないただの取っ組みあいなら、一いっ切さいのお飾かざりを廃はいした殺しあいなら、もしかしたらおれのほうに少しだけ分があるんじゃないかと思っていたのにな。

大おお間ま違ちがいだったよ。

何も見えなくなった。

真まっ暗くら闇やみだ。

どうやらおれはまんまと誘いに乗ってアジアンに襲おそいかかろうとして、その出鼻をくじかれるように顔面に前蹴りか何かを浴びせられたらしい。まさか、あんな体勢からこんなに強きよう烈れつな蹴りがくるとはね。信じられないよ。信じられないけど、どうも事実みたいだ。

ぐしゃ、という音がした。

　後ろのほうだ。たぶん、頭の後ろのほうだと思う。

　でも、おれにはまだ何も見えないんだよ。

「──ったく、どうしようもないな、お前さんは」

　そうなんだよ。本当にそうなんだ。おれはどうしようもないんだよ。

「開きなおるんじゃねえよ、阿あ呆ほう」

　笑い声が聞こえた。

　低い笑い声だ。

　何度も、何度も聞いた。

　あの笑い声だ。

「そういうとこがよくないんだ、お前さんは」

　ああ、そうだね。そうかもしれない。きっと、そのとおりなんだ。

　わかってはいるんだけどね。わかっていたのにね。

「馬ば鹿か野や郎ろうだな」

　そうなんだ。

　本当に、そうなんだよ。

「なんで俺の友だちはみんなこう……いちいち世話が焼けるっていうかな」

　それは、でも、しょうがないよ。

　きみの周りには自然とそういう人間が集まってくるんだ。ようするに、きみが集めているようなものなんだ。

　それなのに、先にいってしまったりするからさ。

「俺の人生は俺のもんだ。お前さんたちの人生がお前さんたちのも

のであるようにな。何でもかんでも俺のせいにするなよ」

　してないよ。いや──、

　してるのかな。

　でも、恨うらんでなんかいないよ。

「恨まれちゃたまらん」

　だから、恨んでなんかないって。

　おれは感謝しているんだ。

　きみに会えてよかった。

「べつに嬉うれしかねえな」

　おれは嬉しいんだ。

　すごく嬉しかったんだ。

「やれやれ」

　ごめんね。

「謝るんじゃねえよ」

　でも、なんだか謝らないといけないような気がしてね。

「そんなことはないさ。お前さんはお前さんなりに、一いつ生しょう懸けん命めいやってきたんだろう」

　ああ──、

　そうなんだ。

　こんなおれでもね。

　精せい一いっ杯ぱいやったよ。

　その結果がこれだからね。

　どうしようもないよね。

　でも—、

　でも、さ。

　だけどね。

「ローガン」

　顔に、何かふれた。

「ローガン」

　手だ。

　こんなにやさしく誰だれかにさわられたことはない。

　こんなにやさしく名前を呼ばれたことが、かつてあっただろうか。

　左目を開けようとした。

　ぼんやりと何かが見えはじめるまで、ずいぶん時間がかかった。

　誰かに見下ろされているようだった。

　次し第だいにその誰かの顔がはっきりしてきた。

「大事な友だちのキミに、ボクは、こんなことしかしてやれない」

「……おれを」

　その先は言葉にならなかった。

　おれを、友だちと呼んでくれるのかい……？

　まいったな。

　せっかくきみの顔が見えたのに、また見えなくなっちゃったよ。

　きみは、でも、笑っていたね。

微笑ほほえんでいたね。

「ローガン」

ああ。

とんでもないよ。

こんなことしかしてやれないなんて、とんでもない。

ありがとう。

本当に、ありがとう。

「ローガン、最後にキミと──」

そうだね。

酒くらい飲みたかったね。

一杯でいいからさ。

でも、いいんだ。

もういい。

十分だよ。

みんなによろしく。

クラニィ。

やっときみに会える。



Omenage 897 12th revolution 6th day

サンランド無統治王国首都エルデン・アンダーグラウンドD8

〝怪虫の坩堝ガンズゲイル〟

chapter.2

何も知らないで

「ベティ」

　あいつは振ふり返って仲間の名前を呼んだ。凄せい惨さん。そんな言葉が頭に浮うかんだ。精せい巧こうで緻ち密みつという表現が人の顔に対する形容詞としてふさわしいのかどうかわからないけれど、とにかくそれくらい整っているあいつの顔が無残なまでにゆがんでいた。唇くちびるは切れて、右みぎ眉まゆの上がざっくり裂さけ、左目は瞼まぶたが腫はれてふさがりかけていた。鼻血だとか口からの出血だとかで顔中血まみれだった。あそこまでやられて、よく喋しやべれるものだ。ぼんやりそんなことを思った。表情なんてわからなかった。声も平板だった。恐おそろしいほど平べったい、何の感情もうかがわせない声こわ音ねだった。あいつの様子や声の調子だけでなく、みんな、誰も彼も凍いてついていた。広間には火が焚たかれていて暑いくらいなのに、凍こおりついてしまいそうなくらい寒かった。寒く感じた。本当は寒くなんかなかった。温度とか湿しつ気けとか、そういうものを感じとる余地があまりなかった。頭の中は空白に近かった。僕はどうしてこんな場所にいるんだろう。

「ローガンを燃やしてやってくれないか」

　あいつにそう求められて、ベティは何か答えようとして唇を動かし、その途と中ちゆうで寒気にでも襲おそわれたみたいにぶるっと全身を震ふるわせて、何かを振り払はらおうとするかのように頭を振った。あるいは、拒きよ否ひするみたいに。いやよ。なんであたしがそんな。ベティはそう言うのではないかと思った。違ちがった。そうじゃなかった。

「わかったわ」

　ベティの顔面は蒼そう白はくだった。炎ほのおに照らされていてもそれとわかるくらい青ざめていた。低い声だった。地の底から響ひびいてくるような、えらく重苦しい、やけにくぐもった、低い声だった。この人って、こんなに声、低かったっけ。

　ベティは壕ごうを飛び越こえてアジアンのそばまで歩いてゆき、つぶやくように、ひとりごとでも言うように何か唱えた。それは上古ハイ高位ロメ語オンの呪じゆ文もんに違いなかった。マリアローズは目をそらしてヨグを見た。ヨグは右手の人差し指で眼鏡めがね

の位置を直していた。いや、眼鏡のブリッジに人差し指をあてたまま、ただうつむいているだけだった。それでもヨグはちゃんと見ていた。ベティが魔ま術じゆつを発動させる場面を、眼鏡のレンズ越しにしっかりと見守っていた。マリアローズはとても見ていられなかった。そんなの、無理だよ。見ていられるわけがないよ。でも、どうして見ていられないのか、よくわからない。何がどうなっているのか。あいつはいったい何をしたんだろう。ローガン。あれは誰なんだろう。知りあい。友だち。そう。友だち。そんなことを言っていた。ちゃんとは聞こえなかったけれど、大事な友だちだって。

なんか、やだな。

考えたくない。

考えれば考えるほど、とんでもないことになってしまいそうで。

遮しや断だんしたい。思考を止めてしまいたい。マリアローズは口を手で覆おおった。唇が乾かわいていた。眩暈めまいがする。軽い吐はき気も覚えた。ローガン。殺した。あいつはその手で殺したんだ。友だちを殺したんだ。どうして友だちが？　何がなんだかさっぱりだ。考えるな。考えなくていい。そんな場合じゃないんだ。無理だ。考えるなんて。だって、立っているだけでやっとなんだ。ただここにいるだけで、そうとう無理をしている。正直、はっきりさせたい気持ちもある。よくわからないでもやもやしているよりは、いっそぜんぶ、何もかも打ち明けてもらって、自分がどう思うか、何を感じるか、どうするかはそれからの話で、どうなるにせよ、まずは事実が、事実関係がわからないと、どうしようもないわけだし。ああ、でも、わかってるんだ、本当はわかってる。どうしようもないんだ。これはきっと、どうしようもないことなんだ。僕がどうするとかそういう問題じゃない。どうにもならないんだ。だから、こんなに静かなんだ。誰だれも口を開こうとしないんだ。

状じよう況きようは最悪なんだ。

もとからよくなかったのに、もっと悪くなった。

たぶん、これ以下はないくらい、ひどいことになってしまった。

いったい誰のせいなんだろう。誰が一番悪いんだろう。

僕じゃなきゃいいけど。

反へ吐どが出る。

こんなときに、そんなことを思ってしまう自分が、気持ち悪い。

「ローガン」

ベティの声だった。

なんだか、懐なつかしむような、惜おしむような、悲しんでいるのに、その悲しみを押し隠かくそうとして失敗しているような、壊こわれかけて、でも必死に壊れてしまわないように取り繕つくろっている、強くて、やっぱり弱くて、脆もろく、はかない、今際の際の花のような、何かをかき抱いだこうとして、かき集めることができずに落とした一ひと粒つぶの涙なみだのような、そんな声だった。

「馬ば鹿かよ、あんた」

「お互たがい様さまサ」

あいつは少しだけ笑ったようだ。

他ほかにどうしようもなくて、笑うしかなくて、仕方なく笑ったみたいだった。

「ボクらは、みんな──」

それからあいつは息を吸いこんで、吐きだして、行こう、と言った。

ようやく顔を上げてあいつを見ると、身を屈かがませて何かを拾っていた。

首飾りチヨーカーだった。

あいつはそれを人差し指に引っかけて、一度だけ回してから、ぎゅっと握にぎりしめた。

場違いな拍はく手しゆが聞こえてきた。アクゼルの仕し業わざだった。頭にきたけれど、怒ど鳴なりつける資格なんて自分にはないような気がした。アジアンやベティも、振ふり返ってアクゼルに目をやっただけで、何も言わなかった。

「お見事。お見事でございました。おめでとうございます。第一勝負フアーストゲイムは皆みな様さま方の勝利でございます」

　誰かがため息をつく音が聞こえた。誰かはわからなかったけれど、自分じゃないことだけはたしかだ。ため息どころか、呼吸がうまくできない。息苦しい。酸素が薄うすいせいかもしれない。それ以外に何か原因があるのかもしれない。わからない。わからなくていい。

「それでは、早さつ速そくではございますが、第二勝負セカンドゲイムの会場へと移動いたしましょう。皆様に不都合がおありでなければ、ですが」

「さっさと案内しろ」

　アジアンの声はつめたかった。冷気そのもののような声色だった。アクゼルは、でも、怯ひるむ様子もなく平然と歩きだした。円形の広間の向こうに扉とびらがあった。どうやらアクゼルは、壕の外側を回りこんでその扉へと向かおうとしているようだった。マリアローズはアクゼルや他の皆みなについていったはずだが、誰が前にいて誰が横にいて誰が後ろにいたのか、まったくわからない。壕の内側を見た記き憶おくもない。アジアンやベティは、そこに横たわっている、もしくは横たわっていた誰か、ローガン、彼に、彼の亡なき骸がらに、残ざん骸がいに、最後に何か別れを告げたのかどうか。それもわからない。何も覚えていない。見なかったからだ。あえて見なかった。

　扉をくぐると、その先は狭せま苦くるしい通路だった。岩の天てん井じようにランプが吊つるされていて、明るさは確保されていたけれど、下り勾こう配ばいで足場はあまりよくなかった。そんなことはなぜかちゃんと覚えている。どうでもいいことばかり見て、聞いて、覚えている自分が、ひどくくだらない、とるにたらない存在に思えたし、自分の無価値さを否定する材料は、実際、どこにもなさそうだった。自分を責めるふりをしていれば、自己嫌けん悪おに陥おちいっていれば、それですむと思っているような、はっきりとは思っていないにしても、そうやって逃にげてばかりいる自分に、ユリカか、サフィニアか、ピンパーネルか、カタリか、誰でもいい、誰かやさしい声の一つでもかけてくれないかな。心のどこかでそんなことを期待している自分に、ほとほと愛あい想そがつきた。

　お願いだから、誰か、僕を責めてくれないかな。罵ののしってく

れないかな。ぜんぶおまえのせいだって言ってくれないかな。そうじゃないのかもしれないし、そうなのかもしれないけど、なんだかもう、そんなふうに言われたほうが楽だ。結局、楽になりたいだけなんだ。この苦しさから解放されたいんだ。それだけなんだ。ようするに僕は、誰のことも心配していない。自分のことだけだ。それしか頭にない。自分のことしか。そういうやつなんだ。僕はそういう人間で、それでいいんだ。それでいい。本当に、もうそれで。

　だって、想像なんてしたくない。今、あいつがどんな思いでいるかなんて、考えたくない。たぶん、考えたってわかりっこない。僕には受け止めきれない。不可能だ。無理だよ。

　通路はやがて広くなって、その先にまた扉があった。

　アクゼルはその前で立ち止まって振り向いた。

「この先が第二勝負セカンドゲイムの会場でございます」

「でェー」

　声をあげたのは飛燕フエイヤンだった。

「次はどォーんな勝負ゲイムなん？　そこんトコ、テキパキパッキリさせろよ」

「承知いたしました」

　アクゼルは扉の前からどいた。第一勝負フアーストゲイムのときと同じだ。扉に金属製の四角いプレートが打ちつけてある。やはり上古ハイ高位ロメ語オンで何か書かれているようだが、マリアローズにはまったく読めなかった。字じ面づらさえ頭に入ってこない。読む気がないのかもしれない。自分にも大いに関係があることなのに、なんだか他ひ人と事ごとみたいだ。

　これでいいんだろうか。

　よくない。いいはずがない。でも、どうしようもない。

　どうしようもないと思う自分が、どうしようもない。

「それでは、僭せん越えつながら、わたくしアクゼルが共通語に訳させていただきます」

アクゼルが縦に割れた口を不気味に動かして、立て板に水を流すように喋しやべりたてるルールを聞いていても、あまり実感がわいてこなかった。それでも一応、理解はした。

まず、第二勝負セカンドゲイムは二人で挑いどむ勝負ゲイムであること。相手も二人であること。それから、参加者プレイヤ二人のいずれかが首飾りチヨーカーを奪うばわれると、その時点で勝負は終しゆう了りようし、もう一人も首飾りチヨーカーを差しださなければならない。また、この勝負ゲイムに参加した者は、第三勝負サードゲイムと第四勝負フオースゲイムには出られない。

本当は、自分がこの勝負ゲイムに参加するべきかどうか、真しん剣けんに考えないといけないのに、そんな気にはまったくなれなかった。

どうせ今の僕には何もできない。何の役にも立たない。そんなことを言っている場合じゃないことはわかっているし、第一勝負ファーストゲイムの前にはずいぶんと偉えらそうな口を叩たたいていたくせに、こんなふうに腑ふ抜ぬけている自分が歯がゆくもある。でも、やっぱり無理なものは無理だ。こんな気持ちで何かするなんてできっこない。二人一組の勝負ゲイムだし、もう一人に迷めい惑わくをかけるだけだ。そうやって理由をつけて、言い訳をして、どこまでも、どこまでも、僕は逃げるんだ。

「ンじゃァ、オレが出とッかァー」

飛燕フエイヤンが右手で自分の左手を殴なぐって唇くちびるをぺろっと舐なめた。

「なァーんかよっくわっかんねェーけど辛しん気きくせェーっつーかなんつーか、フィーンキ悪ィーしよォ。ぱーっとしてェーかんじだし、もともとオレとしちゃァーバトバトしたくてきたわけで、黙だまってンのはつまんねェーしな。性しようにあわねェーんだよなジッセー」

「会場と当方の参加者プレイヤをご覧になってからお決めいただいてもよろしいのですよ」

「アホかテメー」

飛燕フエイヤンは顔をゆがめてアクゼルをにらみつけた。

「このオレサマがよぉ、バットバトしよぉーってトキにだぜ？　相手がどぉーとかドコでバトるとかンなコト関係あっかよ。つーかンーなのわっかんねェーほうが楽スィーっつーの。オレから楽しみ奪うんじゃねェーよバケモンの分際でよぉテメーから死なすぞオラ？」

「オッホッホッホッ。たいそう意い気き軒けん昂こうで結構でございますな」

「つーわけでオレは決ィーまりッと。あともぉー一人かァ」

　飛燕フエイヤンが横目で荊王ジンワンを見た。荊王ジンワンは色眼鏡サングラスをかけた顔を動かして、飛燕フエイヤンの視線を受け止めるだけは受け止めたようだが、うんともいやとも言わなかった。態度だけを見れば、ただこの場にいるだけで、何にも関心がなく、自分は無関係だと思っているかのようですらあるけれど、必ずしもそうではないらしい。荊王ジンワンはアクゼルに向かって軽く顎あごをしゃくってみせた。

「先に中を見せろ」

「かしこまりました」

　アクゼルが扉とびらを開けて、中に入るよう身み振ぶりでうながすと、アジアンとベティが並んで扉をくぐった。その後ろにヨグが、それから飛燕フエイヤンと荊王ジンワンがつづいた。マリアローズはユリカに肩かたを叩かれるまで動けなかった。慌あわててユリカとピンパーネルのあとに従いながら、アジアンとベティの後ろ姿を眺ながめていた。二人は視線をかわすわけでもなく、肩を並べているといっても、いくらか離はなれていた。それなのに、なぜだか身を寄せあっているように見えた。きっと同じものを背負っているからだ。もしかしたら、僕は勘かん違ちがいしていたのかもしれない。そうなりたいとか、なるといいとか、そんな気持ちはこれっぽっちもなかったけれど、いろいろあって、その結果として、あいつとの距きょ離りが近くなったような気がしていた。どういう間あいだ柄がらか、あいつをどう呼べばいいのか、ずっとわからなかったし、今もわからないけれど、名前をつけようとすれば何かつけられるんじゃないかと思いはじめていた。

　たぶん、ぜんぶ気のせいだった。

　あいつは遠い場所にいる。すごく、遠くにいる。遠くにいるあいつのことを、僕は何も知らない。どうしてベティがあんな態度なのか、腑ふに落ちた。あなたは何も知らないでしょう。知らないくせに、何なの。引っかきまわして、めちゃくちゃにして。きっとベティはそう思っているんだ。そのとおりだ。本当にそのとおりだ。弁解できない。しようがない。恥はずかしい。ものすごく恥ずかしい。今ここにいることが、恥ずかしくて仕方ない。

　第二勝負セカンドゲイムの会場は第一勝負ファーストゲイムの会場と違って四角かった。扉をくぐった先は会場の床ゆかよりも五メーテルほど高い場所にあって、会場全体を見み渡わたすことができた。幅はばは約十五メーテル、奥行きは二十五メーテルくらいあるだろうか。その会場を一周する手すり付きの通路が設けられていて、マリアローズたちはその一角にいる。

　マリアローズは誰だれの顔も見たくなかった。手すりから身を乗りだして下を見ると、褐かつ色しよくの床は平らでなめらかだった。やはり平らな天てん井じようように半永久灯か何かの照明が据すえつけられているので、会場はやや赤みがかった光に包まれている。

　相手の参加者プレイヤとおぼしき二人は、会場の真ん中あたりに腰こしを下ろしていた。一見、普ふ通つうの人間のようだったし、二人とも置物みたいに動かない。何だ、あんなやつらなのか。それが最初に抱いだいた感想だったが、目を凝こらして見ると、少し気味が悪くなってきた。

　相手はどちらも禿とく頭とうで、首にマリアローズたちと同じ黒い首飾りチヨーカーをつけているようだ。体格は一人が長身瘦そう軀く、もう一人はさして大おお柄がらではないものの、かなりがっちりしている。

　がっちりしているほうは上半身裸はだかで、それはまあいいとしても、目のところに包帯のような白い布を巻きつけてあった。あれでは何も見えないだろう。べつに見えようが見えまいが、こちらとしてはどうでもいいといえばどうでもいいのだが、問題はたっぷりした白い麻あさ服を身にまとっている背の高いほうだった。

　目がない。

　冗じよう談だんでも大おお袈げ裟さでも何でもなく、本当にない。

目があるべきところに何もなくて、つるっとしている。

そのかわりなのかどうか、耳がやたらと大きいのも異様だった。

がっちりしているほうは何も持っていないが、背が高いほうは金属製らしい角張った黒い棒を右手に握にぎって抱かかえるようにしている。

「一人は拳けん法ぽう使いで、もォー一人は棒術使いってカンジかよ」

飛燕フエイヤンは、へっ、と笑った。

「どっちも視覚には頼たよらねェータイプっぽいな。オレの師し匠しようのジーチャンも目ェーほっとんど見えてなかったし、まァ、マジクソ強ェーヤツならそンなんあんま関係ねェーっちゃァー関係ねェーかンな。とりあえずよォ、見た目はたいしたことなさげだけど、じつはマジクソ強ェーつー展開になることを祈いのるぜ。
弱ェーヤツとバトってもつっまんねェーしなァ」

「わたくしのほうから、簡単にではございますが、紹しよう介かいさせていただきます」

アクゼルが蝶ちようネクタイを引っぱって嘘うそくさい咳せき払ばらいをした。

「背の低いほうが兄のホワン、背の高いほうが弟のグウェンと申しまして、彼らはまごうことなき血を分けた正しよう真しん正しよう銘めいの兄弟でございます。ちなみに兄弟仲はすこぶる悪いようで、三度の飯より兄弟喧げん嘩かが好きという有様でございまして、ですが、喧嘩するほど仲がよいという言葉もございますから、本当は案外、固い絆きずなで結ばれた兄弟なのかもしれませんな」

どうでもいい紹介だ。あまりにどうでもよすぎて、ツッコミを入れる気にもなれない。もちろん、のんきにツッコミを入れるような空気でもないし、そんな心境でもない。

ため息をつきそうになって、さすがに自重した。

誰が出るんだろう。

どうでもいいはずがないのに、どうでもいい。

なぜか突とつ然ぜん、涙るい腺せんがゆるみそうになって、顔面の筋肉が引きつった。肺がおかしい。ひくひくしている。横おう隔かく膜まくの調子が変だ。マリアローズは手すりにつかまって何度か屈くつ伸しんした。自分がなんでそんなことをしているのか、さっぱりわからなかった。心と身体からだがばらばらになってしまったかのようで、いったいどうやって整合性をとればいいのか。もういい。どうなってもいい。僕が出る。そう言ってみようか。それも悪くないかもしれない。だって、これ以上耐たえられない。この先もずっとこんな状態がつづくなんて、考えるだけでぞっとする。ダメだ。投げやりになるのは勝手だけれど、今はダメだ。

　でも、本当にダメなのかな。

　いいんじゃないの、べつに。

　もしここで僕が殺されたって、勝負ゲイムはつづくんだ。大勢に影えい響きようはない。むしろ、邪じや魔ま者ものは、厄やつ介かい者ものは、役に立たない屑くずは、さっさと退場してしまったほうがいい。いっそ、そのほうがすっきりするはずだ。誰が？　誰がすっきりするって？

　僕が？

　僕自身が……？

「わたしが出るわ」

　嘘、と言いそうになって、うまく声を出すことができず、振ふり返った。

　ユリカはとくに意気込んでいる様子でもなかった。表情は引き締しまっていたけれど、灰色がかった青い瞳ひとみは静かに澄すんでいた。そして、その美しく凪ないだ両眼は、他ほかの誰でもない、マリアローズをしっかりと見すえていた。

　桜色の唇くちびるがそっと笑った。

「必じゅ勝ってくるから、ここで見ていて」

Omenage 897 12th revolution 6th day

サンランド無統治王国首都エルデン・アンダーグラウンドD8

〝怪虫の坩堝ガンズゲイル〟

chapter.3

友として

人として人に何ができるだろうと考え、医術士を志して、医術式を学んだ。

自分として自分をどうやって守るべきかと考え、トワニングに師事して、鵺ヌエ流古式戦闘術を身につけた。

仲間のために何ができるだろうと考え、仲間のために行動することが免めん罪ざいの灯火となって自分の道を明るく照らしてくれるような気がして、それに甘え、こんなわたしでもまっすぐ歩いてゆけるのだと自分に言い聞かせた。

わたしはとても幸せだ。こんなふうでも生きている。生きてゆける。仲間がいる。大好きな人たちがいる。みんなを守りたくて、みんなに守られてもいる。

そのあたたかさが、わたしの胸に突つき刺さる。

わたしは笑ってもいいの？

笑う資格がわたしにあるの？

そうじゃない。

わたしはユリカのかわりに笑っている。ユリカのために生きている。自分じゃない、自分以外の誰だれかのために。それがせめてもの償つぐないだから。それくらいのことしか、わたしにはできないから。

いつも言い訳ばかりしてきた。

言い訳しないといけないほど恵めぐまれているからだ。

だって、こんなに楽しいことばかりあっていいのだろうか。

サフィニアがＺＯＯに加わって、マリアと出会った。三人で買い物に行って、おいしいものを食べに行った。何もかもがきらきらした思い出で、忘れようにも忘れられない。何も特別なことはしなくても、たわいもないことを喋しやべっているだけであっという間に時間がすぎた。夜がきて一人きりになると、申し訳ない気持ちでいっぱいになって、必死に打ち消した。

　たしかに楽しかったけれど、それはあくまでユリカのかわりに楽しんだだけで。本当なら、これはユリカが味わっていたはずの幸せで、歩いていたはずの人生で。考えてみれば、とても楽しくはあったけれど、自分はどこか冷静で、心底から楽しんでいたわけじゃない。そこまで脳天気にはなれない。なってはいけない。なるわけにはゆかない。

　そんなふうに思ったところで、この身体をユリカに返してあげられるわけじゃないのに。

　すべて単なる自己満足だ。

　ごまかそうとしているだけだ。

　もういいよ、と夢の中でユリカが肩かたを叩たたいてくれる。いいよ、お姉ちゃん。あたしのことはいいから。もう十分だよ。見ていたくないよ。苦しそうなお姉ちゃんを見ているのは、あたしだってつらいよ。

　嘘うそだ。まやかしだ。ユリカはそんなことを言わない。言えるはずがない。

　ユリカはもういないからだ。

　鏡を見ればユリカはそこにいるのに、笑うことだって、泣くことだって、何でもできるのに、それでもユリカはいない。

　自分を騙だましつづけてきた。勇気がなかった。わたしは、ユリカのかわりに、じゃない、ユリカのおかげで生きているんだ。ユリカがわたしに命をくれたんだ。そう認めることができなかった。認めたくなかった。それがどういうことか、ようやくわかってきた。

　わたしはユリカのせいにしてきたんだ。

　この生き方を選せん択たくした責任を、ここにはもういない、いなくなってしまった、死んでしまった、まだ小さかった妹に、ユリカにかぶせてきた。

　わたしはずるい。卑ひ怯きよう者ものだ。

　せっかくわたしを生きのびさせてくれたのに、こんなお姉ちゃんでごめんね。ユリカのおかげで、たくさん楽しいことがあったのに

ね。大切な仲間に巡めぐりあうこともできたのにね。わたしはそれを素す直なおに喜ぶこともしないで、自分が生きているということの意味から逃にげまわってきた。

もう逃げない。わたしはもう逃げたりしない。他ほかの誰でもない、わたしが、自分自身が間ま違ちがいなく生きているということに、正面から向きあおうと思う。

わたしはＺＯＯの仲間たちが大切で、少し不器用な父親みたいにわたしを見守ってくれている、遠くにいてもわたしを思ってくれているに違ちがいないトワニングのことを考えると空を仰あおぐ力がわいてきて、トマトクンの広い背中は頼たのもしくて、カタリはまるで手のかかる弟のようで、サフィニアとマリアは、大事な、とても大事な、いつも一いつ緒しよにいても飽あきることのない、大好きな友だちだ。

みんなと出会えてよかった。本当によかった。

生きてきてよかった。

ユリカ。

あなたがくれたこの命に、わたしは心の底から感謝している。

いつかあなたの名前を捨てるかもしれない。

そのときがきたら、わたしはやっぱり泣いてしまい、足がすくんでしまうかもしれないけれど、やがて前を向いて歩きだすだろう。背中を押してくれる人たちもいるだろう。その人たちはわたしの手を引いてくれさえするだろう。

みんな。

とくに、サフィニア。そして、マリア。

あなたたちがわたしに勇気をくれた。

今、どうしてマリアがそんなに打ちひしがれているのか、くわしいことはわからない。だからといって、ここで事情を問うこともできない。でも、大好きな友だちだから、何かしてあげたい。あなたがわたしにくれた力を、今度は立ちすくんでいるあなたにわけてあげたい。

　こんなことしかできないけれど、わたしを見ていて。

　わたしは戦って、必ず勝ってみせる。

　大だい丈じよう夫ぶ。勝算もある。二人一組。一人はおそらく体術使いで、もう一人は棒術使い。わたしも人並み以上に棍こんを使える。それに、わたしには医術式がある。飛燕フエイヤンはああ見えて強い。ピンパーネルやアジアンと互ご角かくかどうかはわからないけれど、退かずに渡わたりあうことができる。身体からだは小さいのに力が強いし、技わざも冴さえている。何より度胸がある。わたしは飛燕フエイヤンの補ほ佐さに徹てつして、もし傷ついたら医術式で治ち療りようする。軽い負傷なら、秒単位の応急処置を施ほどこしてどうにかできる自信がある。自分で言うのも何だけれど、二人組の相棒として、わたしは適格だ。

「ンン～……」

　飛燕フエイヤンは唇くちびるをへの字に曲げて腕うで組ぐみをし、考えこむ仕種をしたが、すぐに表情をゆるめて、太陽みたいにニカッと笑ってみせた。

「まァ、相方がオレだしダイジョブかァ。つーかユリィ、超ちよう強ェーしなッ」

「はイ」

　うなずいてみせたピンパーネルの顔がほんの少しだけ引きつっていた。荊王ジンワンがやや落ちつかなげに色眼鏡サングラスの位置を直して小さく咳せき払ばらいをし、アジアンもうつむいて人差し指で頰ほおを搔かいた。

　ユリカは目を瞠みはった。アジアンの端たん整せいな顔は第一勝負フアーストゲイムで見るも無残にゆがんでいたはずなのに、今は少々印象が違う。唇は切れているし、だいぶ腫はれている箇か所しよもあるのだが、なぜか、それほどでもない、と思った。さっきはもっとひどかったような気がする。ユリカの勘かん違ちがいだろうか。気のせいだろうか。

「それでは、第二勝負セカンドゲイムに参加されるお二方はこれにて決定ということでよろしいですか」

　アクゼルが一つしかない奇き妙みような目でユリカと飛燕フエイ

ヤンを順々に見た。ユリカは首を縦に振ふろうとしたが、できなかった。かわりに、きゃっ、と短い悲鳴をもらしてしまった。

「イッチーチしつっけェーんだよいーっつってんだろタコ地蔵」

　気がつくと、飛燕フエイヤンに抱かかえられていた。

「え？　え？　え……？」

「しゃアァッ！　いっくぜェェーッ……！」

　飛燕フエイヤンはユリカを抱だきかかえたままぴょんと跳はねあがって手すりに足をかけ、そこからさらに跳ちよう躍やくした。何がなんだかわからないということはさすがになかったが、まったく心構えをしていなかったから、とにかくびっくりした。五メーテル以上ある高さからただ飛び降りるだけでなく、わざわざジャンプする必要がどこにあるのかと思いもした。身体が落下しはじめると、内臓がぐっと引っぱりあげられるような感覚に襲おそわれて、全身の毛穴がわっと広がるようなかんじがした。どういうわけか、それがちょっぴり気持ちよかった。

　不思議な男の子だ。

　お互たがい様といえばお互い様だけれど、これで同い年だし、男の子と呼ぶのは変かもしれないが、ユリカにとっての飛燕フエイヤンはやっぱり男の子だった。

　あれはダメ。これもダメ。できない。無理。だいたいの人はそんなふうに、いろいろなことを我が慢まんしたりあきらめたりして生きてゆくものだと思う。近づきたくても近づけない、そんなことはしょっちゅうだし、人を寄せつけないために壁かべを作ってその中に立て籠こもっていないと、誰かを傷つけてしまいそうで、自分も傷ついてしまいそうで、怖こわくて、安心できない。だからあえて、膝ひざを抱えて一人きりでいる日だってある。きっとみんな同じに違いないから、肩かたを叩たたこうとのばしかけた手を引っこめて、今はそっとしておこうと自分に言い聞かせる。たぶん、自分だけじゃない。みんなそれぞれに臆おく病びようで、引っ込み思案で、不安で、それでも寂さびしいから、苦しいから、おっかなびっくり誰かと手をつなぎたいと願っている。

　飛燕フエイヤンは違うのかもしれない。

とても強ごう引いんで、すごく自分勝手で、いつも気ままな風みたいにユリカをさらってゆこうとする飛燕フエイヤンを見ていると、その存在をそばで感じていると、本当はできないことなんて何一つないのかもしれないと思えてくる。あれもダメじゃない。これもダメなんかじゃない。壁なんて飛び越こしてしまえる、近づきたいのなら近づけばいいし、もしいやがられたら引き返せばいい。何も難しいことなんかない。ついそう考えてしまいそうになる。

着地の衝しよう撃げきは思ったよりも小さかった。

心配なんかしなくてよかった。

飛燕フエイヤンはユリカを床ゆかに下ろすなり頭上で両手を組みあわせて身体をのびあがらせ、首を、肩を、手首を、足首を回し、上体をひねりながら右みぎ膝ひざをのばして、それから左膝をのばした。

「ユリィもキチキチ柔じゆう軟なんしとけよ。オレの希望的観測だけどよォ、アイツらケッコー楽しませてくれそォーだぜ」

「あ、あなたに言われなくたって──」

ユリカも慌あわてて身体の各部をのばしたり縮めたりした。全身がほどよくあたたまってくると、気力も充じゆう溢いつしてきて五感が研とぎ澄すまされた。

相手の二人、背の低いホワンと背の高いグウェンの兄弟は、さながら彫ちよう像ぞうのように動こうとしない。不気味なほど静かだ。観察していても、動どう揺ようしたり昂こう揚ようしたりはしていない様子であることと、外見から想像できること以外の情報はえられそうもない。やってみないとわからないということだ。望むところだ。

振り返ると、アジアンとベティは神しん妙みような面おも持もちでこちらを見下ろしていた。ヨグという人は、相変わらず何を考えているのかよくわからない表情だ。荊王ジンワンは色眼鏡サングラスをかけているので、そもそも顔色を読みづらい。ピンパーネルはうなずいてくれた。トマトクンは手すりに片手をかけて片方の眉まゆをつりあげている。きっと心配してくれているのだろう。その隣となりで、ほとんどトマトクンにしがみついているサフィニアはかなり青い顔をしていて、かえってこっちが心配になってくる。大だ

い丈じよう夫ぶだから、わたしを信じて。サフィニア、あなたが不運につきまとわれていたのはもう過去の話なんだから。

　カタリは、目があうと、おおおおおおお、と雄お叫たけびを発しながら両手を振ふりあげてみせた。あれで応おう援えんしているつもりなのだろうか。きっとそうなのだろう。思わず笑ってしまい、肩の力が抜ぬけて、元気が出た。ちゃんと効果があったということだ。

　だから、マリア、そんな顔をしないで。

　マリアローズは手すりにすがりつくようにしてうずくまり、両りよう眼めを見開いて、唇を震ふるわせ、今にも泣きだしそうだった。

「マリア」

　ユリカは少し迷った末に、左手の親指を立ててみせた。

　マリアローズは唇をきゅっと噛かみ、何度か肩で息をして、うなずいた。それから、首を横に振って立ちあがり、何か言おうとしたけれど、うまく声が出せなかったようで、喉のどを押さえた。マリアローズは奥歯を噛みあわせて、何回か試みたあげく、ようやく声をしぼりだした。

「がんばって」

「任しぇて」

　ユリカは笑えみを浮うかべてホワンとグウェン兄弟に向きなおった。

「なんッかよォ」

　飛燕フエイヤンは手て袋ぶくろをはめた手で頰ほおをゴシゴシこすって、ヒャハ、と笑った。

「よっくわっかんねェーけど、ユリィってばやたらとかっくいィーよなァ」

「何バカなこと言ってるのよ」

「ンだってそォー思ったからよォ、しょォーがねェーじゃん」

　飛燕フエイヤンは横目でちらりとユリカを見て親指で唇くちびるをなぞり、たぶん近くにいるユリカ以外には聞こえないだろう小声で言った。

「どうりでオレも惚ほれるわけだぜ」

「……え？」

「えっつーか、愛の告白ってヤツなんだけど、地味に」

「な──」

「よっしッ」

　先に目をそらした飛燕フエイヤンの横顔はかすかに赤らんでいた。おそらくユリカの顔も赤いだろう。きっと真っ赤だろう。

「オレもかっくいィーく決めンぞッ！」

　飛燕フエイヤンはぴょんと跳とびあがって両足の裏同士を、それから着地して両の拳こぶしを打ちあわせた。もうすっかり集中しているらしい。呆あきれるほどの集中力だ。ユリカも負けじと頭を切りかえた。そのつもりだったのだが、さっきの言葉を思いだしてしまった。

　愛の告白ってヤツなんだけど、地味に。

　告白。愛。愛？　愛の告白？　何を言ってるのかしら。バカじゃないの。本当にバカなんだから。こんなときに。何も、よりにもよってこんなときに言わなくてもいいのに。それは、べつに悪い気はしないけれど。悪い気はしない……？

　ユリカは思いきり息を吸って、吐はきだした。

　自分でもよくわからないけれど、悪い気がしないのなら、いい。妨さまたげにはならない。今度は大丈夫だ。もう平気。やれる。わたしはやれる。

　極限クライマックス九手棍ナインボールをくるりと回して両手でぎゅっと握にぎりしめ、感かん触しよくを確かめてから余分な力を

抜いた。

　飛燕フエイヤンが一歩前に踏ふみだすと、ホワンとグウェン兄弟が同時にすっと立ちあがってこちらに向きなおった。

「まずは様子見ってことで、ジュントーにオレが素す手でのヤツ、ユリィが棒のヤツっつーかんじのタイマン×ペケ２ツーでいくか」

「とりあえじゅ、しょれでいきましょう」

「オレが二人イッペンに相手してもいィーんだけどなァ」

「自信を持ちゅのはいいけど、過信は禁きん物もちゆよ」

「ヘイヘーイ」

「真ま面じ目めにやって」

「わァーってるって。ユリィに逆らうと怖こえェーしよォ」

「もう」

「フヒャヒャ」

　飛燕フエイヤンが声だけで笑いながらさらに一歩前進しようとした。その瞬しゆん間かんだった。

　きた。動いた。背の低い兄のホワンはすっと左斜ななめ後ろに移動して、背の高い弟のグウェンは滑すべるような足どりで前に出てきた。飛燕フエイヤンは吸いよせられるようにホワンに向かって駆かけだし、ユリカの身体からだはほとんど自動的にグウェンを迎むかえ撃うつ体勢を整えようとした。グウェンは一いち陣じんの風のように素早かった。それだけでなく、グウェンが持っている金属製らしい角張った棒は、その重量だけでも十分な威い力りよくがありそうだった。軽量で底のやわらかい靴くつを履はいているのか、足音はほとんどせず、息づかいも静かで、聞こえるのは身にまとっている麻あさか何かの衣がこすれあう音だけだったが、肌はだがビリビリするほどの圧あつ迫ぱく感かんだ。身の丈たけはおそらく一・八メーテルくらい。痩やせているものの、体格差は明確だ。得物の長さはあまり変わらないが、腕うでの長さのぶんだけリーチは相手に分がある。ユリカは、ふっ、と呼吸を止めて、あえてこちらからも距きよ離りをつめた。何はともあれ、気持ちで負けるわけにはゆ

かない。相手に主導権を握らせてなるものか。

　もう少しで棍が届く。

　ユリカは突つきだそうとした。

　頭上で妙みような音がした。

　何の音かはわからなかった。

　ただ直感に突き動かされて後退した。

　それはいきなり降ってきた。

　天てん井じようからだった。

　なんかくるッ━━と飛燕フエイヤンが思ったときにはもう、それは天井から落下してきてドッシイイイイィィィィィンと超ちよう弩ど級きゆうの地じ響ひびきを立てていた。何だよコレッ!?　壁かべだ。幅はば十五メーテル、奥行き二十五メーテルくらいの会場が真っ二つにされてしまった。たぶん二十五メーテルの半分くらいのところに、天井からどでかい壁が降ってきて、会場を完全にキッパリハッキリ分断したのだ。マママジかよォ。冗じよう談だんだろヲイィ。見えねェーよ。ユリィ、あっち側にいンのかよォ。ンでもってオレはこっち側かよォ。ユリィってば、あの棒きれ持った変なヤツと二人ッキシかよォ。ンだよソレッ。そりゃタイマン×２計画だったワケだけど、それはとりあえずっつーか一応っつーか今ンとこっつーか、ソレで相手の手の内探さぐりつつみたいなツモリだったのによォ。ユリィも強ェーワケだし、そんな心配してるワケじゃねェーけど、姿が見えねェーとなっとソレはソレでまた話が別っつーかああああああああああああチックショウ、何してくれやがんだボケェッ。飛燕フエイヤンは壁に突っこんでいって蹴けりの一つでもくれてやろうかと思ったが、やめておいた。それどころではなかったからだ。

「我が名はホワン！　ホワン・ゼン・ラァ……！」

　きたきたきやがった。身の丈がだいたい百六十五サンチ、体重は七十キルグラハム以上ありそうで、生白い裸はだかの上半身も麻のズボンを穿はいた下半身もやたらとムキムキだ。つーかなんで目ンとこに包帯みてェーの巻いてるワケ？　剝はぎとってやりたい衝しよう動どうに駆られたが、繰くり返す、それどころではなかった。

ホワンはもうすぐそこまで迫せまっていた。飛びかかってはこなかった。むしろ重心を低くして突とつ進しんしてきた。この動き、思っきし玄人くろうとくせェッ……！

　空気を切り裂さくどころか叩たたき割るような音がした。下から突きあげてくる右のアッパーカット、それから左のフック、右フック、左右の連打、連打、連打。ぜんぶで十五発かよッ。イキナシ元気だなッ。それらをすべて見切ってかわしてやった飛燕フエイヤンも、もちろん元気いっぱいだ。ありあまる元気をこめて、左のハイキックをお見み舞まいしてやったら、ヤツも心得たもので、生意気にも左のハイキックで応じた。互たがいの脛すねと脛が大衝しよう突とつして、その衝しよう撃げきが骨を伝って脳天までガァァァァァンと響ひびいた。飛燕フエイヤンは痺しびれる左足を引き戻もどすなり、裂れつ帛ぱくの気合いとともに右の正拳突きを繰りだした。ヤツも当然、何のひねりもない右の正せい拳けん突きだった。拳こぶしと拳は正面からぶつかりあい、お互いの拳の骨が粉こな微み塵じんにならなかったのがいっそ不思議なくらいだった。とんでもなくいい突きだった。飛燕フエイヤンはサッと飛び離はなれて右手をブンブン振ふった。認めないわけにはゆかなかった。

「オレァ飛燕フエイヤン！　エルデンの闇やみ市いちをキチキチとりしきっちまってるＳ＊Ｋシリアル・キラーズのウルトラ・スーパー・ファンキー・グレート頭目マスター・飛燕フエイヤン様たァオレのことだぜィッ……！」

　こんな真面目に構えンのなんてどンくれェーぶりだ……？　だァーいぶ崩くずしちまってっからなァ。ナリっつーかフィーンキっつーか。ンでも、ダメだ。この相手にャァハッキシ言ってソレじゃ通用しねェー。マジにやンねェーとダメくせェー。

　飛燕フエイヤンは左足を前に出して半身立ちになり、ぐっと膝ひざを落とした。重心は両足の間に置いて自在に前後左右させる。左手は掌しよう。右手は拳。掌は攻こう防ぼうを一体としながらも主に防と眩げんと惑わくとを行い、拳は剣けんに通ずる。これすなわち、八十四バーシーシサン散乱打ルアンダ、中庸立ジヨンヨンリなり。

「──強ェーなテメー。全ぜん裸ら男とかって変な名前のくせしてよォ」

「ゼン・ラァだ。全裸ではない」

「へっ。似たよォーなモンだろァ？」

「まるで違ちがう」

　ホワンは両足を広げて腰こしを落とし、胸の前でガッチリ合がつ掌しようするという、見たこともない奇き妙みような構えだ。

「そもそも拙せつ者しやは全裸ではない。半裸だ」

「セッシャァ？　ハッ、ンだソレ、おかしな一人ショーだなヲイィ。つーかイッチーチこだわってンじゃねェーよ、半裸だろォーが全裸だろォーがよォ……！」

　右足を右前方に進めて左足をそのすぐ後ろに置き、右足を左前方に進めてまたそのすぐ後ろに左足を置き、それを繰り返しつつ、左手の掌は常に相手に正対させて右手の拳は矢をつがえた弓のように引き絞しぼっておく。相手の目は掌に固定されがちになり、左右の動きを追いきれない。ホワンは視覚に頼たよっていない模様なので、眩げん惑わくの効果は期待できないが、この柳足歩リウズーブという足運びは八十四バーシーシサン散乱打ルアンダの基き礎そにして奥おう義ぎでもある。飛燕フエイヤンはゆらゆらと風に揺ゆれる柳のようにホワンに接近していった。八十四バーシーシサン散乱打ルアンダを極めた皆かい伝でん者しやである飛燕フエイヤンの柳足歩リウズーブは、もはや獲え物ものに肉にく薄はくする蛇へびの歩みのようだ。飛燕フエイヤンは拳を剣となして突きだした。ホワンは合掌をといて拳の剣を打ち払はらった。その手めがけて飛燕フエイヤンの掌がスルスルとのびてゆくと、ホワンは逆の手で掌を打ちすえようとしたが、掌の左手は鞭むちのようにしなってそれをすり抜ぬけた。

　拳の剣がホワンの顔面めがけて飛んだ。

　ホワンは首を曲げて拳の剣をかわしながら、両手を手刀にして矢や継つぎ早ばやに突いてきた。

　どれも正確に、一直線に、無む駄だなく急所を狙ねらっている、一撃必殺と言ってもさして大おお袈げ裟さではない手刀だったが、飛燕フエイヤンはそれらをすべて左手の掌で払い、流し、崩した。その合間に拳の剣をホワンの眉み間けんや顎あごや喉のどや鳩尾み

ぞおちに叩きこもうとしたが、いずれもあたらなかった。右手と左手で役割を分担している飛燕フエイヤンと違い、ホワンは両手をまったく同じように攻こうにも防にも用いた。どちらがよりすぐれているとか、そういう問題ではない。ただやり方が違うというだけだ。互いに隙すきはない。このままでは十分たっても一時間たっても決着はつかないだろう。いや。今、そう見えるだけだ。実際はそうではない。

　飛燕フエイヤンには制約があるのだ。

　百パーセントの力を出しつづけられる時間はかぎられている。

　焦あせりはなかった。ずっとつきあってきた身体からだだ。もう慣れている。恨うらみ言ごとを言っても始まらないことは、誰だれよりも飛燕フエイヤン自身が一番よく知っていた。そンでもオレは勝っちまうワケだしな。オレァ強ェーし。そりゃァオレよっか強ェーヤツだっているさ。ピンパーとかね。虐殺人形カーネイジドールもやベェー相手だ。ミスター・トメィトゥも敵に回すと厄やつ介かいそォーだしなァ。でも死なねェー自信はある。死ななけりゃァーいつかゼッテー勝てる。オレァ今でも強ェーワケだけど、もっともっと強くなる。強くなれる。まァ、今回はあとでとかそンなのはねェーから、今、ここで決着つけねェーとなンねェーけどさ。ソレもまたヨシッてかァ？　だな。楽スィーぜッ。

「──すううぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぁぁぁぁぁ……」

　飛燕フエイヤンは急きゆう遽きよ両手を掌にして、ホワンの手刀を払いのけることに集中しながら、息を吸いこみつつ腹の底、丹田ダンテイエンに聖気シエンキをためていった。防ぼう御ぎよに手を抜けば、たちまちホワンの手刀は飛燕フエイヤンに致ち命めい的てきな打だ撃げきを加えるに違いないから、この二つを両立させるのは至難の業わざだ。困難ではあっても、短時間なら、という条件付きであれば、不可能ではなかった。八十四バーシーシサン散乱打ルアンダにおいて、聖気シエンキは人体の中を巡めぐり、ありとあらゆる陽の活動の源になるものとされている。その聖気シエンキに対して魔気モオキは、人体の臓器に宿って陰かげの活動を支える。飛燕フエイヤンは聖気シエンキを丹田ダンテイエンにためるかわりに、両手の掌に魔気モオキを集中させていた。魔気モオキによる陰の活動は防御に適している。こうして、今まさに、聖気シエンキは丹田ダンテイエンに充じゆう塡てんされた。準備は整った。飛燕フエイヤンは笑った。

「いっくぜェェッ……！」

　拳は剣ではなくなった。打ち砕くだく鎚つちだった。飛燕フエイヤンは右手の鎚を振ふりかぶって、ホワンの胸めがけて叩たたきつけようとした。ホワンは何かを察したのか、思いきりよく飛びすさった。飛燕フエイヤンとしては正解してくれなくもよかったのだが、間違いなくその対応は正解だった。

　剣ならば途と中ちゆうで止められるが、鎚の勢いを止めることはできない。

　飛燕フエイヤンの右手は床ゆかを叩いて破は砕さいした。

　それだけでは終わらなかった。

　聖気シエンキはまだ丹田ダンテイエンに残っている。

　まだまだ残っている。

「──ラアアアアアアァァァァァッ……！」

　飛燕フエイヤンは身体をひねって跳とんだ。左手の裏拳が鎚となってホワンに襲おそいかかった。ホワンにできることは多くなかった。逃にげるか、受け止めるか。ホワンは逃げることを選んだ。飛燕フエイヤンの裏拳はまたもやグッザグザに床を砕いた。聖気シエンキはまだあった。飛燕フエイヤンは回転しながら横っ跳びした。飛燕フエイヤンの師し匠しようである藍オランカイは、自分の年ねん齢れいを覚えていないほどの高こう齢れいで、目も耳もほとんどきかなかったが、死ぬまで頭はしっかりしていて、普ふ通つうの人間には見えないものまで見えているようですらあった。医術士も匙さじを投げた飛燕フエイヤンの病気について、藍オランカイはその死の直前に、お前は人よりあまりにも聖気シエンキが多すぎる、もしかしたらそれが病の原因かもしれん、と言った。飛燕フエイヤンは嬉うれしくなって、師の枕まくら元もとで笑った。もしそォーだとしたらよォ、オレってすげェーってことじゃん？　聖気シエンキマンマンのイッパイっつーことで才能アリアリで百年に一人の天才とか言われて、そりゃァー不便もあっけど、不便くらいあってもしょォーがねェーくらい恵めぐまれてるってこったろァ？　そんなようなことを喋しやべったら、藍オランカイは、そういうところもありあまっとる聖気シエンキのせいなのかのう、と少しだけ困ったような声こわ音ねでつぶやいて、ため息をついた。

深い、深いため息だった。それが師の、ジーチャンの絶息だった。ずいぶんよォ、長く生きたなァ、と飛燕フエイヤンは藍オランカイの皺しわに埋うめつくされた顔を撫なでながら笑った。ンでも最後にオレに会えてよかったなァ。オレみてェーな天才が最後の弟で子しで幸せモンだぜ。だってオレ、フツー一発っきゃ出せねェースゴ技わざ、四発も連続で出せンだからよォ。マジクソすげェーじゃんオレ。つゥーわけで、もォー逃がさねェー。受けてみやがれェッ、八十四バーシーシサン散乱打ルアンダ絶紹、炸裂爆打ジヤアリエバオダ……！

「ダアアアアリャアアアアアアァァァァァァァッ……！」

　打ちおろした飛燕フエイヤンの右足が鎚となってホワンを猛もう襲しゆうした。ホワンはその場で踏ふんばり、両りよう腕うでを交差させて鎚を受け止めようとした。タコ生意気だな全ぜん裸ら野や郎ろうォッ！　岩をも砕くオレの、この飛燕フエイヤン様の炸裂爆打ジヤアリエバオダを防ごうなんざハッキシ言って百兆万年くれェー早ェーッ！　早すぎなンだよコナクソがァッ……！　丹田ダンテイエンから一気にドバッと放出された聖気シエンキが、まばゆいばかりの光となって飛燕フエイヤンの右足を真っ白く輝かがやかせた。全裸野郎が口を妙みような形にすぼめて全身に力をこめた。ただでさえムキムキだった身体がさらにムッキムキになって紅潮した。

「──翻ホンッ……！」

　なんて声だ。でかいなんてものじゃない。こめかみの奥あたりがチリッと焼け焦こげるような感覚があった。だからソレがどォーしたって？　かまうモンかよッ！　行けェッ！　行っちまえェェッ！　飛燕フエイヤンは右足の鎚で思いっきりぶっ叩いた。全裸野郎の両腕を木こっ端ぱ微み塵じんに破は壊かいしてやるつもりだった。それなのに、マジかよチクショウ。ヲイヲイヲイ何だコレェッ。

　かってえェェ……！

　手て応ごたえっつーか足応えっつーか、腕っつーかとりあえず人体じゃねェーだろコレ、金属だろまるで、とにかくありえねェーだろこンなのあってたまっかクソボケッ！　つーか認めねェーぞポンスケッ！　認めてたまっかよォ……！　飛燕フエイヤンは右足を着地させ、身体をひねって左足を鎚となし、踵かかと落としの要領で

全裸野郎の両腕を今度こそ絶対、必ずやへし折ってやろうと残った聖気シエンキのすべてを発散させた。

「━オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオォォォォォォォォ……！」

　完全だ。

　完かん璧ぺきだ。

　それ以上だ。

　三百パーセントだ。

　これ以上の威い力りよくを生みだすことはできない。

　それを、正真正しよう銘めいの渾こん身しんの一いち撃げきを、ヤツは、全裸野郎は、ホワンは、ホワン・ゼン・ラァは、やはり両腕で受け止めた。

　さすがにホワンの膝ひざが沈しずんだ。

　包帯を巻いていない顔の下半分がゆがんだ。

　ホワンが出した声は、さっきとは違ちがい、翻ホン、ではなく、ブオン、と聞こえた。

「……わりと鬼おにだなテメー」

　飛燕フエイヤンは三回連続でバック転して距きよ離りをとった。

　両足がジンジンしている。骨はおそらく問題ない、大だい丈じよう夫ぶだと思うが、筋肉にはそれなりにダメージがありそうだ。つってもまァ、まだまだやれっけどな。ゼンッゼン平気なワケだけどな。余よ裕ゆうっちゃァ余裕だけどよォ。

　超最低ＳＵＣＫだぜ。

　マジかよクソッ。

　ホワンは例の足を開いて合がつ掌しようをする奇き妙みような構えに戻もどっている。

　両腕は炸裂爆打ジヤアリエバオダを受け止めた場所が赤くなっているが、それだけだ。

「拙せつ者しやの骨組みは、通常の人のそれとは異なっている。偉い大だいなる我らが真の王ルヴィー・ブルーム様が授けてくださったこの鋼はがねのごとき肉体は、そうやすやすと打ち砕かれはせん」

「ケンソンかよ」

　飛燕フエイヤンは目をすぼめた。

「身体からだだけじゃねェーだろァ？　技のほォーもケッコーホンマモンじゃねェーか」

「拙者、かれこれ七十有余年修行しておるが、まだまだ未熟」

「……テメー、見た目よっかズイブン年食ってやがンだな」

「これ、このとおりでな」

　ホワンは目のあたりを覆おおっている包帯を示すように軽く頭を振ふってみせ、笑う形に唇くちびるをゆがめた。

「もうだいぶ鏡を見ておらぬゆえ、拙者が他ひ人との目に何歳いくつに見えるか皆かい目もく見当がつかん」

「へっ」

　飛燕フエイヤンは袖そでで額をぬぐって唇の端はしを嚙かんだ。いくらぬぐっても無む駄だだった。汗あせはあとからあとから噴ふきだしてくる。呼吸もだいぶ乱れていた。飛燕フエイヤンは舌打ちしたい気持ちを押し殺ころして、あえて笑った。

「アッチーぜチクショウめ」

　本当に、暑い。暑いというよりも、熱い。そうだ。熱い。熱くてたまらない。

　初めての経験かもしれない。どこまでもどこまでも自分の棍こんと相手の棒とに集中して、他ほかのことはまるで頭に入ってこない。突つくことに、打つことに、跳ね返すことに、弾はじくこと

に、打ち払はらうことに、自分自身のすべてが投入されている。

　そうして生みだされる熱の中で、ユリカは今、喘あえいでいた。

　まるで波の荒あらい熱湯の海で泳いでいるかのようだ。

　少しでも気を抜ぬけば、波にさらわれて溺おぼれてしまうだろう。

　これ以上、この煮にえたぎる湯を飲めば、喉のどや胃いの腑ふが焼けただれて息ができなくなってしまうかもしれない。

　あるべき場所に目のない男は、壁かべが落ちてきた直後にグウェン・ゼン・ラァと名乗っただけで、それきり一言も喋しゃべらない。その口くち許もとにはずっと笑えみが貼はりついている。貼りついているといえば、男の皮ひ膚ふはゴムか何かの薄うすい膜まくを骨の上に貼りつけてでもいるかのような妙みような質感だ。一見、三十代か、せいぜい四十代くらいに見えるが、もしかしたら見た目よりも年がいっているのかもしれない。いつかそんなことをちらりと思ったような覚えがある。

　いつか。

　いつのことだろう。

　わからない。

　遠い昔のような気がしてならない。

「──ふっ……！」

　いけない。集中が乱れた。疲ひ労ろうのせいか。ユリカはグウェンが振ふりまわしてきた棒をさけるために、足で床ゆかを蹴けりながら棍の石いし突づきで床を叩たたき、勢いをつけて飛びさがった。グウェンの棒は、むしろ金棒と呼ぶべきかもしれない。鉄か何らかの合金か、とにかく金属製だと思われるので、そうとう重いだろう。背が高いとはいえ、かなり痩やせているくせに、よくもあんなに軽々と扱あつかえるものだ。ユリカは当然、追撃を警けい戒かいしたが、拍ひよう子し抜ぬけした。グウェンは金棒を手許に引きよせると、自分の肩かたや胸、背中に叩きつけるようにして回転させ、低く鼻を鳴らした。それを見てようやくわかった。

　わたしは熱湯の海を泳いでいたんじゃない。

　泳がされていた。

　自分の極限クライマックス九手棍ナインボールとあの男の金棒に集中していたんじゃない。

　集中させられていた。

　遊ばれている……？

　頭の後ろのほうで火花が散ったようなかんじがして、口の中を嚙んでしまいたくなったが、我が慢まんした。いくら心を激しく燃やしても、その奥底にはつめたく動かない核かくのようなものを常に沈しずめておかなければならない。我を忘れてはならない。わたしは怒いかりに支配されやすい。簡単に沸ふつ点てんに達してしまう。それは時として力になるけれど、足をすくわれる原因にもなりうる。何度も何度もトワニングに指し摘てきされた欠点だ。

　その胸に燃え立つ炎ほのおと凍いてついた氷とを同時に抱かかえるのだ。

　お前ならばできる。できぬはずがない。

　ふとマリアの顔が脳のう裏りをよぎった。

　振り返れば、きっとマリアは息を殺して勝負の行方ゆくえを見守っているだろう。

　わたしには足りないものがある。たくさんある。たとえばこんなことは、マリアと出会って、ともに肩を並べて戦ってこなかったら、絶対に思いつかなかった。

「なるほど、しょういうことね」

　ユリカは両りよう眼めを細めて唇をつりあげてみせた。熱が引いてゆく。でも、消え失うせたわけじゃない。いつでも煽あおって燃え立たせることができる。わたしの中に火種があるからだ。

「あなたはわたしをいたぶって愉ゆ悦えちゆにひたっている下げ劣れちゆで下品な変態野や郎ろう。わたしのことなんか、いちゅでもどんなふうにでも料理してしまえると思っているんでしょう。で

も、おあいにくしゃま。わたしはまだ、じぇんじぇん本気を出してないわ」

「ほお」

　グウェンは舌先で上うわ唇くちびるをレロレロと舐なめた。いやらしい仕し種ぐさだ。本ほん性しようが出てきた。ユリカは今までグウェンが作りだした幻まぼろしのグウェンと戦っていたようなものだった。完全にグウェンのペースに巻きこまれていたということだ。わたしは正直すぎる。駆かけ引きができない。でも、できないなんて言っていられない。危なくなったら助けてくれる、足りない部分を補ってくれる仲間はいないのだ。いや、そんなことはない。ちゃんと助けてもらっている。

　マリア。

　あなたは体格がいいわけじゃない。それどころか、かなり華きや奢しやだ。たとえば、同年代の男の子と比べると、圧あつ倒とう的に骨が細くて、筋肉の量もずいぶん少ない。人並み以上に身体からだがやわらかいのは、たゆまぬ訓練よりもむしろ、関節の可動範はん囲いを狭せばめてしまうような邪じや魔まな筋肉が一いつ切さいついていないせいだ。すばしっこいと言っても、ピンパーネルみたいに常人離ばなれしているわけじゃない。それはほとんど、小動物が身を守るために身につけている敏びん捷しようさと同じたぐいのものだ。

　はっきり言って、あなたは恵めぐまれてない。そのことをあなたは自分でよくわかっている。絶望的なまでの標準との隔へだたりを認にん識しきして、痛感していながら、たまにはふてくされたり、くじけたりすることはあっても、結局、今日まで前を向いて歩いてきた。利用できるものは何でも利用して、たくましく生きてきた。

　そんなあなたを、仲間として、友だちとして、わたしは誇ほこりに思う。

　あなたから学んだことがたくさんある。

　あなたが教えてくれたやり方で、わたしはグウェン・ゼン・ラァという男の仮面を引っ剝ぺがして、丸まる裸はだかに、それこそ全ぜん裸らにしてやる。

「だって、あなたって、ちゅまらないんでしゅもの。しょの重しょうな棒を振りまわしゅだけで、何のおもしろみもない。今までちゅきあってあげたけど、正直、退たい屈くちゆだわ。しょろしょろ終わりにしましょう」

「終わらせられるかな」

「できないと思う？」

「おぬしでは俺に勝てぬぞ。俺は、目はこのとおりだがな。見える者よりもよく見えるのだ。空気の動き。息づかい。声。汗あせのにおい。体たい臭しゆうの変化。それ以外にも感じとれることはいくらでもある」

　グウェンは鼻をひくひくさせて忍しのび笑いをもらした。

「俺には見える。はっきりと見えるぞ。おぬしの姿が。おぬしはかなり背が低いようだな。若い女のにおいがする。きわめて若い女だ。子供か。だが、それにしては妙だな。まあ、俺としてはかまわんが。兄者と違ちがい、俺は禁欲主義者ではないのでな」

「お兄しゃんのほうがまともしょうね」

「まともなものかよ。俺のほうがまだまっとうな人間に近い」

　声を荒あららげそうになって、なんとかこらえた。そんな声こわ音ねだった。そういえば、アクゼルが言っていた。この兄弟は仲が悪いと。それに、「まっとうな人間に近い」という言葉が気にかかる。目がないという外見からしてわかりきっていることではあるが、グウェンは「まっとうな人間に近い」けれども、まっとうな人間ではないのだろう。そして、あの言い方からすれば、まっとうな人間ではない自分を、必ずしも好意的に受け容いれているわけではなさそうだ。

　少しずつではあるものの、いろいろな材料が集まってきた。

　そのたびに、グウェンという敵が等身大に近づいてゆく。

　グウェンは自信家だ。自分の欲望に正直な性質でもあるらしい。ただ、ユリカを見下していながらも、油断はしていない。相手の力を見きわめながら、じわじわと真綿で首を絞しめるように追いつめてゆき、逃にげ場を失わせて穴に突つき落とす。もっとも、挑ちよ

う発はつされればつい乗ってしまう。おそらく、その欠点を自分でもわかっていて、だから最初は無言を貫つらぬいていたのだろう。慎しん重ちような男だ。ユリカがまだ全力を出し切っていないのと同じように、グウェンも手の内を隠かくしているに違いない。

　ユリカは棍で床ゆかを叩たたいて低く叫さけんだ。

「開きなしゃい、鵺ノヌエノ血涙ノ裏ケちゆルイノリ門モン……！」

　鵺は霧きり深い霊れい峰ほう泰山タイザンに棲せい息そくしている妖よう獣じゆうで、虎とらや猿さる、鳥、狼おおかみや猪いのしし、ときには人の姿をとってありとあらゆる動物を捕食し、泰山生態系の頂点に位置していた。そのような妖獣の棲すむ山に、人がなぜ生活の場を求めたのか、その理由や経けい緯いについては諸説あるようだが、彼らは鵺を駆く逐ちくし、あるいは殺すことで生活圏けんを広げていった。鵺もたびたび群れをなして泰山のそこかしこに点在する人の村を襲おそったという。人々は一いつ致ち団結し、知ち恵えと勇気と力を結集して鵺と戦った。こうして生みだされた数々の技法こそが、すなわち鵺流古式戦せん闘とう術であり、世にも珍めずらしい可変動物である鵺の屍しかばねを有効活用する方法もその中にふくまれていた。

　極限クライマツクス九手棍ナインボールは鵺の骨や腱けん、歯、血液、髄ずい液えきなど、もろもろの組織片へんや体液で作られる。製作法は秘中の秘だ。泰山にもその技術を代々伝える専門の職人が若じやつ干かん名いるだけなので、誰でも手にできる代しろ物ものではない。

　よって、極限九手棍の裏の姿とでも言うべき〝三さん叉さ牙が〟と呼ばれる形態を目にしたことがある者は決して多くないだろう。

　極限九手棍は生き物のように大きく膨ふくれあがって盛りあがり、突きだしたりへこんだりしながら、あっという間に形を変えた。

　それはもはや棍ではなく槍やりだ。鵺ノ血涙ノ正門を開いた真の姿では、斬ざん、砕さい、掛か、抉けつ、突とつ、払ふつ、打、流、弾だんの攻こう防ぼう動作を自在に行うことができるが、三叉牙は用よう途とがいくらか限定されている。まっすぐのびた真ん中の刃はは突とつして貫かんし、下に向けて湾わん曲きよくした右の

刃は刺ししてあるいは掛かいし、上に向けて反っている左の刃は斬ざんして払ふつする。ユリカはこれまで師であるトワニング以外の前で鵺ノ血涙ノ裏門を開いたことはない。今日が初めてだ。

「やはり鵺流か」

　グウェンが上うわ唇くちびるをぺろぺろ舐なめて、金棒を斜ななめに背負うようにして構えた。

「極限九手棍とはな。話に聞くほどお目にかかれるものでもない。といっても俺の場合、目に見えるわけではないがな。いずれにせよ、ただの子供ではなさそうだ」

「年と齢しが知りたい？」

「興味はある」

「わたしを倒たおしぇたら教えてあげてもいいわ」

　ユリカは三叉牙を前方に差し向けて構えるなり、左右の足でほぼ同時に床を蹴けりながら進む閃足センソクという歩法を駆く使ししてグウェンに突とつ進しんした。

「━ちゅまり、教えないってことよ、変態しゃん」

「ムンッ……！」

　間合いに入りこんだ瞬しゆん間かん、グウェンは向かって右上から金棒を振ふりおろしてきた。ユリカは金棒を右の刃で受け止めたのではない、まともに受け止めたりすれば力負けしてしまう、三叉牙全体を返しつつ受け流しながらグウェンの側面、左側に進みでて、その勢いを殺さずに石いし突づきでグウェンの横っ面つらを殴おう打だしようとした。グウェンの体勢は崩くずれかけていた。それにもかかわらず、グウェンは身体からだをぐにゃりと斜めにひねりながら前ぜん屈くつさせて石突きの一いち撃げきをかわした。なるほど、まっとうな人間ではない。普通の人間の身体はあんなふうに曲がったりしない。驚おどろきはなかった。恐おそれもない。ユリカはすかさずグウェンめがけて三叉牙を振りおろした。グウェンは折り畳たたむように背中を丸め、床に倒れこんで転がり、起きあがりざまに金棒を突きだしてきた。わずかに届かないはずの距きょ離りだった。ユリカは、だが、あえて退いた。冷ひや汗あせが出た。案の定だった。後退したおかげであたらずにすんだ。金棒はぐ

んとのびてきた。金棒自体がのびたのではない。腕うでだ。いや、おそらくは肩かた、肘ひじ、手首。関節だ。瞬間的に外したのか。それとも、関節の構造が常人とは異なっているのか。

「俺もいくらか気を入れよう」

　グウェンは上唇をめくれあがらせて、上の歯と下唇の間から、チュウゥ、と卑ひ猥わいな音を出してみせた。

「鵺流古式戦闘術の使い手でもここまでやる者は珍しい。しかも外見は幼女らしいからな」

「ロリコンなのね」

「女は若いほうがいい。とくに変わった嗜し好こうでもないと思うがな」

「しょうね。どこにでもいるごく普ふ通ちゆうのありふれた変態だわ」

「そこまで言われると少々心外だ」

　グウェンは首を曲げてポキリと骨を鳴らし、上唇をレロレロ舐めた。

　くる。

　何か仕し掛かけてくる。

　望むところだ。もともとユリカがそう仕向けたのだ。鵺流古式戦闘術は人が鵺に対たい抗こうするために進化や変化を遂とげてきた戦闘技法だ。弱者が強者を征せいするために生みだした技わざといってもいい。そのため、トワニングのような天才、鬼きオさいでもなければ、相手の力量を見きわめた上で、勝つべくして勝つ方法を選せん択たくするのが基本的な戦法となる。簡単に言えば、後出しジャンケンだ。グウェンは強い。現時点では、ユリカよりも強いと考えたほうがいいだろう。それでも、あとに出したほうが必ず勝つ。いつかトワニングが教えてくれた。勝敗を決する要因は必ずしも強さだけではない。勝者となるために強者となる必要はないのだ。才ある者が凡ぼん人じんに敗れることなど珍しくもない。勝者の道とはなぜ才能が凡ぼん庸ように敗れるのかを知ることだ。トワニングは遠回しに励はげましてくれたのだろう。ゆえに、お前にも

拙せつ僧そうを打ち負かすことはできるのだ。いつか拙僧を討うちたいと思ったときはそうするがいい。あなたはきっとそんなことも考えていたに違ちがいない。頭がいいくせに、バカなんだから！

「俺はぐちゃぐちゃになった死体でもいける口だから、安心しろ」

　グウェンは金棒の端はじっこを両手で握にぎった。

　そうきたか。

　技もへったくれもない。グウェンは両手持ちした金棒を振りまわしはじめた。縦じゆう横おう無む尽じんというよりも、でたらめだ。規則性なんてなさそうだ。それだけでも厄やつ介かいなのに、あの両りよう腕うで。まるでゴムか何かでできているみたいだ。ぐねぐねとありえない方向に曲がるだけでは飽あきたらず、のびている。次し第だい次第にのびてゆく。軌き道どうが読みづらくて、なおかつリーチも変化する。徐じよ々じよに間合いが広がる。グウェンは動いていないのに、金棒は近づいてくる。ぶおんぶおんぶおんぶおん空気を叩たたき潰つぶしながら迫せまってくる。ユリカは下がった。とりあえず下がるしかなかった。金棒自体の重さに速度や遠心力も加わって、もしあたったら、かすっただけでもとんでもない破は壊かい力を発揮するだろう。極限九手棍といえども、無事ではすまないかもしれない。ユリカの小さな身体は挽ひき潰されてしまうだろう。あれは受け止められない。受け流すこともできない。なんとか金棒をかいくぐってグウェンに一撃を見み舞まうしかない。どうやって？

「どうした！　腰こしが引けているぞ！　さっきまでの威い勢せいはどこへ行った……！」

「──くっ……！」

　頭に血が上って、思わず踏ふみとどまりそうになった。何でもいい。正面からぶつかって打開してやる。力がわきあがってきた。やれる。根こん拠きよはない。ただ、やれる。そう思うだけだ。途と端たんに金棒の動きを目で追えそうな気がしてきた。

「ユリカ……！」

　マリア。マリアローズの声だ。

　我に返ると、極きよく端たんに狭せばまっていた視野が一気に広

がった。自分はあんな状態で突つっこんでゆこうとしていたのか。無む謀ぼうだ。思いきり飛びさがって、ちらりと振り向いた。その一瞬の間に、マリアローズは首を横に振ってみせた。たったそれだけの仕し種ぐさで何を言おうとしたのか、何を伝えようとしたのか、なんとなくわかった。たくさんあるマリアローズの長所のうちの一つだ。俯ふ瞰かんするようにものを見て、現状を把は握あくする能力。他人だけでなく、自分自身さえも客観視できる。マリアローズはたぶん、そうして注意深く周りをうかがいながら、慎しん重ちように一歩一歩足を進めなければ生き抜ぬいてこられなかった。どんなにつらくても、打ちのめされていても、対応しないといけない状じよう況きようというものがあれば、観察し、考えて、抜け道を探そうとする。きっとマリアローズはユリカにこう言いたかったのだと思う。

　違うよ。今、ユリカがやらないといけないことは、危険を冒おかして真正面から突とつ撃げきすることなんかじゃない。焦あせってそんなことしなくてもいいんだよ。ほら、よく見て。考えて。ちょっと考えればわかるはずだよ。

「しょうね、マリア」

　ユリカはそっとつぶやき、微笑ほほえみさえ浮うかべて駆かけた。グウェンに背中を向けて走った。壁かべ際ぎわで足を止めて振り返り、三さん叉さ牙がの形態をとっている極限九手棍の石いし突づきで床ゆかを叩いた。

「閉じなしゃい、鵺ノヌエノ血涙ノ裏ケちゆルイノリ門モン」

　極限九手棍はたちまちのうちに〝臥が角かく〟と呼ばれるもとの姿へと戻もどった。

　ユリカは腰に左手をあてて首をかしげ、ため息をついてみせた。

「しょれで？　しょの腕はどこまでのびるの？」

「──貴様……」

　グウェンは歩きだした。同時に腕がいっそうのびた。金棒が約一・五メーテル。腕はもうどれくらいだろう。おぞましい話だが、もしかしたら二メーテルくらいあるかもしれない。あそこまでゆくと、関節を外すだけでどうにかできる長さではないから、グウェン

の身体からだは何かもっと特とく殊しゆな構造になっているのだろう。

　それにしても、グウェンはどうして走って距離を縮めようとしないのか。ひょっとして、しないのではなくて、したくてもできないのではないか。何らかの原因で、腕をのばすことと速く走ることが両立しないのだとしたら、あの奇き妙みような技は見世物にしかならない程度の虚こ仮け威おどしだが、決めつけるのはまだ早い。

　確かめるために、ユリカは天てん井じようから落ちてきた壁かべめがけて駆けだした。グウェンはすぐに方向転てん換かんして、追いかけてこようとしているものの、やはり足の運びは鈍にぶい。ゆっくり歩いているという速度ではないが、小走りと呼ぶのもちょっと無理がある。これでほとんど決定的だ。ユリカは鼻でせせら笑ってみせた。普ふ段だんそういう表情をすることがないので、板についているかどうか、少しだけ不安ではあったが、どうやらグウェンを逆上させるくらいの三文芝しば居いはできたようだ。

「しゃんじゃんもったいぶったあげく、しょれでおしまい？　やっぱりちゅまらないわ。あなた、女の子にもてないでしょう？　でも、しょれって顔のしぇいじゃないわよ？」

「黙だまれ……！」

　グウェンがそう怒ど鳴なると一いつ瞬しゆんのうちに腕うでが縮んだ。グウェンは金棒を斜ななめに背負うように構えて加速した。次の瞬間にはトップスピードに達していた。特殊な身体構造も何かの足しになっているのかもしれないが、その運動能力はたいしたものだ。もっとも、それに依い存そんしすぎている。うぬぼれが強く、自分が上位に立っている間は落ちつきはらって物事を進められるけれど、立場が逆転するとかっとして、そうなると力任せで雑になる。力を見せつけて、相手を屈くつ服ぷくさせないと気がすまない。安心できない。小人物だ。

「図じゆ星ぼしだったみたいね」

　ユリカは右手一本で棍こんの端っこを握にぎった。両手ではないから、グウェンの持ち方とは違ちがう。極限九手棍は大部分が鵺の骨なので、強度のわりに驚おどろくほど軽い。そのおかげで、こんな芸当ができる。ユリカは右足を前に出して半身に構え、まるで細剣を扱あつかうように棍の先を前方に差し向けた。

「──フンッ……！」

　グウェンはかまわず突っこんできて、金棒を右上から斜めに振ふりおろした。金棒の長さが突とつ然ぜん、倍になったかのようだった。腕がぐんとのびた。ユリカは、だが、怯ひるまなかった。身体をひねりながら左足を前に出して棍に左手をそえた。

「離りゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁ……！」

　グウェンは極限九手棍など叩たたき折ってやるという気構えだったはずだ。残念ながら、そうはならなかった。棍と金棒が接せつ触しよくする、まさにその瞬間だった。ユリカは両手のみならず身体全体を駆く使しして棍に螺ら旋せん状のねじりとひねりの力を加えた。これこそ、鵺流古式戦せん闘とう術極限九手棍法正技〝旋気センキ〟。トワニング曰いわく、旋気には鵺流のすべてがある。旋気を極きわめた者は鵺流の本質を知る。それゆえに、トワニングは一時期、ユリカに旋気だけを練習させた。寝ねても覚めても旋気、旋気、旋気。ねじり、ひねる動作はユリカの血となり肉となった。トワニングの怒ど濤とうの蹴けりと比べれば、グウェンの金棒の一撃は遥はるかに御ぎょしやすかった。

「がっ……！」

　グウェンは金棒ごと弾はじかれるように吹ふっ飛んだ。それでも転てん倒とうすることなく、ぐねぐねと身体を曲げて尋じん常じようではない体勢で着地したのはさすがだったが、もうユリカはグウェンに飛びかかろうとしていた。棍だ。棍を突つきだした。グウェンはとっさに金棒を振りまわして棍を弾き返そうとした。あたらなかった。当然だ。ユリカはグウェンを狙ねらったのではなかった。床だ。床を突いて、棍をしならせて、跳とんだ。

「砲ほうおおおぉぉぉ羅らあああぁぁぁぁぁぁっ……！」

　すでに気は十分練られていた。極められた旋気は攻こう撃げきのためだけの技わざではない。全身をねじり、ひねる動きは体内に拡散している気を凝ぎよう集しゆうさせる。ユリカは左足に気をためていた。鵺流古式戦闘術には体術もある。その肉体自体が凶きよう器きといってもいいトワニングは大得意だ。

「──ぬぐぇっ……！」

　淡あわく金色に光るユリカの左足がグウェンの右みぎ頬ほおを強打して、その顔面を大いにゆがませた。トワニング仕込みの鵺流古式戦闘術剛柔体法奥おう義ぎ〝黄金脚オウゴンキヤク〟をまともに食らったグウェンは、叩きつけられるようにして床に倒たおれこみ、それでもゴム人形みたいに奇妙な転がり方をしてすぐに起きあがったが、そこからさらに飛びさがった。

「……ふ、ふほ……へ、へめえ……」

　顎あごの骨でも外れたのか、口をうまく動かすことができないようだ。出血も見られる。結構な量で、口のまわりは血まみれだ。ぺっ、と吐はきだしたのは、折れた歯に違いない。おそらく、疲ひ労ろうではなく、精神的なショックのせいだろう。肩かたで息をしている。目がないこともあって表情はよくわからないが、ひどくうろたえているようだ。こうなれば、もはや心理的な駆け引きは必要ない。今のうちに畳たたみかけるべきだ。ユリカは棍を手て許もとに引きよせて駆かけだした。

　何か重い音とともに会場全体が振しん動どうし、足が止まりかけた。

　次の瞬間、その音と振動が高まって、つい足が止まってしまい、呆あつ気けにとられた。

　あの壁だ。会場を両断していた壁が軋きしみながら持ちあがって、あるいは引きあげられてゆく。予想外の出来事で、反応できなかった。グウェンが左に向かって走っていった。追いかけようとしたが、引きあげられた壁の向こうに飛燕フエイヤンとホワンの姿が見えた。飛燕フエイヤンも驚いているようだ。ちょうど壁のすぐ向こうで戦っていたらしい。近い。十メーテルと離れていない。飛燕フエイヤンは汗あせをかいている。すごい汗だ。グウェンよりもずっと息が荒あらい。思わず凝ぎよう視ししてしまった。

「……ユリィ」

　やっべえ。今の、すっげェー情けねェー声だったかも。気合い入れろよオレ。ユリィとか言ってる場合じゃねェーし。なんかもっと見てたい気分だけど。ハカらずもユリィの姿ァ見れて、ちょォーっとだけ元気出たかんじもナキにッしもアラズッつーか。ンでもソレどころじゃねェーから。ホワン。ホワンの野や郎ろう。アレレ？　なんで？　なんで逃にげてるワケ？

「ヲイッ！　テメー……！」

　駆けだす間際、視界の隅すみに、さっきまで壁の向こうでユリカとやりあっていたはずの背の高いほう、グウェンが走っている姿が見えた。どうやらグウェンもユリカから逃げようとしているらしい。妙みようだと思った。足が鈍った。そのときだった。

　天井だ。

　またた。

　また壁かべだ。

　ドッシイイイイイイイイイイイイイイィィィィィンと落ちてきた。

　でも、違う。

　前の壁とは違って、幅はば約十五メーテル、奥行き約二十五メーテルの会場の十五メーテルのほうを、つまり、前回は会場を横に、今度は縦に分断する壁だった。

　手で顔をぬぐった。

　服の中は汗だらけで、これ以上ないくらい不快だ。

「まだ決着ついてねェーってのによォ。これからっつートキに逃げやがってアンニャロめ」

　飛燕フエイヤンは舌打ちをして、背の高いほうに向きなおった。

「むっちゃムカポンだぜ。オレァちぃーッとアッタマきてっからよォ。テメーとは遊んでやンねェー。容よう赦しやなくぶっ殺ォースス」

「へひふはな」

　グウェンは棒というか金棒を斜ななめに背負うように構えてみせたが、何を言ったのかさっぱりわからない。ユリカにこっぴどくやられたようだ。口の周りが血だらけで、顎がゆるんでいる。コイツのほォーが弱かったってコトか。つってもユリィ、マジクソ強ェーかンなァ。相あい性しようとかもまァーすッげェーあるし。

　ケドでも━気ィーつけろよ、ユリィ。要チューイな。ホワンの野郎、ケッコー強ェーぞ。つーかチクショウ、気ィーつけろってチョクセツ言ってやることすらできねェーなんてな。思うことしかできねェーなんて。

　パッパと終わらせちまうか。

　どっちか一人しとめたらソコでシューリョーだかンな。

　飛燕フエイヤンはいきなり突とつ進しんした。身体からだは重いし、節々が痛むし、目も少し霞かすんでいるが、これくらいどうってことはない。慣れている。相手は金棒を持っているので、リーチにかなり差があるが、それがどうした。ビビらねェーで突っこめェッ！　どォーせあたらねェー！　あたるハズねェー！　あんなモン、長ささえ見切っちまえばゼンゼン怖こわくねェーっつーの！

　金棒野郎まで五メーテル。

　まだだろ。まだ届かねェ。

　四・五メーテル。

　まだだ。

　四メーテル。

　まだまだッ。

　そう思った。チリッと頭の後ろのほうで火花が散ったような感覚。何だよ。くンのかよッ。飛燕フエイヤンは右方向に横っ跳びした。勘かんに従って正解だった。金棒は思ったよりグンッとのびてきた。イヤイヤ。そォーじゃねェーぞ。飛燕フエイヤンは目に入りかけていた汗をぬぐいながら跳び起きた。腕うでか。腕だ。のびやがった。気味悪ィーなヲイ。

「━だからってよォ……！」

　飛燕フエイヤンは床ゆかを蹴けってふたたび突とつ撃げきした。金棒野郎は痩やせているわりに力があるらしい。そのうえ両手持ちしているし、金棒の速度は馬ば鹿かにならない。ただ、飛燕フエイヤンの目に見えないほど速くはない。それに、飛燕フエイヤンは生まれつきの病と同じくらい、もしかしたらそれ以上に、得物を持っ

た相手と素す手でで戦うことには慣れている。慣れ親しんでいると言ってもいい。

　金棒野郎がブンブン振ふりまわす金棒をかいくぐって、ヤツに肉にく薄はくすることなど朝飯前だ。

　懐ふところに入りこんでしまえば、金棒なんて無用の長物だ。

「アァァタタタタタタタタタタタァァァッ……！」

　速く。

　とにかく速く。

　息つく間も与あたえないほど速く。

　飛燕フエイヤンは手足を武器に変え、金棒野郎をぶん殴なぐって蹴ったくってボッコボコにしてやった。いや、しようとした。

　あたらない。突つきも蹴りも、かろうじてたまにかすめる程度だ。かわされる。目がないくせに、ぜんぶ見えているかのようだ。そうじゃない。これはそんな種類の動きじゃない。見ているというよりも、知っている。読まれている。見み抜ぬかれている。

　不意に目がくらんだ。

　迷わず飛びすさり、金棒野郎が振りおろしてきた金棒を紙かみ一ひと重えでかわした。

「……なんッかミョーだぞクソッタレ」

　飛燕フエイヤンは奥歯をギリリと噛かみあわせて、乱れるどころか破れてしまいそうな呼吸をなんとか整えようとした。アホかよ。限界なんかじゃねェー。オレァまだまだやれる。余よ裕ゆうすぎだぜマジで。ンなのはどォーでもいィーんだよ。おっかスィーぞ。なんでオレの、この飛燕フエイヤン様の技わざがイキナシ見切られちまってンだ？　ヤツはそんなに鬼おにすげェーのか？　イヤ。ヤツァユリィにはやられてる。オレとユリィ、どっちが強ェーとか今考えンのはアレだけど、身体能力は明らかにオレのほォーが上だ。体術もさすがに負けてやしねェーと思う。じゃァー何だ？　コレってイッテーどォーゆゥーワケだ……？

いっか。

どォーでもいィーこったぜ。

肝かん心じんなンは、ヤツがオレの技だの癖くせだのをどォーやら知ってるらスィーってコトだ。

そンだけわかってりゃァー十分すぎらァ。

「アッチーんだよチクショウ」

飛燕フエイヤンは上着を脱ぬいだ。外気にふれた汗あせが冷えて、少しだけ気持ちよかった。それも一いつ瞬しゆんのことで、すぐに背中から肩かたにかけておぞましい寒気が襲おそってきた。気を抜ぬいたら震ふるえてしまう。歯がガチガチ鳴りそうだ。膝ひざが痛い。肘ひじも痛い。首も痛くて、頭が重い。吐はく息は灼しやく熱ねつだ。呼吸をするたびに肺がズキズキする。むやみやたらと暴れている心臓が憎にくたらしかった。ヲイコラ心臓ッ、テメーはよォ、ちったァー我が慢まんしろよボケ。

「言っとッけどよォ。こォーんなやり方すンのはオレとしても本意じゃねェー。我流、無手勝流はオレよッかジンの特技だしな。つってもオレァ大天才だからよォ。イキナシ思いつきで今までちっともやったコトねェーコトやっても鬼強ェーぞ」

飛燕フエイヤンは脱いだ上着の袖そでを右の掌てのひらに巻きつけて、ぎゅっと握にぎった。手首の力をきかして鋭するどく右手を振り、上着でビシッと床を叩たたいてみた。結構いい音がした。上着といってもただの服ではない。複合強化繊せん維い製で、軽くて耐たい久きゆう性の高い装そう甲こう服だ。

「さァーコレでどォーすっかなァ。まァやりながら考えっか。テメーごときそんなンでもなんとかなンだろ」

「はへふな……！」

金棒野や郎ろうが金棒をブオンブオン振りまわしながら猪ちよ突とつしてきた。飛燕フエイヤンも対たい抗こうして上着をビュンビュン振りまわした。試ためしに唸うなりをあげる金棒に上着を叩きつけてみたら、なんということもなく弾はじき返されてしまったので、ちぇっ、と内心で舌打ちしながら床に転がりこんだ。そうして金棒をよけてすぐ、起きあがりざまに今度は金棒野郎の足首を狙

ねらって上着を繰くりだした。金棒野郎はヒョイと足を上げてこれをかわし、猛もう然ぜんと金棒を振りおろしてきた。普ふ通つうなら届かない距きょ離りだが、ヤツの腕はのびる。脳天だ。叩き割るつもりか。ソレだ。ソレだよソレ。オレとしちゃァーソレを待ってたワケよ。つっても今思いついたんだケドね。そンだからトーゼン、テメーもコレは読めねェーだろァ？

　飛燕フエイヤンは上着のもう一方の袖を左手で握りしめ、両りよう端たんを引っぱった。上着は複合強化繊維製の短い棒となった。

「━━シャアッ……！」

　金棒が上着の棒にふれる直前、いやほぼ同時に、飛燕フエイヤンは身体からだを独こ楽まのように回転させた。

　頭の中を真っ白にして手足が動くままに任せたので、何をどうしてどうなったのか、飛燕フエイヤン自身にもよくわからない。

　とにかく、上着は金棒を受け止めたのではない、からめとっていた。

「ふぬっ……！」

「キャハハハハハハアアァァッ……！」

　飛燕フエイヤンは金棒をとらえたまま踏ふみこんで、金棒野郎の手に蹴りをぶちこもうとした。ためらわずに金棒を手放して飛びさがった金棒野郎の判断は、そう悪くなかった。ただ、それほど好判断でもなかった。飛燕フエイヤンはすかさず上着から金棒に持ちかえ、突とつ風ぷうのごとく金棒野郎に接近した。八十四バーシーシサン散乱打ルアンダには徒と手しゅ空くう拳けん以外の技もたくさんあるとはいえ、こんなクソ重い棒を扱あつかった経験はたぶんないはずだが、ソイツがどォーしたってンだッ！　マジクソ関係ねェー……！

　フルスイングしてやった。

　一回。

　前進して、さらにもう一回。

　さらに前進して、さらにもう一回。

　金棒野郎はほとんど這ほう々ほうの体ていといったかんじで、下がって、下がって、下がった。背中を向けて逃にげださないだけで精せいーいつ杯ぱい、という風ふ情ぜいだった。

「──テメーなんざお呼びじゃねェー！　弱ェーんだよタコスケがァッ……！」

　飛燕フエイヤンは金棒を捨て、一気に逃げ腰ごしの金棒野郎に迫せまり、右足の飛び膝ひざ蹴げりをその顎あごに見み舞まった。間を置かずにヤツの頭を抱かかえこむようにして首に両足を巻きつけた。そうしてヤツの側頭部をガッツリ殴なぐりつけ、ボッコリ殴って、ドカスカ殴りまくった。これくらいやれば、普通なら頭ず蓋がいが砕くだけてもいいはずだが、まるで衝しよう撃げきを吸収しているかのような妙みような手て応ごたえだった。コイツもまともじゃねェーってワケかよォ！　ンじゃァーコレでどォーだァッ……！　飛燕フエイヤンはヤツの頭を両手で押さえつけてフンッと身体をひねった。首の骨を折ってやろうとした。

「チィッ……！」

　折れねェーぞチクショウ。キモイんだよコナクソがァッ。飛燕フエイヤンは足をゆるめて両手で床ゆかに着地し、何度か前転して立ちあがった。

　顔をゴシゴシぬぐった。何回か目をしばたたくと、ようやく物の輪りん郭かくがはっきりと見えるようになった。もう寒気はしない。あるところまで熱が上がると、そこから先は寒気のかわりに別の感覚が全身を襲うようになる。この身体は誰だれンだ……？　オレの？　変だよなァ。ゼンッゼンそんなカンジがしやがらねェー。鉛なまりか何かでできているみたいに重い。それでいて石せつ膏こうのように脆もろそうでもある。パラパラと身体の表面が剝はがれていって、それは止めどもなく、やがてすべてが剝がれ落ちて、何もなくなってしまう。いっそのことそうなってしまえばいい。楽になりたい。どうすれば楽になれるのか。いつまでこんな思いをしないといけないのか。

　そンでもよォ。アイツをぶっ倒たおすくらいはできンだろ。だってアイツ、もォーヘロヘロじゃねェーか。立ってはいるけどよォ。フラついてンし。口なんかダラーッと開キッパだぜヲイ。折れはしなくても、関節は外れるってコトか。まァなんとかなンだろ。殺やれンだろ。飛燕フエイヤンは右の拳こぶしで左の掌を叩いた。まだ

力は入る。大だい丈じよう夫ぶだ。

「もォー片ァつけンぞ」

　金棒野郎は、いやだ、とでも言うように首を横に振ふってあとずさった。ンだァ？　ワガママゆゥーんじゃねェーよダボスケ。飛燕フエイヤンはつきることのない汗あせをぬぐって一歩前に踏みだした。音がした。あの音だ。ヲイ。マジかよ。またかよォ？　つーか、もォーかよォ……？

　会場を分断していた壁かべが、重く軋きしむ音を立てて引きあげられはじめた、その瞬しゆん間かんではなかった。ユリカは見み逃のがさなかった。ホワンはその前に動きだしていた。もしかして、ホワンは壁が引きあげられることを知っていた？　気づかなかったけれど、そのタイミングを何らかの方法で誰かがホワンに教えたとか。もしくは、ホワンが合図をして壁を引きあげさせたとか。気になることは他ほかにもあった。ホワンはどういうわけかユリカの技わざを知っていた。まるで一度、手合わせをしたことがあるかのようだった。もちろん、そんなはずはない。ユリカはさっきまで金棒使いのグウェンと一対一で戦っていて、そのあとホワンとやりあう羽目になった。当然、ホワンと会ったのも今日が初めてだ。ユリカはすでに、ホワンの骨格が常人のそれとは違ちがって、金属のような強度を誇ほこっていることに気づいていたが、それは何度かホワンを棍で打ちすえて、その手応えでわかった。ホワンは違ちがう。そうではなかった。包帯のような布で目を覆おおっているので、実際に見えているわけではないだろうが、ユリカの間合いも鵺ヌエ流の技も最初から見切っていた。攻こう撃げきがあたったのも、命中したというより、その鋼鉄のような腕うででやすやすと防がれたと言ったほうが正しい。ホワンはあらかじめユリカの情報を持っていた。かなり確度の高い、詳しよう細さいな情報を。そうとしか思えない。でも、いったいどうやって……？

　ホワンは床に転がっていた金棒を拾い、グウェンに駆かけよっていった。

　壁が天てん井じようまで引きあげられると、やけに広々としているように感じられた。

　飛燕フエイヤンはなぜか上着を脱ぬいで、シャツ姿だった。まるで雨に降られたような有様だ。濡ぬれ鼠ねずみで、そのうえ肌はだが赤い。汗まみれの顔も真っ赤だ。

　あっちーだろオレの手。

　たしかに、熱かった。

　オレさァ、変な病気なんだよね生まれつき。

　熱。

　そう。

　熱だ。

「飛燕フエイヤン……！」

　ユリカは飛燕フエイヤンのもとへと走った。飛燕フエイヤンはこちらを見て、おう、と低い声で言った。弱々しい、かすれた声だった。目つきもおかしかった。焦しよう点てんが定まっていない。ユリカは飛燕フエイヤンの前に出てホワンとグウェンをにらみつけ、極限九手棍を構えた。手が震ふるえそうになって、思わず唇くちびるを噛かんだ。どうしよう。どうしたら。そんで遊びまくってたら死にかけた死にかけた。飛燕フエイヤンはそんなふうに笑い飛ばしていたけれど、笑いごとじゃない。こないださァ、一回倒れたんだオレ。無理をするからだ。無茶ばっかりして。見ればわかる。一目瞭りよう然ぜんだ。

　飛燕フエイヤンはもう限界だ。

　おそらく、ホワンとの戦せん闘とうでかなり力を使ったのだろう。それでもグウェンを押していた。金棒が床に転がっていたし、グウェンの顔はだいぶひどいことになっている。もしかしたら、もう少し、あと一歩というところまで追いこんでいたのかもしれない。でも、ダメだ。これ以上、無理はさせられない。たぶん、飛燕フエイヤン自身、したくでもできないだろう。

「あのさァ、オレ、へーキだぜ」

　飛燕フエイヤンが鼻をすすって、へっ、と笑った。

「ユリィがいりゃァーさァ、百人力だからよォ。オレァまだまだバッキバキにやれっからな。ヨッケーな気ィ回すンじゃねェーぞ」

「バカ」

　それしか言えなかった。他に言葉が見つからなかった。隣となりに進みでてきた飛燕フエイヤンの横顔をじっくり見つめる余よ裕ゆうもなかった。敵だ。敵が目の前にいるのだ。目を離はなしてはいけない。

「……ふほっはへ……」

　グウェンは両手で顎を押しあげると、具合を確かめるように口を何度か開け閉めして、ホワンが差しだした金棒を受けとった。

「おのれ……よくもやってくれたな」

「グウェン。愚おろか者め。貴様が未熟なだけだ」

「黙だまれ。もとはといえば、兄者が手を抜ぬいてさっさと片をつけないからこんなことになるのだ。俺のせいではない」

「手て抜ぬきなどしておらぬ」

「どこが」

「おのれに枷かせを嵌はめるのもまた修行のうちだ」

「なんで勝負の場で修行しないとならん。阿あ呆ほうめ」

「貴様の言葉にも一理ある」

　ホワンはユリカと飛燕フエイヤンに顔を向けたままうなずいて、包帯に手をかけた。

　ほどかずに、むしりとった。

　さすがに驚きよう愕がくせざるをえなかったし、正直、動どう揺ようしてしまった。

　弟のグウェンと違い、ホワンには目があった。ありすぎるくらいだった。

　鼻び梁りようの両りよう脇わきに一つずつ、この二つで十分なのに、眉み間けんの上に一つ、あわせて三つ、これでぜんぶならそれほどショックを受けなかったかもしれないが、左右のこめかみの位置に一つずつ、さらに、左右の耳の上にも一つずつあった。

　七つだ。

　ホワンには七つも目がある。

「……ぐうェッ」

　飛燕フエイヤンが小さく声をもらした。ユリカはなんとか我が慢まんした。口をしっかり閉じていないと、呻うめいてしまいそうだった。

「これも修行のためだ」

　ホワンは七つの目を細めて微笑ほほえんでみせた。

「どうも見えすぎて困るのでな。極力使わぬようにしている。グウェン、あれをやるぞ」

「気が進まんがな」

「拙せつ者しやとて同じだ。だが、不出来で愚かな弟が早く決着をつけよとうるさいのでな」

「この仕事が終わったら、兄者、貴様を殺してやる」

「返り討うちにしてくれるわ、未熟者め」

「できるものならやってみろ……！」

　グウェンはさっき受けとった金棒をまたホワンに投げ渡わたして、何をするのかと思ったら、いきなり衣ころもを脱ぎ捨てて下した履ばき一枚の姿になった。予想以上だった。思っていたよりも痩やせていた。腕や脚あし以外は、骨にゴムのような奇き妙みような質感の皮が貼はりついているような有様だった。呆あつ気けにとられていると、グウェンは自分の胸に手をかけた。もっと言えば、肋あばら骨ぼねだ。まさか、そんなこと。いや、グウェンはそれをやってみせた。両手の指で肋骨をがっちりつかんで、ぐぐぐぐぐぐぐぐぐっと押し開いたのだ。俺のほうがまっとうな人間に近い？　あれは嘘うそだ。大嘘だ。今や肋骨は限界いっぱいまで開かれ、グウェンの身体からだの横よこ幅はばは信じられないほど広がっていた。唖あ然ぜんとするしかなかった。でも、何のためにそんなことを……？

　その答えはすぐにわかった。というよりも、見せつけられた。ホワンだ。

　ホワンがグウェンの前に進みでて、それからあとずさりをした。

　むろん、ホワンの後ろにはグウェンがいる。

　肋骨を思いきり広げている弟が、兄に対してどう出るのか。

「……ハアアァァァァ……？」

　飛燕フエイヤンが素すっ頓とん狂きような声を出した。

　ユリカもぽかんと口を開けてしまった。

　それを表現するために、どんな言葉を使うのが適切なのだろう。

　合体、あるいは、装着。

　とにかく、弟は自分の肋骨を押し広げていた手を放して、兄を迎え入れた。

　二人をぴったりと結合させたものは、兄の肩かたや背中にほとんど食いこんでいる弟の肋骨だ。それから弟は、おそらくさらに接着力を高めるべく、兄の腰こしに両足を文字どおり巻きつけて固定した。一心同体かどうかはわからないが、一身同体には見える兄の右手が弟の右手に金棒を受け渡す光景は、眺ながめているだけで頭がこんがらかりそうになるくらい奇妙だった。

「合体して、パワァーも二倍ってかァ……」

　飛燕フエイヤンが両手で顔をぬぐって、ハッ、と短く笑った。

　待ちなしゃい、と止める余裕もなかった。

「──ンなワケあるかよボケェッ……！」

　飛びだしたときの勢いと、一いつ瞬しゆんでホワンとグウェンのゼン・ラァ兄弟に肉にく薄はくしてみせた大だい胆たんさからは、体調の悪さなど微み塵じんも感じられなかった。あんなに動けるのなら本当に大だい丈じよう夫ぶなのではないかという希望的な観測は、だが、いっぺんに打ち砕くだかれてしまった。

「二倍ですめばいいがな」

　いやらしい笑いをふくんだ声でそう言ったのは弟のほうだった。兄は弟を背負っているのと同じはずなのに、その重みをまるで感じさせないほど速く鋭するどく力強く踏ふみこんで、腹のあたりで合がつ掌しようした。まさにその瞬間だった。飛燕フエイヤンの右の拳こぶしが兄の喉のどを直ちよく撃げきして、跳ね返された。

「オォッ……！」

　飛燕フエイヤンは体勢を崩くずした。尻しり餅もちをつきそうになって、あえてこらえずに身体をひねって床ゆかに身を投げだし、そのまま転がって距きよ離りをとろうとしたのだろうが、そこに弟が腕うでをのばして金棒を床すれすれの高さから振ふりあげてきた。飛燕フエイヤンはやっぱり本調子じゃなかった。前に出るのはまだなんとかなっても、下がる動作になると明らかに鈍にぶい。ユリカは棍を構えて駆かけだした。遅おそい。わたしも遅い。遅すぎる。

　ダメだ。

　とうてい間に合わない。

「ヌン……！」

「―がっ……！」

　飛燕フエイヤンは金棒の一撃をまともに食らった。

　紙かみ屑くずみたいに吹ふっ飛ばされた。

　回転しながら五、六メーテルも空中を移動して床に叩たたきつけられ、ごろごろ転がるたびに、あっ、とか、ぐっ、とか、呻き声というよりも悲鳴に近い声がもれた。

　ようやく横向きの体勢で止まったが、起きあがろうとする気配はない。

　ユリカは飛燕フエイヤンの名を呼ぼうとした。声が出なかった。とにかく飛燕フエイヤンのもとへと急いだ。助け起こそうとしたら、飛燕フエイヤンはユリカを見上げて首を横に振り、右手だけを支えにして身体を起こした。左ひだり腕うでには力が入らないだろ

う。上じよう腕わんと下腕。二箇か所しよだ。完全に折れている。

　たぶん、曲げた左腕で金棒を防ぐというよりも身体の他ほかの箇所を守ろうとした。とっさに左腕を犠ぎ牲せいにしたのだ。医術式。無理だ。骨折を治すのはそう簡単ではない。時間がかかる。そんな余よ裕ゆうはない。でも、このままだとろくに動けないだろう。ユリカは唇くちびるを噛かんで飛燕フエイヤンの左肩にふれた。飛燕フエイヤンは顔をゆがめて歯を食いしばった。

「神経を遮しや断だんしゅるわ」

　気合いを入れて、一瞬で終わらせた。その瞬間はそうとう痛かったはずだ。さすがにこらえきれなかったのだろう。飛燕フエイヤンが、ヒヮァッ、というかんじの短い悲鳴をあげた。大丈夫だろうか。どうにかうまくいったようだ。飛燕フエイヤンは無理やり押さえこむようにして呼吸を整えると、すげェーな、とつぶやきながら右手で顔をぬぐい、兄弟に向きなおった。

「クッソ……オレのパンチがマルキシ効かねェーなんてよォ」

「先しやき走らないで。二人でやるのよ」

「ヘイヘーイ」

　おどけた返事にも力がない。ユリカは腹を決めた。状じよう況きようは厳しい。名案も浮うかばない。それでも、負けるわけにはゆかない。マリアが見ている。仲間たちが。なんとかする。たとえわたし一人でも、なんとかしてみせる。

「飛燕フエイヤン。あなたはわたしをサしやポートして」

「……ああ」

「行くわよ」

　ユリカはすっと進みでて両足でダダンダダンと地面を蹴けった。歩法、閃足センソク。兄弟はもう自分たちの有利を確信しているのか、悠ゆう然ぜんとユリカを迎え撃うつ構えだ。その鼻っ柱をへし折ってやる。ユリカは左上段から襲おそいかかってきた金棒を、螺ら旋せん状のねじりとひねりの旋気センキで弾はじき返してやった。すかさずがらあきになった懐ふところに入りこんで、ホワンの腕のリーチの外から棍を突つきだした。矢や継つぎ早ばやに突きだ

した。ホワンはよけなかった。合掌したままフンッッフンッッフンッと息を吐はきながら身体からだで受け止めた。弾かれた。すごい反動だったが、半ば予想していた。ユリカはその反動をうまく全身で吸収して、次の攻こう撃げきに繫つなげた。

「──破は汰た汰汰っ……！」

　旋気の応用だ。ねじりを加えた突きを左右の肩、鳩尾みぞおち、喉の四点に叩きこむ。じつは一点だけが本命で他の三点は囮おとりだ。鵺ヌエ流古式戦せん闘とう術極限九手棍法裏技〝四幻シゲン〟。兄は合掌をといた。信じられなかった。どうやったの？　すぐにはわからなかった。

　ホワンは両手でユリカの棍にさわった。まさしくさわった、というかんじの手て応ごたえだったが、そんなはずはない。猛もう烈れつなねじりを加えていたのだ。その棍を、微び妙みょうな掌てのひらの角度と手首の返しで、やさしく外側に押しだしてみせた。

　呆あっ気けにとられてしまいそうになったけれど、ユリカは慌あわてて飛びさがった。金棒がくるのではないかと思った。こなかった。後ろだ。飛燕フエイヤンがゼン・ラァ兄弟の後背に回りこんで接近しようとしていた。グウェンの右腕はありえない方向に曲がった。飛燕フエイヤンは金棒をよけて、結局、下がらざるをえなくなった。

「卑ひ怯きょう者ものとそしられたくはないゆえ、明かしておくが」

　ホワンはまた合掌した。

「拙せっ者しゃの七つある目は伊だ達てではない。この目に見えぬものはないと、あえて申しておこう。加えて、我が愚ぐ弟ていは耳がよい。鼻もきくがな。さらに、我ら兄弟はありとあらゆる感覚を共有することができる。すべて真の王ルヴィー・ブルーム様からの賜たまわり物だ」

「必ずしもぜんぶがぜんぶありがたいわけではないがな」

「口を慎つつしめ、グウェン」

「ふん。兄者は禁欲主義者のふりをして、俺が女を抱だいているときの快感を味わうこともできるわけだから、さぞかし満足だろう

さ」

「雑念にしかならぬわ」

「ということは、やはり味わっているんだろう。この助平め」

　ホワンはほんの少し顔をしかめただけで返事をしなかった。その場から動こうともしない。それならばこちらから攻せめればいいだけの話だが、まるで足が床ゆかの下に根を張ってでもいるかのようだ。いや、足のせいではない。気持ちだ。萎なえそうになっている。もう萎えている。ユリカは棍を握にぎる手に力をこめて深呼吸をした。今は何をしても無む駄だのような気がする。今は。今だけだ。何か手立てはあるはずだ。糸口を見つけることさえできれば、なんとかなる。絶対に。あきらめてはいけない。絶体絶命の窮きゅう地ちに追いこまれて、神に罵ば声せいを浴びせた仲間がいた。あれは痛快だった。肩かたの力が抜ぬけた。あのときに比べればまだまだぬるい。

「飛燕フエイヤン……！」

　たいした意味はなかった。ゼン・ラァ兄弟の背後にいる飛燕フエイヤンに声をかけて、少しでも注意をそらすことができればもうけものだ。ユリカはふたたび閃足で前進し、兄弟につめよって棍を繰くりだした。無む駄だ骨ぼねに終わろうと、何度でも繰り返すつもりだった。グウェンは飛燕フエイヤンが引きつけてくれているので、ホワンだけ相手にすればよかった。ただ、たやすい相手ではない。合がつ掌しようをといた両手は、ユリカの棍をすべて、的確に、あっさりと身体の外側へ、外側へと押しだした。子供扱あつかいされて、あやされているようで不快だったが、それ以上に無力感がつのった。みるみるうちに自信がなくなってきて、かわりに焦あせりばかりが生じ、そのせいで自分の動きが硬かたく、小さくなってゆくのがわかった。わかっていてもどうしようもなかった。まだ自分には奥の手がある。鵺ノ血涙ノ正門は開いてない。そう元気づけようとしても、不安になるだけだった。もしそれでも通用しなかったら……？　出しつくしてしまうことが怖こわい。もう何もない、からっぽの状態になってしまうのが恐おそろしい。とっておきたい。あれがあるからまだ大だい丈じよう夫ぶだと思っていたい。そうやって自分を支えていないと、崩くずれてしまいそうで。

　自分がこんなに弱いなんて。

　もっと強いと思っていたのに。

　どんなときでも心を強く持っていられるはずだって。

　いいえ、わたしは強くないといけないのよ。そう言い聞かせるように放った棍の突きは、だが、ホワンの両手に軽々とつかまえられてしまった。

「見えてしまえば所しょ詮せん、児じ戯ぎ」

　ホワンは右手で棍を握ったまま、左手の掌で棍の先を強く押した。

「修行にならぬ」

「―ぐっ……！」

　棍の石いし突づきがユリカの胸を強打した。息がつまったが、棍から手を放さなかった。引っぱりあいになることを予想して踏ふんばろうとしたら、ホワンはあっさり手を放した。ユリカは無様に尻しり餅もちをついて、なんだかものすごく泣きたくなったが、それでも雷かみなりのように降ってきた金棒を間かん一いつ髪ぱつのところで必死に転がってよけ、這はうようにして兄弟から離はなれた。みじめだった。でも、あのときには及およばない。あの雪の日には。そうして奮起をうながさないといけないほど追いこまれていることに気づいて愕がく然ぜんとし、飛燕フエイヤンが兄弟を回りこんで近づいてきてくれて、ほっとした。怪け我が人にんの顔を見て、安心するなんて。

　飛燕フエイヤンはその身を盾たてにして守ろうとするかのようにユリカの前に立って、右手で顔の汗あせをぬぐった。ユリカほどではないにしても小さな背中が、今はやけに大きく見えた。

「ダイジョブか」

「……ええ」

「ンだよ弱気っぽいじゃんユリィらしくねェー。オレァ強気だぜ？」

　気持ちだけじゃどうにもならないのよ、と言ってしまいそうになった。気持ちでも負けている自分に、そんなことを言う資格がな

いことくらいわかっていた。

　門を開こう。怖がらずに正門を開いて、自分のすべてを出しつくそう。ユリカがそう決意したのとほぼ同時に、飛燕フエイヤンがぽつりとつぶやいた。

「金棒野や郎ろうはいィーとして、あの目がウッゼェーんだよなァ」

「目……？」

　きっかけなんて、案外こんなものなのかもしれない。閃ひらめいた。それだ。もう少し考えを整理したかったが、ゼン・ラァ兄弟が動いた。

「しょろしょろ終わりにしましょう……！」

　弟のグウェンがユリカの口くち真ま似ねをして叫さけんだ。なんてくだらない。本当に下品な男だ。とはいえ、品性が下げ劣れつでも、グウェンが腕うでをのばしながら猛もう然ぜんと振ふりまわす金棒はやはり脅きよう威いだ。しかも、ホワンがおもむろに走りだした。

「──アレャァやべェーぞユリィ！」

「しょうみたいね……！」

　飛燕フエイヤンが右方向に駆かけだしたので、あとを追った。ホワンもついてくる。速度はどうだろう。さほどでもない。ホワンの足がとんでもなく速いようには見えないが、グウェンの腕がどんどんぐんぐんのびている。ということは、ホワンと同じ速さで逃にげつづけたとしても、いつかはグウェンの金棒につかまってしまう。そして、そのときはそう遠くないだろう。ユリカは走りながらできるだけ短い言葉で簡潔明めい瞭りように思いついたアイディアを飛燕フエイヤンに説明した。飛燕フエイヤンの答えはさらに短かった。リョーカイッ。その一言だった。あとはタイミングだ。

　そう思っていたら、飛燕フエイヤンが足を止めずに顔だけ振り返らせた。

「イッコ頼たのみがあンだけど」

「何よ！」

「チューしてくれね？」

「はあああっ……？」

「ジツはさァ、オレもォー力が出なくて」

「だからって！」

「ほっぺでいィーから」

「もう！」

　ユリカは立ち止まって振り向いた。全身を使って生みだす、螺ら旋せん状にねじり、ひねる力を瞬しゆん時じにすべて極限九手棍へと伝える。トワニングは、お前には天てん稟ぴんがある、と言ってくれた。ユリカにはよくわからない。自分で判断することではないと思う。

「──離ゃぁぁぁぁぁっ……！」

　左下から猛もう速度で襲おそいかかってきた金棒を弾はじいた。予想よりずっと反動が大きくて、ユリカも撥はね飛ばされたが、地面に叩たたきつけられることはなかった。

「だっ……！」

　飛燕フエイヤンだ。飛燕フエイヤンが抱だきとめてくれた。

　ユリカは飛燕フエイヤンに抱かれたまま床ゆかを転がった。

　起きあがる前に、思いきってぐっと身体からだをのけぞらせ、首をのばした。

　目を閉じて、唇くちびるを押しつけた。

　顎あご、だったと思う。

　汗の味がした。

「──ピッキィィィーンッ……！」

　突とつ然ぜん、飛燕フエイヤンが右腕一本でユリカを抱きかかえたまま跳とび起きた。

「キタぜキタぜキタキタキタァァァァッ……！　スイッチ入っちまったぜ百倍モォードッ！　今のオレに敵なんざいねェェェ……！　ユリィ！」

「は、はいっ？」

「ちゅっ」

　電光石火の早はや業わざだった。飛燕フエイヤンはユリカのほっぺたに音を立てて口づけをするなり、前に飛びだした。ユリカは目を見開いて頬ほおに手をのばそうとしたけれど、そんなことをやっている場合じゃない。即そく座ざに頭を切りかえて、棍の石いし突づきで床を叩いた。

「開きなしゃい、鵺ノヌエノ血涙ノケちゆルイノ門モン……！」

　極限九手棍は大きく膨ふくれあがって、盛りあがったりへこんだりしながら一瞬で真の姿を現した。その名も〝影鵺カゲヌエ〟。かつて泰山タイザンの人間たちが、多くの犠ぎ牲せいを払はらってようやく打ち倒たおした鵺の首領からとった名だ。影鵺は美女、古ふる鷲わし、餓が狼ろう、白びやつ虎こ、巨きよ猪ちよ、大おお猿ざる、妖よう狐こ、狂きよう熊ゆう、飛ひ竜りゆうの九変化をなして人々を欺あざむき、惑まどわせ、拐かどわかし、殺さつ戮りくして、思うさまに喰くらったという。

　棍の影鵺はその先せん端たんが幾いく股またにもわかれている。完かん璧ぺきに使いこなすことができれば、斬ざん、砕さい、掛か、抉けつ、突とつ、払ふつ、打、流、弾だんの攻こう防ぼう動作を自在に行うことができるが、鵺流古式戦せん闘とう術の歴史に名を残している極限九手棍法の達人でも完全なる極みには達していなかったとされる、非常の上にも非常がつく扱あつかいの難しい武器だ。当然、ユリカにとっても影鵺は手に余る。この先、五年、いや、十年修行しても、手足のごとく馴な染じむことはないのではないかとさえ感じている。それでも影鵺はユリカに力を与あたえてくれるだろう。影鵺は生きているのだ。

「──影鵺、わたしに力を貸して……！」

　ユリカは駆けだした。飛燕フエイヤンはすでに金棒の間合いに入ろうとしている。違ちがう。間合いはのびるのだ。もう入っている。金棒がきた。右上から。飛燕フエイヤンはハッハッハッハーと笑いながら身体をひねってこれをかわした。簡単にかわしてしまった。すごい。すごすぎる。たかがキス一つであんなに動けるようになるものなの……？　なぜだか胸が熱くなった。人間って不思議だ。ユリカは閃足で加速して飛燕フエイヤンの背中までの距きょ離りをつめた。約〇・七メーテル。これでユリカにはゼン・ラァ兄弟の姿はほとんど見えない。兄の背中に寄生しているような恰かつ好こうのグウェンの頭の位置は高いが、あの変態男には目がないし、七つ目のホワンは背が高くないから、相手にもユリカの姿は見えないはずだ。

　見えてしまえば所しよ詮せん、児じ戯ぎ。

　さっきホワンはそう言った。

　それなら、見えなければどう？

「──行っくズアアアェェェェァァァァッ……！」

「赴ふっ……！」

　飛燕フエイヤンと呼吸をあわせて一いつ緒しよに突っこんだ。迷いはなかった。これっぽっちもなかった。前に飛燕フエイヤンがいる。飛燕フエイヤンの背中がある。ユリカを信じきって背中を見せている。わたしはただその信しん頼らいに応こたえればいい。影鵺が脈動している。力が流れこんでくる。仲間の声がする。マリア。サフィニア。カタリ。ピンパーネル。トマトクン。それに、今は遠くにいるトワニング。ジョーカーやクローディア、ロム・フォウまで。みんながわたしを応おう援えんしてくれている。

「破は汰た汰汰汰汰汰汰汰ぁぁぁぁぁぁぁあっ……！」

　ユリカは飛燕フエイヤンの右みぎ肩かたの上からその向こうにいるホワンめがけて影鵺を突きだした。次は左肩の上。それから右みぎ脇わき。左脇。右肩の上。左肩の上。影鵺が自在にのびたり曲がったり突きでたりしながらホワンの身体に斬りつけ、抉えぐり、打ちすえている手応えがあった。ホワンの呻うめき声も聞こえた。その間も飛燕フエイヤンは前進して、ユリカもそれにあわせて前に出た。飛燕フエイヤンが急にしゃがみこんだ瞬間も驚おどろかな

かった。きっとそうするだろうと思っていたわけでもないのに、まるで前もって打ち合わせていたかのように身体が動いた。

　ユリカは影鵺を突きだした。

　身体中傷だらけで明らかに狼ろう狽ばいしている様子のホワンが、それでもすかさず両手で影鵺をつかまえようとしたが、かすりもしなかった。

　ユリカがその前に影鵺を引いたからだ。

「──聖気シエンキ充じゆう塡てんカンリョォーッ……！」

　飛燕フエイヤンが影鵺の中ほどに右腕をがっちりと巻きつけた。

　ユリカは右前方に踏ふみこみつつ、ひねり、ねじる力を影鵺に加えた。

「離ゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ……！」「ラアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア
アァァァァァァァァァァァァァァッ……！」

　飛燕フエイヤンの右足が真っ白く輝かがやいた。もしかしたら、黄金脚オウゴンキヤクに似た技わざなのかもしれない。それに旋気センキの威い力りよくがあわさって相乗効果を生んだ。ホワンはとっさに下から突きあげてきた飛燕フエイヤンの右足を両手で防ごうとしたが、たやすく弾き飛ばされた。

「──ばぐをっ……！」

　飛燕フエイヤンの右足はホワンの股こ間かんにめりこんだ。七つの目が同時に白目を剝むいて、ホワンの全身から一気に力が抜ぬけた。

「貴様ァァァァッ……！」

　そのおかげで、グウェンが横よこ殴なぐりに振ふりまわしてきた金棒の勢いはやや鈍にぶっていた。そうはいっても、直ちよく撃げきを受けたらただではすまない。

　ユリカは一いつ瞬しゆん、頭が真っ白になった。

　旋気は即座に連発できるような技じゃない。

　それでもなんとかしないといけない。

　だけど、いったいどうすれば……？

「やらせっかよォォォッ……！」

　飛燕フエイヤンが回転しながら跳とんだ。

　左の後ろ回し蹴げりだった。

　その左足はかすかに白く輝いていたが、金棒と衝しよう突とつした瞬間、心臓が凍こおりつくような、硬かたいものが折れて、砕ける音がした。

　金棒は押し戻もどされて、グウェンはホワンごと大きく体勢を崩くずし、飛燕フエイヤンは受け身をとることもできず、地面に叩たたきつけられた。

　目が眩くらんだ。勝手に声がもれて、身体中が震ふるえた。許さない。許さない。許さない。許さない。何があっても許さない。絶対に許さない。許してなんかやるものか。血が沸ふつ騰とうして、何もかもわからなくなってしまいそうなのに、自分がやらなければならないことはしっかりと理解していた。ユリカは影鵺カゲヌエを振りあげて手首を返した。

「しょろしょろ終わりにしましょう」

「お──」

　グウェンは何か言おうとしたのかもしれない。言わせなかった。聞きたくない。この男の声はもう二度と聞きたくない。ユリカは影鵺を思うぞんぶん舞まわせた。自分の手の中でこんなに美しく自由に舞い踊おどる影鵺を見たのは初めてだった。グウェンの頭部はさんざん斬り刻まれたあげく、胴どう体たいから切り離され、傷んで捨てられたキャベツのように床ゆかに落ちた。ホワンが泡あわを吹ふいて仰あお向むけに倒たおれた。喜びはなかった。安あん堵どはあった。それ以上にひどく疲つかれていた。

　ため息が出た。

肺にたまって汚よごれた空気と一緒に、どす黒い怒いかりに汚お染せんされた魂たましいまでも吐はきだしてしまおうとしているかのような、深いため息だった。

ホワンの身体からだが、ぴくり、と動いた途と端たん、あの溶よう岩がんのような殺意が蘇よみがえって影鵺を構えた自分は、もはや抜けだせない深みにはまってしまっているのではないかと疑った。

ユリカはグウェンの頭部のすぐそばに転がっていた首飾りチヨーカーを拾った。首飾りチヨーカーの真ん中あたりにある硬こう貨かのような部分に、双そう剣けんを象かたどった紋もん章しようらしきものが浮うき彫ぼりにされている。

勝った。今ここで勝利を宣言するべきだろうか。でも、そんな気にはなれない。まだ床に倒れたままの飛燕フエイヤンをちらりと見た。いまいましい、血に塗まみれた首飾りチヨーカーなんかどこかへ投げ捨ててしまいたくなった。そうして飛燕フエイヤンに駆かけより、助け起こして、怪け我がを治してあげないといけない。自分にやるべきことがあるとしたら、それしかない。実際、そうしようとした。

仲間たちがいる通路のほうがざわめいた。

影かげが差した。

何かが飛んできた。

そう思ったときにはもう、それは落下してきた。

着地するのと同時に、振りかぶった分厚く長い刃は物ものを叩きつけた。

切断というよりも破は砕さいするような音がした。

事実、切断と破砕、その両方が起こったらしかった。

シルクハットはかぶっていなかった。途と中ちゆうで脱ぬげたのかもしれない。

手に持っている大振りで分厚いモトロール刀は、拵こしらえも立派で、少なくとも二束三文の安物ではないだろうが、刀身が粉々に

砕くだけてしまっていた。

　身につけている白い燕えん尾び服ふくだけでなく、のっぺりした顔も、大量の返り血を浴びて真っ赤に汚れている。

　アクゼルは壊こわれたモトロール刀をぽいと捨てると、血だまりの中をまさぐって何か拾いあげ、一つ目をこちらに向けた。

「お見事。お見事でございました。お二方のお見事なお手並み、このアクゼル、とくと拝見させていただきました。僭せん越えつながら堪たん能のういたしました」

　声が出なかった。

　この化物は何を言っているのだろう。ゼン・ラァ兄弟はルヴィー・ブルームを敬っているようだった。何のことかよくわからないが、真の王とも呼んでいた。アクゼルもルヴィー・ブルームをご主人様と呼んでいた。彼らは仲間ではないのか。

　それなのに、そんなことを。

　手ずからホワンの首を叩き斬って、平然としているなんて。

「いやはや、ホワンの骨格は特別製でしてな。首を落とすのも大変です。とはいえ、皆みな様さま方にルールを守っていただく以上、こちらも同様に厳守しなければなりません。一つの首飾りチヨーカーを獲かく得とくされたならば、もう一つもお渡わたししなければならない。これはやむをえぬ仕し儀ぎでした」

　一応、言い訳めいたことを口にしたそのあとで、アクゼルは縦に割れた不気味な口をゆがめてホワンの遺体に唾つばを吐きかけた。

「この役立たずめ」

　ユリカはアクゼルから目をそらして唇くちびるを嚙かんだ。アクゼルがホワンの首飾りチヨーカーを差しだしてきたが、無視して飛燕フエイヤンのもとへと走った。横向きに倒れていた飛燕フエイヤンは、ユリカが近づいてゆくと仰向けになって、にひひ、と笑いながら右手でＶサインを作ってみせた。笑える状態ではないはずだ。左ひだり腕うでは痛覚を麻ま痺ひさせたので大だい丈じよう夫ぶかもしれないが、左の脛すねが真ん中くらいの位置で折れ曲がっている。これは痛いだろう。ものすごく痛いはずだ。それに、この汗あ

せ。熱もひどそうだし、脱だつ水すい症しよう状じように陥おちいっていてもおかしくない。ユリカは飛燕フエイヤンを叱しかりつけようとした。それもなんだか違ちがうような気がした。言葉が見つからず、それでもむやみに動こうとする唇を無理やり閉じていたら、見る間に頬ほおが膨ふくらんだ。何やってるのよ、わたし。子供じゃないんだから。そう思いはしてもどうしようもなくて、ユリカは頬を膨らませたまま床に膝ひざをつき、飛燕フエイヤンの左足の付け根に手を添そえた。強制的に神経を遮しや断だんした瞬しゆん間かん、飛燕フエイヤンの顔がゆがんだ。声はもらさなかった。強情なんだから。もう我が慢まんなんかしなくたっていいのに。

「……最後さァ」

　飛燕フエイヤンは、へっ、と笑って目を細めてみせた。

「オレら鬼おにスゲかったよなァ……合体技わざ、ラヴラヴ炸裂爆打ジヤアリエバオダ」

「しょうね」

　思わず微笑ほほえみ返してしまった。

　飛燕フエイヤンは笑え顔がおのまま目をつぶって深く息をついた。そのまま眠ねむってしまうのではないかと思った。くわしく診みなくてもわかる。飛燕フエイヤンはそれくらい衰すい弱じやくしていた。がんばったからだ。最後まで一いつ緒しよに戦ってくれた。二人で戦い抜ぬいた。必ずしも後味はよくないけれど、そうして手に入れた勝利だった。飛燕フエイヤンは頼たのもしい相棒だった。少しだけ、だけれど、かっこよかった。でも、もういいのよ。休んでいいから。ユリカは手をのばして、飛燕フエイヤンの頬にふれようとした。

　不意に飛燕フエイヤンが目を開けて、小首をかしげた。

「……アレレ？　オレらってやっぱラヴラヴなン……？」

「な──ちちちちっ、違いましゅ！」

「だってさっきオレがラヴラヴ炸裂爆打ジヤアリエバオダっつったら、ユリィもそォーだって」

「しょれは！」

「ラヴラヴかァ……ふひひ……」

　抗こう議ぎしようとしたが、飛燕フエイヤンはまた目を閉じて、それと同時に寝ね息いきを立てはじめた。

　ユリカは引っこめかけた手をのばして、飛燕フエイヤンの頬をさわった。

　熱かった。

　火傷やけどしてしまいそうなほど熱く感じた。

　なぜだか火傷したい気分だった。

　わたしったら、何を考えてるの。バカみたい。



　天てん井じょうを仰あおいで深呼吸をした。

　振ふり返ると、マリアローズと目があった。

　マリアローズは通路の手すりから身を乗りだし、鮮あざやかな橙だいだい色いろの目をいっぱいに見開いて、唇を引き結んでいた。

それでいて、唇の両りよう端たんがきゅっと持ちあげられている。なんとも言いがたい微び妙みような表情をしているのは、マリアローズだけではない。きっと皆みな、どう反応するべきか決めかねているのだろう。会場全体が妙みようにに静かだ。

　正直、ユリカにもよくわからない。第一勝負フアーストゲイムからしてああだった。そもそも、すべての勝負ゲイムで圧あつ倒とう的に、完全な勝利を収めたとしても、取り戻もどすことができるだけで、何かを勝ちとることができるわけではない。それなのに、一つでも負ければ、たちまち大事なものを失ってしまうのだ。その一方で、第一勝負フアーストゲイムの相手方の参加者プレイヤは昼飯時ランチタイムの関係者のようだったし、アクゼルはホワンをあっさり始末してしまった。たぶん、相手の参加者プレイヤたちは、ルヴィー・ブルームにとって、大切な、欠くべからざる存在などではない。たとえ勝負ゲイムに負けて失うことになっても、たいした痛手ではない、単なる手て駒ごまでしかないのだろう。

　徹てつ底てい的に不平等だ。

　だからこそ、だ。

　だからこそ、絶対に勝たなければいけない。

　誰だれ一人失うことなく第七勝負セブンスゲイムまで持ちこんで、アジアンにルヴィー・ブルームをこてんぱんにやっつけてもらわないと帳ちよう尻じりがあわないし、気がすまない。

　ユリカは反へ吐どが出そうな気持ちを抑おさえつけて無理やり笑顔を浮うかべ、さっき飛燕フエイヤンがしたようにＶサインを作ってみせた。

　マリアローズがぐっと歯を噛みしめて、声にならない声を発しながら拳こぶしを振りあげた。

「ユリカ最高オオオオオオオオオオオオ
オォォォォォォォォォォォォォォォォ……！」

　跳とびあがって大声でそう叫さけんだのはカタリだった。サフィニアがユリカの名を呼んで、ピンパーネルとトマトクンは力強くうなずいてくれた。いきなりヨグが拍はく手しゆしはじめ、意外なことに荊王ジンワンがそれにならって、やがてアジアンとベティもつ

づいた。それだけならともかく、カタリが音おん頭どをとって始めたユリカコールはさすがに恥はずかしかった。ユリカ、ユリカ、ユリカと連呼する声を浴びて赤面しながらアクゼルの様子をうかがうと、一つ目を半開きにして、指にぶらさげた首飾りチヨーカーをくるくる回しつつ、縦に割れた唇の合間から、くくく、と低い笑い声をもらしていた。

Omenage 897 12th revolution 6th day

サンランド無統治王国首都エルデン・アンダーグラウンドD8
〝怪虫の坩堝ガンズゲイル〟

chapter.4
向日葵のおかげ

かなわないな。

本当に、かなわない。

あのユリカが相手を言葉で挑ちよう発はつしてみせたとき、鳥とり肌はだが立った。口で説明されなくても、ユリカが伝えようとしたことはぜんぶわかった。ＺＯＯに入って、みんなと出会って、少しずつかもしれないけれど、成長しているのは僕だけじゃない。わたしだって変わってきているのよ。マリア、わたしがあなたから学んだこともたくさんあるのよ。ユリカは背中でそう語っていた。小さいのに、大きな後ろ姿だった。そういえば、トマトクンも言ってくれたっけ。俺たちがお前に助けられたことは何度もあるんだぞ。何をバカなことを、と思った。バカなことなんかじゃないわよ、とユリカに肩かたを叩たたかれたようなかんじがした。ユリカにはかなわない。かなわなくてもいいんじゃないかと思える。でも、やっぱり強くなりたい。ちょっとずつでもいいから強く、いつか大好きなユリカを支えてあげられるくらい、強くなりたい。

あんなやつには任せたくないし。

飛燕フエイヤン。

とくに終しゆう盤ばん、とてもいいコンビネーションを見せたことは否いなめないけれど、なんかやだ。ぶん殴なぐっても目を覚ましそうにないくらい深く寝ね入いっている飛燕フエイヤンに医術式を施ほどこすユリカの顔つきが、やけに真しん剣けんで──や、ユリカはそういうとき、いつも真剣だけど、その手つきがなんだかやたらとやさしく見えて──や、ユリカはいつだってやさしいけど、雰ふん囲い気きというか何というか、とにかく妙にいいかんじで、やなかんじだった。

さりとて治ち療りようの邪じや魔まをするわけにはゆかないし、黙だまって見守っているしかないわけで、マリアローズとカタリが二人して仏ぶつ頂ちよう面づらを並べているのに、ユリカはまったく気にするそぶりも見せず──まあ、治療中だからあたりまえだけれど、終わったあとにタオルで身体中の汗あせまで丁てい寧ねいにぬぐってやって、荊王ジンワンに手伝わせて上着を着せ、大だい丈じよう夫ぶかしら、とつぶやいた表情がめちゃくちゃ気づかわしげで、ユリカ、もしかして──なんてあらぬことを想像してしまい、即

そく座ざに打ち消して、打ち消しきれず、カタリと顔を見あわせた。不本意ながら、半魚人と目と目で通じあってしまった。

　今はしょうがないとしても、あとで始末しよう。

　ヤツを消そう。

　まあ、冗じよう談だんだけどね。

　半分とはいかないまでも、三分の一くらいは本気だけど。

　だって、飛燕フエイヤンだよ？　小こ猿ざるだよ？　馬ば鹿か三号だよ？　成り行きでこの７Ｓとのセブンス七つの・ゲ勝負イムでは仲間ということになってしまったけれど、もともとはむしろ敵だ。マリアローズは龍りゆう州しゆう連合に拉ら致ち監かん禁きんされた経験まであるのだ。それに、龍州連合は一いつ緒しよにつかまったベアトリーチェの身み柄がらをＳｍＣに渡わたした。おかげでベアトリーチェはひどい目に遭あった。そんな連中の一味だ。一味どころか、頭目マスターの一人だ。とうてい認められない。認めてなるものか。

　わかってはいるけど。そんな簡単なものじゃないってことは。

　あのときはこんなふうになるなんて思ってもみなかったし。みんな、それぞれ事情を抱かかえて動いているわけだし。

　互たがいの運命がどんなふうによじれて、どう重なったりすれ違ちがったり離はなれていったりして、どこに行きつくのかなんて、きっと誰だれにもわからない。

　わかっていたら、傷つくことも、傷つけることもないはずだ。失敗しないで、大切なものは失わないように守って、仲間や友だちとやさしく寄り添そいあって、ぬくもりをわけあって生きてゆけるはずだ。

　僕らは、少なくとも僕は、そんなに賢かしこくないし、器用でもない。

　いつもいつも間違ってばかりだ。

　前へ、前へと歩いているつもりだけれど、どこに向かっているのかもわからない。

腹立ちまぎれに蹴け飛とばした路ろ傍ぼうの石が、跳ね返ってきて額にぶつかり、涙なみだがにじむ。

なんてみじめで滑こつ稽けいで、笑うに笑えない、おぼつかない歩みだろう。

僕は裸足はだしで、鋭するどく尖とがった石を踏ふんだ。血が出て、痛くて、うずくまっていた。声をかけられて、どうにか顔を上げた。ユリカは、歩け、とうながしたわけじゃない。ただ自分が歩く姿を見せてくれただけだ。その後ろ姿を。どうする？　どうしたい？　そう尋たずねることさえしなかった。それは僕が自分で考えればいいことだ。自分で自分に問えばいい。へたれの僕にだってそれくらいのことはできる。どうする？　どうしたい？

痛いよ。

怖こわい。

でもやっぱり、歩いてゆくしかないと思うんだ。

歩いてゆきたいんだ。

ここで立ち止まってしまいたくない。

僕の中に歩いてゆこうという意志さえあれば、ついてこいとばかりに前を行く人がいる。ときには手を引いてくれる。背中を押してくれる人もいる。

予感がある。

僕はこれからとても傷つくだろう。打ちのめされるだろう。また足が萎なえてしまうかもしれない。だから、立ち止まってじっとしていようとした。嵐あらしがくるのなら、黙って耐たえて、過ぎ去るのを待てばいい。何も立ち向かうことはない。つらいだけだ。やめたほうがいい。傷つきたくない。自分がつけた傷から目をそらしたい。その傷口はおそらく深い。ものすごく深い。癒いえがたいほどに深い。僕があいつに負わせた傷は。

どうすればいいかなんてわからない。そのとき自分がどうするのかも見当がつかない。心臓がずきずきする。喉のどはからからだ。舌が口の中にぴったりとくっついてしまっていて、動かない。さっきからずっと、岩を削けずって作られた階段をひたすら下りてい

る。その足あし許もとが頼たよりない。岩の壁かべに手をつこうとして、思いとどまった。ところどころにランプが吊つるされているが、それでも薄うす暗ぐらくて狭せま苦くるしい階段だ。一行は一列になっている。先頭はアクゼル。その後ろにあいつ。それからベティ。ヨグ。ユリカ。荊王ジンワンはぐっすり眠ねむっていて
ちょっとやそっとでは起きそうにない飛燕フエイヤンを抱だきかかえている。マリアローズのすぐ前にはピンパーネル。そして、トマトクン、サフィニア、カタリの観戦者組がつづく。

　右手をきつく握にぎりしめてから、開いてみた。

　大丈夫だ。

　僕の身体からだはちゃんと僕の思うとおりに動いてくれる。

　ままならないのは僕の心で、そのせいで身体までたまに言うことを聞かなくなる。

　それもこれもふくめて自分自身だと受け容いれることができるようになるまで、あとどれくらい痛みを乗り越こえてゆかないといけないのだろう。たくさん人を傷つけて、自分も傷ついて、泣いたり、涙を押し殺したりしながら、その遠くて険しい道のりを踏とう破はした果てには、本当に終着点があるのだろうか。

　僕はあいつに言えるのかな。

　ちゃんと訊きけるかな。

　クラニィって誰だれ？　その人はどうしてしまったの？　ローガンっていう人とはどういう関係だったの？　どんなことがあって、きみはどれだけ傷ついたの？　きみはそれで、あんなふうに泣いたりしたの？　それは──僕のせいなの？

　今まで考えもしなかったんだ。初めて会ったあのとき、きみは僕をどう思ったんだろう、とか。きみは何度も何度も僕を救ってくれたけど、どんなふうに僕を見ていたんだろう、とか。僕はいつもつめたくあしらった。助けてもらっても、感謝なんかほとんどしなかった。叩たたいたこともある。足あし蹴げにしたことだってある。きみは平然としていた。僕が何を言っても、何をしても、変わらなかった。次に会ったときは、相も変わらずくだらない、夢でも見ているんじゃないのと言いたくなるようなバカげた台詞せりふを

ぺらぺらまくし立てて、僕は呆あきれて、迷めい惑わく千万だけど、追い払はらっても追い払っても寄ってくるし、もう勝手にすれば、みたいな態度だった。きみは平気そうだった。本当に？　ぜんぜんなんともなかった？　僕の言動がきみを傷つけたことは一度もないのかな？　ＺＯＯに入って、いきなりきみが現れなくなった。きみは僕がクランに入ることを反対していたから、臍へそでも曲げたのかな、と思ったりした。ただ、見られている、と感じることはたまにあった。見ているのなら、目の前に出てくればいいじゃないか。変なの。まあ、きみの長ちよう広こう舌ぜつを聞かされずにすむわけで、それならそれでいいけど。僕としては。そんなふうに軽く考えていた。気楽なものだった。だけど、それにはたぶん、何か事情があって。きみはそうせざるをえなくて、そうしていただけで。その間、きみがいったいどんな気持ちでいたかなんて、想像したこともなかった。

　わかるヨ。キミのことなら、全部。

　ああ――、

　そうだね。そうなのかもしれない。

　何もかもうまくゆかなくて、一人で苛いら々いらしていると、きみはどこからかやってきて、おどけてみせて、僕は怒おこって、八つ当たりして、ちょっとだけすっきりして、しょうがない、こんな日もある、明日もがんばろうって、気持ちを切りかえた。ＺＯＯに入ってからも、自分の居場所なんてないんじゃないかと悩なやんでいたら、それでもＺＯＯにいるべきだと言ってくれた。

　キミだって彼らのことが好きなんだろう？

　そうだよ。そのとおりだよ。なんでわかるわけ？　どうして……？

　愛ゆえに。

　バカじゃないの。僕は思わず笑ってしまう。

　やっと、キミの笑顔を見ることができた。

　ああ、もう――、

　そういうことなんだね。ずっと、そうだったんだ。

　きみは気づかれないように、そっと僕を抱きしめていたんだ。

　それなのに、僕はきみのことがまるでわからないままなんだ。

　それなのに、きみは僕にわかってくれとも言わないんだ。

　ただどうにも抑おさえきれなくて、泣いてしまっただけなんだ。

　階段を下りきってしまうと、平らな通路がのびていて、突つきあたりに木製の扉とびらがあった。返り血にまみれたままのアクゼルが扉の前に立って振ふり返ったところを見ると、どうやらその向こうが第三勝負サードゲイムの会場らしい。案の定だった。

「さて」

　アクゼルは、コホン、と嘘うそくさい咳せき払ばらいをした。

「この先が第三勝負サードゲイムの会場でございます」

「もったいぶらないで、さっさとルールを説明してくれない？」

　自然と口をついて出た。アジアンが顔を振り向かせてこっちを見た。まだすっかりきれいとまではゆかないけれど、ユリカに治ち療りようしてもらったわけでもないのに、だいぶ傷が治ってきている。そのことには気づいていたので、驚おどろきはしなかった。ただ、自分は本当にあいつのことを何も知らない、とあらためて思い知らされた。たとえば今、振り返って、探さぐるような目つきでこちらを見ているベティは、どれくらいあいつのことを知っているんだろう。

　火で炙あぶられたように、胸がヂリッとした。

　何だろう、これ。

「承知いたしました」

　アクゼルが一礼して扉の脇わきに移動した。扉には例の四角い金属製のプレートが打ちつけられている。プレートに刻まれている上古ハイ高位ロメ語オンの文字の量は第一勝負フアーストゲイムや第二勝負セカンドゲイムよりもだいぶ多いように見えた。ただの殺しあいではない、何か複雑な勝負ゲイムなのか。

「それでは僭せん越えつながら、このたびもわたくしアクゼルが共通語に訳させていただきます」

　マリアローズの勘かんはあたった。

　第三勝負サードゲイムに参加する参加者プレイヤは三名。この勝負ゲイムに出た参加者プレイヤは第四勝負フオースゲイムと第五勝負フイフスゲイムには出られない。問題はここからだった。

　第三勝負サードゲイムは攻こう撃げき側のＡチームと守備側のＤチームに分かれて行われ、Ａチームはあっちが、Ｄチームはこっちが担当する。Ｄチームにはベイスと呼ばれる陣じん地ちが与あたえられるが、守備側といっても、このベイスを守り抜ぬくことが勝利につながるわけではない。Ｄチームが勝利するためには、制限時間内にＡチームの三名全員をつかまえなければならないのだ。

　つかまえることをキャプチャといい、これには特定の手続きが必要となる。アクゼルの話を聞いただけではどうもイメージしづらいのだが、どうやらＡチームの参加者プレイヤは、共通語で何か書かれた布みたいなものを胸に三枚重ねて貼はりつけているらしい。これをコオドと呼ぶ。Ｄチームはそのコオドを確かく認にんして、ベイスに戻もどる。ベイスにはボタンが設置されていて、確認した名前をコールしながらそれを押すと、キャプチャ成立と見なされる。キャプチャされた者は、ベイス内にあるプリズンに入らなければならない。つまり、プリズンにＡチームの三名が収容された段階で、Ｄチームの勝利が確定するわけだ。

　ただし、プリズンをのぞくベイス内にＡチームの者がいるときは、Ｄチームがボタンを押すことはできない。逆に、Ａチームの者が「リリース」をコールしながらボタンを押すと、そのときプリズン内にいるＡチームの者は解き放たれてしまう。

　また、Ａチームの者は、ベイスに一度侵しん入にゅうしてからその外に出たあとか、あるいはプリズンから解き放たれてベイスの外に出たあとに、布を破ってコオドをチェンジできる。布は三枚重ねて貼りつけてあるわけだから、チェンジは二度まで可能ということだ。三つ目のコオドでキャプチャされると、ベイスの外に出た瞬しゅん間かん、コールされてまたキャプチャされてしまうので、そうなった者は戦力外に等しいだろう。

　制限時間は一時間。

　Ａチームの三名をキャプチャできないまま時間切れとなった場合、Ｄチームの敗北が確定する。敗北した参加者プレイヤはただちに首飾りチヨーカーを差しださなければならない。

　一方、Ｄチームが勝利すれば、首飾りチヨーカーを一つ入手できる。

　こっちは三つなのに、たった一つ。不公平だと抗こう議ぎしてもいいが、そんなことをしても始まらないだろう。マリアローズは腕うで組ぐみをして顎あごをつまみ、爪つま先さきで地面をトントン叩たたいた。三人対三人。こうやってルールを聞かされただけでも、考える余地がいろいろある。肉にく弾だん戦せんだけで片がつくとは思えない。これってもしかして、僕向きなんじゃないの……？

「会場、見せて」

「もちろんでございます」

　アクゼルが扉を開けた。その先は五メーテル四方ほどの部屋で、正面は壁かべではなく鉄てつ柵さくだった。どうやら鉄柵の一部が開閉できるようになっているらしく、鍵かぎもついている。この部屋はさしずめ観客席といったところか。

　鉄柵の向こうには十五メーテル四方程度の灰色っぽい空間が広がっていて、その真ん中よりもこちら寄りの位置に四角い岩の台がある。台の上に突きだしている赤い突とつ起き物ぶつがボタンなのかもしれない。台よりもっとこちら側に置かれている、金属製らしい円柱形の籠かごがプリズンというやつか。あの大きさなら、大人三人くらいは楽に収容できそうだ。ボタンがあり、プリズンがあるということは、この広間がＤチームのベイスなのだろう。

　ベイスの正面と左右の壁には、それぞれ一箇か所しよずつ穴があいている。Ａチームがベイスに攻せめこんでこないかぎり、Ｄチームはあの穴から外へ出て行かないといけない。穴の向こうがどんなふうになっているのか、ここからではうかがい知ることができないので、最初は手探り状態になるだろう。まずはベイスの外の構造を把は握あくしないといけない。相手を一人キャプチャするまでは、ベイスをあけて三人で外に出てもいいが、ひとたびキャプチャが成立した途と端たん、Ｄチームは守備のことを考えざるをえなくなる。守備に人員を割さけば、当然、そのぶんキャプチャのために動

くことのできる人員が少なくなってしまう。

　マリアローズはベティの顔は見ずに、ヨグの表情をちらりとうかがった。ダメだ。こいつは何を考えているのかさっぱりわからない。信しん頼らいできるとかできないとか、それ以前の問題だ。この男と組んで何かをやるところがこれっぽっちも想像できない。ユリカは出られない。もちろん、飛燕フエイヤンも。いいけど。うっさい小こ猿ざるなんて冗じよう談だんじゃないし。ということは、だ。

　マリアローズが視線を向けると、彼は、わかっている、とでも言いたげに微笑ほほえみながらうなずいてくれた。

　ピンパーネル。彼のことを信用できなくて、いったい他ほかの誰だれを信用できるのかというくらい、頼たよれる男だ。その穏おだやかな微び笑しようが与えてくれるリラックス効果も無視できない。

　それから、こいつですか。

　はっきり言って、ものすっごくやなんですけど。

　マリアローズの視線に気づいたのか、やつは色眼鏡サングラスをこちらに向けた。マリアローズはすぐさま顔をそむけた。ため息が出た。でも、仕方ない。消去法だ。これしかない。

「それで、そっちの参加者プレイヤは？」

「バシルド」

　おそらく名前なのだろう。アクゼルがそう呼んで手を叩くと、真ん中の穴から進みでてくるものがあった。

　そいつを、人、と呼ぶのには抵てい抗こうがある。ある意味、やっとそれらしくなってきたということなのかもしれない。だから、吃驚びつくり仰ぎよう天てんしたりはしなかったけれど、さすがにはっと息をのんでしまったし、もっと違ちがう反応を示した者もいた。

「……バシルド……？」

　ほとんど呻うめき声に近かった。マリアローズのみならず、皆み

ながーいつ斉せいに声の主のほうを見た。

　むやみやたらと端たん整せいなあいつの顔は、唇くちびるの脇わきや頬ほおのあたりに凝ぎよう固こした血がこびりついているだけで、傷らしい傷はもう見あたらない。その薄うす青あおい両りよう眼めは見開かれ、少しだけ開いた唇の合間からのぞく白い歯はきつく噛かみあわされている。

　第三勝負サードゲイムの会場は天てん井じようの各所に照明が据すえつけられていて、あいつの顔色がやけに悪いことなんて一目瞭りよう然ぜんなくらい、かなり明るい。

　マリアローズは正面に向きなおった。

　あらためて思った。あれは人じゃない。だったら何なんだと訊きかれると困るが、とにかく人には見えない。それでいて、なまじ直立歩行していて、服なんか着ているものだから、明らかに人ではないものの、人型と言えなくもない。

　やつが着ている服は、白地に黒で何やらややこしい紋もん様ようが描えがかれた袖そでつきの長衣だった。胸に貼はりつけるか縫ぬいつけるかしてある四角い布は、一枚ではなく何枚か重なっているようだ。見えている一番上の布は真っ白だが、おそらく二枚目、三枚目、四枚目にはコオドとやらが記してあるのだろう。しかし、どうしても服ばかりに目がいってしまう。あまりくわしく見たくないからだ。その一方で、見たい欲求もあるのだけれど、やっぱりやめといたほうがいいんじゃない？　や、そんなわけにもいかないんだけどね？　でも、怖こわいよ？　やばいよ？　はっきり言って、かなり、そうとうグロいよ……？

　長衣からのぞいている手足は、なんということもない。簡単に言えば、タコだとかイカの足のようなものだ。紫むらさき色いろの触しよく手しゆみたいなものが、長衣の袖や裾すそからもじゃもじゃうじゃうじゃ突つきだすというか飛びだすというか、とにかくあふれだしていて、さかんに蠢うごめいている。もちろん、見ていて気持ちのいいものではないけれど、たいしたことはない。本当に。やつの顔、いや、あれを顔と呼ぶのは言語感覚に対する無む謀ぼうな挑ちよう戦せんだろう、やつの頭部に比べれば。

　皮肉なことに、その頭部はやつを人型の生き物と思わせるのに一役買っていた。なぜなら、やつの頭部は人間の頭ず蓋がい骨こつに

似た形をしていた。似ているだけで、同じではまったくなかった。たとえば、その眼がん窩かからは無数の細い紫色の触手があふれだしていた。触手の先せん端たんにはもれなく小さな眼球がついていた。鼻の部分にある穴からも触手が飛びだしていた。口は上うわ顎あごがあって下顎があってという構造ではなく、ただ丸い穴があいているだけだった。その穴の中はぬらぬらした赤い粘ねん膜まくで、奥に弁のようなものがあり、開いたり閉じたりしていた。どうやら呼吸しているらしい。ただ息をしているだけで、これほど生理的な嫌けん悪お感かんを催もよおさせる生き物というのも珍めずらしいだろう。

「……おひさし……ぶりで……ございます……おうじ」

　その弁がぷるぷる震ふるえて音声を作りだしたようだった。つまり、やつは今、喋しやべった。流りゆう暢ちようとは言えない、聞きづらい声ではあったけれど、共通語だった。喋れるんだ。それはいい。とりあえず、やつが喋れるということは事実として受け止めておいて、やつの言葉の内容について考えるべきだろう。

　お久しぶりでございます、おうじ。

　やつはたぶん、そう言った。

　おうじ。おうじ？　もしかして、王子……？

　誰が？

　やつは誰に向かってそう言ったのか。

「……わし？」

　カタリは、ちゃうちゃう、あんな知りあいおれへんがな、わしはちゃうで、とでも言わんばかりに手を高速で左右に振ってみせたが、そんなことはわかっている。どう見てもそうは思えないので、つい忘れてしまいそうになるけれど、たしかにカタリは王子だ。正確には、元王子と言うべきかもしれない。いずれにしても、カタリの故国であるキングダム・イズルハは、地図にもちゃんと載のっているれっきとした人間の国家だ。いくらカタリが人間未満の半魚人でも、あんな化物に王子呼ばわりされる筋合いはないだろう。

　マリアローズはそっと息をついて、唇の端はしをきゅっと嚙んだ。

　あいつは両眼をすぼめて眉み間けんに縦たて皺じわを刻んでいた。

　何か言おうとしたのか、唇を動かしたが、声は聞こえなかった。

　化物が、バシルドが、触手の群れを這はわせて滑すべるように近づいてくる。

　悪夢のように。

「……おかわりなき……ごようす……まことに……まことに……ちょうじょうで……ございます……おうじ……いえ……それどころか……ますます……おうつくしく……なられて……」

「黙だまれ」

　鉄てつ柵さくが震えた。アジアンが鉄柵に右手を叩たたきつけていた。怒おこっているのか。苛いら立だっているのか。あるいは、怯おびえているのか。とにかく平静ではないことは間違いなかった。それなのに、声は静かだった。平板で、何の感情もうかがえなかった。ひどくアンバランスだ。

「黙れ。その醜みにくい口でボクを語るな。一いつ切さいだ。一言も口にするな。黙れ」

「……せっかく……ふたたび……おめにかかれましたのに……」

「ボクが再会を喜ぶとでも思ったか。黙れ」

「……ふふ……ふふふ……ふふ……われらいちどう……おうじが……おかえりになるひを……おまちもうしあげて……おりますのに……」

「帰るはずがないだろう。黙れ」

「……ふふふ……ふふ……ふふふ……」

　バシルドは不意に、あとずさりでは決してない、そのままの姿勢で後退しはじめ、穴の手前で停止した。あの長衣の中がどうなっているのか、想像したくはないけれど、考えておくべきかもしれない。何しろ、マリアローズはもう決めていた。バシルドの得体の知れなさ、気色の悪さを目まのあたりにして腰こしが引けそうになっ

たものの、決意が揺ゆらぐほどではなかった。どうせまともな相手なんていないのだ。当たり籤くじはたぶんない。すべて外れだ。

　あいつはまだ鉄柵に右手を押しつけている。

　その手がかすかに震えていた。

　ベティが心配そうにあいつを見つめている。

　マリアローズは深呼吸をして、アクゼルを見た。

「相手は三人いるはずじゃないの。三人って言っていいのかどうか、かなり微び妙みようなところだけどさ。他ほかのもう二人は？　あと、あいつ、首飾りチヨーカーしてないように見えるんだけど」

「首飾りチヨーカーは、今回にかぎってわたくしのほうで預らせていただいておりますので、皆みな様さまが見事勝利なさいました暁あかつきには、わたくしアクゼルから皆様にお渡わたしすることをお約束いたします。どうも首飾りチヨーカーを嵌はめるのは無理があるようでしてな。そのあたりはお察しください。それから、残りの二名ですが、これはバシルドに用意させました。勝負ゲイムが始まってからのお楽しみということで、何とぞご了りよう解かいいただければと思います」

「ふうん」

　クモソウ野フ郎オ。

　口くち汚ぎたなく罵ば倒とうしてやりたいが、ぐっとこらえた。そんなことをしてもストレス解消くらいにしかならないし、今のところは溜ために溜めて、この勝負ゲイムに勝つことで晴らしてやるべきだ。

　ただし、頭に入れておかないといけない。７Ｓとのセブンス七つの・ゲ勝負イムに公平さを期待したらバカを見る。ルールなんて単なる体てい裁さいだ。ひょっとしたら、こっちをやけっぱちにさせないための方便でしかないのかもしれない。

　顧かえりみれば、第二勝負セカンドゲイムもひどかった。あの壁かべだ。天てん井じようから落ちてきて会場を分断した壁について、アクゼルは一言も説明しなかった。それに、壁の上げ下げのタ

イミングもあやしかった。一定の間かん隔かくでは絶対になかったし、戦せん況きようを見ていたかんじでは、誰だれかが、もちろん相手側の者が壁を操作していたと疑わざるをえない。二度目に壁が引きあげられたとき、飛燕フエイヤンはグウェンを追いつめていたのだ。あの展開なら、きっと飛燕フエイヤンは遠からず一人でグウェンをしとめていただろう。そうはさせまいとして、何者かが壁を引きあげ、兄弟を合流させた。

　仮に問いつめたところで、アクゼルは認めないに違ちがいない。もしくは、そのとおりでございますが、それが何か？　みたいに開きなおってみせるか。どちらにしても、超最低ＳＵＣＫだ。

　おそらくルヴィー・ブルームは、すべての勝負ゲイムをどこかで見物しているのだろう。どうやったらそんなことができるのかなんてわからないが、きっとそうだ。そうしてほくそ笑えんでいる。事情はさっぱりだけれど、さっきのアジアンの反応も、ルヴィー・ブルームにしてみれば予想どおりなんじゃないか。たぶん、勝ち負けさえ関係ない。極きよく端たんに言えば、アジアンに嫌いやがらせをしたいだけなんだ。たったそれだけのために、昼飯時ランチタイムの人たちを連れ去って、言うことを聞かなければ殺してやると脅おどしているんだ。それもふくめて、盛大な嫌がらせなんだ。

　いい性格してるよ、ほんと。

「ちょっといい？」

　アジアンはとてつもなく意外そうだった。まるで犬に話しかけられた子供みたいにきょとんとして、目をぱちぱちさせながら、あ、ああ、とうなずいてみせた。まったくためらわなかったと言ったら嘘うそになるけれど、マリアローズは思いきって、単刀直入にずばっと尋たずねた。

「あのバシルドって、どんなやつなの？　もし何か知ってることがあれば、教えといて欲しいんだけど」

「……あれは」

　アジアンの薄うす青あおい目が揺れた。焦しよう点てんがぶれそうになって、でも、すぐにマリアローズをしっかりと映した。

「修モ道ン士クといってもわかるはずがないネ。ある場所の……管

理者のような立場にある集団の一員だ。知ち恵えはそれなりに回ると思う。ただ、申し訳ないけど、正直、それ以上のことはボクにもよくわからない。ああいう生き物だということしか知らないんだ」

「なーんだ」

　マリアローズは眉まゆを上げて鼻先で笑ってみせた。ベティの視線が痛い。あの視線はほとんど凶きよう器きだ。

「面識ありそうだし、弱点とかでも知ってるかなと思ったのにさ。その程度じゃぜんぜん参考にならないね」

「すまない」

　アジアンは目を伏ふせてうつむいた。てゆうか、やめてよね。たかがこのくらいで、そんな本気感漂ただよう落ちこみ方しないでくれる？

　なんかさ、胸が、こう──、

　ちくっとして。

　ほんの少し、つらいからさ。こっちだって。そういうつもりじゃないし。そうじゃなくて。

　ふだんの僕はこうじゃなかった？

　実力が伴ってないのに、口ばかり達者で、なぜか偉えらそうで、意地っぱりで、こうやって考えてみると、とんでもなくやなやつみたいだけど、そうなのかもしれないけど、とにかく、たしか、こんなかんじだったはずだよね。

「ま、いいや」

　マリアローズは小さくため息をついてみせた。

「最初からあてになんかしてないしね。じゃ、この勝負ゲイムは僕が出るから。あとの二人は」

「ワタシ・出まス」

　ピンパーネルとはもう互たがいに目配せしあっている。今さらマ

リアローズが何か言うまでもなかった。問題はのっぽの変態抜ばつ歯しフェチ野郎だ。どう頼たのむべきか。というか、なぜマリアローズが頼んだりしないといけないのか。横目でうかがうと、でも、どういうわけかやつも心得ている様子だった。

「俺も出よう」

　内心ほっとしたけれど、安あん堵どの表情を浮うかべるのもなんとなく癪しやくだ。どうしても出たいっていうなら、しょうがないね。出させてやらないこともないけどさ。うーん。これもなんか違うかな。ちょっと違うよね。

　結局、口をへの字に曲げて、喜ばしいと思っているわけでは決してないが、受け容いれざるをえないからやむをえず受け容れる、といった心情を表すだけにとどめておいた。

　ちらりとアジアンを見たら、目があった。

「……キミが」

「何だよ」

「キミが……出る？」

「だからそう言ったでしょ。聞こえなかった？」

「それは、もちろん──聞こえたけど……」

「そ」

　マリアローズは肩かたをすくめてみせた。自分の演技に無理があるような気がして、アジアンの視線を受け止めているのがつらい。だいたい、どうして演技なんてしないといけないのか。ごまかそうとしている部分はあるだろう。逃にげだしたい気持ちもある。でも、僕は自分に嘘なんかついていないのに。

　ただ正直になる、たったそれだけのことが、こんなに大変だなんて。

「それならいいんだけど。てゆうか──あのさ、念のために言っとくけど。あたりまえの話なんだけどね？」

　マリアローズは腰こしに手をあてて顎あごを上げ、大おお袈げ裟さに顔をしかめてみせた。

「やるからには、負けるつもりなんかさらさらないから。絶対に勝つ気でいるし、勝てない勝負はやらない主義だし、てゆうことはつまり、勝算があるってこと。ありまくりだから。わかる？　いいけどね。べつに。わからなくても。だいたいさ、きみは僕の戦せん闘とう能力に疑問持ってるみたいだけど、僕だっていつまでもずっと前の僕のままじゃないし、はっきり言って、きみには想像もつかないようなすっごい修しゆ羅ら場ばをくぐり抜ぬけてきたりもしてるんで、甘く見ないで欲しいんだよね。とにかく、僕は余よ裕ゆうで勝てる勝負ゲイムだと思ってるし、心配とかーいつ切さい無用だから、せいぜい邪じや魔まにならないように、ここで黙だまって見てれば？」

「う、うん」

　アジアンは気け圧おされたというよりも呆あつ気けにとられたような顔つきで、カックンとうなずいた。ユリカに視線を送ったら、太陽の光をいっぱいに浴びた向日葵ひまわりのように微笑ほほえんでくれて、自然とマリアローズの頬ほおもゆるんだ。ありがとう。本当に。ユリカのおかげだよ。僕はまだ前には進めないかもしれない。でも、あとずさりしたぶんだけ這はって進んで、少しずつ取り戻もどしてゆくことくらいなら、なんとかできそうな気がする。

Omenage 897 12th revolution 6th day

サンランド無統治王国首都エルデン・アンダーグラウンドD8

〝怪虫の坩堝ガンズゲイル〟

chapter.5

決断とはったりの効率

　鉄てつ柵さくの向こう側に足を踏ふみ入れると、天てん井じように丸い文字盤ばんが設置されていることに気づいた。どうやら時計のようだが、針が一本しかなく、今は動いていない。たぶん、勝負ゲイムが開始されたら針が動きだし、一周したところで時間切れということになるのだろう。一周一時間と思わせておいて、本当は五十分だったり四十分だったり三十分だったり、まさかそんなことまではしてこないと考えたいが、絶対にないとは断言できない。自分の時計も見ておいたほうがよさそうだ。ベイスについてはアクゼルに確かめた。やはりこの約十五メーテル四方の広間がベイスだとのことだ。一応、ベイスの外のことも尋たずねてみたが、ホッホッホッと人を小こ馬ば鹿かにしたような笑い声でごまかすばかりで、何も教えてくれなかった。いちいち腹が立つだけじゃない。ホワンの首を叩たたき斬きった手並みは尋じん常じようじゃなかった。油断も隙すきもない生き物だ。バシルドはマリアローズたちがベイスに入る前に穴の向こうへと戻っていった。身体からだの前面をこちらに向けたまま、触しよく手しゆを動かして後退する姿が目に焼きついている。やつも明らかに曲くせ者ものだ。

「それでは第三勝負サードゲイムの開始です」

　アクゼルがそう宣言すると、おそらくベイスだけでなく、会場全体にドヨォォォォォォォォンというかんじの不快な低音が響ひびき渡わたって、天井の時計が動きはじめた。マリアローズは自分の懐かい中ちゆう時計を出して時間を確かく認にんした。十二時三十四分。胸に手をあてて思いきり深呼吸をしてから、ピンパーネルと荊王ジンワンを順々に見た。

「まずは外がどうなってるのかを調べないとね」

「穴は三つある」

　荊王ジンワンは色眼鏡サングラスを右手の中指で押しあげて、ほんの少しだけ首を傾けた。

「どうする」

「まだ一人もキャプチャしてないから、当然、リリースされることもないし、ベイスはあけても問題ない。ただ、弁解とかは無む駄だだからしないんで、そのつもりで聞いて欲しいんだけど、三人ばら

ばらで動くのはまずいね。二手に分かれて探たん索さくするしかないと思う。僕は誰だれかと組んで、もう一人は単独行動。どちらかが敵のコオドを確認できたら、大声で叫さけんで知らせて、みんなベイスに戻る。それでキャプチャの手続きをしてから、状じよう況きようを報告しあって、そのあとどうするか決めるってとこかな。とりあえずは」

「わかった」

「わかりまシタ」

「で、組み分けだけど」

「俺は一人でいい」

　まるでマリアローズの提案を予想していて、あらかじめそうすると決めていたかのようだった。荊王ジンワンは肩かたにかけていた大きな黒いバッグを床ゆかに下ろして、中から籠こ手てのようなものをとりだした。

「それが自然だろう」

「……まあ、ね」

　これがあいつなら、いや是ぜ非ひともボクが自分がとうるさかったかもしれない。

　ふと鉄柵のほうへ目をやると、気づかわしげというよりも思いつめているようなあいつの顔が見えた。

　慌あわてて目線をそらしたら、ユリカの膝ひざ枕まくらで飛燕フエイヤンがのんきに爆ばく睡すいしていた。

　てゆうかさ、ユリカってば、なんでそんな小こ猿ざるに膝枕とかしてあげちゃってるの？　そりゃあ飛燕フエイヤンをそっと床に寝ねかせた荊王ジンワンに、頼たのむ、と言われて、ええ、とうなずいてみせたわけだから、ユリカはもともと責任感がとっても強いし、手厚く世話をするのは当然なのかもしれないけど、何もそこまでしてやることはないんじゃない？

　カタリが魚顔を真っ赤にして、飛燕フエイヤンを蹴けり起こそうとしている。やっちゃえ。いい。僕が許す。でも、本当にそんなこ

とをしたら、ユリカにめちゃくちゃ怒おこられそうだ。でも、なんで。どうして怒られなきゃいけないのか。ユリカを小猿の毒どく牙がから守ることは、むしろ僕らの使命なんじゃないの？　ねえ、髭ひげ、そう思わない……？

「飛燕フエイヤンは悪い男じゃない」

　荊王ジンワンは籠手を装着し終え、これもバッグからとりだしたものらしい、細身でそう長くないモトロール刀の鞘さやを払はらって、色眼鏡サングラス越ごしに刃は紋もんを眺ながめていた。それでもバッグはまだ空っぽにはほど遠い。いったい何が入っているのだろう。

「ああ見えて信義を知っている。もともとハヤ九ク三ザは似合わないのかもしれない。この街は性しようにあっているみたいだが」

「どうだか」

「俺のような根っからのならず者とは違ちがう」

　荊王ジンワンは刀を鞘に戻した。

「右、左、正面。俺はどっちへ行けばいい」

　何だろう。こいつって、こんなやつだったっけ。一いつ瞬しゅん、そんなに変な男じゃないのかも、と思ってしまいそうになって、いやいや、待って待って、こいつにはつい先日、拉ら致ちられたばっかりだし、どう考えたって変態クモソウ野フ郎オ以外の何ものでもないから、と否定した。ただ、頭は結構回るようで、機転がききそうだし、それでいて変に出しゃばらず、気持ち悪いくらい協力的だから、少なくとも厄やつ介かい者ものになることはなさそうだ。期間限定とはいえ、一応、仲間なわけだし、評価するところは評価して、持てる力をぞんぶんに発揮してもらうべきだろう。好き嫌きらいなんて二の次、三の次、四の次だ。使えるか、使えないか。その点でいえばマリアローズが一番あやしいわけだが、だからこそ頭脳をフル回転させないといけない。

「きみは右をお願い。僕とピンパーネルは左に行くから。まずだいたいの広さを把は握あくしたいんで、外側の壁かべにそって進んで、分かれ道なんかがあったら、覚えられるかぎり覚えて。僕としては、外の構造がちゃんとわかるまで、敵は無視してもいいと思

う。制限時間があるから、広さ次し第だいっていうところはあるけどね」

「道を覚えるのは苦手じゃない」

「とにかく、最初の──そうだね、十分くらいは様子見のつもりで」

「わかった」

　荊王ジンワンは低い声で短くそう答えるなり、右の穴に向かって歩きだした。刀は腰こしに差さず、鞘ごと左手で持ったまま行くようだ。マリアローズもピンパーネルと顔を見あわせ、うなずきかわしてから左の穴へと向かった。カタリやユリカ、サフィニアが声をかけてくれたけれど、軽く手を振ふってみせただけで、あえてそっちのほうはちゃんと見なかった。ユリカと飛燕フエイヤンはまあ仕方ないとしても、集中を乱す原因になりそうなものがありすぎる。

　ピンパーネルが前に立って、マリアローズはその一・五メーテルくらい後ろを進んだ。ピンパーネルの歩みが無音といってもいいくらい静かなので、マリアローズもできるだけ足音を立てないように気をつけたが、元アッサシンの完かん璧ぺきな忍しのび足あしには及およびもつかなかった。

　左の穴から出ると、幅はば約三メーテル、高さも同じくらいの通路が目測で二十メーテル以上もまっすぐのびていた。わりと正確性に自信のある歩測で実際に確かめてみたところ、だいたい二十四メーテルだった。通路はそこで右に折れていた。

　右折して約十二メーテル前進すると、そこは十字路で、その先にも十字路があり、さらにその向こうはどうやら丁字路になっているようだ。

　右を向くと、突つきあたりで左に折れている。

　左を向けば、突きあたりで右に折れていた。

　ピンパーネルが振り返ったので、マリアローズは指で左を示した。

　左の通路を約十二メーテル進んで右に曲がると、ため息が出た。明るいので、かなり遠くまではっきり見える。長い。おそらく、五十メーテルではきかないだろう。ひょっとしたら、突きあたりまで

百メーテル以上あるんじゃないか。

　そのまっすぐのびた通路に、右への曲がり口がいくつかある。遠くのほうはちょっとわからないけれど、ここから十メーテルくらい先に一つ、さらに十メーテルほど先にもう一つ、そのすぐ向こうに一つ。ともあれ、仮にこの通路の突きあたりが果てだとしても、外はだいぶ広いことになる。

　不意にピンパーネルが右手をあげて人差し指で前方を示した。

　ピンパーネルは前を向いたままだ。

　マリアローズはまったく気づかなかったが、何かいた、ということだろう。

「無視で」

「はイ」

　ピンパーネルは余計なことを言わない。すぐに手を下ろして歩きだした。

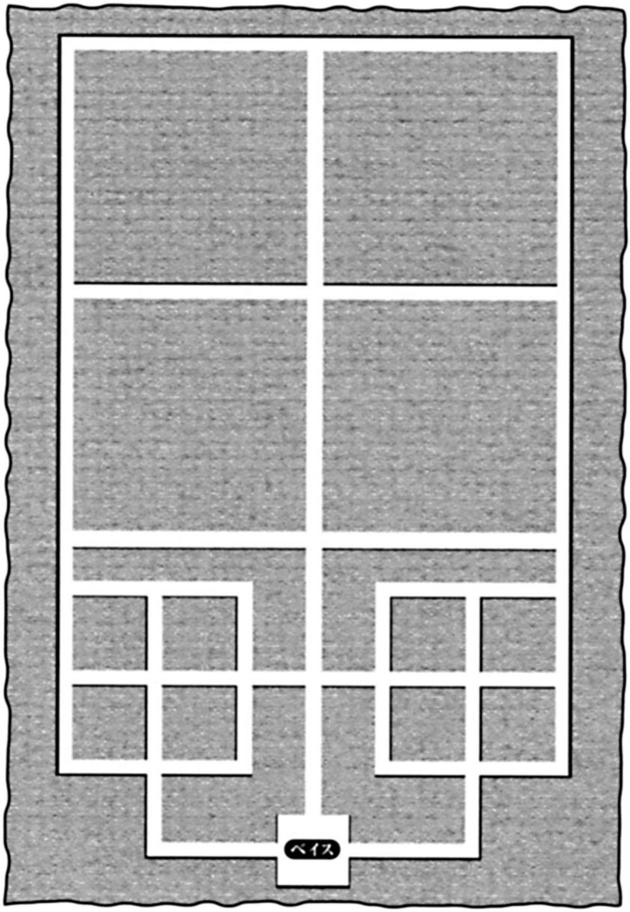
　一つ目の右への曲がり口までは約十二メーテルだった。曲がるつもりはないが、どんなふうになっているのか眺めてみると、この通路もかなり先までまっすぐのびている。十字路がいくつもあって、突きあたりはどうなっているのか。ここからではよくわからないけれど、その突きあたりを小さな人ひと影かげが横切ってゆこうとして立ち止まった。マリアローズは目を凝こらして見た。荊王ジンワンか。どうやらそうらしい。荊王ジンワンはすぐに歩きだして左のほうへ消えた。右からきて、左に去ったということは、あの突きあたりは丁字路になっているのだろう。

　なんとなくだし、一部でしかないが、少しずつ外の構造が見えてきた。

　また約十二メーテル直進して二つ目の右への曲がり口までくると、正確かどうかは別としても、今まで歩いてきた部分の仮の地図がマリアローズの頭の中にできあがっていた。

　ベイスには三つの穴がある。あのタイミングであの場所に荊王ジンワンがいたということは、少なくともここまでは左さ右ゆう対たい称しように近いのではないか。つまり、ベイスの左右の穴から出

て二十四メーテル直進し、直角に曲がって十二メーテル進むとぶちあたるのが、たぶん三十メーテル四方くらいの「田」の形をした通路の、下の辺と真ん中の縦棒が交わる地点だ。ベイスから見て斜なめ左右前方に位置するこの二つの「田」は、真ん中の横棒同士がつながっている。マリアローズたちと荊王ジンワンは、この長い横棒の両りよう端たんを通りすぎるときに互たがいの姿を確かく認にんした。今、マリアローズたちは「田」の上の辺と左の辺が交わる地点にいる。そこからさらに約六メーテル進むと、また右への曲がり口があって、その長い通路の果てにまた荊王ジンワンがいた。
やっぱりだ。結論づけるのはまだ早いが、たぶんマリアローズが頭の中に描えがいた地図はおおよそ正しいだろう。



第三勝負会場
"7S GAME" The 3rd stage

　約三十九メーテルまっすぐ進み、またもや出くわした右への曲がり口の向こうに目をやると、荊王ジンワンがこちらを見ていた。どうやら荊王ジンワンもマリアローズと同じことを考えているようだ。いまいち読めない男だし、疑う余地なんかこれっぽっちもないほどの変態だけれど、察しがいいことは間ま違ちがいないみたいで

助かる。遠いので、さすがに見えないだろうが、マリアローズは荊王ジンワンにうなずいてみせ、ピンパーネルとともにさらに直進した。予想どおり約三十九メーテルだった。ここが第三勝負サードゲイムの会場の左上の隅すみということになる。これまた思ったとおり、荊王ジンワンは右上の隅にたどりついていた。

　Ｄチームの三人は、ひとまず会場の上の辺の真ん中にあたる地点で合流した。マリアローズが左側の様子を手短に説明すると、荊王ジンワンは一言で応じた。

「左右対称だな」

　抜ばつ歯しフェチで粘ねん着ちやく質しつの変態とは思えない、簡潔明めい瞭りようで的確な答えだった。

　それから荊王ジンワンは、膝ひざを折って灰色の床ゆかに地図を描いてみせた。見えない線で描かれたその地図は、マリアローズの頭の中にあるものと一いつ致ちしていた。荊王ジンワンは最後にＤチームの現在位置を指さして、マリアローズではなくピンパーネルに色眼鏡サングラスを向けた。ピンパーネルもしっかりとのみこんだようで、無言でうなずいてマリアローズを見た。マリアローズは荊王ジンワンの隣となりにしゃがんで、会場の背骨にあたる縦にまっすぐのびた通路を示した。目には見えない地図だ。それでも、三人にはちゃんと同じものが見えている。マリアローズとしては、その三人の中に荊王ジンワンがふくまれていることが心情的にやや微び妙みようだけれど、心強くはあった。

「ここを通って、いったんベイスに戻もどろう」

　そうすることで、地図の妥だ当とう性がほぼ確認される。いちいちそこまで言わなくても、二人はわかってくれているだろう。

　ピンパーネルが先頭に立って、荊王ジンワンが後ろにつき、マリアローズは歩測と地図の確認に集中した。ベイスに戻ると、鉄てつ柵さくの向こうで何人かが安あん堵どの吐と息いきをもらした。マリアローズはユリカやサフィニアに微笑ほほえんでみせてから、天てん井じようの時計と自分の懐かい中ちゆう時計を見比べた。天井の時計の針は六分の一くらいの位置まで進んでいる。懐中時計は十二時四十五分を示していた。開始直後は三十四分だったから、十一分経過したことになる。とりあえず今のところ、天井の時計はまっとうに動いているようだ。

　マリアローズはピンパーネルと荊王ジンワンを見まわした。二人はマリアローズに決断をゆだねている。責任重大だ。そのわりには、意外とリラックスして事にあたることができているような気がする。まだ何も起こっていないせいか。時間もたっぷりある。慌あわてたり、焦あせったりする状じよう況きようじゃない。

　すべてはこれからだ。そのうち絶対に正念場がやってくる。今、いくら落ちついていたとしても、そのときにうまく対処できなければ、何の意味もない。

「奥の広いところは後回しにする。また二手に分かれて、まず右下と左下を潰つぶそう。最初にも言ったけど、誰かがコオドを確認したら、すぐにそのコオドを大声で叫さけんで。それが合図ね。合図を聞いたら、全員ベイスに戻って、キャプチャする」

　マリアローズとピンパーネルは先ほどと同じ左の穴からベイスの外へ出た。荊王ジンワンは右だ。

　すでに地図が頭に入っているので、今度は敵を見つけることに全神経を集中できる。敵はどこかでじっとしているのだろうか。だとしたら、その場所を探しあてさえすればいいことになるけれど、たぶんそれはない。Ａチームの立場になって考えてみると、隠かくれるか、逃にげまわるか、大きく分けて二つの戦術が考えられるが、この会場の構造は明らかに後者に向いている。マリアローズたちＤチームがこうして動いているように、敵のＡチームも移動しているはずだ。あるいは、Ｄチームが動けば、それにあわせてＡチームも動くはずだ。

　つまりこの勝負は、かくれんぼではなく、追いかけっこだと考えたほうがいい。

　極論すれば、ＡチームはＤチームに発見されてもかまわないのだ。コオドは胸に貼はりつけた布に書かれているのだから、背中を向けて一時間逃げつづければいい。そうすれば、Ｄチームは時間切れで敗北する。

　負けた参加者プレイヤは、ただちに首飾りチヨーカーを差しださなければならない。

　たぶん、いや、間ま違ちがいなく、少なくとも一度は死なないといけないということだ。

大だい丈じょう夫ぶだ。たとえ死んでも蘇そ生せい式がある。髭ひげはいないけれど、エルデンには高層寺院があるし、金さえ積めば、それなりに精度の高い蘇生式を施ほどこしてくれる僧そう侶りょや神官もいるだろう。確実じゃないだろうけど。蘇生可能な殺し方をしてくれるかどうかだってわからない。アクゼルあたりに任せないで、仲間にスパッと首をやってもらうという手はあるけれど、誰だれもやりたがらないだろう。てゆうか、負けたときのことなんてうだうだ考えてどうなるんだよ。

負けなきゃいいんだ。勝てばいい。それでぜんぶ解決だ。

もうすぐ地図でいえば左下の「田」にさしかかる。

前を行くピンパーネルが足を止めた。

マリアローズも即そく座ざに立ち止まって息をつめた。

耳を澄すました。何も聞こえない。ピンパーネルは前ぜん傾けい姿勢で膝を曲げている。いつでも飛びだせる体勢だ。その鋭えい敏びんな感覚で何かを感じとっているのか。きっとそうなのだろう。マリアローズにできることは？　身じろぎ一つせず、ピンパーネルを邪じゃ魔ましないことだ。

額に汗あせがにじんできた。

気がつけば、まばたきすることさえ我が慢まんしていた。

目が乾かわいている。

それがどうしたっていうんだ。

マリアローズはひたすら待った。

突とつ然ぜんだった。

ピンパーネルが猛もう然ぜんと、だが、静かに駆かけだして、「田」の下の辺と真ん中の縦棒が交わる場所で右に曲がった。マリアローズは追おうとしてやめた。ピンパーネルはほとんど足音を立てていない。マリアローズが走れば、ガシャガシャうるさい音がする。何度かまばたきをしながら、ゆっくりと息を吸って吐はきだした。僕はここから動かずに、耳をそばだてて目を光らせる。頭をやわらかくして、たとえ何が起こっても対処できるようにしておく。

　そのときはすぐにやってきた。正面だ。「田」の上の辺と真ん中の縦棒が交わる丁字路に、そいつが右から飛びこんできた。

　そいつは全身が茶色っぽい硬かたそうな皮ひ膚ふに覆おおわれていた。腕うでがやけに長く、合計四本の手足を駆く使しして、床を這はうようにして走っていた。肩かたや胸まわりは逞たくましかった。首も太く、頭部は前方に向けて尖とがっていた。頭だけだが、地じ肌はだが茶色い犬の毛をきれいに刈かってしまったら、あんなかんじになるかもしれない。胸に白いものが見えた。布だ。コオドが書かれているはずだが、マリアローズの位置からは確かく認にんできない。できなかった、と言うべきだろう。

　砂色の風が吹ふきつけて犬モドキを一いつ瞬しゆんで抜ぬき去った。

　風は旋つむじ風かぜとなって犬モドキの前に立ちふさがった。

　犬モドキは急停止して方向転てん換かんしたが、さすがに百八十度転進することはできなかったようだ。そうなると、必然的にこっちへ向きなおるしかなかった。

　四角い布が見えた。

　黒い字で何か書いてある。

　まだ三十メーテルくらい距きよ離りがあるので、ここからでは読むことができない。

　マリアローズが走りだすと、犬モドキはヲゥンと唸うなりながらのけぞるようにしてあとずさりかけた。その肩かたにピンパーネルの手がかかった。

　犬モドキは後ろにひっくり返った。

「シ、ン、ゴ、ウ、キ」

　ピンパーネルがゆっくりと犬モドキのコオドを読みあげた。マリアローズは両手でラッパを作って叫んだ。

「コオド確認！　シンゴウキ……！」

　もう犬モドキに用はなかった。マリアローズは踵きびすを返し

た。ピンパーネルはすぐにマリアローズの後ろについた。全速力でベイスに駆け戻もどった。さて、じゃあボタンを押して━と思ったのと、異物の存在に気づいたのと、どっちが早かっただろう。何とも言えない。鉄てつ柵さくの向こうで誰かが騒さわいでいたような記き憶おくもある。その声にうながされて気づいたのか。その前に見てしまったのか。正直なところ、さっぱりわからない。

「あ」

　驚おどろいたというよりも、いきなり混乱してしまった。

　ボタンがついている台のすぐそばに、そいつはいた。床ゆかだ。へばりついていた。

　そいつの体色は灰色だった。床と同じ色だ。だからベイスに足を踏ふみ入れるまで気づかなかったのか。保護色？　そんなバカな。というか、バカな、じゃなくて、実際そうだ。今も目を凝こらして見ているのに、そいつの姿がはっきりとは見えない。そこにいるということはわかる。どうも人間っぽい形だというかんじはする。ただ、具体的に、手足はどんなふうで、顔はどうなのかとか、そのあたりはよくわからない。ぼやけている。床に同化しかけている。

　そいつが顔を上げて、こっちを見た━ようだ。

　いや、間違いなく見た。

　目だ。

　ともすると周りの風景にとけこんでしまいそうな灰色の頭部の真ん中から少し上のあたりで、二つの目が見開かれていた。

　白目はない。鮮あざやかな緑色の虹こう彩さいはうっすらと光っている。黒い瞳どう孔こうは円くなく、猫ねこのように縦に裂さけているわけでもなくて、山や羊ぎのごとく横に割れているわけでもない。十字形だ。

　やつは少しだけ口を開けた。

　黄色い歯が見えた。

　紫むらさき色いろの舌が、おそらく唇くちびるだと思われる場所をちろちろ舐なめた。

「えっと……」

　じゃない。

　キャプチャしないと。そうだ。キャプチャするために戻ってきたんだ。

　ダメだ。あいつは腹はら這ばいになっているので、コオドが書かれた布は見えないけれど、どう考えても敵だろう。Ａチームだ。ベイス内にＡチームの者がいる間は、キャプチャできない。そういうルールになっている。ということは―どうすれば……？

　マリアローズはピンパーネルと顔を見あわせた。ピンパーネルは一見、思し慮りょ深そうな表情を浮うかべているが、たぶん本当は何も考えていなくて、マリアローズの指示を待っている。一度、自分の中で順列を決めると、徹てつ底ていしてそれに従う。ピンパーネルにはそんなところがある。いいとか悪いとか、そういう問題じゃない。人にはいろいろなタイプがあるということだ。

　ここは僕がどうするべきか決めるべきだ。それくらいしないと、僕がここにいる意味なんてない。落ちつけ。冷静になれ。こんなときこそ理り詰づめで考えるんだ。ベイス内にＡチームの者がいたらキャプチャできない。今、ベイス内にはＡチームの者とおぼしき灰色の十字目野や郎ろうがいる。よってキャプチャできない。キャプチャするためにはどうしたらいいか。簡単なことだ。十字目野郎がいなくなればいい。十字目野郎はどうやったらいなくなるか。

　荊王ジンワンが右の穴からベイスに戻ってきた。

　おそらく十字目野郎の姿が目に入ったのだろう。入ってすぐのところで立ち止まった。

　マリアローズはピンパーネルの背中を軽く叩たたいて走りだした。ピンパーネルは瞬時に反応してくれた。荊王ジンワンも理解したようで、モトロール刀の鞘さやを払はらって駆けだした。マリアローズも負けじと腰こしから偽にせ劫ごう火かを抜いたが、速さでピンパーネルにかなうわけがなかった。マリアローズはあっという間にピンパーネルの背中を追う恰かつ好こうになった。

　ルールにとらわれていたのか。いや、ちゃんとルールを把は握あくしていなかったのだ。最初にどうもこれはちょっと独特な勝負ゲ

イムらしいと感じて、そう決めつけてしまったのが失敗だった。マリアローズの頭の中に、自分が単独で行動するのはまずいという思いはあった。荊王ジンワンもしっかり武装していた。まったくわかっていなかったわけではないはずだが、追いかけっこ的な要素に注目しすぎていた。

　この７Ｓとのセブンス七つの・ゲ勝負イムはあくまで首飾りチヨーカーの争そう奪だつ戦せんだ。少なくとも、形の上ではそういうことになっている。

　マリアローズたちがルールを破ったら、人質に危害が及およぶ。だから、提示されたルールを守るしかない。それ以外に選せん択たくの道がなかったからこそ、マリアローズたちはここにいる。逆に言えば、ルールさえ破らなければ、勝つために何をしてもいいのだ。

　第三勝負サードゲイムのルールの中に「相手に危害を加えてはいけない」という項こう目もくはなかった。つまり、ぶん殴なぐってもいい。蹴け飛とばしてもいい。なんなら殺してしまってもいい。情けは無用だ。容よう赦しやなんかする必要はない。あるはずがない。

　とはいえ、十字目野郎もなかなか機き敏びんで、ピンパーネルが雌し雄ゆう一対ついの短たん剣けんを閃ひらめかせて飛びかかる前に、するすると床を這はって正面の穴へと向かいはじめた。薄うす気き味みが悪いほどなめらかな動作だった。しかも、というのは何か違ちがうような気もするけれど、やつには尻尾しつぽがあった。その尻尾といい、四よつん這ばいというよりも床に張りついているかのような姿勢といい、まるで蜥蜴とかげみたいなやつだ。もちろん、ピンパーネルはさらに十字目野郎を追いかけようとしたが、荊王ジンワンが鞘を捨てて怒ど鳴なった。

「俺が行く！」

　ピンパーネルが足をゆるめて振ふり向いた。マリアローズはうなずいてみせた。荊王ジンワンがモトロール刀を肩かたにかつぐように構え、上体をほとんど揺ゆらさずに両足だけ激しく動かして加速した。十字目野郎の姿は、正面の穴に飛びこんだ途と端たん、ぼやけるというか、霞かすむというか、とにかく周りにとけこんで見えなくなった。荊王ジンワン一人に任せて大だい丈じよう夫ぶだろうか。わからないが、とっさの判断だった。最善かどうかは自信がな

いけれど、必ずしも間違ってはいないと思う。

　マリアローズは偽劫火を鞘に収めて台に向かった。

　鉄てつ柵さくの向こうにいるアクゼルを一いち瞥べつすると、あの野郎、なんてやつだ、返り血で汚よごれた白い燕えん尾び服ふくを脱ぬいで、真新しい燕尾服へと着き替がえをしている最中だった。頭にきたので、ボタンをアクゼルの頭頂部に見立てて思いっきりぶっ叩いてやった。

「シ、ン、ゴ、ウ、キ！」

　そうくるとは思わなかった。

　キャプチャ。シンゴウキ。キャプチャ。シンゴウキ。キャプチャ。シンゴウキ。キャプチャ。シンゴウキ。キャプチャ。シンゴウキ。キャプチャ。シンゴウキ。キャプチャ。シンゴウキ。

　嫌いや味みなほど無む駄だに渋しぶい声だった。まぎれもなくアクゼルの声だが、本人（？）は見てのとおり着替え中だ。それに、たぶんベイスだけじゃない。この声は会場全体に響ひびき渡わたっている。さらに、プリズンの一部がガゴンッと開いて、それまで自然光に近かった照明が、いきなり赤、青、緑に点てん滅めつしはじめた。さすがにびっくりしたけれど、それ以上に腹が立った。こっちは真しん剣けんなんだ。遊びでやってるんじゃないんだ。負けたら死ぬだけじゃない。こっちが相手を殺してもルール上、問題ないということは、こっちだって相手に殺されるかもしれないということだ。命いのち懸がけなんだ。いや、待て。ここは抑おさえろ。深呼吸だ。

　吸って。

　吐はいて。

　すー。はー。すー。はー。

　そうだ。落ちつけ、僕。あくまで冷静に。今は怒おこるだけ損だ。損をするのは嫌きらいだ。大嫌いだ。これも、悪ふざけで情じよう緒ちよ不安定にして、こっちの判断能力を鈍にぶらせるという相手の策かもしれないわけだし。くだらない、低級な策略だけれど、げんに、マリアローズは平静を失いかけていた。まったく効果がないとは言えない。

しばらくすると、犬モドキが悄しよう然ぜんとうなだれて左の穴から姿を現した。

犬モドキがおとなしくプリズンに入ると、開いていた部分がひとりでにガゴンッと閉まって、例のやかましい、むかつく声はやみ、うざくてうざくてたまらなかった照明も元に戻もどった。

マリアローズは一息ついて、三つの穴を順々に見まわした。一応、敵の気配はないようだ。安あん堵どはできなかった。一人キャプチャしたから、とりあえずほっと一安心なんて、とうていできない。むしろ、今ようやく勝負ゲイムが始まった。そう考えるべきだろう。

荊王ジンワンは首しゅ尾びよく十字目野や郎ろうのコオドを確かく認にんして帰ってくるだろうか。荊王ジンワン個人に対する感情はーいつ切さい抜ぬきにして、今はひたすらうまくいってくれと願うしかなかった。

まずはそれまでの間、マリアローズはピンパーネルとともにベイスを守り抜かないといけない。キャプチャした犬モドキがリリースされてしまうことを防ぐ。それもあるが、何よりも自分たちの命を守らないといけない。

とくに、マリアローズだ。

十字目野郎はともかく、もしあのバシルドというやつが、とんでもない力を持っていたとしたら。そして、このベイスに攻せめこんできたら。

Ａチームの誰だれかがプリズンをのぞくベイス内にいる場合、キャプチャできない。

ということは、Ａチームにベイスを制圧されてしまったら、Ｄチームにはなすすべがない。

それで、こっちはＤチーム、まさしく守備のチームなのだ。

かといって、ただベイスに籠こもっているだけでは、時間切れで負ける。勝負ゲイムに勝つためには、守りながら攻めなければならない。敵を一人キャプチャした段階で、Ｄチームはその問題に直面する。わかっていたことではあるけれど、ここまでシビアだとは思っていなかった。追いかけっこの皮を脱ぎ捨てると、この勝負ゲ

イムは単なる殺しあいでしかない。そういう展開になるケースを想定していなかった。迂う闊かつだった。

　もしバシルドがやばい相手で、今、ベイスに飛びこんできたら、マリアローズは足手まといにしかならない。一人で十字目野郎を追いかけていった荊王ジンワンが、バシルドに襲おそわれるという可能性もある。そうなれば、二対一だ。荊王ジンワンとマリアローズがベイスに残ったとしても、そこにバシルドが奇き襲しゆうをかけてくるかもしれない。

　だからだ。

　荊王ジンワンは真性の変態だけれど、自分の救いがたい変態性以外は、わりと冷静に客観視しているように見受けられる。荊王ジンワンとピンパーネルを比べれば、腕うでが立つのはピンパーネルだ。思えばまだ一年もたっていないので、長い間とは言えないかもしれないけれど、苦楽をともにしてきて、気心の知れたＺＯＯの仲間同士でもあるし、荊王ジンワンよりもピンパーネルと一いつ緒しよにいたほうが、当然、マリアローズの生存率は高まるだろう。

　こうしてあらためて考えてみても、荊王ジンワンが外に出て、マリアローズとピンパーネルが残るという判断はまずまず妥だ当とうだ。

　認めざるをえない。

　荊王ジンワンは度しがたい変態だけれど、切れ者だ。敵に回すと厄やつ介かいだろうし、味方としては頼たのもしいとまでは言わない、というより言いたくないが、有ゆう為いの人材であることは間ま違ちがいないだろう。もちろん、そうでもなければ、ＳｍＣが壊かい滅めつしたあと、すかさず闇やみ市いちを手中に収めるような芸当はできないはずだ。不本意ながら、今はある程度、信しん頼らいしてもいいと思う。勝つためだ。こだわりは捨てるべきだ。今だけは。

　マリアローズは懐かい中ちゆう時計を出して、天てん井じようの時計と見比べた。懐中時計は十二時五十二分だった。開始から約十八分経過したことになる。天井の時計の針も四分の一を少しすぎているから、だいたい同じくらいだろう。

　十八分。もう十八分。まだ十八分。どちらでもない。とにかく、

残された時間は四十二分だ。その時間の中で絶対に勝たないといけない。気負いすぎだろうか。もっと肩かたの力を抜くべきか。ピンパーネルを見ると、どこにも無む駄だな力が入っていないすっとした立ち姿で、でも、三つの穴にしっかりと目を光らせていた。余計なことばかり考えている自分が恥はずかしくなった。思わず鉄てつ柵さくのほうに顔を向けそうになって、慌あわててこらえた。ダメだ。気弱になっちゃいけない。助けてくれる仲間はちゃんといる。二人もいるんだ。僕だって精せいーいつ杯ぱいやる。三人で力をあわせて、必ず勝つ。僕は絶対に誰も失わない。失いたくない。

　失うことを想像しただけで、身み震ぶるいする。

　初めてだ。

　俺は飛燕フエイヤンとは違う。塵ごみ溜ためのような裏うら街まちに、塵みたいに捨てられ、塵を蹴け倒たおして塵を漁あさって塵を喰くらって塵として育った。塵を喰らうのに飽あきると、塵どもは獣けもののように、獣よりも浅ましく交わって憂うさを晴らしてまた塵を喰らった。俺は塵だった。裏街から一歩外に出ると、塵はならず者になった。最初から塵だった俺は、生まれながらにならず者の資格を手にしていた。多少目め端はしがきく塵でならず者だった俺は、塵を喰らうのに飽いてハヤ九ク三ザの皮を被かぶった。俺は塵よりはいくらかマシな飯を喰らうようになったが、本ほん性しようは変わらなかった。塵は目の前にあるものを喰らうことしか考えない。そこに欲望があれば満たすだけだ。生きることだけには執しゆう着ちやくする。そもそもその執着がない塵は、塵に埋うもれて息絶えるしかない。俺は自分には何もないことを知っていた。俺はただ、塵の本能に従って生きているだけだ。たまたまハヤ九ク三ザ稼か業ぎようは向いていたが、それだけだ。裏街で塵を喰らって塵と交わって塵として死んでゆく塵と何も変わらない。

　女が一人、いた。

　俺は女に魅み入いられた。

　生きて、生きて、いつか必ず逃にげだして、自由になってやるから。

　自由になりたいと願った女は、病に打ち負かされて、死を望み、俺の腕の中で死んだ。

いつだったか、あの女がうわごとのように言った。

ねえ、こんなふうじゃなくて━わたしは商家の娘むすめか何かで、あなたはその家と取引がある家の者で、ある日、出会って、そんなふうだったら━わたしたち、どうなっていたかしら。わたしは寝ねたきりなんかじゃなくて、もちろん歯もちゃんとあって、その気になれば、どこへだって行ける、あなたと二人で、どこか遠くへ━大陸に渡わたることだってできる、そんなふうだったら、わたしたち、どうなっていたかしら。

戯たわ言ごとだと思った。俺は塵で根っからのならず者だ。お前は死病に冒おかされて老女のようだ。何かを望んだり夢見たりするなんてお笑い種ぐさだ。俺は自由になりたいと笑ったお前の強さに惹ひかれたのかもしれないが、所しよ詮せんどこに行くこともできないお前にどうせ塵以外の何ものでもない自分を重ねあわせ、自分自身を納なつ得とくさせようとしたのかもしれない。俺は塵だ。一生、塵だ。それでいいと思っている。仕方ないと。どのみち無駄だ。俺たちには羽がない。飛んでゆくことなどできない。どこかへ行きたいと願うのは勝手だ。ただ、どこにも行けない。

女が死に、俺はその事実を確かく認にんした。俺は悲しまなかった。惜おしむこともなかった。女がいつか死ぬことはわかっていた。女が安らかに息を引きとろうと、俺が女を壊こわして殺そうと、同じことだ。俺にも友はいた。仲間、朋ほう輩ばいと言ったほうが正確だろう。大半は塵かハヤ九ク三ザだった。ほとんど死んでいった。死に様はいろいろだったが、誰が死んでも俺は何も感じなかった。そいつが有用な人材だったら、穴あな埋うめを考えないといけなかったが、たいていどうにかなるものだ。ああ、そうか。結局、それだけだった。俺は塵らしく自分が生きるためには何でも犠ぎ牲せいにしてきたが、仮に自分がくたばっても、その瞬しゆん間かん、俺は思っただろう。ああ、そうか。

お前と出会ってから、俺の中の何かが変わりはじめた。

あるいは、気づいていなかっただけで、俺はもとからそうだったのかもしれない。

いずれにせよ、今の俺はもとの俺とは違う。

お前がかき消えるようにこの街からいなくなったことを知ったとき、俺は自分でも滑こつ稽けいに感じるほど狼ろう狽ばいした。そ

れでも、お前がどこかの空の下で、あの運命にあらがう強い瞳ひとみを前に向けて、一歩一歩、ゆっくりと、だが、着実に歩いている姿を想像すると、少しだけ気持ちが落ちついた。お前に会いたいと思った。あの瞳に射い貫ぬかれたい。その瞬間を思うと胸が締しめつけられた。俺は自覚せざるをえなかった。

　お前を失いたくない。

　生きていて欲しい。

　死ぬな。

　死んでくれるな。

　塵として生まれ、塵として育ち、塵に甘んじることで自分を保ってきた弱い俺が、はかない自由を願った哀あわれな女に伝えられなかった言葉だった。

　お前がこの世界に生きていると思うだけで、生まれてきた甲か斐いがあったと感じる。

　できることなら、まっすぐ歩いてゆくお前を守りたい。

　俺にはおそらくその資格がない。

　俺の手はあまりに粗そ雑ざつすぎて、お前にふれると汚よごしてしまい、傷つけてしまいそうだ。

　足をゆるめずに、モトロール刀の柄つかから離はなした左手で色眼鏡サングラスをずらしてみた。案の定だ。どういうわけか、やつの姿は裸ら眼がんよりも黒い色のついたレンズ越ごしに見たほうが識別しやすい。それにしても速い。全力疾しつ走そうしても、離されずについてゆくだけでやっとだ。正面の穴から出て、最初の十字路で右に曲がり、次の十字路を左、それから突つきあたりを右に折れて丁字路を直進し、その先の丁字路で右に曲がって――ようするに、右下の「田」の「口」をぐるぐる回っている。何のつもりだ？　たぶん、持久力に自信があるのだろう。げんに、こっちはもう息が上がりはじめている。いつまでもこの速度で走りつづけることはできない。そのうち離される。こっちが疲つかれを見せたら、一気に突き放して逃げる腹か。この距きょ離りで、色眼鏡サングラス越しであればなんとか見えるし、やつも必死に手足を動かしているようだから、ぺたぺたともしゅたしゅたとも言いがたい音がす

る。ただ、こっちの足音と比べれば、大きな音では決してない。やつは隠かくれるのも逃げるのも得意だろう。取り逃がすと厄やつ介かいだ。ここで片をつけたい。それも、できるだけ早く。時間はかぎられている。この勝負ゲイムに負けるわけにはゆかない。お前を死なせたくない。死なせてなるものか。

　博打ばくちは嫌きらいだが、勝負事に一か八ばちかの賭かけはつきものだ。

　わざと足の運びを乱して速度を落とした。

　やつが振ふり向いた。

　十字形に裂さけた瞳どう孔こうが菱ひし形がたに近くなった。

　あえて顔をゆがめてみせ、モトロール刀を捨てた。

　自由になった両手を振って足を速めたときに、やつはいったいどう出てくるか。

　二つに一つだと思っていた。そのうちの一方に賭けた。

　果たして、やつは左側の壁かべに向かって跳ちよう躍やくした。両足で壁を蹴けり、身体からだをねじりながら飛びかかってきた。一瞬、白い布が目に入って、そこに書かれた黒い文字も見えたような気がした。判読することまではできなかった。賭けには勝った。心構えはできていたが、予想していたよりもやつの圧力は強かった。右手の一いち撃げきだった。重かった。左手の籠こ手てで受け止めたのだが、危あやうく弾はじかれてしまいそうになった。衝しよう撃げきは骨まで響ひびいた。機き敏びんなだけじゃない。やつは力も強い。逃げる。隠れる。それが得意技わざだと思わせておいて、ここぞというときには肉にく弾だん戦せんでしとめにくるというわけか。右手につづいて、というよりもほとんど間を置かずに飛んできた左手は防げなかったし、よけきれなかった。よけきれないと悟さとって、荊王ジンワンはぐっと顎あごを引いて頭からやつに突っこんでいった。

　横よこ薙なぎの左手を顎から首のあたりに食らった瞬間は、目の前が真っ暗になった。

　その一瞬後に、やつの顔面と荊王ジンワンの額が激しく衝しよう突とつした。

「━ぐっ……！」

「Ｇａａｈａ……！」

　額が痛いというよりも熱い。目が眩くらんだが、立っていられないほどではない。色眼鏡サングラスのフレームがゆがんだ。レンズも割れたようだ。やつは仰あお向むけに床ゆかに倒たおれ、だが、もう腹はら這ばいになっている。やつの顔の下半分が血で汚れていた。鼻血と、口の中も切れたようだ。

「化物でも血は赤いんだな」

　荊王ジンワンはゆがんだ色眼鏡サングラスを外して床に放った。

「おかげでよく見える」

「……Ｕｇｇｇｇｇｇｇｇｇｇｇｇｇｇｇｇｇｇｇｇｇｇｇｇ……」

　やつは右手で口の周りをぬぐった。そのせいで、手の甲こうにも血がついた。血はあとからあとからあふれてくる。ひょっとしたら、歯も何本か折れたのかもしれない。そんなことを考えていたら、いきなり右側の視野が失われた。まばたきをしてみた。右目に何か入ったのか。いや、流れこんできたのだ。液体だ。血か。額が切れているようだ。

　荊王ジンワンは両手で額から右目のあたりをふいた。

　傷口にさわったときは痛みを覚えたが、痛くたって死ぬわけじゃない。

　当然、両手は荊王ジンワン自身の血で汚れた。

「もっと見えるようにしてやる」

「Ｕｕｕｕｕｕｕｕｕｕｕｕｕｕｕｕｕｕｈｈｈｈｈｈｈ……！」

　やつは低い姿勢のまま突っこんできた。人間ではありえない動きなだけに、対処しづらい。龍州でハヤ九ク三ザをやっていたころは、自分がいつかこんな得体の知れない化物とやりあう羽目になるとは思ってもみなかった。どこか遠くへ行きたいと願った女はむなしく龍州の土となったのに、自分はあの島国から遠く離れた場所で今もこうして息をしている。生きようとしているだけでなく、誰だ

れかを生かそうとしている。わからないものだ。

　夕蝶シーデイエ。

　命の無情に負けて慰なぐさめに俺を愛した女よ。

　お前も生きていればよかった。なんとしても生きていればよかった。老女とみまごう姿でもいい。哀れでも、みじめでも、無残でもいい。無様でも、無価値でも、無意味でも、生きてさえいれば、お前も別の景け色しきを見ることができたかもしれなかった。羽はなく、飛ぶことはできなくても、歩いてゆくことはできたかもしれなかった。歩くことができなくても、這はってゆくことはできたかもしれなかった。身動きがとれなくても、夢見ることはできたかもしれなかった。俺がお前を背負って、どこかへ連れてゆくこともできたかもしれなかった。

　殺して。壊こわして。わたしを、壊して。

　お前の口からそんな言葉は聞きたくなかった。

　お前はこう言うべきだった。

　うわごとじゃなく、冗じよう談だんまじりでもなく、本気で言えばよかった。

　どこかへ行こう、二人で遠くへ行こう、と。

　お前は馬ば鹿かだった。

　愚おろかなお前は俺を愛した。

　弱い俺はお前を愛した。

　ちっぽけな愛は何も生まなかったが、俺はまだ生きている。

　生きていれば、また誰かを愛することができる。

　やつの狙ねらいは足のようだった。荊王ジンワンは下がらなかった。前に出て、右足の踵かかとでやつの顔面を踏ふみつけるようにして蹴け飛とばそうとした。やつはかまわず突つっこんできた。首を曲げて、左ひだり肩かたで荊王ジンワンの足を受け止めながら両りよう腕うでをのばしてきた。やつは右足に絡からみついてきた。

腕だけじゃない。全身だ。尻尾しつぽまで使って荊王ジンワンの左足にしがみつき、身体からだ全体をねじった。下手にあらがえば骨だの腱けんだのが無事ではすまない。荊王ジンワンはとっさにやつの動きにあわせて跳とんだ。ちょうど横向きに一回転して、床に背中を打ちつける恰かつ好こうになった。

「──ッ……！」

　息がつまったが、手を動かした。やつの頭を拳こぶしで殴なぐった。金属製の籠手で殴おう打だした。右足の膝ひざでやつの脇わき腹ばらを、踵で背中を蹴りつけた。Ｇｕ！　Ｕｈ！　Ｚｕ！　Ｇｕ！　やつは呻うめいて、とうとう力をゆるめた。すかさず右足と両手でやつの身体を押しのけ、引きはがした。おまけにやつの側頭部を籠手でぶん殴ってやった。やつは仰向けになって床に転がった。すぐに起きあがったが、例の布が見えた。お互たがい血で汚よごれていたものの、それはやつの胸に、おそらく直接、しっかりと縫ぬいつけてあった。字もちゃんと読めた。エレベーター。

　一いつ瞬しゆんの油断があったのかもしれない。立ちあがりながら叫さけぼうとしたら、やつが組みついてきた。あっという間に押し倒されて、腹から胸のあたりにまたがられた。視界が、頭が揺ゆれた。殴られている。何度も、何度も、何度も殴られている。気が遠くなる。ふざけるな、と引き戻もどす。右手でポケットをまさぐり、それを探さぐりあてる。握にぎりやすい形の短い棒だ。その端はしで床を叩たたくと、逆の端から尖とがった金属の針が飛びだした。それをやつの背中に突き立てた。

「□□Ｇａａａａａａａａａａａａａａａａａａａａａａａａａａｈｈｈｈｈ……！」

　獣けものというよりは怪かい物ぶつの鳴き声、もしくは咆ほう哮こうだった。

　どこだろう。それほど遠くない。あの十字目野や郎ろうの声なのだろうか。

　マリアローズはピンパーネルと二人でベイスにとどまっている。状じよう況きようはわからないが、少なくとも、十字目野郎がひたすら逃にげて、荊王ジンワンが延々追いかけまわして、という展開ではないようだ。やりあっている。戦っているのだ。マリアローズはそれを見ていることしかできないどころか、この目で見ることす

らできない。ときおり聞こえてくる音を頼たよりに想像するしかない。待っているしかない。

　いや、ベイスを守る。警けい戒かいを絶やさない。同時に、これから先どうなって、どうすればいいかを考える。この勝負ゲイムに勝つためには何をするべきか。相手の一手、二手先を読んで、後手に回らないようにしないといけない。自分の役目に集中するんだ。ピンパーネルはそうしている。鉄てつ柵さくの向こうにいる者たちも、息を殺し、固かた唾ずをのんで見守っている。習性というか本能としてやかましい新種の半魚人カタリさえ、口をつぐんでいる。きっと、余計な音を立ててマリアローズたちの気を散らしてはいけないと配はい慮りよしてくれているのだろう。参加者プレイヤ以外の仲間も、今、自分に何ができるかを考えて、それを実行している。気持ちの上ではみんな一いつ緒しよに戦ってくれている。

　ピンパーネルが右の穴のほうへ顔を向けた。

　足音だ。

　何かが近づいてくる。

　それだけじゃない。何かを引きずっているような音も聞こえる。

　マリアローズも右の穴を見た。どんな顔をすればいいのかわからなかった。おそらく今の自分は、かなり中ちゆう途と半はん端ぱな表情をしているのではないかと思う。

　短く息を吸いこんで、ゆっくりと吐はきだした。

　やせ我が慢まんをしているのかもしれないけれど、足どりはしっかりしている。色眼鏡サングラスはしていない。額が裂さけているのと、鼻がひん曲がっているのとで、顔中血だらけだ。やはり血にぬれた右手に握っているのは、十字目野郎の尻尾らしい。何しろ血だるまなので、第一印象とはずいぶん違ちがうけれど、たぶん十字目野郎なのだろう。あるいは、十字目野郎だった、と言うべきかもしれない。

　荊王ジンワンに引きずられているのに、やつはぴくりともしない。ぐったりしている。それはそうだろう。やつの後頭部から、何か刃は物ものようなものが生えている。というか、どう見てもあれは正しよう真しん正しよう銘めいのモトロール刀だ。穴の近くま

できた荊王ジンワンが、尻尾を両手で持ちなおして、やつの身体をひっくり返した。やつの口とおぼしき部分から棒状のものが突きだしている。あれはモトロール刀の柄つかに違いない。

「コオドはエレベーターだ」

　何か言うべきなのかもしれないけれど、適当な言葉が見つからなかった。ぐずぐずしている場合じゃない。マリアローズはうなずいて台の上のボタンを押した。

「エレベーター」

　キャプチャ。エレベーター。キャプチャ。エレベーター。キャプチャ。エレベーター。キャプチャ。エレベーター。キャプチャ。エレベーター。アクゼルのクソ憎にくたらしいほど渋しぶい声が響ひびき渡わたって、プリズンの一部がガゴンッと開き、照明が赤、青、緑に点てん滅めつした。二回目なので驚おどろいたりはしなかった。ただただ白々しく感じられて仕方なかった。

「出来損ないが」

　むかつく声に交じって、同じ声が吐き捨てるようにそう言った。

　鉄柵の向こうに目を向けると、アクゼルは取り繕つくろうように嘘うそっぽい咳せき払ばらいをして、相変わらずの表情もクソもないしれっとした顔で、お手数ですが、と声を張りあげた。例の声のせいで、聞きとりづらいことこの上なかった。

「見たところキャプチャ、どうもその者が自力でプリズンにエレベーター入るのは無理そうです。皆みな様さまのほうでキャプチャぶちこんでやっていただけませんでしょうか。もちろんエレベーター、わたくしアクゼルがそちらにお邪じや魔ましましてキャプチャ運んでもよろしいのですが、なにぶんわたくし、着き替がえたエレベーターばかりでございまして。正直に申しあげますとキャプチャ、服を汚したくないのですエレベーター」

「きみね……」

　さすがにかちんときたが、マリアローズが抗こう議ぎする前に荊王ジンワンが無言で十字目野郎の亡なき骸がらを引きずりだした。落ちつけ、と言われているような気がした。たしかにそのとおりだ。

　所しよ詮せん、アクゼルは狂きよう言げん回まわしでしかない。それなのに、事あるごとにこっちをかき乱そうとするから頭にくるのだが、放っておけばいいのだ。耳をふさいでいれば害はない。

　荊王ジンワンが十字目野郎の亡骸をプリズンの中に放りこむと、開いていた部分が勝手に閉じて声がやみ、照明がもとどおりになった。懐かい中ちゆう時計を確かく認にんすると、十三時四分。天てん井じようの時計の針は、開始位置を零れい度としたら、ちょうど百八十度の位置を指している。三人中二人をキャプチャするのに三十分かかった。きっかり半分だ。あと一人、バシルドをキャプチャするために残りの半分を費ついやすことができる。そう考えると、上出来と言ってもいいのかもしれないが、どうもすっきりしない。何かが引っかかる。僕はいったい何が気になっているんだろう……？

　荊王ジンワンは黒いバッグを漁って何か白い物体をとりだした。タオルと包帯らしい。用意周しゆう到とうな男だ。そのタオルで顔や手をふいて、額に包帯を巻いただけとはいえ、かなり手早い応急処置だった。ずいぶん手慣れているようだ。

「大だい丈じよう夫ぶなの」

「ああ。問題ない」

「そ」

「あと一人か」

　荊王ジンワンは汚よごれたタオルで十字目野や郎ろうから引き抜ぬいたモトロール刀の血ち脂あぶらをぬぐい、さっき捨てていった鞘さやを拾いあげた。そういえば、鞘を捨てるという行こう為いには身命を賭として事にあたるという意味があるらしい。ただ邪魔だっただけかもしれないけどさ。

　マリアローズは息を止めて天井を見上げた。

　時計の針は、ほんの少しずつだが、片時も静止することなく動きつづけている。

　目をつぶって息を吐き、うなずいた。

「ピンパーネル、お願い」

「はイ」

　目を開けてピンパーネルに顔を向けると、何もかもが片づいたジェードリの砂すな浜はまに腰こしを下ろしていたときと同じ表情だった。

　あのときは、たまたま他ほかの皆みなが離はなれた場所にいて、マリアローズとピンパーネルだけが並んで砂の上に座っていた。

　二人とも黙だまっていた。

　波の音や皆の声が聞こえた。

　ふと隣となりを見たら、ピンパーネルもこっちを向いた。

　見つめあって、でも、何も起こらなかった。

　本当に何も起こらないということが不思議で、心地ここちよかった。

「十分してもバシルドのコオドを確認できそうになかったら、いったん戻もどって。聞こえないかもしれないけど、こっちからも十分後に合図するから」

「はイ」

　ピンパーネルはそっと微笑ほほえんで駆かけだした。



　駆けることは苦ではない。

　かつて砂の海をどこまでも、いつまでも駆けた。

　もうどこにも咲さいていないけれど、目を閉じれば今もその姿が浮うかんでくる一輪の花が残した言葉だけを胸に抱だいて、駆け

て、駆けて、駆けつづけた。

　生きてね。

　瑠璃繁縷ルリハコベ。

　あなたは生きてね。

　瑠璃繁縷。

　それはわたしのすべてをゆがめたあの男が与あたえた名前だ。わたしからあなたを奪うばったあの男がわたしにつけた刻印だ。

　それでもわたしは捨てない。

　あなたがわたしを呼んだ名だからだ。

　あなただけだった。

　わたしはあなたの思い出だけを抱かかえて、あなたの言葉にだけ従って、ただ生きて、遠くへ、ひたすら遠くへと、あてどなく駆けてゆく、目的地も知らず、何をすればいいのかもわからず、まっしぐらに駆けてゆくだけの命でしかなかった。

　アッサシンだったわたしにとっては、息をすること、命令に従うこと、欲望に身を任せること、それだけが生きることだった。

　わたしは知らなかった。

　何も知らなかった。

　ジナ。

　わたしはあなたが願ったように生きているだろうか。

　あなたが生きたことの証あかしになることができているだろうか。

　あなたに伝えたいことがある。

　ありがとう。

　ありがとう、ジナ。

あなたがわたしを生かしてくれた。おかげで、わたしは大切な人たちと巡めぐりあうことができた。彼らはたくさんのことをわたしに教えてくれた。

わたしはあなたの笑え顔がおを思い描えがくことができる。

夢の中で、わたしはあなたに語りかける。

海を見に行ったんだ、ジナ。信じられるだろうか。

今のわたしには、笑いあうことのできる仲間が、友がいる。

わたしはあなたを守ることができなかった。

あなたを連れて逃にげればよかった。

そう考えることができるのも、あなたがいたからだ。そして、友のおかげだ。

彼らを守りたい。失いたくない。もう失いたくない。

ピンパーネルは正面の穴から飛びだして、奥の大きな「田」の上の辺と真ん中の縦棒が交わる地点までまっしぐらに駆けた。左に何かいると思い、そちらに目をやると、向こうの角に影かげを見た。ピンパーネルはそのまま追うことはしなかった。百八十度方向転てん換かんして、今きた道を戻った。速度を上げた。ぐんぐん上げた。走るごとに身体からだが重くなってゆく砂とは違ちがい、硬かたい石の床ゆかはピンパーネルの脚きゃく力りょくを効率よく速度に変へん換かんした。「田」の下の辺と真ん中の縦棒が交わる場所は、縦棒がそのままのびてベイスまでつづいているため、十字路になっている。ピンパーネルはその十字路を右に曲がった。突つきあたりの丁字路だ。見えた。いた。そう思った途と端たん、標的はすっと後退して丁字路の右に消えた。

逃がさない。

どこまでも追いかける。

しとめるまで追いつづける。

足を動かせ。

手を振ふれ。

走れ。

もっと速く。

行け。

奔はしれ。

天あま翔かけるように。

丁字路を右に曲がると、標的は「田」の左の辺と真ん中の横棒が交わる地点まで達していなかった。いくらか距きょ離りが縮まっている。目測で二十五メーテルといったところか。もちろん背中を向けているので、コオドは確かく認にんできない。人間とはとても思えないものの、人間に近い形をした生き物が直立したまま滑かつ走そうしているように見えるから判断しづらいが、標的はあれでいっぱいいっぱいか。こちらはまだ加速の余地がある。足の速さではこちらに分がありそうだ。一気に追いつくことはできないかもしれないが、いつかはとらえることができる。

ピンパーネルは両足に力をこめて、一蹴けりごとに十サンチでも、数サンチでもいい、とにかく少しずつ確実に標的に迫せまろうとした。そのつもりだったのだが、思ったより急速に標的との距離が狭せばまった。一歩につき十サンチ以上、もしかしたら数十サンチ。ピンパーネルは腰こしに吊つるしてあった雌し雄ゆう一いつ対ついの短たん剣けんを抜ぬいた。

右手には刺し突とつ斬ざん撃げき両用短剣、雄おすのグレアデ。まっすぐのびた頑がん丈じような剣身は約三十五サンチ。

左手には斬撃兼けん解体用短剣、雌めすのリレッザ。鋭するどく湾わん曲きよくした剣身はおよそ四十サンチ。

あの男から奪うばった双そう剣けんで友のために戦う皮肉に思いをいたしたことはない。得物はただこの手に馴な染じめばいい。斬きれればいい。鋭ければ鋭いほどいい。来歴などに興味はない。実用的でありさえすればそれでいい。

あの男は、おまえの素質は百万に一つの稀き少しようなものだ、と言った。

人殺しの道具を生みだすアサシエンだったあの男が、腕うでによりをかけてつくりあげた、素す晴ばらしい傑けつ作さくだと。

たしかに、わたしには人殺しくらいしか能がない。

わたしにとって、殺すことはいつでも、今でも、喜び以外の何ものでもない。

わたしは人殺しのために鍛きたえられた一本の刃やいばでしかないのかもしれない。

刃のわたしは相変わらず殺すだろう。だが、あの男に振るわれる刃ではもはやない。

刃のわたしはわたしを振るう者を選ぶだろう。ときにはみずから斬りつけるだろう。

わたしは友のための刃となろう。

標的は背中を向けたまま、だが、頭ず蓋がい骨こつめいた顔はこちらに向けて逆進してきた。

こちらも前進している。

二十五メーテルの距離はまたたく間に縮まった。

標的が身にまとう長衣の袖そでから突きだすというよりはあふれだしている、腕とはとても言えないような腕だった。触しよく手しゅの束だ。それが広がって、のびてきた。おびただしい量だ。視界は触手の渦うずに埋うめつくされたが、ピンパーネルには見えていた。いつも、ではない。たまに、というほど頻ひん度どが低いわけでもない。誰だれかに打ち明けたこともない。それが何なのか、説明できる自信もないが、ピンパーネルには見えるのだ。これから自分が描くことになる軌き跡せきが見える。何色ともつかない、それでいて目にも鮮あざやかな色で、はっきりと見える。かといって、それをなぞるわけではない。見えた瞬しゅん間かんにはもう、ピンパーネルの身体は動いている。そうして、そのとおりの軌跡を描く。わたしは刃だ。考える必要はない。そもそも考えることなどできない。刃のわたしは斬り刻む。ただ斬り刻む。ひたすら斬り刻む。

手て応ごたえは、だが、砂を斬るようなものでしかなかった。実

際、切断された触手はぼろぼろと崩くずれながら床に落ち、細かい粒りゅう子しとなって撒まき散らされた。砂ではないかもしれないが、砂のごとき物体に成り果てていた。降りしきる砂の雨の中を突き進んだ。声が聞こえた。標的の声だろう。笑い声だった。

「……ふふ……ふふふ……」

　標的に肉にく薄はくしていてもいいはずだった。そうならなかった。むしろ遠ざかった。

　逃げてゆく。

　追いかける。

　速い。

　標的は明らかに先ほどまでよりも速い。

　触手の切断面が見えた。

　それはただの断面でしかなかった。動物どころか植物のようですらない。生き物ではなく、単なる物のようだ。

　不意に目に痛みを覚えた。

　あたりが煙けむっている。

　とっさに目をつぶって息を止め、飛びすさった。

　踵きびすを返して逆方向に走りながら雌雄一対の短剣を腰に戻もどし、まばたきをしてみた。痛い。目に異物が入っている。小さなものだ。これは──砂……？

　目を開けた。視界は涙なみだで曇くもっている。近くの角を曲がって足を止めた。壁かべに背中をつけて、痛んでも気にせず、何度もまばたきをした。異物はあらかた流れだしたようだ。袖で涙をふいて、角から顔を出した。

　やはり、砂だ。

　標的は「田」の左上の隅すみで立ち止まっている。頭蓋骨めいた顔はこちらに向けているが、布は見えない。あの生き物は首が三百

六十度回転するのだろう。どうも首飾りチヨーカーを嵌はめるのは無理があるようでしてな。たしか、アクゼルがそんなことを言っていた。標的であるあの生き物には、最初から首と呼べるようなものなどないのかもしれない。

　標的の足あし許もとに砂すな煙けむりが立っている。

　それらは標的の袖のあたりに吸いこまれてゆこうとしていた。

　砂は凝こり固まって触手を再生しつつある。

　あの生き物はいったい何なのか。そんなことはどうでもいい。標的が何ものであろうと関係ない。わたしは今、あの標的をとらえなければならない。だとしたら、わたしは追うだろう。どこまでも追いかけつづけるだろう。

　ピンパーネルは駆かけだした。

　駆けることは苦ではなかった。それが友のためならば、なおさらだった。

　ジナ、あなたはわたしを生かしてくれ、仲間は、友はわたしに生きる意味をくれた。

　彼らのために、わたしはこの命が果てるまで、どこまでも奔はしってゆくだろう。

「──でも、やっぱりおかしいよ」

　ずっと考えつづけていた。途と中ちゆうまでは穴のほうも警けい戒かいしつつだったが、もうほとんど注意を払はらっていない。荊王ジンワンに任せっきりだ。じつは、その必要すらないのかもしれない。

「何がだ」

「簡単すぎる」

　荊王ジンワンをちらりと見た。額に巻いた包帯に血がにじんでいる。頬ほおも腫はれているし、唇くちびるの端はしには血のかたまりがこびりついていた。見えない場所にも怪け我がをしているかもしれない。きっとしているだろう。平気なふりをしているけれど、

本当はつらいのかもしれない。そんな手傷を負いながらも、どうにか十字目野や郎ろうをしとめてきた荊王ジンワンに向かって、簡単すぎる、なんて言うのはどうなんだろう。

「そうだな」

　荊王ジンワンは平然と同意してみせた。読めない男だ。

「一人目は呆あつ気けなくつかまった。二人目も俺だから手こずったが、ピンパーネルならもっとたやすく始末できただろう」

「引っかかってるんだ」

「お前は」

　荊王ジンワンはさりげなく手で口許を隠かくして声をひそめた。鉄てつ柵さくの向こうでアクゼルがあからさまに聞き耳を立てている。耳なんてどこにあるのかという話ではあるのだが。

「この勝負ゲイムをどう思っている」

「うん」

　荊王ジンワンはボタン台の右側に、マリアローズは左側にいる。離はなれたままだと、内ない緒しょ話はしづらい。マリアローズはボタン台の前に移動して、荊王ジンワンに身を寄せた。鉄柵に背を向けているから、もしアクゼルの一つ目の視力がよくて、やつが読どく唇しん術じゅつを心得ていたとしても、マリアローズの唇の動きは見えないだろう。

「問題はそこなんだよね」

「俺も考えていた」

「最初は追いかけっこだと思ってたんだ」

「同じだ」

「そのあと、本当は追いかけっこの形を借りた殺しあいなんじゃないかって」

「俺たちを皆みな殺ごろしにすれば連中の勝ちだからな」

「結局のところ、それが目的だろうしね」

　ちらりと振ふり返ってみたら、アジアンが鉄柵に手をかけて眉まゆをつりあげていた。や、そういうのじゃないから。今はただその必要があって相談してるだけだし。てゆうか、なんで僕が心の中で言い訳なんかしなきゃいけないんだよ。

　マリアローズは小さなため息をつき、気をとりなおして前に向きなおった。

「──でも、この勝負ゲイムに負ければ、どっちにしても僕らは殺されちゃうわけで」

「何も勝負ゲイムの中で息の根を止めることはない」

「それ自体はあたりまえのことなんだけどさ。Ｄチームの僕たちは、時間内で三人キャプチャしないといけないわけだから、つきつめて考えるとやることは一つなんだけど、Ａチームはそうじゃないんだよね。やつらがとりうる戦略は何通りもあって」

「攻せめるか、逃にげるか」

「大きく分ければ、そうなるだろうね」

「途中で切りかえることもできる」

「こっちはいろいろなことを考えれば考えるほど、選せん択たく肢しが少なくなっちゃう」

　マリアローズは懐かい中ちゆう時計と天てん井じようの時計を確かく認にんした。十三時十一分。ピンパーネルがベイスを出てから七分たった。正面の穴の先を見ていると、たまにピンパーネルらしき人ひと影かげが遠くの十字路を横切ってゆく。まだバシルドを追いかけつづけているということだ。

「たぶん、相手の狙ねらいはそれなんだ」

「釘くぎ付づけにする、か」

「うん。まず、一人ないし二人が早い段階でキャプチャされるのは織りこみずみだったんじゃないかな。もっと言えば、今、プリズンの中にいる犬モドキは最初から囮おとりで、キャプチャされる役

だったのかもしれない。その間に、十字目野郎がベイスに侵しん入にゅうする。そのままだとキャプチャできない。そうして相手に攻める姿勢があることを僕らに印象づける。十字目野郎がきみにやっつけられちゃったことまで、相手の想定内だったかどうかはわからないけど」

「やつは最初から俺とやりあうつもりだったようだ」

「一人殺やるか、一人殺られるか。どっちでもよかったのかもね。結果的に、僕らＤチームはベイスの守備に人数を割さかざるをえなくなる。追っ手は一人か、せいぜい二人。逃げるのはＡチーム最後の一人、バシルド。たぶん、バシルドは二人までなら逃げきれる自信があるんじゃないかと思うんだ」

「外の構造から考えても、追っ手が二人までなら、足が速くて体力さえあれば、延々逃げまわれる可能性はある」

　荊王ジンワンの言うとおりだ。外には、地図でいえば右下と左下、それから上と、三つの「田」の形をした通路がある。いずれかの「田」にＡチームの誰かがいるとき、Ｄチームがその「田」に出入りできる通路をふさいでしまえば、逃げ場はない。あとは追いこんでいって、コオドを確認すればいいのだが、問題は、どの「田」にも出入口が三つずつあることだ。つまり、三人いなければ「田」を封ふう鎖さすることができない。二人でも、うまく角に追いこむことができればコオドを確認するチャンスは十分あるが、その場合、逃げ役のバシルドは角をさけ、「田」から「田」を渡わたり歩くようにして逃げるだろう。

「勝負ゲイムは、相手の──バシルドの目もく論ろ見みどおりに進んでるんだ」

「ここまでは」

「そう。ここまでは」

「時間はまだある」

　荊王ジンワンがこっちを見た。その落ちつきはらった顔つきからは、動どう揺ようも、不安も、気負いも感じられない。切れ長の目の奥には厚かましくない程度の信しん頼らいがある。

「たっぷりとね」

　マリアローズはうっかり微笑ほほえんでしまった。

　なんとなく、まずい、と思った。

　慌あわてて目をそらそうとしたら、荊王ジンワンのほうが先に顔をそむけた。

　マリアローズは人差し指で頬ほおをぽりぽり掻かいてから、また懐中時計と天井の時計を確認した。そろそろだった。

「ピンパーネル！　いったん戻もどって……！」

　おそらくピンパーネルも、だいたい見当をつけていたのだろう。真ん中の穴からベイスに戻ってくるまで、一分もかからなかった。

「すみまセン」

　マリアローズの近くまでくるなりそう言って頭を下げたピンパーネルは、多少呼吸が荒あらくて目が赤いくらいで、怪け我がはしていないようだ。ただ、ちょっと肩かたが落ちている。バシルドのコオドを確認できなかったので、しょんぼりしているのだろう。マリアローズはピンパーネルの肩を軽く叩たたいて、今度はちゃんと笑ってみせた。

「気にしなくていいよ。おかげで相手の狙いがわかったし」

「狙イ……？」

　もう警けい戒かいする必要はない。もし、今、バシルドがベイスに突つっこんできたら、三人で袋ふくろ叩だたきにしてやればいいのだ。もっともその場合、マリアローズは鉄てつ柵さくの向こうにいる皆みなとかぎりなく近い立場に、つまり主に応おう援えんを担当することになると思うが、それはそれだ。

　マリアローズたちはボタン台のそばで身を寄せあって打ち合わせをした。途と中ちゆう、真ん中の穴からのびている通路の突きあたりにバシルドが現れたことに気づいたけれど、無視した。ピンパーネルも荊王ジンワンも、マリアローズが立てた作戦に反対はしなかった。心配そうではあった。とくにピンパーネルは、眉をひそめてじっとマリアローズの顔を見つめ、しばらくの間、何か言いたそうにしていたけれど、結局、無言のままうなずいた。荊王ジンワンは何を考えているのかよくわからなかった。ただ、配置につく前

に、低い声でマリアローズに言った。

「死ぬな」

「死ぬわけないでしょ」

「そうだな」

「僕たちは勝つんだからさ。完勝するんだよ。圧あつ倒とうしてやるんだ」

「ああ」

「誰だれか一人でも欠けたら、相手の思う壺つぼなんだから」

「お前は強いな」

「何言ってるんだよ。僕なんかより、きみのほうがずっと強いでしょ。ピンパーネルはもっと強いし。そのぶん、きみたちにはしっかりやってもらわないとね」

「わかった」

「はイ」

「じゃ、準備開始」

　すでに覚かく悟ごは決めていた。恐きよう怖ふや不安がないとはいわないけれど、リスクを冒おかすことにためらいはない。僕は強くなんかない。弱い。でも、弱いからこそ、乗り越こえないといけない山や解決しないといけない問題は多かった。他ほかの誰かなら、無造作にぴょんと跳とび越えてしまえるようなちょっとした溝みぞでも、僕にとっては巨きよ大だいな渓けい谷こくだった。ジャンプするなんてとんでもない。谷の底まで慎しん重ちように下りて、ゆっくり進んで、時間をかけてじっくりと登って、そうしてようやく一息つこうとしたら、その先に今度は断だん崖がい絶ぜつ壁ぺきが立ちはだかっている。そんなことは日常茶さ飯はん事じだった。

　僕より資質に恵めぐまれている大多数の人には、きっと想像もつかないだろう。

そこそこ安定してはいるものの、儲もうけは少ないメリクル狩がりの手法を確立するまで、僕が何度死にかけたことか！

しかも、もうこれで大だい丈じよう夫ぶ、と思った途と端たん、たいてい何かにつまずいてしまい、失敗して、半死半生の目に遭あう。あげくの果てには、たとえばコロナとかコロナとかコロナとか、傍はた迷めい惑わくな疫やく病びよう神がみに出くわして、またぞろ危き機きーいつ髪ぱつだ。

結果的には、あの出来事もいい方向に転んだ。不本意ながら、ボディーガード気どりの変態ストーカーに命を救われて、ＺＯＯのみんなと巡めぐりあうことができた。

とはいえ、どこかで一歩でも踏ふみ間ま違ちがえていたら、今、僕はここにいなかった。

自じ慢まんじゃないけれど、生死の瀬せ戸と際ぎわに立たされた経験は豊富だ。毎日が綱つな渡わたりだったんだ。弱いからってバカにするな。弱者には弱者の知ち恵えがある。持たざる者にはのるかそるかの大博打ばくちに出る度胸がある。正直、そんなものでも振ふりかざして戦わないと、いつまでたっても踏んだり蹴けったりで、損をするばかりだし、とくに世せ知ち辛がらいエルデン無統治王国では生き抜ぬくことさえ難しい。

それでもなんとか今日まで生きてきたんだ。自分だけの力ではないけれど、ぜんぶひっくるめて僕はこの命にしがみついてきた。こんなところで捨てるつもりなんか毛頭ない。

マリアローズは左の穴の近くに移動した。

荊王ジンワンは右の穴だ。

ピンパーネルはボタン台の前に立っている。

追っ手を二人にして、ベイスの守備はピンパーネル一人に任せる。正面の穴の向こうにいるバシルドには、たぶんそういうふうに見えるはずだ。

マリアローズは鉄柵のほうへと顔を向けた。

ユリカが床ゆかに座ってこちらを見ていた。飛燕フエイヤンはユリカの膝ひざを枕まくらにしてまだ眠ねむっている。小こ猿ざるの

くせに、僕らのユリカに膝枕をしてもらうなんてやっぱり許しがたい。やさしいユリカの隣りん人じん愛あい的な厚意にすぎないと思うが、小猿が勘かん違ちがいしてはいけないから、そのあたりは目が覚めてからよくよく言い聞かせるべきだろう。でも、小猿が人間の言葉を理解できるかどうか。

カタリは鉄てつ柵さくにしがみつくようにしてマリアローズの視線を魚眼で受け止めてくれた。魚顔がわずかに引きつっている。マリアローズが、大丈夫だから、と言うつもりでうなずいてみせると、カタリは、せやな、というかんじで笑えみを浮うかべた。

トマトクンは静観の構えだ。何も言わなくてもわかってくれているだろう。僕はやると決めたら絶対やる。トマトクンは信じてくれているはずだ。

そのトマトクンに寄り添そっているサフィニアは、意外と落ちついているようだ。心配性しようのサフィニアが冷静だと、こっちまで気が楽になる。もしかしたら、それを見み越こして、サフィニアは無理をしているのかもしれない。僕のために無理をしてくれる、その気持ちが嬉うれしい。

ヨグは右手の人差し指で眼鏡めがねの位置を直しながら、何やら思案顔だった。

ベティは、お手並み拝見、といったところか。

そして、あいつは━、

鉄柵にきつく指をからめて、この世の咎とがのすべてを、ありとあらゆる罪を一人で背負いこんでいるかのような顔をしていた。

ただ、その重みに耐たえかねて、今にも押し潰つぶされてしまいそうになっているかといえば、そんなことはない。悲ひ愴そうな面おも持もちではなかった。もしそうだったら、マリアローズはすぐに目をそらしていただろう。

見つめあった。

心臓の鼓こ動どうが知らせる、三秒間。

時は移る。僕らは勝たないといけない。何がなんでも。

天てん井じようの時計の針は二百七十度を指している。

残り十五分。

ピンパーネルと荊王ジンワンに目配せをした。

合図はしなかった。必要ない。

マリアローズと荊王ジンワンは同時にベイスを出た。全力疾しつ走そうだ。奥に位置する広い「田」の、マリアローズは左の辺と下の辺が交わる地点、荊王ジンワンは右の辺と下の辺が交わる地点をひたすら目指す。足音を立ててもいい。うるさいくらい立てていい。思いきり走れ。もうちょっとだ。あと少し。やけに長く、遠く感じたが、実際には一分もかかっていないはずだ。

右を見ると、突つきあたりに荊王ジンワンがいた。

これで奥の「田」の三つある出入口のうち、二つをふさいだことになる。

「ピンパーネル……！」

マリアローズは叫さけぶなり前進した。

荊王ジンワンも同じように走りだしたはずだ。

ピンパーネルは砂色の風と化して疾駆し、たちまちのうちに最後の、三つ目の出入口に到とう達たつして、足を止めることなくバシルドに迫せまろうとするだろう。

バシルドはもう「田」から出られない。

たった一つの方法をのぞけば。

きっとバシルドはその方法を選せん択たくするはずだ。

マリアローズは「田」の左の辺と真ん中の横棒が交わる地点を越こえた。

「左……！」

ピンパーネルの鋭するどい叫び声が聞こえた。やっぱりだ。予想どおりだ。こっちだ。そうくると思っていた。心構えはしていた。

　こっちが握にぎっている相手の情報はゼロに等しいが、相手もそうだとはかぎらない。仮に、前もってくわしいことを知らされていなかったとしても、マリアローズが戦力としては凡ぼん庸ようか、それ以下だということくらいは、たぶんお見通しだろう。ピンパーネル曰いわく、バシルドは前を向いたまま高速で後ろに移動することができるという。それでも、三人で三方向から迫れば、コオドを確かく認にんするのはそう難しくないはずだが、バシルドがＤチームの包囲を突とつ破ぱする方法はある。そのままだ。突破すればいいのだ。

　あそこだ。

　マリアローズが向かっている、そしてバシルドも向かっているだろう場所は、「田」の左上の角だ。

　きっとバシルドは、出会い頭がしらにマリアローズを襲おそい、一いち撃げきのもとに昏こん倒とうさせるか殺してしまうかして、コオドを確認されることなく、まんまと逃にげおおせるつもりだろう。右からやってくる荊王ジンワンや、正面から迫りくるピンパーネルはともかく、マリアローズが相手なら突破できる。間違った判断だとは思わない。妥だ当とうだ。マリアローズがバシルドでもそう考えるだろう。

「──やらせないけどね……！」

　マリアローズは立ち止まってベルトのホルダーに手をのばし、カバーを外して中から小こ瓶びんを抜ぬきとった。右手の人差し指と中指の間に一本、中指と薬指の間にもう一本挟はさんで、一呼吸置いてから投とう擲てきした。

　目標はあの角だ。

　タイミングをずらしたので、バシルドは角から飛びだす直前だったか、もしくは角の向こうでマリアローズを待ちかまえていたのかもしれない。

　小瓶は壁かべにあたって割れた。

　瓶びんの中身は爆ばく薬やく液ハーレム・ゴードンだ。

　今になって思えば、そんな名前をつけた自分の気負いに苦笑いしたくもなるけれど、ハーレム・ゴードンは空気にふれると気化し、

閃せん光こうを発しつつ体積が瞬しゅん間かん的にとんでもなく増大して、その反応の際に可燃性のガスが発生する。ようするに、マリアローズの十五メーテルくらい前方でドッガアアアァァァンと爆発して、ボオオオォォォンと炎ほのおが撒まき散らされたわけだ。

　その瞬間はぐっと腰こしを落として腕うでで目のあたりを覆おおったが、すぐに腕をどけた。

　孤こ独どくな半はん端ぱ侵入者クラツカーとして底辺近くを這はいずり回ってきた者の常として、楽観より悲観のほうに親しみを感じる。十通りの結果が予想されるとしたら、その中で最悪のケースを念頭に置いて行動することに慣れているので、とりたてて失望したりはしなかった。

「□□Ｗｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｈｈｈｈｈｈｈｈｈｈｈｈｈｈｈｈ……！」

　あれはもう声じゃない。音だ。轟ごう音おんだ。洞どう窟くつの中を猛もう風ふうが吹ふき渡わたったらあんな音が轟とどろくかもしれない。

　バシルドは爆ばく煙えんを突き破って姿を現した。その身にまとう長衣はあちこちが燃えている。袖そでや裾すそからはみだしている例の触しよく手しゆはぼろぼろだ。崩くずれ落ちている。ハーレム・ゴードンの威い力りよくは見かけほど強力ではないから、打ち合わせのときにピンパーネルが言っていたとおり、やつの身体からだは何らかの作用で砂みたいなものが固まってできているのだろう。意外と脆もろいけれど、やつはその砂を操あやつることができるらしい。やつの身体は壊こわれてもまた固まって、もとどおりになってしまう。やつの身体についてピンパーネルから聞いた話はそれだけだった。

　あれは聞いてない。

　知らないんですけど。ねえ？　どういうこと？

　やつの両袖から、白くて尖とがったものがジャッキイイイィィィィンと飛びだした。

　それは一本じゃない。何本もあった。長さは一メーテル、いや、もっとあるだろう。動物の角か、もしくは、先を尖らせた骨か。そ

んなふうに見える。あんなもので串くし刺ざしにされたら、もちろん無事ではすまない。てゆうか、死んじゃうかもね……？

　でも、泣くな、僕。怯ひるんじゃダメだ。いやでも怖こわくても足がすくんじゃいそうでも、それを見せちゃいけない。動け、僕の足。足だけじゃなく、全身だ。僕は下がらない。向かってゆく。表情は？　笑え。不敵に笑ってみせるんだ。いかにも自信ありげに、雑ざ魚こだと思ってたかもしれないけど、残念でした、能ある鷹たかが爪つめを隠かくしてました、みたいなかんじで。

　やつはどう思っているだろう。どんなふうに感じているだろう。やつの顔は頭ず蓋がい骨こつに毛というよりも変なものが生えているだけで、表情なんてわかるはずがない。でも、気のせいかもしれないけれど、一瞬、ほんのちょっとだけ、やつの勢いが弱まったように思えた。

　偽劫火を抜いた。

　やつが突とつ進しんしてくる。

　こっちも負けじと突っこんでゆく。

　やつの胸の布は何か丈じよう夫ぶな素材でできているようだ。長衣は燃えているのに、布に火が燃え移る気配はない。

　布に書かれている黒い文字は、ジドウシャ、と読めた。

　一度でいい。

　やつをぶっ倒たおす必要はない。

　この一瞬だけでいいんだ。

　見えるはずだ。僕はピンパーネルの解体劇を見てきた。トマトクンの斬きり裂さくというよりも破は砕さいする斬ざん撃げきを何度も目にした。ユリカの棍こん術じゆつを見た。髭ひげに力と技わざを見せつけられた。大勢の敵がいた。どいつもこいつも僕より強かった。速かった。怖かった。見えないはずがない。あの白い尖ったものだけでいい。近づいてくる。どんどん近づいてくる。もう近くにある。至近距きよ離りだ。見える。ちゃんと見えている。はっきりと。考えるな。何も考えなくていい。見えてさえいれば、僕の身体は動いてくれるはずだ。

　やつは白い尖ったものをバアッと広げて突つきだしてきた。

　マリアローズは偽劫火を捨てて右斜ななめ前方に身体を投げだした。

　左ひだり肩かたから背中にかけて熱が走った。

　ぎりぎりどころか右側の壁に右肩がぶつかった。かまわなかった。前転して、そのまま飛びだすように立ちあがり、走った。後ろは見なかった。角を曲がってから、あらんかぎりの声を張りあげた。

「ジ、ド、ウ、シャ……！」

　急に力が抜けて、ぐらっと揺ゆれた。何が揺れたのかよくわからなかったけれど、どうでもいい。僕はやった。やったんだ。やりとげた。そのうちベイスに引き返したピンパーネルか荊王ジンワンがキャプチャの手続きを実行してくれるだろう。そうすれば、僕らの勝ちだ。どうだ。ざまあみろ。僕らは勝つ。もう勝ったも同然だ。勝負ゲイムは間もなく終わる。もう間もなく。でも、まだ終わったわけじゃない。

　そうだ。

　終わってないんだ。

　足に力をこめた。大だい丈じよう夫ぶだ。なんともない。気のせいだ。振ふり返ろうとして、やめた。確かめるのが怖かった。さっきまでは何も、ぜんぜん怖くなかったのに、今はものすごく怖い。やつは追いかけてきているだろうか。たぶん、いる。すぐ後ろに。距離はどれくらい？　わからない。かなり近いと思う。でも、知りたくない。足が止まってしまいそうで。

「Ｈｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｈｈｈｈｈｈｈｈｈｈｈｈｈｈｈｈｈｈ……！」

　逃にげないと。走れ。精せい一いつ杯ぱい駆かけるんだ。視界がぐるぐる回っている。何がなんだかわからない。前もよく見えない。うわあ。うあああああああ。これは、僕の声？　そうかもしれない。そうじゃないかもしれない。わからない。足がもつれそうになる。転ぶ。転んじゃう。ダメだ。こらえろ。僕の足。なんとか。どうにか。

　つんのめった瞬間、何かとすれ違ちがったような気がした。

　後ろで何かと何かがぶつかる音がした。

　床ゆかに倒れこんだ姿勢のまま、どうにか顔を後ろに向けた。

　ぼやけていたので、頭を振って、まばたきをした。

　背の高い男がバシルドに組みついていた。身体からだで止めたというかんじだった。

　その背中から、白いものが何本も突きだしている。

　いや、白くない。

　赤い。

　真っ赤な液体でぬれている。

「貴様は」

　男は右手で柄つかを握にぎって横向きにしたモトロール刀の刀身をバシルドの頭部の下、人間なら首にあたる箇か所しよに押しあてていた。

　左手は切っ先に近い刀身の峰みねにそえられている。

「死ね」

　男は両手を前方に押しだした。斬るという形にはならなかった。力任せに押されて、バシルドの身体が後ろに倒れかかった。それとともに、男の背中から突きだしていた尖ったものがずぶずぶと引っこんでいった。

　抜ぬけた。

　その途と端たんだった。

　男がモトロール刀を両手持ちして振りおろした。

　バシルドの頭頂部だった。

　すっと眼がん窩かと眼窩の間を斬り裂いて、口らしい穴のすぐ上

あたりで止まった。

　Ｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｈｈｈｈｈｈｈｈｈｈｈｈ……

　それは断だん末まつ魔まの声だったのだろうか。

　男は刀から手を放した。

　バシルドは頭に刀を埋うめこんだまま後ろに倒れていった。そのときにはもう、バシルドの身体の大部分は砂と化していた。残ったのは、刀をめりこませた頭ず蓋がい骨こつのような頭部と、焼け焦こげて穴だらけになった長衣と、背骨と肋あばら骨ぼねみたいな骨格らしきもの、それからコオドが書かれた布だけだった。

　男は、荊王ジンワンは、首を曲げて一つ息をついてから振り返った。

「大丈夫か」

　そう言った唇くちびるの端はしから血が流れだした。荊王ジンワンもそれに気づいたようで、無造作に手でぬぐいながらマリアローズに近づいてきた。

「大丈夫そうじゃないな」

「……きみこそ」

　起きあがろうとしたら、左肩と背中が痛んだ。顔をしかめて呻うめき声を押し殺していると、荊王ジンワンが屈かがみこんできて、あっという間に助け起こされてしまった。キャプチャ。ジドウシャ。キャプチャ。ジドウシャ。あのむかつくアクゼルの声が響ひびき渡わたって、照明が赤、青、緑に点てん滅めつしはじめた。ピンパーネルがキャプチャしてくれたのだろう。

　マリアローズは荊王ジンワンの手を振り払はらった。本当は突き飛ばしてやりたかったけれど、それで精一杯だった。気が抜けてしまい、立っているのがつらくて、壁かべに手をついた。

　荊王ジンワンも逆側の壁に背中をもたれさせた。他ひ人とのことは言えないけれど、ずいぶん呼吸が荒あらい。照明のせいもあって、傷の具合はよくわからないが、あの尖とがったものは背中まで

貫かん通つうしていた。血も吐はいていたから、内臓が傷ついているかもしれない。かすり傷とはほど遠いだろう。

「意地っぱりだね」

「お前に言われるとはな」

　荊王ジンワンは少しだけ笑った。マリアローズもつられて笑ってしまった。まあ、いいか、と思った。今くらいは笑いあってもいい。何しろ、僕らは勝ったんだから。

Omenage 897 12th revolution 6th day

サンランド無統治王国首都エルデン・アンダーグラウンドD8

〝怪虫の坩堝ガンズゲイル〟

chapter.6

告白の理由

「ローガンは」

　あいつは唐とう突とつに切りだしてきた。

　ピンパーネルは無傷に近かったけれど、マリアローズと荊王ジンワンは負傷していた。それも軽傷とは言いがたかった。とくに荊王ジンワンは、放っておいたら命にかかわる深手を負っていた。

　治ち療りようを一手に引き受けているのは、最強伝説の持ち主でありながら、優ゆう秀しゆうな癒いやし手でもあるユリカだ。

　魔ま術じゆつから派生したとはいえ、むしろ〝超越者のオーバ業ラーツ〟に近いらしい医術式は、傍はたから見るよりもずっと施せ式しき者しやに消しよう耗もうを強しいる。大おお怪け我がをした飛燕フエイヤンの手当てをして、そのうえ重傷者二名の面めん倒どうを見るとなると、そう楽ではないだろう。それに、ユリカ自身も飛燕フエイヤンと二人で勝負ゲイムに参加した。ユリカのことだから、自分は平気だと言い張るに違いないけれど、その疲ひ労ろうだってきっとあるはずだ。

　そんなわけで、第三勝負サードゲイムのあと、一通り治療が終わってから第四勝負フオースゲイムの会場前まで移動したところで、マリアローズは休きゆう憩けいを提案した。反対する者は誰だれもいなかった。アクゼルも、内心どう思っているのかはわからないが、拒きよ絶ぜつはしなかった。

　会場へと通じる扉とびらの前は、天然の洞どう窟くつにいくらか手を加えたように見えなくもない、といった程度ではあるものの、ちょっとした広場になっていて、明かりもあった。アクゼルがいるので、くつろぐのは無理でも、身体を休めることくらいはできるだろう。

　椅い子すになりそうな岩に腰こしを下ろすと、空腹を感じた。時刻は十四時を回っていた。昼食には遅おそいくらいの時間だった。背負い袋ぶくろの中から携けい帯たい食しよくを出そうとしたら、「待てぇ待てぇ待たんかあああぁぁぁい」と制止された。カタリだった。

　カタリは背負っていたバックパックを地面に下ろして、「腐フっ

腐っ腐っー」と不気味に笑いながらその中から何かとりだした。弁当だった。サンドウィッチやらおにぎりやら、ありふれているといえばありふれているものばかりだったけれど、どれも口に入れやすそうだった。それに、運んできたのはカタリでも、作ったのはサフィニアに違ちがいない。だとしたら、味は折り紙付きだ。

　わざわざ本人に確かく認にんするまでもなかった。カタリにすすめられるまま、ミックスサンドを一口食べただけでわかった。あえていつもより味つけを少し濃こくしてあるあたりの心こころ遣づかいも憎にくかった。ゆったりと食事を楽しめる状じよう況きようなら、複雑で奥深い旨うま味みを嚙かみしめる余よ裕ゆうもあるけれど、こういうときは問答無用で「うまい！」と感じられるものが嬉うれしい。

　自然と笑えみがこぼれた。

　なぜかカタリが誇ほこらしげに胸を張っていた。

「や、きみが作ったんじゃないでしょ」

「アホゥ、今回はわしもなあ、バッチリ手伝うたんやで！」

　ピンパーネルの動きが止まった。ちょうどおにぎりを口に入れたところで、これから咀そ嚼しやくしようとしていた。まさにそのときだった。

　ピンパーネルは五秒間くらい静止したままでいて、それから口の中のものを一度も嚙まずにのみこんでしまった。

　目が泳いでいた。魂たましいが抜ぬけたような顔だった。三分の二くらいになったおにぎりを握にぎったままの手が小刻みに震ふるえていた。おにぎりの中身が見えた。何やら赤い粘ねん液えきとオレンジ色の物体、それから黒っぽいものやら緑色っぽいものが混じりあっていて、少なくとも食欲をそそられるような見た目ではなかった。

「ん？　どないしたんや、ピンパーネル。オオゥッ、それはアレやな。わしの開発したピリ辛からウメコブウニケチャップソースで和あえたイカスミとアンキモによるゴージャスなハーモニー大人の味やないか。大当たりやで。思わず息が止まってまうくらいウンまいやろ？」

「はイ」

　ピンパーネルはすっくと立ちあがって神速でカタリに接近した。本気になったピンパーネルの動きは目で追うことすら難しかった。つい本気になってしまうほど、ひどかったのか。

　ピンパーネルはカタリの口の中に食べかけのおにぎりを突つっこんだ。それから左手でカタリの後頭部をがっちり押さえ、右手でしっかりと口に蓋ふたをした。

「アなたのモ息・止メルとイーdeathカ？」

　ふだんからあまり流りゆう暢ちようとは言えないピンパーネルの共通語が、いつにもまして変だった。表情や声こわ音ねも殺気をはらんでいた。もちろん、ピリ辛ウメコブウニケチャップソースで和えたイカスミとアンキモによるゴージャスなハーモニー大人の味とやらのせいだろう。必死に吐きだそうとしているけれど、ピンパーネルが正当な権利として妨ぼう害がいしているために吐きだすことができず、目を白黒させながら全身を痙けい攣れんさせているカタリ自身が、その味の破は壊かい力をまざまざと見せつけていた。もはやカタリにできることはたった一つしかなかった。のみくだすしかない。カタリは一分以上に及およぶ苦く悶もんと葛かつ藤とうの末にそうした結果、地べたにへたりこんで放心状態に陥おちいった。まったくもって自じ業ごう自得としか言いようがなかった。そのまま陰かげ干ぼし半魚人にでもなっちゃえばいいんじゃない？

　半魚人の陰干しが徐じよ々じよに進行するなか、サフィニアがおそるおそる荊王ジンワンに昼食をすすめた。荊王ジンワンは拒こばまなかった。すまない、と短く言って、だが、おにぎりには手をのばそうとしなかった。それを見たサフィニアが申し訳なさそうに肩かたをすぼめた。

「……わたしは……止めたんですが……カタリさんが、聞いてくれなくて……でも、あの……よく見ると……違いがあります……大きさが一定で、形が整っているのは、わたしが作ったおにぎりなので……」



　途と端たんに荊王ジンワンがおにぎりを手にとってかぶりつき、うまいな、と低くつぶやいた。エルデンでも米の飯はよく食べられているが、もともと大陸東部から伝わってきた食べ物だと聞いたことがある。考えてみると、同じサンランドの中でも、カリオサークではあまり見かけなかった。ジェードリでは米をそのまま炊たくよ

りも、炒いためてスープを加え、魚ぎょ介かい類るいなどと一いっ緒しょに炊くリゾットという料理が一いっ般ぱん的だった。ラフレシアでは米を食べたことがなかったように思う。龍州ではどうなのだろう。よくわからないけれど、荊王ジンワンは米が好きなようだ。それがどうしたという話ではあるし、そんなことよりもトマトクンの挑戦者魂に度ど肝ぎもを抜かれた。

「これはこれで悪くないと思うがな」

　トマトクンは明らかに形の悪いおにぎりを二口で食べてしまうと、鼻をすすりながら、またもやいびつなおにぎりを手にとった。

「なんというか、ちょっと表現しがたいが、斬ざん新しんな味がするぞ」

「……そういうの、求めてないんだよね。誰も。てゆうか、トマトクン、風か邪ぜひいてて味覚とか麻ま痺ひしちゃってない？」

「うむ。そのはずなんだが、どういうわけかこれは味がするんだ」

「それって、ただ単にものすっごく刺し激げきが強いってことじゃないの？　あんまり身体からだによくなさそうだけど」

「そうか？　これを食ってると、風邪が治りそうな気もするぞ」

「気のせいだよ、きっと。どう考えても、逆に悪化しちゃいそうだもん」

「――はっ……！　だ、ただっダメですっ……！」

　サフィニアが猛もう然ぜんとトマトクンの手からおにぎりを叩たたき落とした。もったいなくはあるけれど、バカタレ半魚人の魔まの手にかかってしまった以上、あれはもはや食べ物ではない。毒物だ。実際、当の半魚人は着々と世にもまずそうな干物になりつつあった。サフィニアの処置は正しい。食べてしまったぶんについても、吐はきださせたほうがいいかもしれないくらいだ。

　そんなことをしているうちに、飛燕フエイヤンがようやく目を覚ました。まだ顔が赤くて具合はよくなさそうだが、ユリカに手て渡わたされたサンドウィッチをうまいうまいと言いながら食べていた。悔くやしいというか、割り切れない気分ではあったけれど、ユリカは世話好きで、飛燕フエイヤンはいかにも手のかかる小こ猿ざ

るだった。飛燕フエイヤンを甲か斐い甲が斐いしく看護するユリカは生き生きしていて、きらきらしていた。それに、第二勝負セカンドゲイムは見事だった。二人の連れん繫けいもすごかったし、最後の最後でユリカが無防備になったとき、飛燕フエイヤンは身を挺ていして守った。飛燕フエイヤンがグウェンの金棒を防がなければ、ユリカはどうなっていたことか。飛燕フエイヤンは左の脛すねを開放骨折していた。つまり、折れた骨が皮ひ膚ふを突き破やぶって外に出ていた。その前に左ひだり腕うでも骨折していたようだ。満まん身しん創そう痍いだった。ユリカは深手を負わなかったが、それはやはり飛燕フエイヤンのおかげでもあるだろう。

　事実は事実として認めざるをえなかった。

　上から目線で物を言える身分ではないけれど、飛燕フエイヤンはよくやった。

　この７Ｓとのセブンス七つの・ゲ勝負イムに挑いどんでいる仲間の一人として、僕の、僕らの大切な、大好きなユリカの相棒として、その役目をきっちり果たしてくれた。

　だから、ユリカと向かいあって地べたに座っているのはいいとしても、ちょっと距きよ離りが近すぎるんじゃないの、それ？　ねえ？　もっと離はなれたら？　みたいなことは思っても口に出さなかった。なんか妙みように仲がよさそうっていうか、恋こい人びと同士は絶対ないけど、姉弟みたいなかんじには見えなくもなくて、それもまあ、気のせいに違ちがいないということにしておいた。

　でも、ユリカが手に持っていたサンドウィッチに直接ぱくっとかじりつくのはさすがにどうかと思う。それはちょっと、かなりやりすぎだ。

　ユリカも「きゃっ」とびっくりしておきながら、「もう」とか言っちゃって、それでおしまいってどういうこと？　なんで怒おこらないわけ？　怒ろうよ、そこは。怒っとこうよ。そうしないと、絶対つけあがるよ？　だって、小猿だよ？　ちゃんと、しっかり線を引いとかないとさ。小猿だけに、何をしても許されるんじゃないかって勘かん違ちがいするに決まってるからね？　そうなるともう、小猿だけじゃなくて、ユリカにも責任があるってことになってくるわけだしさ。そのやさしさが仇あだとなる、みたいな。

　楽しそうだから、いいけどね。

あんな顔をしているユリカを見るのは初めてだった。強いユリカでも、やさしいユリカでも、寝ねぼけているときのかわいらしいユリカでも、少しとぼけたことを言うときの微笑ほほえましいユリカでもなかった。女の子の表情だった。

好き、なのかな。

ユリカは、飛燕フエイヤンのことが。

だとしたらどうだとか、どうすればいいとか、よくわからなかった。

あまり深く考えたくなかった。もし考えてみたところで、すぐ壁かべにぶちあたることはわかりきっていた。

それはどうやっても乗り越こえることのできない、百万年かけて削けずっても向こうにはたどりつけないくらい厚くて、見上げてもてっぺんが見えないほど高い壁だった。その壁に手をついて、うつむき、じっとしていることには慣れていた。壁に手をついている自分が自分なのか、自分が手をついている壁が自分なのか、どちらも自分なのか、正直もうよくわからないくらいだったし、わからなくてもいいと思っていた。このままずっと、わからなくていい。

ベティは妹弟で子しに義理立てするようにサンドウィッチを一つ、つまんだだけだった。

ヨグはおにぎりとサンドウィッチを二つか三つずつぺろりと平らげて、何やら感想らしきことを喋しやべっていた。大海の波打ち際に生まれる塩あん梅ばいが何だとか、天空にまたたく星が仰ぎよう天てんする配合がどうしたとか、とても料理について語っているとは思えない言葉が次々と飛びだして、サフィニアがまばたきをしながら頭をひねっていると、ようするに美味であるということです、と微笑んでみせた。だったら最初からそう言えばいいのに。

いくら語ご彙いが豊富でも、適切に使われないかぎり、徹てつ底てい的に無む駄だだ。

伝わらない言葉に意味なんかない。

伝えたい思いがあるのなら、わかりやすい言葉で、はっきりと口に出すべきだ。

伝えられない思いなら、鎖くさりでがんじがらめにして胸の奥底に沈しずめてしまえばいい。

あいつはベティに「せっかくだし、あんたもいただいたら」と言われて、サンドウィッチを食べていた。この間、朝ご飯を一いつ緒しよに食べたときも思ったけれど、食べるだとか、寝るだとか、そういう人間としてあたりまえの行こう為いがここまで似合わないやつも珍めずらしい。ぼんやりとそんなことを思ったきり、あいつのほうは見なかった。食べることに集中していた。

物音がしたわけでもない。

ただなんとなく顔を左に向けたら、少し離れた場所にある岩の出っぱりにあいつが腰こしかけていた。

正面に向きなおると、ベティが五メーテルくらい先の岩がん壁ぺきに背をもたれさせてこっちを見ていた。例の責めるような目つきではなかった。これから起こることをすっかり見通しているかのような、それでいて予想される事態に微み塵じんも心を動かされていない、静かな目だった。

あいつは唐とう突とつに切りだしてきた。

「ローガンは」

誤解しようのない言葉で、はっきりと言った。

「昼飯時ランチタイムの仲間だった。クランを作る前からの知りあいで、大事な友だちだった」

途と端たんに僕の身体からだが震ふるえだした。滑こつ稽けいなくらいがたがた震えだした。歯の根があわなかった。自分がどこを見ているのかわからなかった。どこも見ていないのかもしれない。見たくないのかもしれない。耳をふさぎたかった。わかっていたのに。だいたい見当がついていた。それでも、僕は、ああ、僕は、聞きたくなかったんだ。もう十分だ。その先は聞きたくない。

それなのに、僕の身体は激しく震えるばかりで、言うことを聞いてくれない。耳をふさぐことすらできない。そうじゃない。僕は聞きたくない。それは本当だけれど、聞きたい。聞かないといけない。そんなふうに思ってもいる。

「クァラナドにミケランジェロという店があってネ。ローガンはそこで働いていた。ボクはある男と知りあったことがきっかけで、その店に通うようになったんだ。ボクだけじゃないけどネ。ミケランジェロの近くにある店で用心棒をしていたベティ。それから、蛇だ蝎かつというクランの頭領マスターだったダリエロ。あとは、当時〝百本塚フアントム・のオブ・怨ハンドレツド霊グレイヴ〟なんていう大層な呼び方をされていたリキエル。昼飯時ランチタイムは六人で始まった。クランを作ろうと言いだしたのはボクだけど、まさか自分が頭領マスターをやる羽目になるとは思っていなかったヨ。それはボクの役目じゃないと考えていた。ボクよりもっとふさわしい男がいたんだ。それなのに、多数決でボクに決まった。どういうわけか、ボク以外の五人がボクを推おしたんだ。なんだか罠わなに嵌はめられたような気分だった。だって、あの男と出会わなければ、ボクはローガンとも、ベティとも、ダリエロとも巡めぐりあうことはなかった。少なくとも、仲間に、友だちになることはなかったはずだ。リキエルはどうだろう。わからないけど、今みたいな関係にはなっていなかったと思う。あの男がいたから、昼飯時ランチタイムがある。ボクはここにいる。それはボクらの共通認にん識しきだと思っていたし、だとしたら当然、頭領マスターはあの男であるべきだった。でも、みんなボクにやれと言う。『ようするに、お前さんと違って俺には人徳ってものがないんだろうさ』と冗じよう談だんめかしてあの男が言った。冗談としては傑けつ作さくだったヨ。人徳があったのはあの男だ。あの男がボクらを結びつけたんだ」

あいつは笑えみを浮うかべていた。

それは懐なつかしそうで、少しくすぐったそうで、心から楽しそうな、そして悲しい、せつない笑みだった。

叫さけびだしたいよ。やめて。もうやめて。そんなこと、僕に聞かせてどうしようっていうんだよ。何にもならない。僕には関係ない。知ったことじゃない。どうでもいい。だけど僕は知っているんだ。僕は心の底からそう思っているわけじゃない。僕はわかっている。何をするべきか、ちゃんと理解している。涙るい腺せんがゆるみかけていた。心臓は百人か二百人が一いつ斉せいに駆かけ足をしているみたいな音を立てている。いつまでも身体中がこんなに震えていたら、そのうち細さい胞ぼうレベルまで分解されてしまうんじゃないだろうか。

それでも僕は言わなきゃいけない。

　確かめるんだ。

「あの男って」

　思ったよりまともな声が出た。

　でも、なんだか自分の声じゃないみたいだ。

　あいつがこっちを向いた。

　その薄うす青あお色の瞳ひとみに、僕はどう映っているだろう。

　僕は一呼吸置くというよりも、必死に息いき継つぎをしてから、その名を口にした。

「クラニィっていう人？」

　あいつはゆっくりとうなずいてみせた。

　僕は、そっか、とつぶやいた。

　胸の真ん中に杭くいを打ちこまれたかのようだった。その杭はあまりに巨きょ大だいすぎて、突つき刺さささったんじゃない、肋あばら骨ぼねを砕くだいて肺や心臓を押し潰つぶしてしまった。僕は息ができなかった。できるはずがなかった。そのための器官が完全に破は壊かいされてしまっていた。そうやって痛みを大おお袈げ裟さに受け止めることで、僕は自分を守ろうと、甘やかそうとした。そうじゃないよね。もう一人の僕はやけに冷静だった。違ちがうでしょ？　わかってるよね。うん。そうだね。わかってる。

　つらいのは、きついのは、痛いのは、とんでもなく苦しいのは、僕じゃない。

　あいつだ。

　アジアンだ。

　うつむきかけて、思いとどまった。

「その人は、もう、いないの？」

「いない」

「死んじゃったんだ」

「ああ」

「それは、僕のせいなんだよね」

「違うヨ」

「でも、何の関係もないってことはないでしょ」

「キミは関係ない」

「嘘うそ、つかないでよ」

「嘘じゃないサ」

「笑わないで」

「すまない」

「謝らなくていいよ。ただ、僕は本当のことが知りたいんだ」

「ボクもキミに話したい。本当は話したかったけど、話せなかった」

「僕はちゃんと聞いておくべき話だったんだよね」

「そうかもしれないネ」

「ＳｍＣでしょ？」

「ああ」

「六巡月の二十番日だよね。Ｄ７で僕を助けてくれたときに、ＳｍＣを殺した」

「そうだ」

「昼飯時ランチタイムはＳｍＣと同盟してたんだよね」

「手を組んでいたわけじゃないヨ。互たがいに干かん渉しようしないという取り決めをしていた」

「きみはその取り決めを破った。僕のせいで、破らざるをえなかった」

「手を下したのはボクだ。責任はボクにある」

「だけど、僕があんなことになってなかったら、起こらなかった事件だよ」

「時間の問題だったかもしれない。ＳＩＸはボクを手に入れたがっていた」

「でも、結果として、きみは取り決めを破った」

「そうだネ」

「報復だったの？」

「同時に脅きよう迫はくでもあった。手を貸さないのなら、今後も仲間を殺すということサ」

「ヨグが言ってたね。きみのところには戦せん闘とうに向かない人も大勢いるって」

「ただ昼飯くらいはーいつ緒しよに食べようというだけの、あぶれ者の集まりだからネ」

「守るためだったんだ」

「その資格や資質があるとは思えないけど、ボクは頭領マスターだから」

「どういう人だったの。クラニィって」

「取り立て屋をやっていた」

「借金とかの？」

「そう。取り立てたぶんの四割を自分の懐ふところに入れて、残りを貸し主に返す」

「わりと良心的だね」

「ボクは相場を知らないから、何とも言えない。評判はよかったみ

たいだ。お人ひと好よしだと言われていた」

「いい人だったんだ」

「そうだネ」

「好きだった？」

「ああ」

「大事だったんだ」

「ボクを人間にしてくれた」

「そっか」

「うん」

「ローガンっていう人は？」

「ミケランジェロはもともとクラニィが通っていた店だ。ローガンがそこで働きはじめる前、何をしていたのか、ボクは知らない。訊きいたことがないし、知りたいと思ったこともない。知らなくても、ボクにはわかった」

「何が？」

「ボクらは似ていた」

「似てるようには見えなかったけど」

「外見じゃない。中身サ。どう言えばいいのか。とにかく、ボクらは似ていた」

「どんなふうに」

「自分の中に、自分じゃない、他ほかの何かを感じていた」

「それは、何なの」

　アジアンは軽く首を横に振ふった。わからない、という意味だと受けとった。

「クラニィがいなくなったあと、ローガンはずっと我が慢まんしていたんだ」

「ローガンとクラニィは仲がよかったんだね」

「親友同士だった。ローガンにはクラニィが必要だった。自分の中の何かを押しとどめるための理由がネ。負けてしまいそうだ、とローガンはボクに打ち明けた。これ以上、自分はここにはいられない。ここから離はなれないと、クラニィに会わせる顔がなくなってしまう、とネ」

「離れても、ダメだったのかな」

「きっと、離れなくても、離れてもダメだったんだ」

　それまで淡たん々たんと語っていたアジアンの表情が、かすかに曇くもった。

「悔くいがないと言ったら嘘になる。ボクは必要以上にローガンを苦しめてしまったのかもしれない。苦しみを長引かせてしまったのかもしれない。昼飯時ウチから抜ぬけることを告げたあと、去り際にローガンが言ったんだ。おれを殺してくれないか、と。そのあとすぐに笑って打ち消した。どこか遠くで何もかも忘れて、自分の中の何かを飼い馴ならして心静かに暮らす日々がローガンに訪おとずれることを、ボクは願っていた。心の底から願っていた。でも、それは無理だと直感してもいた。正直に言えば、予感があった。いつかすべてを終わらせないといけない。それができるのは、おそらくもうボクだけだ。ローガンがそれを望んでいることもわかっていた。だとしたら、ボクはやらないといけない」

　アジアンは右手をぎゅっと握にぎりしめた。手て袋ぶくろはしていない。断だん末まつ魔まの剣けんのせいでずたずたになったからだ。それでいて、ユリカの治ち療りょうを受けたわけでもないのに、手はきれいだ。

「あれからローガンがどこで何をしていたのか、どうしてこの勝負ゲイムに参加することになったのか、ボクにはわからないけど、ルヴィー・ブルームの目もく論ろ見みは見当がつく。きっとあの男は、かつての仲間とやりあわせることでボクを嬲なぶろうとしたんだろう。でも、失敗だヨ。ボクはいずれローガンに会わないといけなかった。あの日から今日まで引き延ばしてきた。たとえあの男が

仕組んだことだとしても、決めたのはローガン自身のはずだ。本当はボクからローガンに会いに行くべきだったのかもしれない。待ちかねて、ローガンのほうから会いにきた。それだけのことなんだ。あの男はわざわざこんな舞ぶ台たいまで用意して、結局、ボクらに利用されただけサ。あの男はボクのことをすべて見み抜ぬいているつもりだろう。そう思っていればいい。だけど、ボクはもう昔のボクじゃない。あの男の人形じゃない」

　アジアンの声に熱がこもった。

「嫌きらいなんだ。虐殺人形カーネイジドールと呼ばれるのが。イヤでイヤでたまらなかった。でも、一方で、そうなのかもしれないと思ってもいた。ボクはずっとそうだったから。あの男の人形だった。所しよ詮せん、変わることはできない。逃にげられないのかもしれない。でも──」

　その熱がふっとゆるんで、無む垢くとさえ言ってもいいだろう、微笑ほほえみの見本のような微笑みがアジアンの端たん整せいな顔を彩いろどった。

「違ちがうと言ってくれたんだ。お前さんは人形なんかじゃない、と。嬉うれしかった。解き放たれたような気がした。ボクは何度も繰くり返した。頭の中で。声に出してつぶやいてみたこともある。ボクは人形なんかじゃない。自分で言わなくたって、今も聞こえる」

「それは」

　どうしてこんなに落ちついて尋たずねることができるんだろう。それどころか、僕はアジアンにつられて、微笑みさえ浮うかべている。

「クラニィが？」

「うん」

「そっか」

「死ぬ少し前に、子供に仕事を依い頼らいされて、仕方なくそれを受けたという話をしていたんだ。友だちに貸した金を取り戻もどしたいとか、そんな内容だった。たしか、十四ダラーだったかな。ろくな仕事じゃないとくだを巻いていた。愚ぐ痴ちを言うくらいな

ら、最初から引き受けなければいいのにサ」

「お人ひと好よし、なんだっけ」

「ああ。口ではどう言っても、誰だれかに頼たよられると断れない。違うネ。断らない男だった。あとでいろいろ調べたんだ。その子供は見つけられなかったけど、目もく撃げき者しやはいた。ただ、かなり遠くにいて、なんとなくそう見えたという話だった。どうやらクラニィは子供を助けようとしてやられたみたいだ。たぶん、そんなところだと思うヨ。そういう男なんだ」

　今なら、とアジアンは天てん井じようを仰あおいで目を細めた。

「わかる気がする。クラニィが目を閉じる直前に何を思ったのか。ボクはもう、一度その願いにそむいてしまったけど、二度目はない。絶対にネ」

　不思議だった。

　当然、僕は知らない。そのクラニィという人とは面識がない。顔も、背せ恰かつ好こうも、もちろん声もわからない。それなのに、ぼんやりと思い浮かんだ。

　丈たけの長いコートを着ている、なんということもない男だった。年のころは三十代半ばか、後半か。目め尻じりが下がっていて、やさしげに見えた。やれやれ、という表情で立っていた。その前に、黒い服を着た別の男が、見捨てられた子供のように、膝ひざを抱かかえて、うなだれて座っていた。下がり目の男が腰こしを屈かがめて黒ずくめの男の頭の上に手を置いた。髪かみの毛をくしゃっとつかんで、そっと声をかけた。

　泣くんじゃねえよ、馬ば鹿か野や郎ろう。

　黒ずくめの男は首を横に振った。いやだ、いやだ、とでも言うように。

　しょうがないやつだな。

　下がり目の男は少しだけ笑って、見ろ、とこちらを指さした。

　見てみろよ。

俺なんかいなくたって、お前さんは大だい丈じよう夫ぶだ。

もう平気さ。

そうだろう？

わかってるはずだ。

お前さんは一人じゃない。

「──そろそろ休きゆう憩けいは終わりにしない？」

ベティが壁かべから離はなれて癖くせのある髪を揺ゆすった。

「どうせ第二勝負セカンドゲイムと第三勝負サードゲイムに出た人たちは次も出られないわ。順当に行けば、あたしかヨグ、もしくは二人の出番ってことになるでしょうから、もっと休みたいっていうなら、観戦がてらゆっくり骨休めのつづきでもしてればいいわけだしね」

癇かんに障さわる言い方だった。ベティは昼飯時ランチタイムとそれ以外との間に一線を引いて、決してそこをまたいでこようとはせず、またがせようともしない。そんな態度をとりつづけていて、言動にもそれがはっきりと表れている。べつに馴れあう必要はないのかもしれないけれど、仮かり初そめとはいえ仲間なのだから、もうちょっと歩みよってくれてもよさそうなものだ。

僕はいいけど。

ベティが僕を恨うらんで、憎にくんで、邪じや険けんにするのは、仕方ない。

アジアンがどう言おうと、原因は僕だ。アジアンは僕を助けるためにＳｍＣを殺した。そこをＳＩＸにつけこまれた。ＳＩＸはクラニィを殺して、アジアンに迫せまった。ＳｍＣの軍門に下れと。さもなければ、もっと殺す。そう宣告したかどうかは別としても、ようするに脅おどして、昼飯時ランチタイムを傘さん下かに入れた。アジアンはＳＩＸに飼われる身となった。ＳＩＸの命令に従って、使いっ走りみたいなことをした。汚よごれ仕事もした。そうして忠誠を装よそおった。秩ちつ序じよの番人とＺＯＯが泉里センリに攻せめこんで、トマトクン率いるチーム・ウルフが鳳ほう凰おうの間に押しよせたとき、ＳＩＸはアジアンに命じたのだろう。昼飯時ラ

ンチタイムの戦力であいつらを追い払はらえ、と。

　ＳＩＸはアジアンを信用していたのか。あるいは、それしか選せん択たく肢しがなかったのか。

　いずれにしても、アジアンはこれさいわいとばかりに、昼飯時ランチタイムの皆みなを引き連れて鳳凰の間を飛びだした。トマトクンと真しん剣けん勝負を演じてみせ、時間稼かせぎをした。その間に、秩序の番人のチーム・タイガーが正門を破った。勝負の行方ゆくえが見えた。ついに好機はきた。アジアンはＳＩＸを裏切って昼飯時ランチタイムの皆とともに泉里センリから逃のがれた。

　あのとき、アジアンとトマトクンは本気だったのだろうか。本当のところはわからないけれど、二人は戦って傷つけあったものの、それだけだった。あの戦いではたしかに大勢が命を落とした。僕は、だけど、ＺＯＯの仲間を失わなかった。戦いが終わると、アジアンがまたつきまとってくるようになった。もちろん、すべてがもとどおりになったわけじゃない。モリーは一度死んだ。ベアトリーチェは深い傷を負って、命まで落とした。それでも、二人とも蘇そ生せい式で生き返った。平へい穏おんな日々が戻もどってきた。

　なんだか思ったとおりにいかなくて、苛いら々いらして、自暴自じ棄きになったりしていられたのも、そのおかげだった。

　アジアンに元気づけられた。

　今から考えれば恥はずかしい。

　僕の悩なやみなんてたいしたことじゃなかった。

　アジアンは、仲間を守るためにあのクソッタレなＳＩＸの足の裏を舐なめながら、ベティに僕を救いださせた。綱つな渡わたりの末にＳＩＸの軛くびきから逃れて、とうとう仲間を守りきった。

　でも、失ったものは戻ってこない。

　クラニィはもういない。

　ついさっき、ローガンまで失ってしまった。

　しょうがなかったとは口が裂さけても言えない。そもそも僕がＤ７でへまをしなければ、こんなことにはなっていなかったはずだ。

クラニィが死ぬことはなかった。そうしたら、ローガンだって死ぬ必要はなかった。アジアンは誰だれのことも失わずにすんだ。

　僕だったら、どうだろう。

　僕がアジアンだったら、僕を恨むかもしれない。少なくとも、以前と同じように接することはできないだろう。くだらない悩みで悶もだえていたら、勝手にしろ、と思うだろう。バカじゃないの。その程度のことで。こっちはもっと大変なんだよ。つらいんだよ。きっとそう思うに決まっている。

　それなのに、アジアンは違ちがった。

　どうして？

　僕がそう尋たずねたら、たぶん、アジアンはこう答えるだろう。

　愛ゆえに。

　愛。

　愛、か。

　バッカじゃないの。

「じゃあ、休憩はおしまいってことで」

　マリアローズは立ちあがって皆を見まわした。

「いい？　よさそうだね」

　誰も返事をしなかったけれど、座っていた者は腰こしを上げた。サフィニアとカタリは昼食を片づけはじめて、手伝おうとしたピンパーネルやユリカを制した。妙みように静かだった。半魚人並みかそれ以上にやかましいはずの小こ猿ざるまでおとなしい。アジアンはべつに声をひそめて話していたわけではなかった。マリアローズも同じだ。皆、アジアンの打ち明け話を聞いてたはずだから、この何とも言えない、というよりも何をどう言えばいいのかわからないような、微び妙みような雰ふん囲い気きはそのせいかもしれない。

　何も、ここで話さなくたっていいのにさ。

　二人きりのときに話してくれればよかったのに。

　アジアンと二人きりになんかなりたくないけどね。

　何気なく荊王ジンワンを見ると、目をそらされた。ということは、それまでマリアローズを見ていたのだろう。

　ふと右に顔を向けたら、憑つき物が落ちたようなまっすぐで透とう明めいなアジアンの眼まな差ざしにぶちあたって、思わずたじろいでしまいそうになった。

　何だろ、これ。

　すっごくやりづらいかんじなんですけど。

「で、第四勝負フオースゲイムのルールは？」

　ベティがアクゼルにそう尋ねてくれたおかげで、皆の注意がそっちに向いて、ちょっと助かった。ベティに助けられるなんて変な気分だけれど、彼女も悪気があってマリアローズにつめたくしているわけではないと思う。そう思いたい。

「──はぅっ！」

　声をかけられたアクゼルは全身をビクッと不快に震ふるわせて、ぺったりした右手でシルクハットのてっぺんを押さえながら、左手で縦に割れた気持ちの悪い口の周りをぬぐうような仕し種ぐさをしてみせた。

「これはこれは失礼をばいたしました。わたくしとしたことが、居い眠ねむりをしておりました。申し訳ございません」

「……目、開いたままだったけどね。思いっきり」

「さようでございますか。お話に耳を傾かたむけておりましたところ、眠ねむ気けを抑おさえられなくなってしまいまして。お役目の最中でございますから、ここは我が慢まん、耐たえろアクゼル、耐え抜ぬくんじゃぁあああぁいと猛もう烈れつに気合いを入れておりましたので、わたくしの愛らしいアクゼルズ瞼まぶただけはかろうじて閉じずにいたのでしょう。重ねてお詫わび申しあげます。何しろ、あまりにも退屈至極なお話でしたもので」

ピキッときた。ダメだ。こらえろ。腹を立てちゃいけない。無視だ、無視。ＺＯＯうちの天下一品アホアホ半魚人のせいで、華か麗れいに無視スルーする技能はかなり向上しているはずだ。

結局、マリアローズをふくめ、誰も反応しなかった。それがおもしろくなかったのだろう。アクゼルは低く舌打ちをして、まあいい、とでも言わんばかりに肩かたをすくめてから、横にすっと移動して扉とびらに打ちつけてあるプレートを示してみせた。

「こちらが第四勝負フオースゲイムのルールでございます」

chalenge-all'aone.

dis-geim-iz-free-stail-match.

winar'ob'dis-geim-wil'get-oponen'ts'chorkar.

tha-ainar'ob'fors-geim-can't-chalenge-fifs-geim.

u-shud'chalenge-fifs-geim-rigardles'ob'win-oa-difeet.

ivun'if-u-lurz-samwan.

「──自由フリー形式のスタイル・試合マツチ……？」

ベティが眉まゆをひそめた。

「ずいぶんとまあ、幅はばのありそうな表現ね」

「当方の参加者プレイヤたっての希望でございまして」

アクゼルは燕えん尾び服ふくのポケットからハンカチをとりだして、顔の汗あせをぬぐう真ま似ねをした。もちろん、汗なんて一いつ滴てきもかいていないが。

「自由にやらせろ。それがこの７Ｓとのセブンス七つの・ゲ勝負イムに彼が参加するための条件──というよりも、彼が突つきつけてきた要求でございました。当方としても拒きよ否ひすることはできなかったのでございます。なぜなら、彼は大物でございますし、わた

くしアクゼルのごときご主人様の単なる下げ僕ぼくではなく、ご主人様の大切な盟友でございますもので」

「大物、ね」

　ベティが鼻で笑ってみせると、アクゼルはいきなり肩を揺ゆらしてゲヒゲヒゲヒと下げ卑びた笑い声を立てた。

「名前を聞いてびびるんじゃねえぞ、小こ娘むすめが」

「聞いてみてから考えるわ。もったいぶらないでさっさと言ったら？」

　ベティは動じない。アクゼルは軽くあしらわれている。ざまあみろ。それでもアクゼルは、わざとらしく胸を張って仰ぎよう々ぎようしいほど厳おごそかにその名を明かした。

「〝踊り羊ダンシングシープ〟」

　マリアローズは聞いたことしかなかった。逆に言えば、魔ま術じゆつ士しではないマリアローズでも、聞いたことくらいはある名だった。

　それはつまり、サフィニアやベティの師し匠しようであるかの有名な閃せん光こうの魔ま女じよマチルダや、いかにも長生きしていそうな〝超賢者メガセイジ〟モーグ、さらには魔導王の血を受け継つぐというこのサンランド無統治王国の支配者、何代目かはわからないキング・グッダーに匹ひつ敵てきするほど知名度が高いということだ。

　サフィニアは大きく目を瞠みはってトマトクンの腕うでにしがみついていた。ナイス、サフィニア。いや、そんなこと言ってる場合じゃないけど。

　ベティは静止していた。さすがの〝垂れ目ペテイ・のザ・ベドウテルーピングィアイズ〟も吃驚びつくり仰ぎよう天てんして声も出ないのか。そう思いかけたときだった。

「──ふふっ」

　ベティのぷっくりした唇くちびるの両りよう端たんがつりあがった。両りよう眼めは何かまぶしいものでも見たように細められた。

笑え顔がおだった。まぎれもなく、笑顔以外の何ものでもなかった。楽しそうというよりも、期待に胸を躍おどらせている。すぐに訪おとずれるだろう幸福な瞬しゅん間かんを待ちわびている。そのことを疑ってもいない。まるで少女のようだ。それなのに、どうしてだろう。

　ぞっとした。

　総毛立って、冷や汗が出た。

　ベティは笑みを崩くずさずに、唇をぺろりと舐なめた。

「いいわ。この勝負ゲイムはあたしに任せて。〝踊り羊ダンシングシープ〟。評判倒だおれじゃなきゃ相手にとって不足はないはずよ。受けて立ってやろうじゃない」

Omenage 897 12th revolution 6th day

サンランド無統治王国首都エルデン・アンダーグラウンドD8

〝怪虫の坩堝ガンズゲイル〟

chapter.7

あたしなりのわけ

会場に足を踏ふみ入れる前に、振ふり返ってあの子を見た。初めて遠くから眺ながめたときに受けた印象とはだいぶ違ちがう。あいつに頼たのまれてしょうがなく助けてあげたときは、正直、もう二度と会いたくないと思った。そうもゆかないだろうとわかっていた。案の定だった。あたしたちはそれぞれ一本の長い糸だ。糸と糸とは複雑に絡からみあって、そう簡単にはほどけない。それでも他ほかの糸とは交わることのできない、交わりきれない糸もある。そうした糸を寄せ集めて一枚の布を織った。ほつれの多い、乱雑な、美しいとは決して言えない、使い古されたわけでもないのにぼろぼろの布だ。それが昼飯時ランチタイムだった。あぶれ者たちにそんな幻げん想そうを抱いだかせて、自分はここにいてもいい、ここにならば自分の居場所があると安心させてしまうのが昼飯時ランチタイムの魔ま法ほうだ。魔術が使えるわけでもないのに、あいつは魔法使いだった。そうでなければ、先天的な快楽殺人者や、絵を描えがく以外に能がない男や、任にん侠きようの徒や、残ざん酷こくなまでに醜みにくい男や、半はん端ぱ者ものの淫いん蕩とう娘むすめや、殺し屋や、詐さ欺ぎ師しや、嫌きらわれ者や、落ちこぼれが、どうして一いつ緒しよにいられるの？

あいつの魔法の秘密を解き明かすことはそう難しくない。解き明かすことはあたしの習性だから、あたしはそれなりに突き止めていると思う。もう何年もあいつのそばにいる。あいつを見ている。あいつの声を聞いている。あいつの存在を感じている。魔法の正体はあいつ自身だ。あいつが昼飯時ランチタイムの真ん中にいることで、魔法は成立する。ほとんどみんな、意識しているかしていないかは別として、それを知っているのに、あいつだけは知らない。あいつがいなくなってしまったら、昼飯時ランチタイムは一瞬のうちに潰ついえてしまう。そのことを、あいつはちっともわかっていない。

あいつは何も知ろうとしてこなかった。

ただ闇やみ雲くもに受け容いれてきただけだった。

あたしやクラニィはその様子をおっかなびっくり見守ってきた。ローガンも、ダリエロさえも一緒だ。あたしたちはあいつに敗れて忠誠を誓ちかったリキエルほど単純にはなれない。いつか行きづまるのではないかと恐おそれていた。受け止めたものには当然、重みがある。あいつはそれを背負わないといけない。男にしては細いあ

の肩かたで。気づかぬうちに許容量を超こえて、ある日、突とつ然ぜん、がくんとくる。あいつは潰つぶれてしまう。そのときは一いち蓮れん托たく生しようだ。あたしたちはとっくに覚かく悟ごを決めていた。何せ、俺たちが選んだ頭領マスターなんだ。そうなったらそうなったで仕方ないさ。そうだろうが？　そんなふうにクラニィに言われたら、あのダリエロでも、もとからゆがんでいる顔をもっとゆがめて舌打ちをしながら、まあな、と同意するしかなかっただろう。駄だ目めなら駄目でしょうがねぇ。そんときはヤツをぶちのめして気合い入れなおすまでだ。

　俺はアジアンを信じる、とリキエルは静かに言うはずだ。

　ローガンは、まあ、取り越こし苦労かもしれないしね、と髪かみの薄うすくなった頭を撫なでながら気弱そうに笑うだろう。

　楽しかったな。

　ミケランジェロで毎日のように飲み明かした。あいつと、あたしと、クラニィと、ダリエロとローガン、それから少ししてからリキエルが加わって、何を話すでもなく、くだらない、どうでもいいことを、ただ喋しゃべるためだけに喋った。もしかしたら昼飯時ランチタイムの他の連中は、あのときみたいによく話をするあいつをいまだに知らないかもしれない。あたしたちとつるむごとにあいつの口数は増えて、昼飯時ランチタイムを作ってから、仲間が増えるごとにあいつは気どるようになった。あたしたちは陰かげでこっそり笑っていた。

「最近妙みようにかっこつけてやがるな、あの塵屑ゴミクズ野郎」

「がんばってるのよ。あいつはあいつで」

「そうだねえ。実際、よくやっているんじゃないかな」

「うむ」

「やってもらわなきゃ困るさ。しかし、何だ」

　クラニィはウイスキーのグラスを揺ゆすって少し不器用に唇くちびるを笑わせた。

「餓が鬼きの成長を見守る親みたいな気分だな。余計なお世話なんだろうが、あいつを見てるとどうもそんな気になっちまって仕方な

い。それだけ俺がおっさんだってことかね」

　最初にあいつがあの子のことを打ち明けた相手はクラニィだった。クラニィはn'ebulaであたしをつかまえて、ちょっとつきあえ、と誘さそった。ミケランジェロじゃない、行ったことのない店に連れてゆかれた。

「お前さん、聞いたか」

「何の話？」

「だから、その……何だ」

　自分から切りだしておいて、クラニィは珍めずらしく歯切れが悪かった。

「あいつに相談を持ちかけられてな。つまり、あれだ。恋こいの相談ってやつさ」

「恋……？」

「ああ。そのぶんだと、お前さんはまだ知らんみたいだな」

　驚おどろいたのはもちろんだけれど、ぴんとこなかった。実感がわかなかった。あいつと恋という単語とがどうしても結びつかなかった。あいつにはどこか子供みたいなところがあった。とにかく顔がいいし、とっつきにくいように見えて、じつはそうでもない。完全に近いくらい受け身で、やや形式的にすぎるきらいはあるけれど、基本的に親切で、平等だ。あいつに想おもいを寄せる女は—男も、昼飯時ランチタイムの内外にいた。たくさんいた。それなのに、あいつはまるで気にしていない様子だった。むしろ、よくわかっていないようだった。あいつが、人形、という言葉を嫌っていることは知っている。でも、まるであいつは人形みたいだった。みんなにかわいいかわいいと愛めでられている、それだけの、お人形さんのようなところがあった。

「冗じよう談だんってわけじゃないのよね」

「どうしたらいいかわからなくて、なんだかその人の前ではとても変なことをしてしまっているような気もする」

「何よ、それ」

「あいつがそう言ってたんだ」

「……重じゆう症しようっぽいわね」

「隠かくそうって気はべつにないらしい。といっても、大々的に宣言するようなことでもないだろう。まあ、ばれたらばれたで、そのときはそのときみたいな、そんなつもりなんだとさ」

「じゃあどうしてあんたがあたしに話すわけ」

「お前さんには言っといたほうがいいんじゃないかと思ってな」

「なんでよ」

「なんでって」

　クラニィはウイスキーをぐいっと呷あおって唇をひん曲げた。

「なんとなく、さ」

「余計なお世話っていうのよ、そういうのを」

「そうかい」

「そうよ」

「俺はいい傾けい向こうだと思うんだがな」

「相手次し第だいじゃないの」

「変なやつに騙だまされたら、ってか。わからなくもないがね。そいつはちょっと過保護すぎるんじゃないか」

「ガキじゃないんだし？」

「そうさ」

「ガキみたいなものよ」

「とんでもなく鈍にぶいしなあ。あいつは」

「ホントにね」

「まあ、そう気を落とすなよ、ベティ」

　クラニィに背中を叩たたかれた。強くもなく、弱くもない、絶ぜつ妙みようの力加減で、リリアはいい男をつかまえた、と心の底から思った。

「気を落としてなんかないってば」

「それならいいんだがね」

「どうしてあたしが」

　クラニィは低く笑いながらあたしの背中をさすった。なぜだかとても泣きたくなって、クラニィのほうをちらりと見た。クラニィは片目をつぶってみせた。下手くそなウインクだった。この男に抱だかれる女は幸せだ。あたしが魔ま術じゆつ士しじゃない、普ふ通つうの女だったら、おそらくとっくに惚ほれていただろう。魔術士じゃないあたしはあたしじゃない。無意味な仮定だ。

「いいんじゃないかな」

　別の日に、ローガンとクラニィとあたしの三人で飲みに行った。

「おれはいいことだと思うよ。なんていうか、他人のため、仲間のため、このごろはとくにそればかりだしね。かといって、つらくても弱音を吐はいたりしないタイプだろう。やっぱり自分のためっていうのも必要なんじゃないかな」

「あいつのことだから、自分のためっていうかんじにはならないんじゃないかしら」

「うーん。それはありうるねえ」

「ただ、俺は思うんだがな。あいつは結局のところ、自分と他人っていう区別がうまくできてないんじゃないか。自我っていうのかね。これが自分だっていう、確固としたものが希き薄はくで、あいつにとっちゃあ昼飯時うちの仲間も自分の一部みたいな」

「ふっと消えるときがあるわね」

「おれはそういうのがわりと得意だけど、あれは、なんて言うのかな、自分を平べったくしてしまうんだよね。立体じゃなくて、薄う

すっぺらいものにしてしまうんだ。でも、意識的にそうするのと、無意識のうちにそうなってしまうのとは、だいぶ違ちがうだろうし」

「よく知らんがね。訊きいてないしな。だが、あいつはろくな育ち方をしてない。何かこう、欠けちまってるような、足りてないような、そんな感覚があるんだろうな」

「埋うめていかないといけないのよね」

「少しずつ、な」

「自分でどうにかするしかないんだろうね」

「俺たちが他人にしてやれることってのは、所しよ詮せん、かぎられてる。この手で守れるものだって、そう多くはない。あいつはあいつなりに学んでいくしかないさ。俺たちがそうしてるみたいにな。つまずくことだって、まあ、あるかもしれんが、痛い思いをしなけりゃわからないこともある。あいつときたら、その痛いっていうのがどういうことか、そもそもよくわかってない節もあるからな」

「前ぜん途と多難ね」

「先が楽しみ、とも言えるぞ」

「やっぱり、物事は何でも前向きに考えたほうがいいよね」

　そう言って笑ったローガンが何を支えに前を向いていたのか、あたしはもちろん知っていた。果たしてあたしは予感していただろうか。ローガンが支えを失う日がくることを。考こう慮りよに入れていただろうか。そんなことが起こる可能性を。

　たしかに、あいつはあいつなりに学んでゆくしかなかった。つきつめれば、あたしたちにはそれ以外に進む方法がない。あいつは痛みを知らなければならなかった。痛みを通して気づいてゆかなければならないことがたくさんあった。

　でも、それがあんなに大きな痛みである必要はなかった。

　もっと小さな、転んで膝ひざをすりむく程度の痛みでよかった。

いきなり身体からだをまっぷたつにされたら、痛みを感じる暇ひまもない。

クラニィがいなくなってしまうなんて。

ローガンまでいなくなっちゃうなんて。

ギャンガーやデ・ペドロ、コリンはクラニィを慕したっていた。それぞれ違う形で心しん酔すいしてさえいた。そのクラニィが愛してやまない──そう、クラニィはあいつのことが好きで、かわいくて、たまらなかった。たぶんそれはリリアも認めるだろう。そんなあいつだからこそ、デ・ペドロたちは頭領マスターとして認めていた。

三人はあいつを責めたらしい。だいぶなじったらしい。それでもあいつが弁解しなかったから、三人は去った。彼らより先に昼飯時ランチタイムを抜ぬけた者たちも、たいていクラニィと結びつきが強かった。

昼飯時ランチタイムはばらばらになりかけた。空中分解する寸前までいった。それはすなわち、あいつがばらばらになりそうだった、ということだ。あいつはわかっていないかもしれないけれど、まだ、少なくとも今はまだ、あいつは昼飯時ランチタイムを捨てて一人で生きてゆくことはできない。昼飯時ランチタイムはあいつ自身だ。昼飯時ランチタイムが潰ついえたら、あいつも壊こわれてしまう。

今にも壊れそうなあいつをこの胸に抱きしめたいだなんて、あたしは思わなかった。

そんなことをしたら本当に壊れてしまいかねないくらい、あいつはぼろぼろだった。

ぜんぶあの子のせいだなんて思ってるわけじゃないわ。

あいつの自じ業ごう自得。そう言えなくもない。

でも、あの子は知っておくべきなのよ。

あいつがどんな状態で、どんな思いで、あの子のために何をしてきたのか。知る気がないのなら、突つき放せばいい。二度と会わなければいい。はっきりとそう言えば、本気で拒きょ否ひすれば、あ

いつのことだから、本当にあの子の前には姿を現さない。そういうやつなのよ。

　曖あい昧まいな態度で振ふりまわすのはもうよして。たしかに、傷つくことだってあいつには必要かもしれない。でも、十分なの。これ以上、傷ついて欲しくないの。見てられないのよ。クラニィ。あんたはきっと呆あきれるでしょうね。そいつはちょっと過保護すぎるんじゃないか、って。そうかもしれないわ。そのとおりかもね。悪い？　いいじゃない。だって、あんたはもういないのよ。ローガンまであんたのあとを追っていっちゃった。ダリエロとリキエルじゃあ頼たよりにならないのよ。あたししかいないじゃない。

　泣くなよ、ベティ。

　あたしにそんなことを言えるのは、世界中どこを探しても、クラニィ、あんただけだった。そのあんたはもう、世界中どこを探してもいない。

　あんたがいなくなったあと、リキエルは下戸だし、ダリエロは素す直なおじゃなくてつまらないから、ローガンと二人で飲んだわ。あんなに飲んだのは初めてだった。二人してべろんべろんに酔よっ払ぱらった。あたしはずいぶん泣いた。ローガンもちょっぴり泣いていた。ああやってあんたのことを語りあえるのはローガンだけだった。そのローガンもいない。自分ではもうどうしようもなかったんでしょうけど、あいつに始末をつけさせるなんてひどいじゃない。そんな恨うらみ言はあたしの胸の中でむなしく響ひびいて、どこにも届かない。

　でもな、ベティ。あいつだっていつまでも餓が鬼きじゃないんだ。

　そうだよ、ベティ。おれのことだって、ちゃんとしてくれたしさ。

　うるさいのよ。

　あんたたちに言われるまでもないわ。わかってるわよ、そんなこと。

　揺ゆり籠かごだった。

　昼飯時ランチタイムはあいつ自身で、同時にあいつの揺り籠だっ

た。

　あいつは子供どころか赤子みたいに、その揺り籠に揺られていた。

　いつの間にか立ちあがり、揺り籠から抜けだして、自分の足で歩きはじめていた。

　あいつはあの子の胸で泣いたのかしら。

　自分で涙なみだの行きつく場所を見つけたのかしら。

　だけど、あたしは生意気なだけで頭の悪い子供は嫌きらいなのよ。

　あの子はどうかしらね。

　薔マ薇リのアマロリーアズ。

　あなたはどう？

「いじめ甲が斐いはあるけど」

　ベティはそっとつぶやいて両りよう眼めをすぼめた。マリアローズは目をそらそうとしない。唇くちびるを噛かんで、上うわ目め遣づかいで、必死に我が慢まんしている。わかっているのかいないのか、とりあえず退かないという気持ちだけは一人前のようだ。

「悪いわね。あたしは過保護なのよ」

　前を向いて会場の中へと足を進めた。

　今までとは違ちがう。第四勝負フオースゲイムの会場は真っ暗だ。開け放たれた扉とびらから射しこむ明かりに照らされた床ゆかは、岩を荒あらっぽく削けずっただけのように見えた。そのはずだった。それなのに、どういうことだろう。

　引き返そうとして、思いとどまった。

　心を乱してはいけない。これしきのことで乱れるはずがない。

　目の前に広がっているのは一面の草原だ。

　見上げると、青い空に白い雲がゆっくりと流れている。

　まぶしい。太陽もある。

　風だ。草がそよいでいる。

　においも感じた。青草のにおいだ。

　土と草を踏ふんでいる。間違いなくその感かん触しよくがある。

　足あし許もとで蝗虫ばつたか何かが跳はねた。

　上空を旋せん回かいしている鳥は鷹たかだろうか。笛の音のような鳴き声も聞こえた。

　遠くに山の影かげが見える。

　どこまでも歩いてゆけそうだ。

　澄すみきった空気を胸むねーいつ杯ぱいに吸いこんで、吐はきだしてみた。

「すごいわ」

　感かん嘆たんせざるをえなかった。わざわざ口に出して言ったのは、聞かせる相手がいたからだ。

　彼は十メーテルほど離はなれた場所に腰こしを下ろしていた。

　白地に赤い水玉模様が入ったつなぎのような服を着て、青地に白い水玉模様のマフラーを首に巻いている。珍ちん妙みようといえば珍妙な恰かつ好こうだが、彼にはよく似合っていた。

　見たところ、十歳かそこらの男の子だ。黄金色の髪かみの毛は綿わた菓が子しのようにふわふわしている。緑色の瞳ひとみはくりくりとよく動いて、頬ほおはほんのり赤く、唇はやわらかそうだ。それだけならば、あるいは、ちょっと風変わりな服装をした少年にしか見えないかもしれない。

「やあ」

　にっこり笑って立ちあがった彼の頭には、普ふ通つうの人間には備わっていないものがあった。

　角だ。

　まっすぐではない。巻き貝のように曲がっている。ある種の雄お羊ひつじの角にそっくりだ。

　彼はちょこちょこと歩いてきながら首をかしげてみせた。

　その右手の小指に黒い輪がぶらさがっている。首飾りチヨーカーだ。

「きみが参加者プレイヤなのかな」

「ええ。あなたが〝踊り羊ダンシングシープ〟なのね」

「そうだよ。でも、呼びづらくない？　だから、クルオでいいよ。本名なんだ」

「仮カ名ナでも真マ名ナでもないのね」



「うん。クルオ・バーミチェット・アンダリュースがクルオの本名だよ」

「じゃあ、遠えん慮りよなくそう呼ばせてもらうわ」

「そうして。クルオもクルオのことはクルオって呼んでいるしね」

　クルオはベティから三メーテルくらいの位置で足を止め、左手の人差し指を顎あごにあてて目を見開いた。

「ふ～ん……」

　観察しているというよりは、まるで好こう奇き心しん旺おう盛せいな子供が初めて見るものをしげしげと眺ながめているような眼まな差ざしだった。

「女の子だ。まだ若いんだね」

「あなたよりはずっとね」

「クルオと比べちゃいけないよ。クルオはだって、もう二百年以上生きているんだよ。クルオと長生き競走しているのはモーグとかマチルダだよ。阿ア麼マ李リはクルオたちより年下だしね。ルヴィーはもっと長生きだけど。キング・グッダーもそうかなあ？　そういえば、剣けん聖モータルレッドも長生きらしいよ」

「お姉様とは面識があるの？」

「マチルダのことかな。もちろん知っているよ。あまり顔をあわせないようにしているけどね。だってマチルダはわがままで怖こわいんだもの。そっか。きみはマチルダの弟で子しなんだね」

「ベティよ」

「ベティか。いい名前だね。でもそれは仮カ名ナかな。クルオはきみの本名が知りたいな」

「あたしに勝ったら教えてあげるわ」

「ほんとに？」

「ええ」

「やったあ！」

　クルオは跳とびあがって喜んでみせた。無む邪じゃ気きにはしゃぎ回る子供にしか見えないが、擬ぎ態たいだろうか。それとも、そういう性格なのか。二百年以上生きているという魔ま術じゅつ士しだ。どちらでも不思議ではない。げんに、ベティの師し匠しようで

あるマチルダにも、どこか初う心ぶな娘むすめのようなところがある。ある部分は天てん真しん爛らん漫まんで、その反面、陰いん険けんなやり口を好み、無む慈じ悲ひで残ざん忍にんな魔女そのものでありながら、気に入った者は溺でき愛あいして飽あきるまで放そうとしない。マチルダに愛されている間は至福の時だが、見放された瞬しゅん間かん、この世の地じ獄ごくに叩たたき落とされる。しかも、あの魔女はわかっていてやっている。その恐きよう怖ふで人を縛しばり、たやすく支配してしまう。

　煎せんじ詰つめれば、魔術とは世界を支配するための業わざなのだ。

　この世界にあるありとあらゆるものをいかに支配して、自分の意のままに操あやつるか。

　今、ベティの五感はクルオに支配されている。

　この草原は幻まぼろしだ。

　否定することに抵てい抗こうを感じるくらいあまりにもリアルな、だが、これは幻だ。

　会場に入った瞬間、ベティはクルオの術中に陥おちいったということだ。

　視覚。聴ちよう覚かく。嗅きゆう覚かく。触しよつ覚かく。味覚まで。どれか一つを意識的に遮しや断だんしてみても、他ほかの感覚はありありと草原を感じる。二つでもだめだ。三つでも。四つでも。人間の感覚を狂くるわせ、欺あざむくことに尖せん鋭えい化した幻術イルージエンと呼ばれる魔術が存在する。ただ、ある感覚の性質を利用して、他の感覚を支配するその仕組みさえ理解していれば、まず騙だまされることはない。これは？　わからない。見当もつかない。さっぱりわからないということ自体が、ベティを支配している。

　不覚をとった。

　歯は噛がみして悔くやしがることすら許されない、見事なまでに完全な敗北だ。

　でも、それが何？

　これくらいでへこたれたりしない。突つき落とされて、すくいあげられ、また突き落とされて、抱だきあげられ、叩きつけられる。師のもとにいたころはずっとその繰くり返しだった。魔女は弟子の鼻柱を折るためなら何でもした。それで心まで折れてしまったら、呆あきれられて塵ごみのように捨てられるか、悪ければ腹立ちまぎれに殺される。歯を食いしばって敗残者の立場にしがみついていることだけが、最低限の明日への保証だった。

　一線級の魔術士は育成下手だと一いつ般ぱん的には言われている。実際、多くの優ゆう秀しゆうな弟子を輩はい出しゆつしている魔術師マギや魔導師マジスタは、必ずしもひとかどの魔術士というわけではない。

　閃せん光こうの魔女はおそらく特とく殊しゆな例だ。マチルダは積極的に素質のある子供をかき集めて、どんどんふるいにかけていった。残った者には目をかけて、熱心に指導した。過か剰じようなほどの熱意をもって教えこみ、魔女の期待にそえない者は容よう赦しやなく指し弾だんした。

　その結果、弟子たちの大多数は魔女の信しん奉ぽう者しや、追従者となって、魔女の手足となる。いつか魔女に追いつき、追い越こそうと志す圧あつ倒とう的な少数派は、いずれ魔女のもとを去るしかない。魔女は無む謀ぼうにも最後まで自分に楯たて突つこうとする者を深く愛したが、その残ざん酷こくな愛は必ず破は壊かいに帰結するからだ。

「う～ん、じゃあ、どうしよっかなあ……」

　クルオは腰こしに左手をあてて首飾りチヨーカーをぐるぐる回しながら、右足の踵かかとで自分の左ひだ膝りひざを何回か軽く蹴けった。

「正直に言うと、クルオはあんまり乗り気じゃなかったんだ。ルヴィーとはいろいろあって仲よしだから、頼たのまれたら断りづらいんだけど、あんまりおもしろくなさそうだったしね。だって、クルオに勝てる人なんてそうそういるはずがないじゃない？　最初から勝つって決まっているのに、わざわざ勝負するなんてバカみたいだとクルオは思うんだよね。ねえ、ベティ、きみもそう思わない？」

「過程は問題じゃないんでしょうね。あなたが勝って、あたしたち

が負けるという結果が欲しいんじゃない？」

「クルオはその結果にはぜんぜん興味がないんだ。だからクルオは条件を出したんだよ。勝負ゲイムの内容はクルオが決めること。ルヴィーはそれでいいと言ったよ。そんなわけで、クルオはいろいろ考えていたんだけど、ベティがあのマチルダの弟子だっていうから、どうしようかなとクルオは思っているわけ」

「前もって聞かされていなかったのね。あたしたちのこと」

「クルオはあえて訊かなかったんだよ。だって、おもしろくないじゃない？　実際、ちょっとおもしろいと思っているんだよ。相手があのマチルダの弟で子しなんだもの。まさかマチルダの弟子と会えるとは思っていなかったんだよ。クルオはね」

　クルオは急に目を細めて唇くちびるをゆがめた。

「大だい嫌きらいなんだ。マチルダが。気持ち悪いんだよ。あの糞女bitch」

　薄うすく研とぎ澄すました刃は物もののような、それもモトロール刀ではなく剃刀かみそりのような、鋭するどさと同時に粘ねん度ども高い、寒気がする眼光だった。見た目だけで中身が子供であるはずはないから驚おどろくに値あたいしないが、子供の目つきではない。もっとも、相手はあの閃光の魔女に匹ひつ敵てきする魔術士だ。二面性どころか多面性があって当然だろう。

「だからって、ベティが嫌いなわけじゃないよ」

　クルオは一転して笑え顔がおになった。

「まだわからないよね。クルオはベティのことが好きになるかもしれないし、嫌いになるかもしれない。それが決まるのはこれからだよ。クルオが決めるんだよ。ぜんぶね。クルオのことはクルオが決めるんだ。ベティ、クルオと遊んでくれる？」

「ええ、喜んで」

「それじゃあ、クルオと精神戦争マインドウオーをしよっか」

「いいわよ」

「クルオとベティが主将コマンダで、主将コマンダをとられるか降参したほうが負けだよ。だけど簡単に降参しちゃいやだからね。つまらないもの」

「心するわ」

「開始スタートだよ」

　次の瞬しゆん間かん、ベティの意識は落ちてゆき、やがて無意識層アルドラス・共有コモン集積領域フイールドにたどりついた。

　人間の精神は巨きよ大だいな暗黒の海にたゆたっている小こ舟ぶねだ。このフィールドはその海の中にあたる。見上げれば、遥はるか遠くに極小の輝かがやきが無数にまたたいている。あの一つ一つが人間の精神だ。この海まで潜せん行こうできる魔ま術じゆつ士しならば、あの輝きに到とう達たつすることも不可能ではないが、人間の精神に入りこむとなると、そう簡単ではない。人間が生まれ持っている心理防壁バランシスは途と方ほうもなく強固だ。魔術士はその心理防壁バランシスを意識的に開閉する方法を学ばねばならない。この暗黒の海の底で渦うずを巻いている大ドいナなトるア流グれナこそが、じつは魔力アドナイそのものだからだ。

　人間の心理防壁バランシスに隙すき間まはないが、無数のきわめて小さな穴がある。大ドいナなトるア流グれナから暗黒の海にとけて広がった魔力アドナイがそこからしみこんでくるのだ。ゆえに人間は誰だれしもある程度の魔力アドナイを持っているが、それは使えば使っただけ消費されてしまう。魔術士にはもっと大量の魔力アドナイが必要だ。そのために心理防壁バランシスを開け放ち、大ドいナなトるア流グれナから魔力アドナイを吸いあげる。ただ、制せい御ぎよしきれない量の魔力アドナイは破は滅めつを招くだけだから、適正量を見きわめねばならない。その限界が魔術士としての資質の一つでもある。また、それ以外に払はらわなければならない代だい償しようもある。本来、堅けん固ごなはずの心理防壁バランシスが次し第だいに脆もろくなり、ついには完全に失われてしまうのだ。

　そのための知識を持ち、訓練を受けた者でなければ、無意識層アルドラス・共有コモン集積領域フイールドの存在を感知することすらできない。一方で、このフィールドに慣れ親しめば慣れ親しむほど、自分自身の精神が危機にさらされる。

敵は同じ魔術士だ。このフィールドでの距きよ離りは、現実世界の距離に必ずしも比例してはいないが、相関関係がある。その関係を示す複雑な数式を解きながら相手の精神の輝きを見つけだす。並の魔術士にとってはほとんど机き上じようの空論でしかないが、並以上であれば不可能ではない。そうして相手の精神を直接攻撃ハツクするための手法、防衛する手段も、魔術士のたしなみだ。当然、ベティも心得がある。魔女と演習を行い、何度となく苦く杯はいをなめさせられたものだ。

一度も勝てなかった。

一度たりとも。

力が及およばなかったのではない。まったく話にならなかった、と言ってもいい。

この無意識層アルドラス・共有コモン集積領域フイールドでは小細工が通用しにくい。いろいろと工く夫ふうをして、策を用い、時間を引き延ばすことはできても、最後は結局、強い者が勝つ。その強さとは何か。じつにシンプルだ。攻性スパク意識体チユラや防衛フオー意識体デユラを作りだすのにも魔力アドナイが必要なので、魔力アドナイを多く利用できる者が有利となる。よほど頭が悪くなければ、物量作戦を展開できる者が圧あつ倒とう的に強い。

たとえば、サフィニアだ。

サフィニアは途方もない量の魔力アドナイを扱あつかえる。あまりにも恵めぐまれすぎているせいで、無む駄だが多く、効率が悪い。それでも、どんどん力をのばしている。恐おそろしい子だ。

魔女もサフィニアとは演習をしたがらなかった。

サフィニアには可能性があったからだ。

かぎりなくゼロに近くても、ゼロではない、可能性が。

あたしにはなかった。

あたしがお姉様に勝てる望みはゼロだった。

お姉様はそれを知っていたから、あたしを何度も叩たたきのめした。完かん膚ぷ無きまで。

「七百七十七サントマル×七百七十七サントマル×七百七十七サントマルでいいかな？」

　暗黒の海に声が響ひびいた。

　遥か向こうにぼんやりと人ひと影かげが見える。

　それが人影だということがかろうじてわかるだけだが、間ま違ちがいない。

　クルオだ。

「ええ。それでいいわ」

「じゃあ、クルオが区切るね」

　またたく間に暗黒の海に境界が出現した。ベティとクルオは一辺が七百七十七サントマルの立方体の中にいる。現実世界における人間の認にん識しきに対応させるとしたら、一サントマルはおよそ三十二・三メーテルにあたるという。無意識層アルドラス・共有コモン集積領域フィールドでの演習でよく用いられる境界サイズは、百十一サントマル立方境界キユーベリオンか、三百三十三立方境界キユーベリオン、五百五十五立方境界キユーベリオンだ。七百七十七立方境界キユーベリオンは体験したことがない。

　広い。

　果てがないようにさえ感じられる。

　クルオは遠ざかってゆき、すぐに見えなくなった。

　ベティも全速で後退した。立方境界キユーベリオンの端はしまで、移動距離は約三百サントマル、要した時間はおよそ二百セグムント。ベティの自意識体エンフユーラは現在、何も身にまとっていない、現実世界でいえば全ぜん裸らの状態だ。ふつう無意識層アルドラス・共有コモン集積領域フィールドでは攻性スパク意識体チユラや防衛フオー意識体デユラのみを用いるので、術者の分身とも言うべき自意識体エンフユーラをこの暗黒の海にもぐらせることはないが、演習では経験がある。自意識体エンフユーラは耐たい久きゆう性が最低、速度、機動性は最高という性質を持っていて、速度には個人差がない。よって一セグムントあたり約一・五サントマル、すなわち約一・五St / Sg、これがありとあらゆる意識体ダチユラに

とっての最高速度だ。セグムントは、感覚的にはほぼ一秒に等しい。一秒あたり五十メーテル近く移動するとなると、時速約百八十キルメーテルだ。そうとうな速さだから制御が難しいし、耐久性が低いままではあまりに無防備すぎる。

「紺碧のブラーレス・鎧装着フルロード、反応性リアクテイブ攻性スパク意識体チユラ〝アラニス〟×８展開ロール・エイト」

　ベティの自意識体エンフユーラはたちまち紺碧の薄うすい甲かつ冑ちゆうに覆おおわれた。自意識体エンフユーラを取り囲むようにして出現した蜂はちのごとき形の小さな攻性スパク意識体チユラ〝アラニス〟八体は、意のままに操あやつることもできるが、放っておいても接近してきた敵対意識体ダチユラを自動的に攻撃してくれる。貧弱な自意識体エンフユーラの耐久性を補う装甲アーマーは最小限度にとどめ、防ぼう御ぎよの大部分をアラニスに依い存ぞんして、できるだけ機動性が損なわれないようにした。これでも、一・三St / Sgまで速度が落ちるのだが、まだ不足だ。

「深淵にアラ潜むモン一角獣タイド・の槍をポイ我がント手にロード」

　自意識体エンフユーラの右手に深い藍あい色いろの騎き兵へい槍やりが握にぎられた。これで速度は一・一St / Sgだ。もう落とせない。あとは魔力アドナイを限界まで費ついやして布ふ陣じんを整えるだけだ。

「防衛フオー意識体デユラ〝ドルトナ・ガルテ〟×６ロール×８シクス展開タイムズエイ、攻性スパク意識体チユラ〝バンシェ〟×４ロール×８フオー×３エイ展開スリー、攻性スパク意識体チユラ〝ヤグラシャ〟×４ロール×８フオー×３エイ展開スリー」

　羽を広げた甲かぶと虫むしに似た姿の〝ドルトナ・ガルテ〟を最前列に四十八体並べて壁かべとなし、その後ろに槍めいたくちばしを持つ鳥のような〝バンシェ〟九十六体を控ひかえさせ、さらにその後方には盾たてと矛ほこで武装した兵士のごとき九十六体の〝ヤグラシャ〟に球形陣じんを組ませて、ベティの自意識体エンフユーラはその中心に収まる恰かつ好こうとなった。

　凡ぼん庸ような魔ま術じゆつ士しであれば、この陣を目にしただけで恐れをなして退散するだろう。だが、相手は〝踊り羊〟だ。ベティは予感していた。これから自分は敵の布陣に圧倒されることに

なる。問題はその程度だ。自分の力と相手の力はいったいどれくらいかけ離はなれているのか。

　久しぶりだ。まるで見当がつかない。

　恐きよう怖ふは感じていないと思う。

　ただひどく心こころ許もとない。

　勝てるのだろうか。

　勝てる。チャンスはある。

　その可能性が万に一つだとしても。

　相手は大物で、あたしはまだ小物。クルオにとっては、こんなことでもなければ歯し牙がにもかけないような木こっ端ぱにすぎない。かといって、油断はしないだろう。そんな甘い相手とは思えない。クルオはあたしを知らない。あたしにとっての武器は、唯ゆい一いつその事実だけ。でも、もし知らないふりをしているだけだったら……？

「準備はいいかな？」

　暗黒の海に響き渡わたった声の調子は、焼き菓が子しが焼きあがるときを今か今かと待ち焦こがれているかのようだった。

「クルオは準備万ばん端たんだよ。ベティはどう？」

「あたしもいいわ」

「そしたら始めよっか」

「ええ」

「カウントするよ」

　ごぉ。

　よん。

　さん。

にい。

いち。

「行くわよ」

ベティは自意識体エンフユーラをふくむすべての意識体ダチユラを前進させた。

各意識体ダチユラの最高速度は、それぞれ遅おそいほうから、甲虫型のドルトナ・ガルテが〇・七St / Sg、兵士型のヤグラシャが〇・八St / Sg、鳥型のバンシェは〇・九St / Sg、武装ずみの自意識体エンフユーラが一・一St / Sgで、反応性リアクテイブ攻性スパク意識体チユラのアラニスは一・三St / Sgとかなり高い機動性を誇ほこるが、戦力を分散させる愚ぐはさけなければならない。足並みをそろえるために、ベティの軍勢はもっとも遅いドルトナ・ガルテにあわせて、〇・七St / Sgでクルオの軍勢が陣を構えているはずの方向へと直進した。

奇き妙みようだった。自意識体エンフユーラには疑似的な五感が備わっているが、人間の器官まで模造しているわけではない。にもかかわらず、胸が早はや鐘がねを打っている。喉のどはからからだ。身体からだのあちこちに余分な力が入っている。こわばってさえいた。緊きん張ちようしている。このあたしが。いいわ。悪くない。この状じよう況きようが楽しくないなんて言ったら、魔術士の名がすたる。

だって、想像以上じゃない？

前進を開始してから、ちょうど三百セグムントたったころだった。

行く手に白い光のようなものがまたたきはじめた。まだ三百サントマル以上離れているだろうから、はっきりと視し認にんできるわけではないが、あれは間ま違ちがいなくクルオの軍勢だろう。

反応性リアクテイブ攻性スパク意識体チユラを勘かん定じように入れても三百に届かないベティの意識体ダチユラは、せいぜい中隊規模でしかない。その意味では、ベティ隊、とでも呼ぶべきかもしれない。

あれは違う。

　近づくごとにその全容が明らかになってゆく。

　なんて広い。

　それでいて薄うすくはない。縦深もかなりありそうだ。

　ベティ隊の意識体ダチユラの外装はあえて艶つやのない暗色で統一しているが、クルオの軍勢の意識体ダチユラはすべて白っぽく、光こう沢たくがある。

　まるで羽を一いつ杯ぱいに広げた巨きよ大だいな白鳥のようだ。

　数は、正直、よくわからないが、ベティ隊の倍ではきかない。

　三倍？

　四倍か？

　それとも、五倍だろうか？

　いや──、

　十倍。

　さらにその倍。二十倍。

　たぶん、それ以上だ。

　軍。

　まさに軍だ。

「ちっぽけだね、ベティ。クルオはちょっと不安になってきたよ。そんなのでクルオの遊び相手がつとまるのかな。クルオは楽しく遊べるのかな」

「やってみないとわからないわよ？」

「そうだね。それがただの減らず口じゃないといいなとクルオは思っているよ」

　クルオの声が暗黒の海に吸いこまれるように消えて、白鳥がその両りよう翼よくをこちらにのばしてきた。左右から挟はさみこむつ

もりだろう。両翼の部隊は速い。高機動の意識体ダチユラのみで構成されているのか。あれだと〇・九St / Sgくらいは出ていそうだ。だとしたら、距きよ離りを考えれば、両翼の部隊の先せん陣じんがベティ隊に接せつ触しよくするまで、およそ六十セグムント。ベティ隊が白鳥の胸にあたる部分に到とう達たつするのに、現状の〇・七St / Sgであれば八十セグムント。つまり、両翼の部隊は六十セグムント後にベティ隊に殺さつ到とうして、もみくちゃにし、二十セグムントの間に押し潰つぶしてしまうだろう。ベティ隊は白鳥の懐ふところに飛びこもうとして、果たせないまま、壊かい滅めつ的な打だ撃げきをこうむるに違いない。

　両翼の部隊は、ベティ隊を左右から挟みこもうとしている。上方か下方へ全速で移動すれば、とりあえずいったん逃のがれることは可能だが、両翼の部隊はベティ隊よりも速い。いずれ追いつかれる。

　これだけ物量の差があるとなると、消しよう耗もう戦の選せん択たく肢しは最初からなかった。決戦をさけて逃にげまわり、なんとか持久戦に持ちこむことができたとしても、敗北までの時間が長引くだけで、勝利の目はない。

　となれば、乾けん坤こん一いつ擲てきの電撃戦だ。持てる力を惜おしみなくすべてそそぎこんだ捨て身の突とつ撃げきで、主将コマンダであるクルオの自意識体エンフユーラを一気に落とす以外、勝機はない。

「──ドルトナ・ガルテ、左右にスプレ散開ダウト！　バンシェ、ヤグラシャ、各自オール全速フルテ驀進イルト……！」

　甲かぶと虫むし型のドルトナ・ガルテは二十四体ずつ左右に分かれた。間もなく鳥型のバンシェがドルトナ・ガルテに追いついて、追い越こそうとし、それにベティの自意識体エンフユーラを中心に置いた兵士型のヤグラシャがつづいた。

　ドルトナ・ガルテは耐たい久きゆう性だけに重点を置いた純じゆん粋すいな防衛フオー意識体デユラだ。昨今では攻性スパク意識体チユラと防衛フオー意識体デユラのハイブリッドが標準だから、図体がでかくて硬い以外に取り柄えがないドルトナ・ガルテの仕様は時代遅おくれといってもいいかもしれない。ベティ隊の中でも、盾たてと矛ほこを構えているヤグラシャは、攻性スパク意識体チユラでありながらある程度の耐久性を確保している。障害物にしかなら

ない純粋防衛ピユア・意識体フオーデユラや、鋭するどくても脆もろい刃は物もののような純粋攻性ピユア・意識体スパクチユラは扱あつかいづらいのだ。

　ベティは自分の百以上ある意識体ダチユラのバリエーションの中から、あえてドルトナ・ガルテを選んだ。

　最速〇・七St / Sgのドルトナ・ガルテ四十八体はベティ隊の左右を守る盾だ。

　最速〇・九St / Sgのバンシェが脇わき目めもふらずに猪ちよ突とつ猛もう進しんすれば、約六十二セグムント後に白鳥の懐に肉にく薄はくする。

　最速〇・八St / Sgのヤグラシャとベティも、七十セグムント後には白鳥に突撃できる計算になる。

　両翼の部隊がベティ隊を押しつつむのは六十セグムント後だ。ベティ隊はドルトナ・ガルテを中心として十セグムント耐たえればいい。

　意識体ダチユラは暗黒の海を音もなく泳ぐ。

　これだけの数の意識体ダチユラが動いているのに、この海はあまりにも静かだ。

　その静せい寂じやくが破られるときは刻一刻と迫せまっている。

　ベティは前だけを見ていた。

　はあ、

　はあ、

　はあ、

　呼吸の音が聞こえる。

　息をする必要なんかないのに。

「──ドルトナ・ガルテ、限界防御マージナルガード……！」

　羽を広げた甲虫のようなドルトナ・ガルテは一いつ斉せいに横向

きになった。その羽にあたる部分が円えん盤ばんめいた形になって激しく発光した。盾だ。まさしくそれは盾以外の何ものでもない。その直後だった。敵両翼の部隊の一番槍やりがドルトナ・ガルテに接触した。暗黒の海を閃せん光こうが引き裂さいて、轟ごう音おんが響ひびいた。ドルトナ・ガルテが爆ばく散さんした。一いつ瞬しゆんのうちに、二体、三体、四体。敵の意識体ダチユラは押し戻もどされただけだ。それでも食い止めた。第一波を弾はじき返した。だが、波は次々と押しよせてくる。ほとんど切れ目がない。光。音。わずか二セグムントの間に、ドルトナ・ガルテは半分まで打ち減らされた。覚かく悟ごの上だった。それでいい。二セグムント。喉のどから手が出るほどその二セグムントが欲しかった。

「全力突貫ブーストチヤージ……！」

　くちばしの長い鳥のような姿をしたバンシェは純粋攻性ピユア・意識体スパクチユラだ。耐久性はゼロに近い。完全無欠の攻性スパク意識体チユラで、攻こう撃げき重視どころか、攻撃することしかできない、その攻撃方法は単純明快だ。回転しながらただ身体からだごとぶつかってゆく。くちばしに似た先せん端たん部に推進力と回転力のすべてをのせ、それでもって貫つらぬいて対象を破は壊かいする。そのままどこまでも突つき進む。

　白鳥の胸にあたる正面の部隊は兵士型意識体ダチユラで構成されていた。ベティ隊のヤグラシャに少し似ている。おそらく防衛フオー意識体デユラ寄りのハイブリッドで、耐久性が高い。連中は盾を構えていた。バンシェたちはその盾めがけて突っこんでいった。自意識体エンフユーラは違ちがうが、他ほかの意識体ダチユラは耐久性が完全に失われると、光と音を撒まき散らしながら消しよう滅めつしてしまう。たとえば兵士型の意識体ダチユラなら、敵対意識体ダチユラの攻撃によって腕うでや足が欠損するといったことは起こらない。その意味では、結果は常に０か１だ。消すか、消されるか。クルオ軍の兵士型意識体ダチユラは風船が割れるようにどんどん消えていった。もちろん、敵と接触する部分を最小限にして、攻撃による反動を極力抑おさえているとはいえ、バンシェは脆い。兵士型意識体ダチユラに突っこんだはいいが、逆に自分が爆散してしまう場合もあった。そのときは別のバンシェが僚りよう友ゆうの残ざん滓しとも言うべき消滅の光と音を突き破やぶり、その兵士型意識体ダチユラに突撃して破壊した。九十六体のヤグラシャとアラニスを従えたベティの自意識体エンフユーラは、今まさにバンシェの群れが白鳥の胸に穿うがった穴へとなだれこもうとしていた。その

間際だった。ドルトナ・ガルテが全ぜん滅めつしたことをベティは知った。同時に、両りよう翼よくの部隊がヤグラシャの球形陣じんに殺さつ到とうしようとしていることもわかっていた。

　ここだ。ここが勝負所だ。少したりとも退いてはならない。今ここで賭かけられるものがあるのなら、そのすべてを賭けろ。この命さえも。

「──ヤグラシャ、全方位ラウンド突撃ブラスト……！」

　それまで中心にいるベティの自意識体エンフユーラを警護するように盾を構えて球形陣を維い持じしていたヤグラシャたちが、号令一下、一気に飛びだした。方向はばらばらだ。それぞれもっとも近い敵の意識体ダチユラに襲おそいかかり、盾ごとぶつかって、あるいは矛を突きだした。最初の一撃で敵を屠ほふったヤグラシャもいる。むなしく爆散したヤグラシャもいる。いずれにしても、あちこちで光の花が咲さいた。乱れ咲いて、狂くるい咲いた。

　ベティの自意識体エンフユーラの周りにはアラニス以外、何もなくなった。

　スペースができた。

　ベティは自意識体エンフユーラを我が身となして加速した。九十六体いたバンシェはもう二十七体しか残っていない。バンシェの最高速は〇・九St／Sgで、ベティは一・一St／Sgだ。先頭のバンシェは──あそこか。そのバンシェが爆散した。一体。二体。いや、五体。これで残り十九体。バンシェは次々と散ってゆく。そのたびに、クルオ軍を抉えぐる穴は細くなる。どんどん先細りしてゆく。その最さい先せん端たんへと向かうベティの至近距きよ離りで、また一体のバンシェが光を発して消滅した。光を突とつ破ぱしてくるものがあった。敵の意識体ダチユラだ。ベティは深淵アラに潜むモン一角タ獣イの槍ドで一ひと突つきした。敵の意識体ダチユラが爆散した。ベティは閃光の渦うずを突っ切った。バンシェはあと七体だ。いや、六──五体。後方で各個撃破の憂うき目に遭あっているヤグラシャも、遠からず全滅する。

「──頼たのむわよ、アラニス……！」

　ベティは歯を食いしばった。また前方で閃光がひらめいた。あのバンシェが先頭だった。今はもうベティが先頭だ。目の前には、

敵、敵、敵、敵。敵。敵の意識体ダチユラが視界を埋うめつくしている。そのすべてがベティに狙ねらいを定めていた。

「上等……！」

　見るのよ、あたしの目。

　感じなさい、あたしのすべて。

　ベティは突とつ進しんした。

　あそこだ。

　隙すき間まがある。

　わずかな隙間が。

　抜ぬけられる。

　絶対に速度は落とさない。敵の意識体ダチユラと敵の意識体ダチユラの間を突っ切るのだ。トップスピードで駆かけ抜ける。

　身体をひねって、横向きにして、ひっくり返して、すり抜けてゆく。

　それでもどうしても抜けられるコースが見つからないときは、反応性リアクテイブ攻性スパク意識体チユラアラニスが敵の意識体ダチユラに体当たりして無理やり道を作る。

　予測していなかった方向から不意に襲いかかってきた敵の意識体ダチユラも、アラニスが排はい除じよする。

　あたしは止まらない。

　止まるわけにはゆかない。

　絶対に。

　八体いたアラニスが五体になった。だから、何？

　敵の意識体ダチユラのすぐ脇わきを通り抜けたあとに、右足に衝しよう撃げきを覚えた。膝ひざから下がもぎとられたかもしれない。それがどうしたっていうのよ？

　相手もベティの目もく論ろ見みに気づいたのか。敵の意識体ダチユラはただベティに群がろうとするのではなく、編隊を組みはじめた。四、五体が密集して迫せまってくる。

「しゃらくさいのよ……！」

　密集隊形を組んでいる五体の敵意識体ダチユラの、ちょうど真ん中のやつを標的にした。

　ベティは深淵アラに潜むモン一角夕獣イの槍ドを前に突きだして吶とつ喊かんした。

　爆ばく散さんさせて、突破した。

　その先にまた五、六体が密集していた。

　いや、上にもいる。

　下にも。

　右にも、左にも。

　アラニスが反応して、後ろから迫ってきた敵の意識体ダチユラに体当たりした。

「──それでも……！」

　あたしは止まれない。

　止まってる場合じゃないのよ。

　ベティは何も考えなかった。

　あたしにしては珍めずらしいわね、と自じ嘲ちよう気味に思った。

　ただ前へ。

　ひたすら前へ。

　視界が揺ゆれた。回転した。

　声を聞いたように思う。自分の声だ。

　左ひだり腕うでがパンッと弾はじけて消えた。

　光の線が交こう錯さくして、その果てに何かが見えた。

　あたしはそこにたどりつく。

　必ずそこまで行きついてやる。

　そこにいるんでしょう？

　クルオ。〝踊り羊ダンシングシープ〟。

　あたしはあなたを墜おとして、勝つんだから。勝たないといけないんだから。

　ふと、笑い声が聞こえた。ひそやかな笑い声だった。笑えばいい。いくらでも笑えば？

　もう少しだ。

　あそこを抜ければ、あなたがいる。

　巨きょ大だいな意識体ダチユラだった。鎧よろい兜かぶとを身にまとい、六本の腕にそれぞれ曲刀を持った巨人の兵士とでも言えばいいか。それが一体ではない。四体もいた。でかけりゃいいってものでもないでしょうに。ベティは四体の間を突つっ切ろうとした。いきなり分かれた。巨人の兵士は見る間に無数の曲刀を携たずさえた兵士となって、ベティの前に壁かべを作った。知ったことじゃないのよ。ベティはかまわず猪ちょ突とつ猛もう進しんした。深淵アラに潜むモン一角タ獣イの槍ドで一体の兵士を爆散させ、壁を突き破った。四方八方から兵士の曲刀が襲おそいかかってきて斬きり刻まれたが、抜けた。とうとう抜けた。

「勇ましいんだね、ベティ」

　クルオは一人だった。

　たった一人で暗黒の海に浮ういていた。

　目がかすんでいる。視野が半分しかない。あたし、今、どうなってるのかしら。わからない。足の存在は感じない。そもそも下半身がないのか。左腕も失われている。頭も半分欠けているのかもしれ

ない。でも、深淵アラに潜むモン一角タ獣イの槍ドを握にぎりしめている右手は健在だ。

「ご期待には添そえたかしら？」

　ベティは笑えみを浮かべて速度を上げた。もっと速く奔はしれそうな気がする。もっと、もっと速く。クルオの表情はわからない。この目ではもうよく見えないが、どうやらクルオは武装していないようだ。あたしを舐なめてたのね。やっぱり、あたしを軽く見ていた。それは油断とは言えない。あの〝踊り羊〟と、怖こわい魔ま女じよ自身じゃなくて、その弟で子しだ。格が違ちがう。正当な評価だ。でもね。それが命とりよ。

　あと一サントマルもない。

　それが、深淵アラに潜むモン一角タ獣イの槍ドの先せん端たんがクルオの胸に届くまでの距きよ離りだ。

「うん。楽しかったよ」

　時間にさしたる意味はない。

　この無意識層アルドラス・共有コモン集積領域フイールドにおけるあたしたちの声は、声のようでいて、声じゃない。

　それはぜんぶ同じだ。

　何もかも一いつ緒しよだ。

「あっという間だったけど、楽しかった」

　信じられなかった。

「でもね」

　あの苛か烈れつな突とつ破ぱ戦せんをくぐり抜ぬけて、アラニスが一体だけ残っていた。

「これでおしまいだよ」

　そのアラニスが反応した。

　右上だった。

体当たりして爆ばく散さんした。

ごく小さな意識体ダチユラだった。アラニスよりも小さい。それらは暗黒の海で、きらり、きらり、とまたたくように輝かがやきながら、四方八方からベティに迫せまってきた。数が多い。回かい避ひしようがなかった。

右手が失われて、深淵アラに潜むモン一角タ獣イの槍ドが暗黒の海に漂ただよった。

腹部に衝しよう撃げきがあった。

胸に穴があいた。

頬ほおがごっそり削そぎ落とされた。

首が半分くらい吹ふっ飛んだ。

意識が薄うすれはじめた。

ホントに、楽しかったわ。

「あれ……？」

クルオはたぶん、自分の首のあたりに手をのばそうとしたのだろう。

できなかった。

もうクルオの頭部は胴どう体たいと切り離はなされていた。

クルオは振ふり向いた。自意識体エンフユーラは生体ではないので、たとえ生首のような状態になってもただちに死ぬわけではない。術者の意識が自意識体エンフユーラを維い持じすることに耐たえられなくなったとき、消しよう滅めつする。

クルオはそこに、頭の先から足の先までを光こう沢たくのない黒い甲かつ冑ちゆう、夜をステ支配するアウア・潜行者ダーケンの具足ロードで覆おおっている女の姿を見たはずだ。露ろ出しゆつしているのはわずかに目と口の部分だけで、他ほかはほとんど暗黒の海にとけこんでいることだろう。その手にはやはり闇やみ色の刀が握られている。今、クルオの首を両断した鎮めのヴアン・黒太刀ロー

タスだ。

　ベティはクルオを見下ろすように見つめていた。

「お姉様みたいな有名人じゃなくてよかったわ」

　クルオはあたしを知らない。

　それだけが一いち縷るの望みだった。

　あたしはサフィニアのように莫ばく大だいな魔力を扱あつかえる稀け有うな資質に恵めぐまれているわけじゃない。トモヨみたいな一から百を知る明めい晰せきな頭脳を持っているわけでもない。お姉様ほど長く生きてもいない。同じ空気を吸っているだけで嫌いや気けがさしてくる天才たちに囲まれて、あたしにできることは一つしかなかった。

　努力だ。他人が十やるならその十倍やる。それ以上やる。おぞましいほどの苦痛を伴ともなう、誰だれもやりたがらないことにあえて手を出す。他人が考えないことをどうにかしてひねりだす。遠回りでもいい。這はいつくばってでもいい。とにかく進む。そうしてあたしは手に入れた。

　第三脳サードブレイン。

　あたしは自分の脳内にほとんど活性化されることのない部位をいくつも見つけて、徹てつ底てい的に開発し、組織化した。それは気が狂くるいそうになるどころか気が狂う作業だった。あたしの精神は何度も分ぶん裂れつし、苦労して統合させると、またすぐに分裂した。あたしの中であたしのような、あたしでないようなあたしは十人になり、二十人になり、三十人になった。あたしはどれがあたしだかわからなくなって、それを突つき止めるためにあたしを殺した。あたしもあたしを殺そうとした。生き残るためにあたしたちは殺しあった。最後に二人のあたしが残った。

　クルオがぼろぼろにしたあたしが、そのうちの一人だ。

　それから、単独でひっそりと暗黒の海を泳いでクルオの背後に忍しのびより、首を斬きり落として、今まさにとどめを刺さそうとしているのが、もう一人のあたしだった。

　自意識体エンフユーラは術者の精神の写し鏡だ。術者が多重人格

者なら、多重人格の自意識体エンフユーラとなる。ベティの第三脳サードブレインは違う。二人のベティは同じ人格の別人で、おのおのが独立している。

　クルオが目を細めて頬をゆるめた。

　恍こう惚こつとしているかのような微び笑しようだった。

「ぼくの負けだね」

「そうよ」

　ベティは唇くちびるをぺろりと舐めた。

「あたしの勝ち」

　容よう赦しやなく鎮めのヴアン・黒太刀ロータスを振りおろした。

　クルオの頭部は真っ二つになって爆散した。

　その瞬しゆん間かん、数千に及およぶクルオの意識体ダチユラたちが一いつ斉せいに膨ぼう大だいな量の音と光を撒まき散らして、暗黒の海に満開の花を咲さかせた。

「花火みたい」

　ベティは一瞬だけその光景に見とれた。もう一人のベティは消滅する寸前だった。近くまで泳いでいって鎮めのヴアン・黒太刀ロータスを放り投げ、両手で抱だきよせた。

「ご苦労さま」

「……貧びん乏ぼう籤くじ……ね、あたし……」

「あたしがそっちでもよかったのよ？」

「……いいけど……べつに……身体からだは……一つ……」

「そういうこと」

　ベティはそっと笑った。

「さあ、帰りましょう」

　暗黒の海の上には無数の星がまたたいている。二人はたった一つの輝きを目指して泳ぎはじめた。そこが彼女たちの帰るべき場所だった。

　ああ──、

　まるで本当に長い時間、暗い海にもぐっていて、今、浮ふ上じようしたかのようだ。光が射して目が眩くらみ、吸いこんだ空気は異物みたいに肺を刺した。平へい衡こう感覚に狂いが生じている。立っていることが難しくなり、座りこんでしまった。音が聞こえる。やけに刺とげ々とげしい音だった。声だ。これが、声か。

　自意識体エンフユーラを暗黒の海に下ろしてそこから戻もどってきたあとは、いつもこの違い和わ感かんに襲おそわれる。慣れないうちはそれが何日もつづく。自意識体エンフユーラに損害を受けると、程度に応じた意識障害に見み舞まわれるし、暗黒の海で自意識体エンフユーラが消しよう滅めつするような羽目になったら、悪ければ脳死に近い状態になる。そこまでゆかなくても、昏こん睡すいに陥おちいってしまう。

　一人のベティは意識を失いかけている。回復するまで眠ねむらせておいたほうがよさそうだ。しばらく目を覚まさないだろうし、その間は特殊なチヤネ精神集中リングを常に維い持じすることができなくなるが、やむをえない。おやすみ。答える声はなかった。

　気がつくと、ベティとクルオは皆みなに半ば囲まれていた。

　最初は真っ暗だったはずだが、いつの間に明かりがついたのだろう。半球状の会場はそう広くない。

　それよりも、床ゆかの上であぐらをかいてうなだれているクルオだ。

　子供なんかじゃない。

　ふわふわした金きん髪ぱつは変わらないし、雄お羊ひつじのような角もある。だが、痩やせてはいるものの、肩かたや胸のあたりはしっかりしている。上背もありそうだ。着ている服も、水玉模様のつなぎではなかった。上衣は身体の線が出るくらいぴったりしていて、ズボンはゆったりしている、セパレートの魔ま術じゆつ士し衣

だ。

　目をつぶっているのでよくわからないが、二十歳くらいに見える。鼻筋が通っていて、彫ほりの深い、それでいて顎あごや頬ほおがほっそりとしている、やさしげな顔立ちだ。

　その右手には例の首飾りチヨーカーが握にぎられている。

　間ま違ちがいない。

　草原の幻まぼろしや無意識層アルドラス・共有コモン集積領域フィールドでは、自分の外見まで偽いつわっていたということだろう。

　見事に騙だまされた。

　クルオ・バーミチェット・アンダリュース。

　彼が〝踊り羊ダンシングシープ〟だ。

　その真の姿だ。

　あたしは勝ったんだ。

　胸に手をあてると、心臓の鼓こ動どうが感じられた。心しん拍ぱく数すうが上がっている。興奮しているのだ。周りに仲間たちがいる。即そく席せきで、この場かぎりでしかない者もいるし、認める気にはとうていなれない者もいるが、今くらいはいい。勝ち誇ほこり、勝利の美酒に酔よいしれて、その深い味わいを彼らとわかちあってもいいだろう。ベティは仲間たちを振ふり仰あおごうとした。

　クルオが目を開けた。

　そうくると思った、と言いたいところだった。言えなかった。まったく別の言葉が口をついて出た。

「……どうして」

「勝負ゲイムはきみの勝ちだよ、ベティ」

　クルオは顔を上げて首を傾かたむけてみせた。

「まさか、クルオと似たようなことを考える人がいるなんてね」

　暗黒の海で、ぼくの負けだね、と言ったときと同じ笑えみだった。にもかかわらず、まったく別物だった。あのときは子供の姿で、今は青年の姿だからか。そうではないだろう。おそらく、クルオにとっては同じ微び笑しようなのだ。ベティの受け止め方が変わった。

　さっきまで何やら賑にぎわしかった会場が静まりかえっている。ベティは知らずに唇くちびるを噛かんでいた。あたしは勝ったはずなのに。

　クルオは笑みを浮うかべたまま立ちあがって、首飾りチヨーカーを差しだしてきた。思ったより背が高い。ベティも女としてはそれほど小さいほうではないが、慌あわてて腰こしを上げると、頭一つ分以上差があった。

　首飾りチヨーカーを手にとろうとしたら、クルオの左手がのびてきた。

　ベティは手首を握られて、ぐっと引きよせられた。クルオが耳みみ許もとで囁ささやいた。

「何人いるの？」

　答えようとしたわけではない。どうせ答えようがなかった。
あっ、と誰だれかが言った。

　唇を唇でふさがれた。

　押しのけようとしたら、離はなれていった。

　いつの間にか、ベティの右手には首飾りチヨーカーが握られている。杖エルの首飾りチヨーカーだ。

　左手で自分の唇をなぞると、少しだけ湿しめっていた。

　クルオはこめかみのあたりを中指で叩たたいてみせた。

　とん、とん、とん、とん、とん。

　ここにはね。五人いるんだ。

　そうして唇に人差し指をあてた。

　秘密だよ。

「また会いにゆくよ、ベティ」

　クルオの身体からだがふわりと浮きあがったように見えた。

　遠ざかってゆく。

　いや、違う。そうではない。

　クルオの姿が次し第だいに薄うすれてゆく。

「そのときは教えてね。きみの本名」

　ついには消えてしまった。ただ、見えはしないが、その存在を感じる。クルオはまだどこかにいる。

「これも、幻術イルージエン……」

　わからない。どういう種類の幻術なのか。その仕組みは。やはり、まるで見当がつかない。何なのよ、いったい。想像を絶するってやつ？　五人。五人も。先を越こされていた。しかも、差は大きい。クルオは遥はるか彼方かなたにいる。あたしの独創だったはずなのに。お姉様でさえ思いつかなかったことなのに。だけど、本当にそうなの？　お姉様が一度も検討したことのないアイディアだったと断言できる？　あのお姉様のことだ。わざとかもしれない。お姉様はあたしには厳しかった。たぶん、叩かれれば叩かれるほど奮起するタイプだと見み抜ぬいていたからだ。でも、鞭むちだけでなく、ときには飴あめも必要だ。あたしが何か考えついて、それを成功させると、お姉様はあからさまに悔くやしがった。あたしは有う頂ちよう天てんになった。あれもぜんぶ、わざとかもしれない。お姉様はあたしが思っているより、もっと遠くにいるのかもしれない。

　お姉様との演習では、二つの自意識エンフユーラを使う戦法は一度も用いなかった。お姉様はあたしが第三脳を生みだしたことを知っている。ただ、その機能を完全に把は握あくしているわけではないだろう。もちろん、教えるつもりもなかった。拷ごう問もんされても明かさない。それはあたしなりの意地だった。

無む駄だだったのかもしれない。

お姉様には見通されているのかもしれない。

あたしは結局、お姉様の掌てのひらの上で踊らされていたのかもしれない。今も必死に踊りつづけているのかもしれない。

でも、だから、それが何？

踊りつづけることで、高みに登ることができるのなら、いくらでも踊ってやるわ。

それすらお姉様の目もく論ろ見みどおりなのだとしても、あたしは決してあきらめたりしない。

お姉様もクルオも、高い場所からあたしを見下ろして、さあ、ここまでおいで、と手招きしている。その顔には同じ笑みが。愉ゆ快かいそうで、どこか嗜し虐ぎやく的で、愛あい玩がん動物に向けられる種類の愛情に満ちている。どうせここまではこられないでしょう。おそらく、心のどこかでそんなふうに思っているに違ちがいない。その目で見てきているからだ。自分たちと同じように、高い、高いところへ行こうとして、途と中ちゆうで無残に転げ落ちていった無数の者たちを。才能だけじゃない。運もある。あたしたちは断だん崖がい絶ぜつ壁ぺきを登ってゆく。手をかけた岩が崩くずれれば落ちて死ぬ。足を踏ふみ外しても落ちて死ぬ。強風に煽あおられても落ちて死ぬ。どうせあなたもそうでしょう？

どうとでも思っていればいいわ。

あたしは他ほかの誰のためでもない、あたし自身のために、どこまでも登ってやる。

一つ息をつくと、笑いがこみあげてきて、我が慢まんするのに苦労した。

クルオ・バーミチェット・アンダリュース。あたしも是ぜ非ひまた会いたいわ。興味があるじゃない？　だって、あなたをふくめたごく一部の例外をのぞいて、あたしよりすごい魔ま術じゆつ士しなんて、結局のところそうそういやしないんだもの。

その意味では、つまらない男ばかりなのよ。

別の意味では、必ずしもそうじゃないけど。

「──な……」

声を聞いて、振ふり向いた。

あいつがこっちを見ていた。目ではなかった。あいつの視線は顔の下半分、唇のあたりにそそがれていて、漂ただようように揺ゆれ、ふっと下のほうへ落ちた。

「何だ。いったい何なんだヨ、あの男は。いきなり……」

意表を突つかれた。

あいつは眉み間けんに深い縦たて皺じわを刻んで、頬ほおをこわばらせ、唇くちびるの端はしを震ふるわせていた。そりゃあ、あたしもびっくりしたけど。突とつ然ぜん、あんなことをされるなんて、思ってなかったし。べつに減るものじゃないから、たいしたことじゃないけど。それよりずっと、あいつがあんな顔をしていることのほうが驚おどろきだ。

やばい。

ほっぺたが赤くなっちゃいそう。

期待なんかしてないのに。

「てゆうか」

あの子が横目であいつを見た。半眼だ。にらみつけたいのをぐっとこらえて、でも、半分しか成功していない。白けたような、つめたい目つきだ。おそらく、どうしてあいつをにらみつけないといけないのか、あの子もよくわかっていないのだろう。

「なんできみがそんなに怒おこってるの？」

「……え、イヤ、ボクは──怒っているわけじゃない……ヨ？　なんでボクが」

「ふうん」

「というか、マリア、キミも怒っているんじゃ」

「僕が怒るわけじゃないでしょ？　何たわけたこと言ってるわけ？　なんか明らかに脳の腐ふ乱らんが進行してる兆候が現れてるみたいだから、もうさっさと朽くち果てちゃえば？」

　あの子は口を尖とがらせて顔をそむけた。あいつはおろおろしている。ベティはこらえきれずに笑った。声を立てて笑った。皆みな、不思議そうな、あるいは訝いぶかしそうな表情でベティを見たが、かまわなかった。すべてが終わったら、ダリエロとリキエルを誘さそってミケランジェロにでも行こう。三人で語り明かそう。だから、待ってなさいよ、あんたたち。もうすぐ行くから。あたしたちが、絶対に助けだしてあげるから。

Omenage XXX Xth revolution Xth day

不明 〝unknown〟

chapter.8

ドッポ

冗じよう談だんじゃねぇ。

まったく、くだらねぇって言ったらねぇ。何なんだ、この滓カスどもは。どうなってやがるんだ、この世界。それより俺は何だ？　俺──俺は──欲しいと思ったはずだ。欲しくて手に入れた。俺は餓うえていたはずだ。いつもそうだ。あれもこれも欲しくなる。それが金なら奪うばって遣つかう。それが女なら組み敷しいて犯おかして飽あきたら捨てる。面めん倒どうくさけりゃ殺バラせばいい。俺はいつもそうしてきた。そうだ。それでいいじゃねぇか。

血の海だ。

どす赤い海に腕うでだの首だの足だの内臓だの性器だのが浮ういている。

男のものもあれば、女のものもある。

立っているのは俺だけ。

俺だけだ。

これで何度目だ？　阿あ呆ほらしい。くだらねぇ。無意味な問いだ。何度だっていい。どうでもいいじゃねぇか。俺が必死に踏みにじっているのは女の腕だ。悪くねぇ女だった。頭のいい、気が強ぇ、そう簡単には従わねぇ女を屈くつ服ぷくさせるプロセスには乙おつな味がある。ところが、どうだ。俺はこの女を無理やり抱だいたんだったか。ろくすっぽ覚えちゃいねぇ。こうして終わっちまえば、記き憶おくなんざ屑クズみてぇなもんだ。そのときだけだ。瞬しゅん間かん、刹せつ那なだ。ベティ。俺はこの女を何度も何度も抱いて、よがらせたんだったか。知ったことじゃねぇ。アジアン。クラニィ。ローガン。リキエル。いい手下になりそうだと思った。欲しくなって手に入れた。他ほかの連中もそうだ。本当にそうか？　わからねぇ。今となっちゃあさっぱりだ。覚えちゃいねぇ。どうでもいい。もうどうでも。だって、そうだろうが？

終わったんだ。俺が全員この手でぶっ殺した。これで何度目だ？　俺は何度こんなことを繰くり返してきやがったんだ？　知らねぇっつってんだよ。いちいち覚えてられるか。それくらい何度も、何度も、何度も、何度も、だ。後こう悔かいなんざしてねぇ。

これっぽっちもだ。何しろ俺がやったことだ。俺が自分で。自分の意志で。そうしたくてやった。欲しくて手に入れたものを、何もかもぶち壊こわしてやった。そうせざるをえなかったからだ。

　俺はなんだかひどく疲つかれていて、血の海の中に座りこんだ。ああ、くせぇ。くせぇぞ。なんてにおいだ、畜生ファアック。ぬるぬるしやがる。この液体はさらさらしてねぇ。脂あぶらも交じってやがるせいか。人間の脂だ。それに、臓物。その中身。その他の体液。ぜんぶごちゃまぜだ。くせぇ。くせぇったらねぇ。やってられるかよ。冗談じゃねぇ。

「やりなおす必要はないんじゃない？」

　遠くで女の声がした。いかにも自分を賢かしこいと思っていそうな、生意気な女の声だ。

「どうせ今さらやりなおすなんて無理でしょう。戻もどれないし、変えられない。行きつくところまで行くしかないのよ。それでも、ずっと一人きりで歩いていくよりは、ね」

「いっそ、クランでも作ってしまったらどうかな」

「いいじゃない」

「いいよ。うん。いいと思うよ。おれも」

「変わったっていい。気にくわないことがあったら、たまにはぶん殴なぐりあったっていい。それでも、まあ、酒くらいは一いつ緒しょに飲める。そんなクランなら、あっても邪じや魔まにはならんしな」

「俺は下戸だ」

「べつに、一緒に酒を飲むんじゃなくたっていいだろう」

「そうね。お昼ご飯だっていいわけだし」

　はっ。

　何だ、そいつは。

　何なんだよ、塵屑ゴミクズ野や郎ろうどもが。

みんなで仲よく昼飯時ランチタイムをすごしましょう、ってか。

鳥とり肌はだ物だな。

糞くそくだらなくて、やってられねぇ。

「──なんでだ」

「何が？」

女は平然としている。不意を突ついて後ろから羽は交がい締じめにしてやったときは、この女もたしかに慌あわてていたはずだ。暴れようとしたので解放してやった。わざとだった。女はほんの一瞬、安あん堵どして隙すきができた。そこを突いた。一気に引き倒たおしてのしかかった。あとは簡単だった。女一人を抵てい抗こうできないように組み伏ふせることなんざ朝飯前だ。あえて思いきり下げ卑びた笑い方をしてやって、恐きよう怖ふ心しんを煽あおる。もう終わりだ。てめぇは俺にあらがえねぇ。これからてめぇは俺に犯やられるんだ。逃にげられやしねぇ。思い知らせて、どこまでも怯おびえさせる。嫌けん悪おと絶望とあきらめに彩いろどられた女の顔を見るのが心底好きだ。この女でもそんな表情をするのか。期待していたというよりも破れかぶれだった。

調子が狂くるう。狂いっぱなしだ。俺はいつからあいつらとつるみはじめた？　クラニィ。あの塵屑野郎のせいだ。あいつが金を返せだとか何だとか、わけのわからねぇことをぬかして絡からんできやがった。気がつくと俺は糞みてぇな路地裏でくたばりかけていた。やられた。なんてこった。俺はやられちまった。危あやうく死にかけた。ほとんど意識がない状態で、なんとかひとけのない路地裏まで這はっていった。そうして気を失った。許さねぇ。あの野郎。ぶっ殺してやる。絶対に殺す。俺はあの塵屑野郎を付け狙ねらった。そのはずだった。それなのに、なんでだ。どうして俺は。わからねぇ。わからねぇぞ、畜生フアツク。とにかく、いつの間にか俺はあいつらとつるむようになっていた。気にくわねぇ。何もかもが気にくわねぇ。死ね。全員死んじまえ。

ベティはやけに醒さめた目で俺を見上げてやがる。おかげで、何十人、それ以上の女を震ふるえあがらせてきた俺のゆがんだ笑えみまで白けちまう。なんでだ。なんでこの女アマは。

「いくらてめぇでも、触しよく媒ばいすら持ってねぇ状態で魔ま術

じゆつを使ったりはできねぇはずだ。絶体絶命の危機ってやつじゃねぇのか、こいつは」

「ホントにそう思ってるの？」

「事実だろうが」

「じゃあ、やれば？」

「いいのかよ」

「やれるものならやってみなさいよ」

　俺を挑ちよう発はつしてやがるのか。こう考えてみた。この女アマは何のかの言って、俺に犯やられたがってるのかもしれねぇ。たまにそういう頭のおかしいイカレ女アマもいる。何を考えてやがるのか、俺に抱かれたがる阿あ呆ほうが。俺はそんな売女ばいたに興味はねぇ。どんな女アマだろうがいやがって泣き叫さけぶやり方を俺は知っている。熟知している。勘かん違ちがいだと教えてやる。恋こいだの愛だの惚ほれた腫はれただのはぜんぶ戯たわ言ごとだ。俺は信じねぇ。絶対に信じることはねぇ。めちゃくちゃにしてやって、殺バラして捨てる。ここには何もねぇってことをわからせてやる。誰だれよりも、俺は俺にそう教えてやる。甘い考えは捨てろ。手に入れたものはどうせすべて偽にせ物ものだ。だから簡単に壊こわれて、あっさりなくなっちまう。この女アマも阿呆だ。塵屑だ。壊せ。壊しちまえ。それでいいじゃねぇか。俺はそうしたがっているはずだ。それこそが俺の望みだ。

「意い気く地じなしね」

　ベティはふっと笑った。

　ぞっとするほどこの女を抱だきたいと思った。

「でも、そういうあんたは嫌きらいじゃないわ」

　俺は嫌いだ。大嫌いだ。嫌いで嫌いで仕方ねぇ。俺には怖こわいものなんざ何もなかったはずだ。それが、どうだ。怖い。怖くてたまらねぇ。俺は──俺は、俺は──壊しちまうんじゃねぇかと。今まで何度も、何度も、何度も、そうしてきたみてぇに、この手でまた壊しちまうんじゃねぇかと思うだけで、冷や汗あせをかいちまう。

阿あ呆ほらしいぜ。

クソッタレめ。

もういい。

騒さわぐぞ。飲めや歌えの糞騒ぎだ。

「アジアン！　てめぇも何か芸でもやりやがれ！」

「え？　ボクが？」

「そうだよ。てめぇだよ。おい！　てめぇらも見てぇだろうが！」

「おお！」「いいぞ！　やれ！」「見たい見たい見たい！」「脱ぬいで！」「やれやれ！」

「おら、みんな期待しまくってんじゃねぇか！　裏切るんじゃねぇぞ！」

「……芸、といっても……」

n'ebula四階の大ホ部ー屋ルに集まった皆みなの視線を一身に浴びて、アジアンはしばらく眉まゆをひそめてうつむいていたが、ついに腹を決めたようだ。すっくと立ちあがるなり、一度、右手に持っているグラスに目を落とした。グラスの中身はウイスキーだ。まだ半分以上残っている。それからいったい何をするのかと思ったら、アジアンはいきなり垂直に跳とびあがった。一メーテル以上、もしかしたら二メーテル近く跳ちよう躍やくしたかもしれないが、その程度で驚おどろくやつはいない。アジアンもそれくらいのことはわかっているのか、一ひと工く夫ふうしてみせた。空中でグラスを手放してくるりと猫ねこのように一回転し、着地してから落ちてきたグラスをキャッチしたのだ。

うお、きゃっ、と短い悲鳴があがって、どっと笑いが起こった。

アジアンとしてはウイスキーをこぼさずにグラスを受け止めたかったのだろうが、結果は大失敗だった。グラスが落下に転じた瞬しゆん間かんからもう、ウイスキーは空中にぶちまけられていた。アジアンもそれをひっかぶる羽目になったし、やつの周りにいた連中にも被ひ害がいが及およんだ。

「すまない。うまくいかなかったみたいだ」

「阿呆！　すまねぇですむか！」

　いいって、気にするなって、とアジアンを慰なぐさめようとする甘ちゃんの糞くそ大馬ば鹿か野や郎ろうどもがいる。女どもは盛りのついた雌めす犬いぬみたいにアジアンに群がってウイスキーをふくどころか舐なめとってやろうという勢いだ。一応、盛りあがっていることとは盛りあがっているが、こんな盛りあがり方は求めてねぇんだよ。そうじゃねぇだろうが。塵屑ゴミクズ野郎どもめ。しょうがねぇ。この俺が手本を見せてやる。宴えん会かいっつったらやっぱりこれだろうが。

「──見やがれ！」

　俺はズボンと下着を一気に下ろしてその部分に純白のハンカチをのせ、床ゆかの上で堂々と大の字になってやった。

「天を衝つく、白い巨きよ塔とう……！」

「おおおぉぉぉぉぉ！」「きゃあああああ！」「すっげえぇぇ！」「で、でかっ」「もはやきもい！」「何だそりゃあ！」「アンビリーバボォッ！」「ありえねえええええっ……！」

「グアッハッハッハッハッハアアァァァァ……！　恐おそれろ、崇あがめろ、粗そチン野郎ども！　短小に生きる道はねぇと知りやがれ……！」

「う、動いてる！　うごめいてやがる！」「ていうかいつまでやってんのよ！」「見るな！　見るんじゃねえ、祝花ノリカ！」「けどちょっとすごいかも！」「な、ナツコちゃん……！」

「ビビってんじゃねぇ！　まだまだこんなもんじゃねぇぞ！　これからだ……！」

「──なッ、さらに……！」「どれだけ……」「や、やべぇ、ハンカチが！」「だ、誰か押さえろ！」「押さえるか、ボケェッ！」「きゃっ」「ご、ご、ご、ご尊顔がああ……！」

　逃にげだす者もいた。ふざけて拝む者もいた。自分も自分もと脱ぎだす阿呆もいた。ただケタケタ笑っている者もいた。しょうがねえなあというツラで苦く笑しようしている者もいた。ベティの排は

い除じよ命令を受けたリキエルが襲おそいかかってきた。下半身裸はだかのまま応戦した。こっちに荷か担たんする者がいて、あっち側に加わる者もいた。酒さか瓶びんが宙を舞まって、酒が雨みたいに降りそそいだ。どうなってもいいような気分だった。もうどうなったってかまわねぇ。知ったことかよ。

「……あ～……頭が痛ぇ……」

　テーブルに突つっ伏ぷして呻うめいていると、オトミばあさんが水の入ったグラスを置いていった。水なんざ飲んだところでよくなるわけでもないが、飲まないよりはましだ。二日酔よいだ。この俺が二日酔いとはな。

「調子に乗って、バーボン五本も一気にラッパ飲みするからでしょう」

「うるせぇ」

「アジアンじゃあるまいしな」

　カウンターのほうから低い笑い声が聞こえた。いつ聞いてもむかつく声だ。

「お前さんも餓が鬼きじゃないんだ。限度ってものを知ったほうがいいんじゃないか」

「黙だまれ」

「でも、あんなふうに無茶できるところがダリエロらしくもあるんじゃないかな」

「死ね」

　知ったような口をたたきやがって。薄うすらハゲの糞中年デブのくせしやがって。

「……死ね、てめぇらみんな……死んじまえ……痛ぇ……」

「むしろお前のほうが死にそうだ」

「黙りやがれ、お面野郎」

「悪口にも冴さえがない」

「……痛ぇんだよ……頭が……」

　気持ち悪ぃ。吐はきそうだ。酒が抜ぬけきってねぇ。二日酔いまでまだいってねぇんだ。これからか。それで、この頭の痛さかよ。冗じよう談だんじゃねぇぞ。ちょっくら吐いてくるか。

　ふらふらと立ちあがって、どこ行くの、とベティに訊きかれ、うるせぇ、と答えて、便所へと向かった。個室に入るなり喉のどの奥に指を突っこんでゲーゲーやっていたら、不意に背中を撫なでられた。おかげでさらに吐き気がして、目に涙なみだをにじませながら吐けるだけ吐いた。

「大だい丈じよう夫ぶかい」

「……これが大丈夫そうに見えるかよ」

「見えないネ」

「大丈夫だ」

　舌打ちをして、手の甲こうで口の周りをぬぐった。便所を流し、手洗いで顔と手を洗っていると、むかむかしてきた。鏡に映る自分の青ざめた顔が気にくわねぇ。あいつは壁かべに背中をもたれさせて、おそらくわざとそっぽを向いている。ずいぶんとまあ気がきくじゃねぇか。気持ち悪ぃ。気味が悪いんだよ。何だ、あの野郎は。何なんだ、この俺は。いったいどうなってやがるんだ、この世界は。

　居い心地ごこちがよすぎて、いやになる。

　あいつがこっちを見た。

　鏡越ごしに目があった。

　あいつは微笑ほほえんでいた。

「いいんだヨ」

「あ？」

「いいんだ」

「何がだ」

「いたければ、ずっとここにいてもいい」

　へえ。

　そうかよ。

　ふざけるな。

　ふざけるんじゃねぇ。

　俺は振ふり返ってあいつに殴なぐりかかる。てんで歯は応ごたえがねぇ。あいつはあっさり俺の拳こぶしを食らって沈しずんだ。それくらいこいつは俺を信用してやがったのか。ちらりとそんなことを思う。違ちがう。違う。違う。違う。そうじゃねぇ。俺はアジアンを踏ふみつける。アジアンのふりをした何ものかを蹴けって蹴りつけて踏みにじる。違う。こいつは違う。断じて違う。俺は便所を飛びだして厨ちゆう房ぼうに飛びこみ、包丁を引っつかんでベティのふりをした何ものかをぶっ殺す。リキエルを。クラニィを。ローガンを。簡単だ。簡単すぎる。まさか俺に殺やられるとは思っていなかったからか。違う。違う。違う。俺はオトミばあさんを殺す。カツヲを殺す。B□Bを殺す。まるで人形だ。身体からだに赤い血が流れているだけの人形みたいだ。こいつらは違う。絶対に違う。血の海の真ん中で俺は思う。違う。違う。違う。違う。違う。違う。違う──はずだ。

「やりなおす必要はないんじゃない？」

　遠くで女の声がした。いかにも自分を賢かしこいと思っていそうな、生意気な女の声だ。

「どうせ今さらやりなおすなんて無理でしょう。戻もどれないし、変えられない。行きつくところまで行くしかないのよ。それでも、ずっと一人きりで歩いていくよりは、ね」

　そうやって、やりなおさせるつもりだろうが。

　もうわかってんだよ。俺はわかったんだ。気づいちまった。

　これは罠わなだ。

　気になってたんだよ。いつからか気になってた。おい、ベティ。ベティの偽に せ物もの。てめぇだ。ずっとてめぇの肩かたにのってやがったり、足あし許もとをちょろついてたりする、その──黒くて丸っこい毛むくじゃらの生き物は、いったい何だ。

「これ？　これは……」

「無理するなよ」

　俺は手をのばす。

「偽物の口から答えなんざ聞きたかねぇ」

「偽物……？　あんた、何言ってるの？」

「さあ、何だろうな。俺にもよくわからねぇ。だがな」

　その黒くて丸っこい生き物をわしづかみにして、握にぎり潰つぶした。

「もうすぐわかりそうな気がするぜ」

　それなのに、訪おとずれたのは圧あつ倒とう的な暗くら闇やみだった。何も見えない。何も聞こえない。漆しつ黒こくの泥どろ沼ぬまに落ちこんでしまったかのようだ。喉から肺まで泥どろに埋うめつくされている。息ができない。俺は死ぬのか。それとも、死んだのか。死んじまってるのか。これが、死。そうなのか。死んだらぜんぶなくなって、何かを感じることも当然なくなると思っていた。完全に終わるものだと。違ったのか。こうしてずっと苦しみつづけるのが死なのか。だとしたら、死ぬもんじゃねぇな。冗談じゃねぇぜ。やってられるかよ。塵屑ゴミクズ野や郎ろうが。

「──あ……がっ……うごぉぁっ……！」

　何だ。わけがわからねぇ。光。目を開けたのか。そうだ。そうらしい。見える。だが、ちゃんとは見えねぇ。これは──ここは──水？　水の中？　海？　池？　何だ？　それなのに、どうして俺は──なんで息をしてるんだ？　たしかに息苦しいが、呼吸はしている。できている。そんな馬ば鹿かな。どういうわけだ？　この粘ねばっこい水、どろりとした液体は何なんだ？

　もがいて、あがくと、身体のあちこちが何かにふれた。狭せめぇ。糞くそ狭ぇぞ、畜生フアツク。俺は━閉じこめられてやがるのか。卵のような形の容器の中で、膝ひざを抱かかえるようにして身体を丸めていた。そんなかんじだ。その容器は謎なぞの液体に満たされている。謎の液体の中ではなぜか息ができる。容器はそれほど硬かたくないようだ。力を入れれば爪つめが食いこむ。

　出せ！　俺をここから出しやがれ……！　容器を内側から思いきり叩たたいた。何度も叩いた。誰だれもいねぇのか？　おい！　いねぇんだったらいねぇと言え！　無理か。わかってるよ。んなこたぁわかってる。出てやる。出るぞ。自力でどうにかしてやる。ふざけるんじゃねぇ。

　容器に爪を立てて瑕きずをつけ、それを少しずつ広げて、深く、深くしてゆくのは、想像以上に根気のいる作業だった。容器はさほど硬くないかわりに弾だん力りよくがあった。半はん透とう明めいで、向こう側がぼんやり見えたが、あえて気にせず作業に集中した。嫌いや気けがさすたびに口の中を嚙かんで、その痛みによって増ぞう幅ふくさせた怒いかりを指先にこめた。右手の人差し指と中指の爪が剝はがれてからは、苦痛だけでなく苛いら立だちとも戦わなければならなかった。とうとう我が慢まんの限界に達して、容器に嚙みついた。食いちぎってやった。そこめがけて液体が流れだした。

　穴だ。

　穴があいた。

　指を突つっこんで一気に広げ、引き裂さいた。

　容器の穴から顔を出すと、ぜんぶの内臓が突とつ然ぜんひっくり返ったような痛みというより衝しよう撃げきを覚えて、口だけでなく鼻の穴や耳の穴からも何かがあふれだした。何かも糞もない。それはまぎれもなく容器の中を満たしていたあの液体に他ほかならなかった。

「━ぃづあぁぁ……ぐあっ……く……そぉぁっ……！　あぁぁぁがあぁぁぁぁ……」

　四つん這ばいの姿勢ですっかり吐はきだし、流れだしてしまうまで、ほとんど何も考えられなかった。もう出るものはないはずなの

に、どこかに残っているようなかんじがぬぐえず、咳せきが止まらない。せめて肺くらいはどうにかして洗せん浄じようしないと使い物にならないのではないか。もし交こう換かん可能なら、たとえその過程にとてつもない痛みが伴ともなうとしても、今すぐ取り外して新しいものにとりかえるだろう。

「いや……んなことやってる場合でもねぇか」

　肩で息をしながらあたりを見まわした。もう驚おどろかねぇ。そう思いはしても、愕がく然ぜんとせざるをえなかった。

　まるで臓物だ。全面に臓物のようなものが敷しきつめられている。そんな吐き気がするような光景だから、部屋とはちょっと言いづらいが、どうやら閉とざされた空間ではあるらしい。

　その床ゆかに生えている何十個もの丸みを帯びた円えん筒とう形けいの物体の中の一つに、今の今まで自分も入っていた。それは半透明で、血管のようなものが網あみ目め状に張りめぐらされている。魚か両生類の卵を大きくしたような見た目だが、大きく異なる点が二つあった。

　一つは、それらの卵めいた物体のてっぺんには、もれなくあの黒くて丸っこい、毛むくじゃらの生き物が鎮ちん座ざしているということだ。

　さらにもう一つは、中身だ。

　人間だ。

　しかも、知っている人間だった。

　どいつもこいつもよく知っている。

「ミシーリャ……リキエル、カイ……雷切ライキリ……ナツコ、ヴィクトリア……レイジ……」

　一番近くの円筒の前にしゃがみこんで、その表面を指でさわってみた。奇き妙みようになまあたたかい。生きているかのようだ。中にいるこいつはどうなのか。

「おい、ミシーリャ」

　呼びかけてみたが、返事はなかった。目を開ける様子もない。寝ねているのか。不思議と穏おだやかな顔をしている。なんだか不ふ吉きつな予感がして、円筒を強く叩いた。中の液体が揺ゆれ、ミシーリャの口から泡あわがごぽりともれたが、それだけだった。いや。違ちがう。よく見ると、表情がかすかに変わった。眉まゆがほんの少しひそめられている。

「生きてやがるのか」

　振ふり返って、自分が入っていた円筒の残ざん骸がいを見た。液体の中に黒い生き物が横たわっている。あいつを、俺が──そうだ。俺は、あいつを握り潰した。その瞬しゅん間かん、あの糞戯たわけた夢──夢なのか？　わからねぇが、とにかくあの悪夢は終わった。てことは、まさか、あの生き物の仕し業わざだってのか。だとしたら。

「ふざけやがって」

　向きなおって、ミシーリャが入っている物体のてっぺんにいる黒い生き物に手をのばそうとしたが、途と中ちゆうでやめて舌打ちをした。駄だ目めだ。不用意にあの黒い塵屑ゴミクズをぶっ潰して、ミシーリャに何かあったらどうする。絶対に大だい丈じよう夫ぶだって保証はねぇ。何せ、俺はわかってねぇんだ。何がどうなっちまってこうなり、いったい今、どうなってやがるのか。さっぱりわからねぇ。俺はねぐらで寝てたはずだ。酒は飲んだ。ただ、いつもの量だ。ぐでんぐでんに酔よっ払ぱらってたわけじゃねぇ。そして、何があった？　見当もつかねぇ。わからねぇことを考えても仕方ねぇか。じゃあどうする？　とりあえず、他のどうでもいいやつで試ためすか。ポー。トト。チェリーあたりがいいか。こいつなら、べつにくたばっちまったところで──、

「そうもいかねぇか」

　また舌打ちをしそうになって腹が立ち、ついため息をついてしまってむかついた。

「仲間は殺さねぇ。まぁ、それが昼飯時うちの流りゆう儀ぎだからな」

　ミシーリャが入っている物体のそばにどっかと座りこんで、息を整えながら頭をめぐらせた。さて、どうする。どうすりゃいい。こ

の空間に敷きつめられている臓物めいたものは、やはりなまあたたかく、生きているかんじがする。まるで糞くそでけぇ生き物の腹の中にでもいるみてぇだな。最悪の想像だぜ。超最低ＳＵＣＫ。まずは、出口。出口を探すか。だが、見つけたとして、俺は逃にげられるのか。こいつらを置いて逃げるってのか。それよりか、こいつらをどうにかするほうが先じゃねぇのか。だが、どうやって……？

「まったく、くそったれだぜ」

　顔をごしごしこすると、爪の剝がれた右手の人差し指と中指が痛んだ。痛みなんざどうとでもなるがな。我慢すりゃいいだけの話だ。問題はそこじゃねぇ。

　俺だ。

　すっかり腑ふ抜ぬけちまってる俺自身だ。

　不ふ甲が斐いねぇと思っていながら、自分の手で壊こわすこともしねぇで、もしかしたらこいつは本物なんじゃねぇかなんて、甘ったるいことを考えてやがる。

　やりきれねぇ。

Omenage 897 12th revolution 6th day

サンランド無統治王国首都エルデン・アンダーグラウンドD8

〝怪虫の坩堝ガンズゲイル〟

chapter.9

偽りの向こうに

「そういえば、あなたとは以前、お会いしたことがありますよね」

　第五勝負フイフスゲイムの会場を目前にした薄うす暗ぐらい通路で、男は出し抜ぬけにそんなことを言いだした。

　話を振られたほうもまったく予期していなかったのだろう。

「ほえぁ？　わ、わし……？」

　半魚人は魚眼を一いつ杯ぱいに見開いて自分を指さした。

「あやぁ、ええっと……どやったかなあ、会おうたこと……あるかあ？　んんんん、わからんなあ、どうやろ、むむむむむ」

「覚えていませんか。何年も前のことですしね」

　男は、ははは、と笑いながら右手の人差し指で眼鏡めがねの位置を直した。

「場所は鉄てつ鎖さの憩いこい場です」

「むを？」

「あなたは僕にこう尋たずねてきました。そこのベンチに座っとった女の子、どこに行ったか知りまへんか。こう、ちっこくてな、肌はだはチョコレート色で、三つ編みで……」

「をを っ」

「そこで、僕はこう言ったのです。僕の名前を一度で覚えることができたら、教えてあげてもいいですよ」

「むふっ！」

「あなたは見事に一度で記き憶おくしてのけました」

「な、なんとぉっ……！」

「覚えていませんか」

「むううううぅぅぅぅぅ……」

　半魚人は頭を抱かかえてしばらく考えこんでいたが、やがてその頭頂部から煙けむりのようなものが立ちのぼりはじめた──ように見えただけだ。いくら半魚人でも、そこまでおもしろい機能は備わっていない。

「これぇぇぇぇっぽっちも覚えとらん」

「そうですか」

　男は気を悪くした様子もなく、ははは、とまた朗ほがらかに笑ってみせた。

　で、オチは……？

　もしかして、何もないわけ？　それで終わり……？



　どうやら終わりのようだ。それきり男はそのことにふれようとしなかった。なんというか、第四勝負フオースゲイムが終わってから、勝者のベティを祝福したり褒ほめ称たたえたりする言葉も型どおりで、ベティ自身も何がおかしいのか、ひとしきり笑ったあとはやけにしれっとしていたものだから、ちょっと微び妙みような、気

まずいというか、みんな何をどうしていいのやらよくわからない、みたいな、はっきり言ってしまうと、結構いやな雰ふん囲い気きだったので、男はなんとかそれを打破しようとしたのか。そう考えることもできなくはないけれど、おそらく違ちがうだろう。違うと思うのだが、じゃあ何だろう、と考えてみても、よくわからない。

　謎なぞめいた男だ。

　だいたい、恰かつ好こうがラフすぎる。セーターにパンツをあわせただけって、散歩するんじゃないんだから。そんな服装には恐おそろしいほど似合わない巨きよ大だいな斧おのを背負ってきたセンスも明後日あさつてのほうを向いている。

　ヨグ・フローヨ・メイドルフ・サイケングレンマイセルヒ。

　第五勝負フイフスゲイムの会場前に到とう着ちやくすると、男は、さてさて、と言いながら、もったいぶるように扉とびらの前に立ちふさがったアクゼルを押しのけてしまった。プレートに書かれた上古ハイ高位ロメ語オンを読む気もないようだった。男は誰だれかが止めに入る前に扉を開け放った。

「これはこれは」

　男は、くんくん、とにおいを嗅かぐ仕し種ぐさをした。

「どうやら思ったとおり、僕の出番みたいですね」

「よろしいのですか。ルールをご覧にならなくて」

　アクゼルはわずかにたじろいでいるように見えた。いや、アクゼルだけじゃない。たぶん、この場にいる者は皆みな、ある種の異様さを感じていたに違いない。それが何に由来するものなのか、最初はわからなかった。今はわかる。

　トマトクンが眉まゆをひそめて右手を持ちあげかけ、途と中ちゆうで下ろした。大剣の柄に手をかけようとしたのか。サフィニアが気づかわしげにトマトクンを見上げている。トマトクンはその視線に気づいているのか、いないのか。いずれにしても、黄玉トパーズの瞳ひとみはひたすら扉のほうへと向けられていた。

　あの男だ。

　今、この一帯の空気には重みと感かん触しよくがある。身動きがとれないほどではない、ただ、立っているだけで疲ひ労ろうがたまってくるようないやらしい重量と、ねっとりした肌ざわりだ。

　ヨグ・フローヨ・メイドルフ・サイケングレンマイセルヒ。

　あの男が原因だ。

「ルールぅ？」

　男は目を細めて唇くちびるを弓のような形にゆがめた。

「見ましたよ。僕は速読が得意なんです。そういえば、第四勝負フォースゲイムは二回休みじゃなく一回休みでしたね。今回はその一回休みもないというのが気になりますが、とりあえずどうでもいいことです。ようするに、そちらの参加者プレイヤを殺して首飾りチョーカーを頂ちよう戴だいすればよいのでしょう？」

「まあ……平たく申しあげれば、さようでございますが」

「では、そうするだけです。ああ、そうだ──」

　男は振ふり返って首を傾かたむけてみせた。

「ここは僕に任せてください、と言うのを忘れていました。まだ勝負ゲイムに参加していないのは僕だけですし、かまいませんね？」

　可否を尋ねているというよりは、ただ一応、確かく認にんしているだけといった口調だった。もっと言えば、有無を言わさず事を運びそうな気配すら漂ただよわせていた。

　男は皆を見まわしてから、最後に昼飯時ランチタイムの頭領マスターに無色透とう明めいの眼まな差ざしを向けた。眼鏡のせいもあるのかもしれないが、何を考えているのか本当にさっぱりわからない。街を歩いているときにすれ違ったら、ほぼ確実に見み逃のがしてしまうだろう。おそらく十人中九人までが気にもとめないような男なのに、こうして見るとあからさまに要注意人物だ。得体が知れない。そんな言葉がこれほど似合う男も珍めずらしいだろう。

「アジアン」

　みずからが戴いただく頭領マスターの名を呼ぶ声もどこか空々し

く響ひびいた。空くう虚きよでありながら、永遠に蓋ふたをされたままの井い戸どで静かに腐くさってゆくつめたい水のような澱よどみが感じられた。澱んでいながらも、あくまでつめたいのだ。その孤こ独どくなつめたさは、なぜだか少しせつなかった。

「僕は僕なりに昼飯時ランチタイムが好きですよ。何しろ、僕のようなものがいられるのは昼飯時ここしかない。誰も詮せん索さくしてきませんしね。無理に仲間と馴なれあわなくていいという点もありがたいです」

「それが昼飯時ウチの方針だからネ」

「ええ。そんなわけで今まで言いませんでしたが、一つだけ打ち明けておきます」

　男はさらりと告げた。

「僕は人間ではありません」

「そう」

　頭領マスターも男に負けず劣おとらずあっさりうなずいた。

「そうなんです」

　男は笑えみを浮うかべた。よほど疑ってかからなければ本物にしか見えない程度にはわざとらしくない、嬉うれしそうな笑顔だった。

「それで、一つお願いがあります」

「何だい」

「僕はもともと戦いは好きではありません。不慣れなもので、無様な姿をさらしてしまうかもしれない。こう見えて、僕はいいかっこしいでしてね。そういうところは、できれば他ひ人と様さまにお見せしたくないのです」

「終わるまで、ここで待っていろということかい」

「いいですか？」

　男は頭領マスターとアクゼルを交こう互ごに見た。頭領マスターは異存がなさそうだが、アクゼルは例の嘘うそくさい咳せき払ばらいをして、縦割れの唇をかすかにゆがめた。明らかに不満そうだ。

「ルールという形で、必ず観戦しなければならぬ、と明確に規定されておるわけではございませんが──」

「勘かん違ちがいしてはいけません」

　男は顎あごを上げ、人差し指を立てて左右に振ってみせた。

「僕たちはべつに、あなたを喜ばせるためにやっているのではありませんよ」

　アクゼルは無言で肩かたをすくめた。肩と呼べるものがありそうな体形でもないのだが、器用な生き物だ。そこがかなり不気味なのだが、男は気にするそぶりも見せなかった。

「ともあれ、ルール違い反はんにはならないとのことですし、そういう方向でお願いします」

「たってのご希望ということでございましたら、やむをえますまい。わたくしアクゼルとしましても、断腸の思い、苦く渋じゆうの決断ではございますが」

「感謝します」

　男は、ははは、と笑いながらアクゼルの肩（らしき部分）を叩たたいた。平然とそんなことをしてしまうあたりも、普ふ通つうの神経の持ち主ではない。アクゼルもまさか敵にボディータッチされるとは夢にも思っていなかったのだろう。あとずさりしかけて、なんとか踏ふみとどまったというかんじだった。

「では、またあとで」

　男は身をひるがえして扉とびらの向こうへと足を踏み入れた。

　扉は男の手によって閉とざされた。

「──二人だけなら、まだしも、ね」

　扉を閉めてから、ひとりごちながら背中に荒あら縄なわでくくり

つけてあった大おお斧おのを外した。

「僕は何なに故ゆえこんなふうに思うのか。それがつまり、仲間ということなのでしょうか」

　人ひ間とは、げにおもしろきものですね。

　同じニンゲン──ヒトを名乗るもの同士でも、ずいぶん違う。

　ヒトの世界にいる生き物は皆みな、ヒトに分類されるので、ヒトは人ひ間との世界に存在する生き物ぜんぶをひっくるめたよりも多種多様だが、大きく二つに分けられる。

　すなわち、帝てい王おうから爵しやく位いと領地を与あたえられた貴族と、それ以外だ。

　貴族は自身の領地内にいるヒトすべての生せい殺さつ与よ奪だつの権を握にぎっているが、保証は何もない。貴族はみずからその権力を死守しなければならないのだ。貴族ではないヒトが貴族を殺せば、爵位と領地とを奪うばうことができる。それは帝王が定めたもうた大法規オーバーロウに則のつとった合法的な下げ克こく上じようだ。貴族が貴族を攻せめ滅ほろぼして、その爵位と領地とを我がものにすることも認められている。ヒトには人ひ間との寿じゆ命みようにあたるものが存在しない。たいていのヒトは、ヒトに殺されるまで生きる。ヒトの世界は人ひ間との世界よりも広大だが、単純だ。そこにあるものは、支配と被ひ支配、そして闘とう争そうだ。野心を滾たぎらせる若く愚おろかなヒトは、いつか帝王の首級を挙げる日を夢見る。たしかに、大法規オーバーロウには反逆罪の規定はない。そもそもヒトの世界には罪などというものは存在しない。帝王を殺したヒトは新たな帝王となるだろう。それが現実的にはかぎりなく皆かい無むに近い可能性であったとしても、ゼロではない。

　地じ獄ごく帝てい国こく開かい闢びやく以来、一度たりとも帝王位を簒さん奪だつしたものがいないとしても、これから先も現れないとは断言できない。

　帝国の辺境では、今日も新たな開かい拓たく者しやが下の下の爵位をたまわっていることだろう。

　辺境よりもやや中央寄りの地帯では、貴族同士が殺しあい、ま

た、貴族にならんとするものが貴族の命を虎こ視し眈たん々たんと狙ねらっている。

　彼らは帝位に手をかけるため、その最後の足がかりとして、ついには公こう爵しやく位を目指そうとするだろう。

　帝国には大公爵をふくめ六十六人の公爵がいて、彼らの領地は帝都をふくむ帝王直ちよつ轄かつ地ちをぐるりと囲んでいる。大公爵や公爵たちの領地は、他の貴族領とは比べものにならないくらい広く、豊かでもあるが、仮に六十六人が一いつ致ち団結したとしても、帝王子飼いの地じ獄ごく軍六百六十六師団と大地獄竜りゆう騎き兵へい団、それから大邪竜兵団をあわせた戦力には及およばない。また、帝王は決して帝都の中心部にある居城〝世界のワールド終わりエンド〟から動かない。迷路のごとく複雑に入り組んでいる、それどころかまさしく迷路そのものと言ってもいい〝無限歩廊ノーターミナス〟を「黒い太陽ブラックホールが七度寝ね入いるまで」歩かなければ到とう達たつできない世界のワールド終わりエンドの最深部〝終わりオーバーの果てエンド〟に帝王陛へい下かはおいでになる。そう深く考えずとも想像がつく万ばん難なんを排はいして、我こそは新たなる帝王にならんと挙兵した愚おろ者かものはかつていない。一人もいない。

　絶対不変、不ふ壊え不ふ朽きゆう不死の帝王陛下はもちろんだが、公爵位にしても、大動乱があった一千年前以降、その顔ぶれに変化はないのだ。

　帝国の中心はあまりにも堅けん固ごだ。

　驚おどろくべきことに、地上のエルデンより平へい穏おんですらある。

　そこは腐くさった花が咲さき乱れる帝王の帝王による帝王のための楽園だ。

　実態を知ってしまえば、興味をそそられるものは何もない。ただ帝王の腕かいなに抱いだかれて腐った花を愛めでることができるものだけが、そこで安らげる。

「僕には無理でしたが」

　彼は大斧の柄つかで床ゆかを突つきながら歩いた。第五勝負フイ

フスゲイムの会場は立方体に近い。幅はば、奥行き、高さはそれぞれ二十五メーテルくらいだろうか。壁かべや床、天てん井じようは黒っぽい岩だ。なめらかではなく、天井から吊つりさげられた籠かごの中で燃えている篝かがり火びの明かりの加減もあり、無数の虫がうじゃうじゃとのたくっているようにも見える。

　相手の参加者プレイヤは、篝火を吊つるしている鎖くさりにしがみついて、彼を見下ろしていた。

　人ひ間とのようだ。

　半分は。

　もう半分は違う。

　いや、あれを半分というべきなのか、どうか。

　首に例の首飾りチヨーカーを嵌はめた三十年配の裸はだかの男が、身体からだじゅう黒と茶の斑まだらの獣じゆう毛もうに覆おおわれた人ひ間とならざる異形のものを背負っている。あれをそんなふうに説明したら、不誠実のそしりをまぬがれないだろう。

　なぜなら、男と異形のものとは明らかに不可分の関係だった。

　ようするに、物理的に融ゆう合ごうしてしまっていた。

　獣毛に覆われた異形のものは、狼おおかみのように口が長いが、毒々しく濁にごった緑色に輝かがやくその目は昆こん虫ちゆうのような複眼だ。

　その顎あごの下に人ひ間との、まず平均より遥はるかに整っていると言っても嘘うそにはならないような、苦み走ったいい男の顔があった。

　顔だけでなく、男の身体つきは頑がん健けんそうで、そのまま彫ちよう像ぞうにしてもよさそうなくらい立派だ。ただ、異形のものと一体化しているせいで、人ひ間との美的感覚からすると、グロテスクとしか言いようがないだろう。

　それに、一人ではない。

　男の下半身の、本来なら性器があるべき場所に、被ひ毛もうのか

わりに鱗うろこに覆われた鹿しかのような生き物の顔が生えていた。

　その生き物は男の腰こしから脚あしとほとんど同化している。

　複眼の狼はSxrendwalと呼ばれる種族だ。

　鱗鹿はGuxnzayllеだろう。

　両方ともヒトだ。

「なるほどね」

　彼は大おお斧おのを左手で支え持ち、右手の人差し指で眼鏡めがねを押しあげた。

「一つ謎が解けたような気がしますよ。ですが、これはやっぱり、あの人には見せられないな。できれば見せたくない。まあ、あの人とベティだけならまだしも──あの子がいますしね。余計なお世話なのかもしれませんが。しかし、あらためて、どうして僕がこんなふうに思うのか。うーん。仲間だから、ですかね。仲間。僕もようやくわかってきたのかな。いよいよこれは、あのとき、あの場所でエリオットと出会った幸運に感謝しないといけませんね」

「さっきから何を一人で喋しやべっている」

　男は口を開けたが、声を出したのは男ではなかった。男の上うわ唇くちびると下唇の間から何かがにゅっと顔を出している。それは紫むらさき色いろのぬらぬらした管のようなもので、その先せん端たんにぱっくりあいている穴が声にあわせてうごめいていた。声の主はあの管、いや、あれもまたヒトだ。

「Yexxbrorngですか」

　彼がつぶやくと、それに応じるかのように男の耳の穴から、鼻の穴から、そして眼球を押しのけるようにして目め尻じりから、目め頭がしらから、紫色の管がにゅっと出てきてゆらゆら揺ゆれた。

「貴様、なぜ我のことを知っている」

「上手ですね。人ひ間との言葉が」

「下等な言語だ」

「そういえば、Yexxbrorngの公こう爵しやくが一人いますね。操り糸のパペテイエル・公爵ヴエリオンカラミ・モーリタルニ。あなたがたは見かけによらず頭がいいんでしたっけ」

「愚ぐ弄ろうするか。人間ごときが」

「愚弄ぉ？」

　彼は、ははは、と笑った。

「そのとおりです。僕は大好きなのですよ。馬ば鹿かにするのも、からかうのもね。とりわけあなたのような下等生物をおちゃらかすのは楽しい遊ゆう戯ぎです」

「貴様……」

　男が首をひねった。もっとも、喋っているのは依い然ぜんとしてYexxbrorngだ。

「人間ではないな」

「ようやくわかりましたか。策士であらせられるモーリタルニ公と違ちがって、ずいぶん鈍にぶいようですね」

「まるで知っているかのような口ぶりではないか」

「さあ、どうでしょうねえ。ところで」

　彼は男に向かって手招きしてみせた。

「もういいかげん下りてきなさい。下品な下等生物に見下ろされたところで、頭上を羽虫が飛びまわっているのと変わりませんから何ら痛つう痒ようを感じませんが、首が疲つかれてかなわない」

「命令するか、貴様……！」

　男が顔色を変えた。どうやら喋るのはYexxbrorngが担当しているらしいが、人間である男に意識がないわけではないのか。その場合、Yexxbrorngに同調しているのだろうか。あるいは、完全に支配されているのか。

いろいろな意味で興味深いが、ともかく男はつかまっている鎖くさりから手を放すのではなく、力ずくで鎖を引きちぎった。もちろんその結果、男は落下した。鎖はかなり長かったが、それでも床ゆかまでの高さは十メーテルほどもあっただろう。まず金属でできた篝かがり火びの籠かごが石の床に叩たたきつけられて火の粉が舞まい散り、その直後に着地した男は事もなげだった。

男の下半身と同化しているGuxnzayIleは頑健にしてしぶといことで知られ、性質は残ざん虐ぎやくだが従属的なので、地じ獄ごく軍六百六十六師団に所属しているものも多い。

男の上半身と一体化しているSxrendwalは狡こう猾かつで俊しゅん敏びん、何より凶きよう暴ぼうだ。

アクゼルをはじめとしたあの異形のものどもを目にしたときから予想していたことではあるが、こうしてはっきりした形で見せつけられると、さしもの彼も軽い戦せん慄りつを覚えた。

人ひ間ととヒトが融合している。

「それはルヴィー・ブルームという男の仕し業わざなのですかね」

「我らの主あるじの名を軽々しく呼ぶな」

「主ぃ？」

肋ろつ骨こつと肺の間に何か粘ねん液えき質のものが流しこまれでもしたかのようだ。それはじわじわと肋骨や肺や心臓に染しみこんでこようとする。どうやら毒物らしいが、致ち死し性ではないのかもしれない。痛みというよりも、これは──不快感か。不快？　僕が、不快。この僕が。

深いですねえ。

うん。

十点といったところですかね。

むろん、百点満点で。

そんなつまらないダジャレが浮うかんでくるくらい、今の僕は不ふ愉ゆ快かいです。

　仲間だから、ですかね。

「飼い馴ならされたものだ」

「黙だまれ！」

　男は鎖を振ふりまわしはじめた。

　鎖の先には篝火が燃える金属の籠がくくりつけられている。

「主は我らに力を与あたえてくださったのだ！　一人一人では持ちえなかった力だ！　力こそが真実……！　力のみが価値……！」

「どうも心に響ひびいてこない言葉の数々ですねえ」

「貴様の心を打ってやる義理はない！」

「たしかに」

「かわりに貴様の肉体を粉こな微み塵じんに打ち砕くだいてくれよう！」

「おっ。ちょっとだけうまい」

「×××××……！」

　ヒトの中には独自の言語を持つ種族もある。Yexxbrorngはそのうちの一つだ。あいにく彼には理解できなかったが、何か罵ののしり言葉でも吐はき捨てたのだろう。

「ふざけおって！　だがしかし、そのように余裕ぶっていられるのもここまでだ！　我が名はナキアージュ……！　未来の公爵だ……！　我が前に跪ざまずけ……！」

　ナキアージュとやらの怒ど号ごうとともに籠が飛んできた。

「あなたが」

　彼は大おお斧おので無造作に籠を叩き斬きった。篝火も両断されて炎ほのおが撒まき散らされた。

「公爵ですって？　無理、無理」

「──殺シヤアアアアアアアアアア
アァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァッ……！」

　その雄お叫たけびは複眼狼おおかみSxrendwalの口から発せられたものらしい。下か肢しの鱗鹿Guxnzaylleは長ちよう駆くに耐たえる持久力が持ち味のはずだが、そのわりにはなかなかの瞬しゆん発ぱつ力りよくだった。ひょっとしたら、男の身体能力がそれなりに高いのかもしれない。ナキアージュは鎖を放り投げつつ猛もう然ぜんと駆かけだして突つっこんできた。彼は適当に大斧を振るってこれを迎むかえ撃うったが、あたらなかった。かわされた。

「おっ……と？」

　ナキアージュは大斧の間合いを正確に見切っていたようで、そのぎりぎり手前でぐっと体勢を低くした。かなり低かった。腰こしよりも低い。普ふ通つうであれば倒たおれこんでしまいそうだが、そうならなかったのはSxrendwalが男の肩かたから胸に垂らしていた二本の腕うでのおかげだ。ナキアージュは今や四つ足で走行していた。なおかつ男の両腕は自由だった。こうして見るとそれなりに便利そうだが、美しくはなかった。醜みにくい。なんて醜しゆう悪あくな生き物だろう。

　ナキアージュはもう目と鼻の先にいる。

　Guxnzayllеの前まえ肢あしが力強く床を蹴けり、Sxrendwalの後肢が踏ふんばって、ナキアージュの身体が跳はねるように起きあがった。

　その勢いを乗せた男の右拳が、唸うなりをあげて突きあげてきた。

「あ……」

　拳は彼の顎あごをとらえた。

　たいした衝しよう撃げきだった。

　その衝撃は顎から脳天までを貫つらぬいた。

　頭頂部から後頭部のあたりで何かが破は裂れつするような感覚があって、大斧の柄つかから手が離れ、身体全体が浮きあがった。

　浮ふ揚ようはやがて落下に転じて、最初に床についたのは足だったが、彼は自分自身の体重を支えることができなかった。まるで力が入らず、足首と膝ひざはふにゃふにゃで、腰までかくんと折れてしまい、尻しりを打ちつけた直後に背中を、また、首も芯しんがないような状態で、頭まで硬かたい床に強打する羽目になった。なんだかものすごい音がした。一いつ瞬しゅん、目の前が真っ暗になったようだが、すぐに回復した視力は、しかし、不完全きわまりなく、ゆがみにゆがみ、ぼやけにぼやけ、揺ゆれに揺れて、何がなんだかさっぱりわからない。どういうわけか、彼は何か言おうとしていた。その努力の結果が、ほふ、ほふ、ほふ、という意味不明の音だった。ほふ、ほふ、ほふ。どうやら顎の関節がちゃんと機能していないらしい。呼吸も不自由だ。

「口ほどにもない」

　Yexxbrorngがそう言い、SxrendwalはＯｏｏｏｏｎｎｇと嘲あざ笑わらうように叫さけんで、GuxnzaylleがＧｙｈｙｙｙｙｙｙと誇ほこらしげに嘶いななき、男が顔に笑えみを浮かべて肩を揺らした。人ひ間とが一人とヒトが三人、あわせて四人が何らかの方法によって結合しているのは見たとおりだとしても、精神はどうなのか。分ぶん離りしているのだとしたら、どう折りあいをつけるのだろう。相そう互ごに干かん渉しようしあえば、さまざまな局面で互たがいが障害となりかねない。それとも、じつは一心同体なのか。だとしたら、ナキアージュとしての人格はどのように形成されたのだろう。四人のうちの誰だれかの人格がそのままナキアージュとなったのか。あるいは、四人の人格が人じん為い的もしくは自然に統合されて、それぞれとはまったく別のナキアージュの人格ができあがったのか。

　興味をそそられるテーマだ。

　あなたは誰ですか？

　わたしはいったい何ものなのでしょう？

　その答えを手に入れられぬものたちが、今日ものたうちながら行く先も方向すらわからず、ただがむしゃらに進もうとしている。

　僕にもわからないのです。

　僕は何ものなのか。

　事実と事実を繋つなぎあわせて、それらしく見える回答を導きだすことはたやすいのだが、どうしてかそれが正しいとは思われない。

　僕が何なのかはわかっているが、それが僕のすべてではないように感じられてならないし、まだ見ぬ何かを見るたびに、まだ聞かぬ声を聞くたびに、まだ知らぬ場所を訪おとずれるたびに、僕はもっと違ちがう何かになれそうな予感に打ち震ふるえて、それでも振ふり返ると、僕自身は何も、何一つ、少しも変わってなどいないのだという現実に愕がく然ぜんとするしかなかった。

　あなたはなぜこんなところへ？

　そう問うた僕に、エリオットは不思議そうに訊きき返してきた。

　まだ見知らぬ土地があれば、そこへ行きたいと願うのは至し極ごく当然じゃないか。

　ああ、友よ。

　あなたは今もどこかを旅しているのだろう。

　僕もまた、僕なりの旅をしているのです。

　見るだけではない。聞くだけではない。

　この旅もなかなかおもしろいですよ。

　いつか再会することがあったら、あなたはあなたの旅の話をしてください。僕は僕の旅の話をしましょう。

　この旅のおかげで、僕はあなたを友と呼ぶことができる。

　驚おどろいてください。

　きっと驚くでしょう。

　僕にはなんと、仲間がいます。

「ほふ、ほふ、ほふ」

　そうしてみると、彼は、地上でヨグ・フローヨ・メイドルフ・サイケングレンマイセルヒを名乗っている一つの生命体は、何か言お

うとしていたのではなかった。笑おうとしていたのだ。その笑い声には複数の意味がこめられていた。一つには、友を懐なつかしんでこぼれる笑いであり、もう一つには、ナキアージュという名の無残なまでに無知蒙もう昧まいで愚おろかで哀あわれな生き物に対する嘲ちよう笑しようだった。

「思いのほかたやすくつまらぬ仕事だったが」

　ナキアージュがGuxnzaylle同然の右足を上げた。

　彼の頭部を踏み潰つぶすつもりのようだ。

「首しゆ尾びよく片づけることができたなら、地じ獄ごくへ戻もどってもよいと主が仰おおせになっている。まずは辺境で木こっ端ぱ貴族を血祭りにあげ、領土と爵しやく位いを我が手に！　百年のうちに必ずや公爵までのぼりつめてみせよう……！」

　百年。

　人ひ間との世界では時の流れがゆるやかだ。

　百年、か。

　短いようで、長い年月だ。

　悠ゆう長ちようなことだ。

　ナキアージュの右足が彼の眼鏡めがねを踏ふんづけた。

「あーあ」

　むろんレンズは粉々になり、フレームはぺしゃんこになった。

「お気に入りの眼鏡なのに、ひどいことをしますね」

　ナキアージュが顔を上げて、呆ぼう然ぜんと首を巡めぐらせた。

　おそらくナキアージュはしっかりと目もく撃げきしたはずだ。目で見ただけではない。眼鏡をかけた男の頭部を粉ふん砕さいしようとしたナキアージュの右足がとらえたのは、その眼鏡と石の床ゆかだけだった。まるで期待はずれの手て応ごたえ、いや、足応えだっただろう。どうしてそんなことが起こったのか。その瞬しゆん間か

ん、何があったのか。ナキアージュは認にん識しきしているはずだ。それにもかかわらず、何がなんだかわかっていない。ようするにそれは、ナキアージュが少なくともヒトとしては悲しいほどに世間知らずで浅はかで愚かだからだ。

　ナキアージュの右足の下には壊こわれた眼鏡が、その足あし許もとには首飾りチヨーカーと衣類が転がっている。

　彼はいない。

　そこにはいない。

　ここにいる。

　ナキアージュの周りで飛び交かっている、赤と黒の、白と緑の、黄と橙だいだいの、銀色の、金色と黒と赤の、青の濃のう淡たんの、紫むらさきと黒の、黄土色と褐かつ色しよくの、紫の、黄と青の──色とりどりの、数百、数千、それ以上の、鱗りん粉ぷんと鱗毛で覆おおわれた葉のような二対の翅はねを持つ生き物、それは人ひ間とが蝶ちようと呼ぶ生き物に酷こく似じしているが、まぎれもなくAxxfflamanddraというヒトの一種族だ。

　もっとも、Axxfflamanddraがヒト前で蝶の群れのごとき真の姿をあらわにすることはめったにない。それはAxxfflamanddraという種族の習性であるといってもいいだろう。

　Axxfflamanddraは偽いつわり欺あざむくものだ。

　完かん璧ぺきな偽ぎ装そう、擬ぎ態たいこそがAxxfflamanddraの身上だ。

「あまりに擬態がうますぎるのも考えものですが」

「×、×××……」

　ナキアージュはかなりうろたえているようだ。混乱しているようにさえ見える。ヒトとして、まさかAxxfflamanddraを知らないということはないだろうが、知識が頭の中にあっても、それを目の前の現象にちゃんと対応させせることができないのかもしれない。あるいは、そうなのではないかと疑う気持ちはあっても、断定できないのか。

　愚ぐ劣れつきわまりないが、理解できなくもない。Axxfflamanddraはヒトの中でも珍めずらしい種族としてよく知られているはずだ。その数は決して多くない。それどころか、そうとう少ない。さまざまな理由によって、殖ふえる見込みもない。

　そのAxxfflamanddraが、どうしてこんな場所にいるのか。

　どうしても何も、実際いるのだから仕方ないのだが、愚ぐ者しやはいつもそうして驚きよう愕がくと当とう惑わくの中ではかない命を握にぎり潰され、あえなく果てる。

「正直なところ、僕としてはそうおおっぴらにしたいわけでもないのでね。見ーたーなーというやつです」

「な、何も……何も、見ていない！　本当だ！　ほら！　このとおり！」

　ナキアージュは両手で男の顔の目を覆った。見れば、SxrendwalとGuxnzayllеも目をつぶっている。どうやら、ようやく状じよう況きようを把は握あくして、腹を決めたらしい。ヒトの世では、弱者は強者に逆らうだけ無む駄だだ。無駄を承知で挑いどむか、死という最悪の結果を回かい避ひするために全力で逃にげるか、這はいつくばって忠誠を誓ちかうか。見み栄えも外聞もかなぐり捨てて無様に命いのち乞ごいをしているだけにせよ、そう見せかけて何かを企たくらんでいるにせよ、ナキアージュは生きのびるために手を打とうとしているのだろう。しかし、残念ながら、もう遅おそい、と言いたいところだが、遅いも早いもない。

「嘘うそはいけませんよ。見えすいた嘘は」

　蝶の群れがナキアージュの周りから離はなれて一いつ箇か所しよに集まった。

　擬態はAxxfflamanddraの習性だ。

　一瞬で完成する。

「もともと戦いは好きではないのです。何をどうすればいいのかよくわからない。ほとんど見様見み真ま似ねです。そんなわけなので、姿も真似てみることにしますよ。これなら、いかにも、といったかんじがするでしょう？」

身の丈たけ二メーテル以上。肩かた幅はばも一メーテルをゆうに超こえている。隆りゆう々りゆうと盛りあがって筋張った筋肉を覆う鉛なまり色いろの皮ひ膚ふは硬かたくて分厚い。小山のような首にのっかっている頭はさながら頑がん丈じような兜かぶとを被かぶっているかのようで、その左右から二本の湾わん曲きよくした角が堂々と突つきでている。

顎あごはどこまでもたくましい。鋼はがねのごとき歯は二列をなして生えていて、後列は嚙かみしめ、嚙み砕くだいて、すり潰つぶすために、前列は食いこみ、切り裂さくために、それぞれの役割に適した形状を備えている。

双そう眼がんには青く猛たける炎ほのおを宿していた。

鼻び腔こうから吐はきだされる息はまるで突とつ風ぷうのようだ。

「Zeorxxgangd」

男の口から突きだしている紫むらさき色いろの管みたいなYexxbrorngが呻うめくようにつぶやいた。男は手で目をふさいでいるし、SxrendwalとGuxnzaylleもまだ瞼まぶたを閉じているが、Yexxbrorngはちゃんと見ていたようだ。AxxfflamanddraがなかなかぴんとこなかったYexxbrorngも、Zeorxxgangdはさすがにすぐわかったのか。

当然といえば当然だ。

地じ獄ごくでZeorxxgangdを知らぬものはいない。

Zeorxxgangdは地獄軍六百六十六師団中の〝地獄の炎ヘルブレイズ〟、〝地獄の風ヘルガスト〟、〝地獄の雷ヘルサンダー〟の各殲せん滅めつ師団を構成する種族で、帝てい王おうの手足とも目されている。帝王の威いを借る狐きつねとして忌いみ嫌きらわれてもいるが、Zeorxxgangdに道を譲ゆずらぬものはそうそういないだろう。彼らはたしかに命じられれば帝王の尻しりの穴まで喜んで舐なめる。ただし、狐などではない。彼らはただひたすら血と肉とを求めて飽あくことなく戦いつづける狂きよう戦士であり、だからこそ餌えさ代わりにその戦いを与あたえてくれる帝王に嬉き々きとして仕えているのだ。

Zeorxxgangdと化した彼は悠ゆう然ぜんと大おお斧おのを拾いあげた。ヨグ・フローヨ・メイドルフ・サイケングレンマイセルヒを名乗る人ひ間との形態をとっているときの彼にはいささか大きすぎたが、今はちょうどいい。まるであつらえたように鉛色の手に馴な染じむ。彼はZeorxxgangdになりきって鋼鉄の胸きよう甲こうに等しい筋肉に鎧よろわれた胸を反り返らせ、思いきり吼ほえてみた。

ＢＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＷＷＷＷＷＷＷＷＷＷＷＷＷ……！

我ながらとんでもない大音声だった。Zeorxxgangdの軍団が発する鬨ときの声は地獄の業ごう火かであり、暴風であり、雷らい鳴めいであると言われているゆえんだ。その叫びシヤウトは聞くものの精神を激しく揺ゆさぶって打ちすえ、驚愕させて動どう揺ようさせ、怖おじ気けづかせて弱らせる。そんなことはヒトの世の常識なのに、愚おろかなナキアージュはまったく心の準備ができていなかったのだろう。あとずさりするどころか、尻しり餅もちをついた。すぐに立ちあがろうとしたようだが、そのときにはもう彼が大斧を振ふりかぶりながら詰つめよっていた。

ＷＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＷＷＷＷＷＷＷＷＷＷＷＷＷ……！

さすがに筋力が違ちがう。

並みの人間にはまともに使えないというしごくもっともな理由から、ほとんど二束三文で売られていた中古の大斧が、Zeorxxgangdと化した彼にとっては包丁同然で、ナキアージュはまな板の上の食材でしかなかった。ただ、Zeorxxgangdはたしかにヒトの中でも屈くつ強きような種族だが、彼は所しよ詮せん、にわか仕込みの似え非せZeorxxgangdにすぎない。本物と比べたらどうか。おそらく標準的なZeorxxgangdにも劣おとるだろう。

つまり、彼が強いのではない。

ナキアージュが弱いのだ。

たしかに、ナキアージュは「一人一人では持ちえなかった力」とやらを持っている。だがそれは、文字どおりの意味でしかない。たとえば、彼ら一人一人の力が１だとしたら、１＋１＋１＋１は当然４である、というだけのことだ。

では、主であるルヴィー・ブルームのおかげで四倍の力をえたナキアージュは、果たして地獄で公こう爵しやくに上りつめられるほどに強いのか。

答えは否いなだ。

彼の見立てでは、そもそもナキアージュの素材となったYexxbrorngもSxrendwalもGuxnzaylleも優ゆう秀しゆうな個体ではない。人間の男性はそこそこ強健そうだが、それ以上でもそれ以下でもないように見える。もし彼ら一人一人がたぐいまれな逸いつ材ざいであれば、話はまた違ってくるかもしれない。ただ、彼らはそうではない。むろん、ルヴィー・ブルームもそんなことは百も承知だろう。それにもかかわらず、ナキアージュを第五勝負フイフスゲイムに送りこんできた。人材不足なのか。そうかもしれない。その可能性は否定できないが、ここはあえて否定するべきだろう。何か別の目もく論ろ見みがあったのだ。人ひ間ととヒトの融ゆう合ごう体たいというおぞましい生き物を、戦力としてではなく、見世物としてこの場に登場させることに、きっと何らかの意味があったのだ。

これは推測にすぎない。あたっている保証はない。

だが、もしあたっているとしたら――、

虫むし酸ずが走る。

傷つけるために。

僕らの頭領マスターを苦しめるために。

たったそれだけのために。

でも、残念でしたね。

僕は気づいてしまった。ここにヒトの気配を感じた。これで僕はなかなか勘かんがいいほうなのですよ。そして、そちらは気づいていなかった。僕の正体に。まさかこちらに僕のようなものがいるとは思っていなかった。僕は擬ぎ態たいが得意ですからね。騙だますことが、偽いつわることが、欺あざむくことが、好きで、好きで、仕方なくて、それが身についてしまっていますからね。

おかげで、しばらくこうして人ひ間とのふりをしているせいで、

錯さつ覚かくしてしまうことがある。

　僕はまるで人ひ間とみたいだ。

　もう人ひ間ととそう変わらないかもしれない。

　人ひ間ととして生きてゆくことさえ、その気になれば可能かもしれない。

　そうしたいわけではない。

　ただそのように感じられるだけだ。

　人ひ間ととしていることがあたりまえのように感じられる瞬しゅん間かんがある。

　それだけのことだ。

　そんなわけにはゆかないと、僕自身が一番よく知っているのですが。

　Zeorxxgangdと化した彼が大斧を振りおろすと、ナキアージュは紙切れみたいにたやすく斜ななめに両断された。彼はすかさず大斧を手放した。そうして男の頭の上にあるSxrendwalの顔面と男の口から飛びだしているYexxbrorngをわしづみにして、力任せに握にぎり潰つぶした。同時に、丸太よりも太い足で男の股こ間かんから突つきだしているGuxnzaylleの顔面を思いきり蹴けりあげてやった。真っ二つにされたうえ、肝かん心じんな箇か所しよが破は壊かいされたナキアージュの身体からだが床ゆかに倒たおれ落ちた。彼の仕事はまだ終わりではなかった。彼は屈かがみこんで男の手首と足首をひっつかみ、勢いよく振りまわした。十分以上に勢いをつけてから床に叩たたきつけると、砕くだける音が、潰れる音が、飛び散る音がした。彼はもはや残ざん骸がい同然となったナキアージュを無造作に放り投げ、その破は片へんを大きいものから順に、丹たん念ねんに踏ふみ潰していった。あまり愉ゆ快かいな作業ではなかったが、とてつもなく不愉快というほどでもなかった。

　やがてナキアージュは、骨混じりの挽ひき肉にくと獣じゆう毛もうの和あえ物色とりどりのジュースびたし、とでも呼ぶべきものに成り果てた。もう完全に原形をとどめていない。この状態からもとの姿を想像できる者はまずいないだろう。

「まあ──」

　彼は両手をこすりあわせるようにぱんぱんと打ち鳴らすという、Zeorxxgangdの姿にはあまりふさわしからぬ仕し種ぐさをしながらひとりごちた。

「こんなところですかね」

Omenage 897 12th revolution 6th day

サンランド無統治王国首都エルデン・アンダーグラウンドD8

〝怪虫の坩堝ガンズゲイル〟

chapter.10

あふれて止まらぬこの思い

　ボオオオオォォォォォウだのウオオオオォォォォォウだのといった恐おそろしげな雄お叫たけびが聞こえたかと思うと、一転、静かになって、しばらくすると扉とびらが開いた。

　大おお斧おのをかついで出てきたヨグ・フローヨ・メイドルフ・サイケングレンマイセルヒは、なぜか服だけが血まみれで、眼鏡めがねをかけていなかった。ついでに、首飾りチョーカーもしていなかった。首に嵌はめてはいなかったが、左手にぶら下げていた。二つだ。そのうち一つはひしゃげている。いずれかがヨグの首飾りチョーカーで、もう一方は相手の参加者プレイヤから奪うばってきたものなのだろう。

「いやいやいや」

　ヨグは右手の人差し指で眼鏡の位置を直そうとしたが、その眼鏡がない。

「──あ、そうでした。まったく大損害です。お気に入りだったのに。眼鏡がないと、僕の魅み力りよくは大おお幅はば減ですし。ははは。というか、眼鏡以外にはとりたてて特とく徴ちようらしきものがありませんからね。ちょっと自じ虐ぎやく的になってしまうくらい悲しいですが、とりあえず勝ちました」

　アジアンがうなずいて何か言おうとしたが、その前にヨグが手をあげて制した。ただ、ヨグも何か言いかけて口ごもってしまった。

　なんとも微び妙みような沈ちん黙もくだった。部外者が邪じや魔までできないような雰ふん囲い気きが漂ただよってもいた。

　そんなとき、あえて空気を読まずに禁断の場所へと足を踏み入れようとする勇者、いや、無む謀ぼうな魚以上人間未満がＺＯＯにはいる。

　傍はた迷めい惑わくな半魚人は皆みなを見まわして、ひょっとしたらここはわしの出番なんやないか、と余計なことを考えたに違ちがいない。そんな魚顔をしていた。そうして勇んで飛びだそうとした半魚人の襟えり首くびを、ピンパーネルが後ろから引っつかんだ。首が絞しまった半魚人は、ぐえっ、と呻うめいて白目を剝むいた。まるでその呻き声にうながされたかのようだった。ヨグが何か

吹ふっ切れたみたいに唇くちびるの片かた端はしをつりあげてみせた。

「仲間ですからね」

「ああ」

　アジアンはふっと目め許もとをゆるめて、そうだネ、と応じた。

　正直、マリアローズにはそのやりとりの意味がよくわからなかった。わかる必要はないのかもしれない。見たところ、なんとなくだが、アジアンとヨグはどうやら理解しているようだ。きっとそれでいいのだろう。もちろん、疑問はある。とくに、首飾りチヨーカーだ。なぜヨグは首飾りチヨーカーを首につけていないのか。というか、外れるものなのか。外せるのか。問い質ただしたい気持ちもなくはないけれど、今はいい。そんなことはすべて後回しだ。

「おつかれさま」

　ベティがヨグに微笑ほほえみかけてから、ちらりとアクゼルを見た。

　アクゼルはつまらない冗じよう談だんがまるで受けなかったときみたいに肩かたをすくめてみせ、コホンと噓うそくさい咳せき払ばらいをすると、気をとりなおしたように一礼した。

「何はともあれ、おめでとうございます。第五勝負フイフスゲイムも皆みな様さま方の勝利でございます。これで残る勝負ゲイムはあと二つのみ。ですが、この７Ｓとのセブンス七つの・ゲ勝負イムは最後に一発逆転が可能な、デンジャルァァァス・エェェンド・スリリングなゲェェェイムでございます。ゆめゆめご油断なさいませんよう。フフフッ」

「なんか、きみに言われるとむかつくんだけど」

「ムッフフフゥー」

「……てゆうか、何なの、その気持ち悪いクソふざけた笑い方」

「ヒュッフフフムヒヒ」

　どう考えても、何か企たくらんでいるようにしか見えない。

　まあ、アクゼルの様子がおかしくなくても、ここらで気を引きしめなおすべきだろう。やつに言われるまでもなく、もう五つの勝負ゲイムが終わったのだ。しかも、こちらは一人も欠けていない。その覚かく悟ごで臨んだのだし、必ずしも簡単に勝ってきたわけじゃないとはいえ、無敗で、あと二つだ。このままいけるんじゃないか。そんな気持ちなんかこれっぽっちも抱いだいていないと、胸を張って断言できるだろうか。

　少なくとも、マリアローズはできない。

　第一勝負ファーストゲイムは後味の悪さだけが残ったけれど、ユリカが第二勝負セカンドゲイムで華か麗れいに勝利を収めて、自分とピンパーネルが出た第三勝負サードゲイムもなんとか勝てた。それからいろいろあって、なんとなく重荷を下ろしたような気分になり、第四勝負フォースゲイム、第五勝負フイフスゲイムと、いい流れでここまできた。

　このままいけるんじゃないか。

　はっきりとそう思ったわけじゃない。でも、そんなふうに感じた瞬しゅん間かんはたぶんあった。

　とんだ思い違いだ。むしろ、そう言いきってしまってもいいだろう。

　根こん拠きょはある。

　第三勝負サードゲイムまでは、これに参加した者は次とその次の勝負ゲイムに出られないという「二回休みルール」とでも呼ぶべきものが明示されていたが、第四勝負フォースゲイムは一回休みだった。第五勝負フイフスゲイムにはそれすらなかった。ルヴィー・ブルームは、勝負には全員必ず最低一回は参加してもらう、というようなことを言っていたはずだ。最終の第七勝負セブンスゲイムがアジアンとルヴィー・ブルームの直接対決だということは、あらかじめ明言されている。

　以上から推測できることは一つしかない。

　第六勝負シクススゲイムは、こちらの全員、もしくはアジアンをのぞいた全員が参加を強制される。

　つまり、僕らの勝負ゲイムはまだ終わっていない。それはもう言

うまでもないことだけれど、僕個人の勝負ゲイムも終わってなんかいない。これからだ。

　次こそが正念場なんだ。

「それでは、次なる会場へとご案内いたします」

　アクゼルに先導されて第五勝負フイフスゲイムの会場に入った瞬間、その凄せい惨さんな光景と猛もう烈れつな臭しゆう気きに吐はき気を覚えた。ヨグは涼すずしい顔をしているが、間違いなくあの男がやったのだろう。どうしてここまで、というか、どうやって、と思わないでもなかったけれど、訊きかないでおいた。こうしてああしてこうやって、と子細に説明されたらかなわないし、あの男ならこちらがいやがるのを承知で、それどころかいやがらせるために、あえて事細かに解説しそうな気がした。

　会場の、向こうの扉とびらから出る間際、アクゼルがちらりと振ふり返って、やれやれ、能無しのせいで台無しですな、とつぶやいたのが印象に残っている。きっと何かろくでもない企みがあって、それが外れたということなのだろう。ざまあみろ、と思いはしたが、マリアローズの頭の中は次の勝負ゲイムのことでいっぱいだった。

　また戦わないといけない。そう考えるだけで、ひどく落ちつかない気分になっている自分の弱さが情けなかった。だいたい、もし予想が大外れして、第六勝負シクススゲイムに自分が出ずにすんだとしても、自分以外の誰だれかが命を賭かけないといけないのに。それに、いずれにせよ第七勝負セブンスゲイムでは、アジアンが一対一でルヴィー・ブルームと決着をつけないといけないのだ。

　気が抜ぬけていたとは思わないけれど、切せつ迫ぱくしてはいなかった。喉のど元もとに刃やいばを突つきつけられて、少しでも間違えば命がない、さあ、どうする、というような心境ではなかったと思う。

　それじゃダメなんだ。

　もっと集中しないといけない。

　たしかに、終わりは近い。でも、本質的には何も変わってなんかいない。昼飯時ランチタイムの人たちが人質にとられている。僕ら

はやりたくもないこの超最低ＳＵＣＫな勝負ゲイムに無理やりつきあわされている。そうする以外、選せん択たく肢しがないからだ。前進しているように感じられはするものの、果たして進んできた方向が正しいのかどうか。一つ一つの勝負ゲイムに勝とうが負けようが、僕らは結局、アクゼルのあとをおとなしくただついてゆくしかなくて、唯い々い諾だく々だくとそうしている。ようするに、これは自分たちで切り開いた道じゃない。用意された道だ。たどりつく場所は最初から決まっている。決められている。僕らはまんまとおびき出されただけなのかもしれない。

　第五勝負フイフスゲイムの会場を出ると、下りの螺ら旋せん階段が延々とつづいた。螺旋階段といっても、床ゆかを石段状に削けずった螺旋トンネルだが、壁かべの全面にどこか生物的でグロテスクな模様が浮うき彫ぼりにされていたりして、なかなか手がこんでいる。どこかで見た覚えがあると思ったら、魔ま導どう王おう時代に流行した建築様式として有名なクライスト式建築だ。エルデンではあまり見かけないが、カリオサークではクライスト式建築の復古がさかんで、八頭蛇へびと人工臓物の輪りん舞ぶだの、さえずるひび割れた親知らずだのといった名前の奇き妙みような建物がたくさんある。そういえば、喪そう神しん街がいオレストロ深部の造りもクライスト式建築だった。これがクライスト式建築そのものなのかどうか、建築家でもないマリアローズには判断がつかないが、似ているとは思う。

　だとしたら、それは何を意味するのか。

　たとえば、ルヴィー・ブルームがカリオサーク出身だとか。そうだとしても、べつにおかしくはない。ただ、違ちがう可能性も考えられる。あくまで、考えられる、というだけだ。

　ルヴィー・ブルームがクライスト式建築を知っている。つまり、魔導王時代を知っている。その時代から生きている人間だ──なんて、思いつきとしても飛ひ躍やくしすぎている。

　ふと振り返ってトマトクンを見た。どうしてそんなことをしたのか、自分でもよくわからなかった。トマトクンはマリアローズの視線に気づいていないようだ。目があわなくてよかった。なんとなくそう思った。

　トマトクンは何歳いくつなんだろう。

軽い調子で訊いたことはもちろんある。うむ。どうだったかな。そういうことはあまり気にならんほうだから、覚えてないんだが。や、気にしようよ。てゆうか、ふつう気になるし。そういうものか。そういうものだよ。うむ。これからは少し気にしてみるか。だいたいそんなやりとりに終始した。そのうち、そこにはふれないほうがいいのかもしれないと思うようになった。誰だって、話せない、話したくないことくらいあるものだし。こちらとしては、聞かされるぶんにはとくに困らないわけだから、いつか打ち明けたくなったら、話してくれればいい。そんなふうに考えながらも、少なくとも見かけどおりの年ねん齢れいじゃなさそうだとか、ひょっとしたら、びっくりするくらい、とんでもなく長い年月を生きてるのかもしれないとか、思ったり、思わなかったりして。でもさ。だから、それが何？　もしそうだとしても、何かが変わるわけじゃないし。トマトクンはやっぱりＺＯＯうちの園長マスターだし。だったら、べつに知らなくてもいい。無理に詮せん索さくする必要はない。ただ、たまに不思議に思うだけだ。純じゆん粋すいな興味だ。トマトクンはどれだけの時間を、どうやって生きてきたんだろう……？

　階段はまだつづいている。

　このまま果てしなくつづくのではないかとさえ思われる。

　アクゼルの後ろを歩いているアジアンが、顔だけ振り向かせてちらりと視線を送ってきた。とくにそうしないといけない理由があるわけでもないのに、つい顔をそむけてしまった。

　なんだか、第四勝負フオースゲイムの終しゆう了りよう後ごあたりから、まともに話をしていない気がする。

　訊きたかったことは訊いた。知っておくべきことは、ぜんぶ、すっかりとまではゆかないかもしれないけれど、だいぶ教えてもらった。わだかまりなんてまったくない、とは言えない。知るべきことを知ったからといって、責任が消えるわけじゃない。罪悪感はある。でも、だからこそ余計に、今は頭を切りかえてよりいっそうがんばらないといけない。そういう気持ちになっていたはずなのに、どうもダメだ。

　ダメなんて言ってる場合じゃないけど。

　そうだ。なんでとか、どうしてとか、そんなことはあとでゆっく

り考えればいい。だいたい、さっきまで次の勝負ゲイムのことで頭がいっぱいだったはずだ。それでいいんだ。あいつのことなんて忘れてしまえ。や、さすがにそれは無理だけどね。いくらなんでも、忘れるっていうのは。だって──あいつがいなかったら、こんなことに巻きこまれてないわけだし。巻きこまれたとか、そういう考え方をするのもよくないのかな。心構えに、覚かく悟ごに影えい響きようするかもしれないし、だから、もっとこう、能動的に、むしろ、やってやる、やってやろうじゃないか、みたいな。うん。どうせなら、そっちのほうがよさそう。そう考えるべきだ。そう考えよう。



　何しろ、ようやく螺旋階段が終わった。

　その先はまさしくクライスト式建築の特とく徴ちようがありありと表れている広大な歩ほ廊ろうだった。

「趣しゆ味みが悪いな」

鼻をぐずぐずさせながら、マスク越ごしにトマトクンがつぶやいた。突とつ拍ぴよう子しもない恰かつ好こうをしているだけでなく、名前も型破りな我らがＺＯＯの園長マスターにはそう見えるのだろうか。でも、それはたぶん、必ずしも一いつ般ぱん的な評価とは一いつ致ちしないだろう。生物の形態的な特性をとりいれたクライスト式建築はたしかに異様に感じるが、醜しゆう悪あくでは決してない。その奇き怪かいさは美しさや荘そう厳ごんさを表現するための要素として巧たくみに生かされている。カリオサークあたりでよく見られるへたくそな模も倣ほうはかぎりなく超最低ＳＵＣＫに近いけれど、この歩廊はぜんぜん違う。

ゆっくりと漂ただよっている大小さまざまな光球の正体はいったい何なのか。いずれにしても、あの光球がもたらすやわらかで不安定な光が、歩廊全体を薄うす明あかるく揺ゆらめかせていることは間違いない。

この床は平らだ。それなのに、平らに見えない。浮き彫りされた人間の手足のような、あるいは入り乱れた草花のような紋もん様ようが遠近感を狂くるわせている。近くのものが遠くに見えて、遠くのものが近くに見え、それらが交こう錯さくして、平へい坦たんではないかのような錯さつ覚かくを与あたえるのだ。

壁も同じだ。床と垂直にそびえ立っているのだと思うが、無数の手をのばして迫せまってくるような、もしくは今にも崩くずれかかってきそうなかんじがしてならない。それでいて、じっと眺ながめていると、吸いよせられ、どこかに連れ去られてしまいそうな心地ここちがしてくる。

どれだけ天てん井じようが高いのだろう。途と方ほうもなく高いようにも、意外とそうでもなく、背せ伸のびをすれば届きそうにも思える。そんなことは絶対ありえないのに、跳とびあがれば、この身体からだはあの天井に向かって真っ逆さまに落下してゆくのではないか。

正直、圧あつ倒とうされた。アンダーグラウンドに、しかもこの怪かい虫ちゆうの坩堝るつぼガンズゲイルにこんなものがあったはずはない。造ったんだ。その事実に打ちのめされていた。僕らは、でも、神さえ向こうに回して戦ったんだ。そして勝った。そうやって自分を勇気づけようとしたけれど、ロシュと渡わたりあってとどめを刺さしたのはトマトクンだ。今回、トマトクンは観戦者でしかない。いざとなれば、という思いはある。ただ、そうなって欲しく

ない。その状じよう況きようは考えるだに最悪だ。楽観は戒いましめるべきで、常に最悪のケースを想定して行動するべきなのかもしれないが、とりかえしのつかないことなんてごめんだ。どうあってもそうならないように、まずは最大限努力するべきだ。その線は譲ゆずれない。譲ってはいけない。

　少しだけ気持ちが落ちついた。

　この歩廊は距きよ離りすらよくわからないが、歩測は裏切らないはずだ。マリアローズの歩ほ幅はばと歩数からすると、もう約百二十メーテル歩いた。それでもまだまだ先がある。その向こうだ。

　長大な歩廊にも果てがあった。

　背筋に悪お寒かんが走って、全身の肌はだが粟あわ立だった。

　我ながら、すごい、と思った。直接会うのはこれが二度目だ。よく知っているわけでもない。それなのに、これだけ離はなれていても、ものすっごく、めっちゃくっちゃむかつく。

　あの男は、幾いく千せん幾万の多種多様な生き物がうずたかく折り重なって絡からみあい、一つの形をなしているかのような岩の台座に腰こしを下ろしていた。

　白い。禍まが々まがしい目と唇くちびる、それから両手の爪つめ以外はあくまでも白い。

　ふつう白という色は、清純、純潔といった言葉と結びつく。正義の象しよう徴ちようとして用いられることも多いが、あの男の白はひどく傲ごう慢まんだ。どこまでも白い、ねっとりした真っ白い闇やみのようだ。白い闇で何もかもを、どこまでも白く白く染め抜ぬこうとしている暴ぼう虐ぎやくな侵しん略りやく者しやだ。

　あいつの背中が明らかにこわばっている。すぐそばにいるベティがあいつの腰のあたりにそっと手でふれた。わかってるんだ。そりゃそうだよね。ヨグは眼鏡めがねがないのにまた眼鏡の位置を直そうとしたようだ。誰だれかがため息をついた。おそらく、緊きん張ちようをときほぐすためのため息だ。トマトクンがくしゃみをして、鼻をかむ音が聞こえた。サフィニアがすかさずティッシュを差しだしたのだろう。へっ、と吐はき捨てるように言ったのは飛燕フエイヤンに違ちがいない。ユリカはかなり気合いが入っているよう

だ。荊王ジンワンは、少なくとも傍はた目めには平然としているように見える。無理をしているのではないとしたら、ピンパーネル並みの平常心だ。

　僕は……？

　大だい丈じよう夫ぶだ。

　怖こわいけれど、これくらい平気だ。

　何より、クソ生意気にもあんな場所で偉えらそうにふんぞり返っているクモソウ野フ郎オに吠ほえ面づらをかかせてやるためなら、結構がんばってしまえそうな気がする。

　アクゼルが足を止めてシルクハットを脱ぬぎ、恭うやうやしく跪ざまずいて頭こうべを垂れた。

「ご主人様。アンナクロマルベルラスゼルフォンス、ただいま参り越こしました」

「ひどいものだな」

　あの男の声は反はん響きようしつつ四方八方から聞こえてきた。

「惨ざん敗ぱいだね。まさか一つも勝てないとは思っていなかったよ。どうやら私の見込みが甘かったようだ。想像以上だよ。必ずしも悪いことではないがね。むしろこれは嬉うれしい誤算と言うべきかもしれないな」

　笑っているのか。そうらしい。あの男は間違いなく笑っている。その低い笑い声にあわせて歩廊全体が揺れているかのようだった。でも、いったい何がおもしろいっていうんだ。五勝零ぜろ敗はいだ。とりあえず今のところはこっちが完勝している。余裕ぶっているだけか。虚きよ勢せいか。

　何か硬かたいものをゴリゴリこすりあわせるような音が聞こえた。

　驚おどろいて振ふり返ると、トマトクンが黄玉トパーズの両りよう眼めをぎらぎらと光らせていた。

　もしかしたら、あれは歯は軋ぎしりの音だったのかもしれない。

「貴様らの慰み者じゃないんだぞ、ネクス・アーク」

「釘くぎを刺したのに出しゃばってきたあげく、そんな様ざまでくだらぬことを言って私を失望させないでくれないか、大量の死の上に立つ者よ。いや──」

　こんな形で知りたくはなかった。

　こんなことがなければ、いつか本人が教えてくれたに違いない。

　きっと、ある日突とつ然ぜん、たとえばみんなでご飯を食べている最中なんかに、ああ、そういえばな、と、本当に偶ぐう然ぜん、思いだして、なんとなくその気になった、というような口調で、ひょっとしたらそれは照れ隠かくしかもしれないし、いろいろな事情からそういう形しかとれなかったのかもしれないけれど、何かの拍ひよう子しで、今さらといえば今さらなんだが、まあ、いいか、みたいな、そんな気になったら、自分の口から明かしてくれたはずだ。

　これで、あの男を憎にくむ理由が一つ増えた。

　あの男の腐くさった口が発音したせいで、僕らの大切な園長マスターの名前が汚けがれてしまったらどうしてくれるんだ。

「Sir Diealot Maxpain」

　サー・ディオロット・マクスペイン。あの男はトマトクンをそう呼んだ。

　ディオロット。

　ディ・オ・ロット。

　大量のダ死のイ・上にア立つ者・ロツト。

　大量の死の上に立つ者。

　大マいクなスるペ痛イみン。

　それは、なんて──、

　重苦しい、引きずらなければならない枷かせのような、深く打ち

こまれた杭くいのような、消しがたい刻印のような、悲しい、痛ましい名だろう。

　トマトクンは大きなため息をついた。片方の眉まゆがつりあがって、目は伏ふせられている。マスクをしているせいで、見てとれる表情の変化はそれだけだが、ものすごく怒おこっているというかんじはしない。どちらかといえば、呆あきれているようだ。そんなことで俺に揺ゆさぶりをかけられるとでも思ってるのか。馬ば鹿かじゃないのか。たぶんそう思っているに違いない。まったくそのとおりだ。だからどうしたっていうんだ。どんな名前だろうと、過去に何があろうと、トマトクンはトマトクンだ。僕らの園長マスターだ。トマトクンは細めた両眼をふたたびあの男に向けた。

「哀あわれなやつだ」

「今のきみに哀れまれてもね」

「そういうところが哀れだと言ってるんだがな。貴様にはわからんのだろう」

「どうやらきみは、ずいぶんつまらぬ男に成り下がってしまったようだ。興が冷めたよ」

「それで二度と貴様の面を拝まずにすむのなら、俺としてはありがたいが」

「フッ」

　あの男は鼻先で嗤わらうと、少しの間、黙だまっていた。もしかしたら、内心、トマトクンとのやりとりでいくらか動どう揺ようしたのかもしれない。それを鎮しずめるために、いくばくかの時間が必要だった。そうだとしたら痛快だけれど、やはり状じよう況きようは変わっていない。

「いずれにせよ、きみは部外者だ。言ったはずだよ。私の愉たのしみを邪じや魔まするなと。どうせできやしないだろう？　したければしてもいいが、その結果どうなるか、きみといえどもわかっているだろう？　きみは黙って見物しているといい。彫ちよう像ぞうのように。あるいは人形のように」

　あのわざとらしくて嫌いやみたらしい言い方は、間ま違ちがいない。人形。明らかにそれは、あいつを引き裂さいて挑ちよう発はつ

するための言葉だった。クラニィという人に、人形じゃない、と言ってもらって慰なぐさめられても、傷口はきっとふさがりきっていないはずだ。心に負った傷はそれほど簡単に癒いえるものじゃない。古ければ古いほど、いつまでもうずきつづけてやまない傷だってある。何度も何度も抉えぐられて、もはや溝みぞのように深くなってしまい、ちょっとやそっとでは埋うめられない。しかも、その傷をつけたのはもともとあの男で、数えきれないほど抉ったのもあの男の執しつ拗ような指だったはずだ。

「どこだ」

　低い声だった。一いつ瞬しゅん、あいつの声とは思えないくらい、押し殺すというよりも押し潰つぶしたような、重くて低い声だった。

「ボクの仲間はどこにいる」

「焦あせってはいけないよ、アジアン。まだ勝負ゲイムは二つ残っているのだ」

「黙れ。もういい。もうたくさんだ。いつまでこんなくだらない、悪あく趣しゅ味みな遊びゲームにつきあわせるつもりだ。キサマの狙ねらいはボクだろうに」

「そう。私が欲しいのはおまえだ、アジアン」

「だったら――」

「ああ、アジアン」

　あかさらまに芝しば居いがかった嘆たん息そくだった。虫むし酸ずが走る。

「アジアン、アジアン、アジアン」

　あの男があいつの名を呼ぶたびに、反へ吐どが出そうになる。

「どうか私を落らく胆たんさせないでくれ。裏切らないでくれ。もっと私の期待にこたえて欲しい。私はもっとおまえを知りたいのだ。おまえのすべてを私の前にさらけ出して欲しい。そうしてぞんぶんに私を愉しませてくれ。私を満足させてくれ。まだだ。まだ足りないよ。十分ではないのだ。おまえの出番は次なのだよ、アジア

ン。第七勝負セブンスゲイムは私とおまえの一いつ騎き討うちだ。それこそが私の望みであり、私を殺して私から自由になることは、おまえの宿願でもあるはずだよ。そうだろう？　おまえは私から逃のがれても私に捕とらえられたままだったろう？　おまえは思い知らされただろう？　逃にげても無む駄だなのだよ。私はそのことをおまえに理解して欲しかったのだよ。そのためにおまえを逃がしてあげた。もうわかっただろう？　だがね。アジアン、焦ってはいけないよ、アジアン。その前に、第六勝負シクススゲイムだ」

「ふざけるな……！」

　駆かけだそうとしたあいつの腕うでを、ベティがつかまえた。あいつの気持ちはわかりすぎるくらいわかるけれど、こっちは人質をとられている。あの男の言いなりになっていて、人質を救出できるのか。不安はあっても、人質の居場所さえわからないのだ。ベティの冷静な判断を支持せざるをえない。もしマリアローズがベティの場所にいたら、同じことをしただろう。

　ちくり、と胸に小さな針が刺さった。

　その針の正体に考えをめぐらしている暇ひまなんかあるはずがなかった。

　アクゼルがいきなりこっちを向いて、ぴょんと跳とびさがった。いや、あれはもう、ぴょん、どころじゃない。
びょぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉん、だ。すごい跳ちよう躍やく力だった。もともとやけに素す早ばやいやつだったし、ちょっと警けい戒かいしてはいたのだが、正直、ここまでとは思っていなかった。十メーテル。もしかすると、それ以上だ。一っ跳びで、しかも後ろ向きで、そんな距きよ離りを稼かせげるなんて普ふ通つうじゃない。まあ、見た目からして普通じゃないわけだが、それにしても、そうきたか、というかんじだった。

　アクゼルはシルクハットをひょいと放り投げて、鞄かばんを床ゆかに置き、あっという間に燕えん尾び服ふくを脱ぬぎ捨てた。三本足のつるんとした裸ら体たいは、生き物というよりも作り物めいていて、前衛芸術家の手による彫ちよう刻こくのようだった。アクゼルはその身体からだをぐりゅぐりゅ不気味に揺らしながら、例の無駄に渋しぶい声で叫さけんだ。

「──変ッッッ！　身ンンンンンンンンンッ……！」

その縦に割れた気色の悪い口からだった。おごえええええ、という嘔おう吐としているような音とともに、何かが迫せりだしてきた。迫りだすどころか、生まれようとしていた。それは衝しよう撃げき的な光景だった。少なくとも、お子様には見て欲しくない、見せてはいけない、そうとうやばい場面だった。だって、ダメでしょ？　口から生まれるなんて。しかも、無理だから。あの大きさは、無理。実際、メリメリ、ビキビキ、口が裂けている。裂けた部分からは出血もしている。あんなやつでも血は赤いんだとか、月並みな感想を抱いだいている場合でもないのだろう。てゆうか、何？　何なの、いったい……？

それは黒い。嫌がらせのように黒くて、つるつるしている。形はよくわからない。定まった形があるのかどうかさえわからない。あちこちが膨ふくれたり縮んだりして、たとえばこう、真っ黒い袋ふくろの中に人が入って暴れているような、そんなふうにも見える。ひょっとして、それはアクゼルの中身なのか。そいつがアクゼルの中に入っていて、あの白くてつるっとした身体は外側の、皮のようなものでしかなかったのか。そんなこともちらりと考えたが、それにしては妙みようだった。今やアクゼルは床に膝ひざをついている。それだけでなく、なんというか、減っている。アクゼルが縮んでいっているような気がする。気がする、じゃない。それはまぎれもない事実だった。アクゼルの口から出てきつつある黒いやつは、もう標準体型の成人男性に近いくらいの大きさがある。一方、アクゼルはくしゃっと潰れたような姿と成り果てていて、大きさは子供程度だ。そこでようやく気づいた。黒いやつと白いアクゼルの体積を足せば、おそらくもとのアクゼルの体積と同じになる。その比率が変化しているのだ。最初は当然、白いアクゼルが10だとすると、黒いやつは０だった。黒いやつが生まれて、どんどん体積を増してゆくごとに、白いアクゼルは小さくなっていった。やがて比率は五分五分となり、逆転して、ついには黒いやつが10に、そして白いアクゼルは０になろうとしていた。

「ンンンンンンンンンンンンンンンンンンンンンンンンンンンンンンンンンアッ……！」

もう白いアクゼルは口しか残っていなかった。

そこから黒いやつが飛びだしたのではない、ぺろっと裏返った。

その部分がきゅっと締しまって黒いやつの口になった。

　そいつはしばらくの間、ぐりょぐりょゆがんだり、もきゅもきゅへっこんだり、ぶひょんぶひょん出っぱったりしていたが、最終的には真っ黒い人型のモノが腰こしを屈かがめて手と足、それから頭を床につけているような姿になった。

「ふううううう……」

　身を起こすなりため息をついて、首を曲げながら腕を回したり手を組んで前に出したりしてみせたやつは、やはり一つ目だった。口もあいかわらず縦に割れていた。ただ、足が三本あることをのぞけば、身体つきは人間の男性とそう変わらない。顔と三本足を度外視すると、真っ黒い全身タイツを装着した、身の丈たけ一・八メーテルくらいの変態男といったかんじだ。もっとも、あたりまえのことではあるけれど、単なる変態男じゃないことは明白だった。

「──といューわッけッでッ」

　その首に首飾りチヨーカーがある。

　うざいほどに渋い声は変わらない。

「もうオワカリでしょうが？　第六勝負シクススゲイムはわたくしダークサイド・オブ・アンナクロマルベルラスゼルフォンス、少々長いので略してダクゼルとお呼びいただいてもかまいませんが、このダクゼルから首飾りチヨーカーを奪うばうことができれば、皆みな様さま方の勝利でございます。たッだァーし。鍵アトルの首飾りチヨーカーをお持ちの方につきましては、次に第七勝負セブンスゲイムが控ひかえております。申し訳ありませんが、そこらで黙だまァーってご覧になっていてください。また、他ほかにどォーしても参加したくねェーっつー臆チ病キ者ンがいらっしゃいましたら、今ここで申告していただいてもかまいませんが？」

　マリアローズは身構えて首を横に振ふった。べつにアクゼル改めダクゼルに向かって意思表示をしたわけじゃない。自分の気持ちを確かく認にんしただけだ。

「たとえ嫌いやでもムリックリ参加していただきますがね？」

　ダクゼルが呵か々か々々々々々々々々々々大笑した。とてつもなく癇かんに障さわる笑い方だった。

　あいつが振り返って皆みなを見まわした。

腰が引けている者は一人もいないことを見てとって、あいつは何を感じているだろう。

目があった。

あいつは怯おびえているみたいだった。そういうやつなんだ。自分の身が危険にさらされるよりも、自分の仲間や──大事な人たちが危ない目に遭あうことのほうが、ずっとこたえる。あいつにとってはそのほうが何倍も、何十倍も、怖こわくて、怖くて、たまらないんだ。

今度は目をそらさなかった。

不安そうなあいつの視線を受け止めて、どうしようかと考え、考え抜ぬいた末に、ほんの少しだけ唇くちびるをゆるめてみた。

その結果、自分がどんな表情をしているのかなんてわからなかった。

僕はあいつに何を伝えたいんだろう。

あいつは──、

アジアンは、唇をきゅっと引き結んで、もう一度、七人の参加者プレイヤを順々に見た。

「誰だれも死なないでくれ」

「馬ば鹿かね」

ベティは軽く笑いながらアジアンの腕うでを小こ突づいた。

「このあたしが死ぬわけないじゃない」

「僕もそう簡単に死ぬような玉ではありませんしねえ」

ヨグが、ははは、と道化た笑い声を響ひびかせた。てゆうか、死ぬような玉じゃないとか、そういうのって自分に対して言うようなことじゃないと思うけどね。

「ンまァー」

目を覚ましてからも、さすがに体調がよろしくなかったのか、し

ばらく静かだった小こ猿ざるの目が爛らん々らんと輝かがやいている。そのポジティブな脳天気ぶりがちょっぴりうらやましい、なんてことは口が裂さけても言えないし、思ってもいない。

「あァーんなヤローが一人？　でオレらの相手するっつーのは
チョッチ役者不足っつの？　ンなかんじもしねェーではねェーけどな。オレ的には」

「しょれを言うなら役やく不ぶ足しよくでしょう」

「や、ユリカ、この場合、力不足が正しいんじゃないかと思うよ。たぶん」

「しょうなの？　だとしたら、わたし、今まで間ま違ちがえて覚えていたのね」

「つーかよォ、なんッかややッこやしィーし、もォーどっちでもいくね？」

「いいけどね、べつに……」

「ンじゃァーオレの勝ちだなッ。キャハハ」



　どうして勝ち負けの話になるのか、さっぱりわけがわからない。げんなりしていると、ピンパーネルに肩かたを叩たたかれた。その微笑ほほえみに癒いやされて、余計な気負いも消え、必要十分な適量の気合いが戻もどってきた。やれる、と思った。だって、ユリカがいる。ピンパーネルもいる。僕には仲間がいるんだ。他の連中は

ともかく──と、何気なく荊王ジンワンを見たら、思わずどきっとしてしまった。なんでか知らないけれど、荊王ジンワンまでかすかな笑えみを浮うかべていたからだ。しかも、やつはその笑みを隠かくそうともしないで、マリアローズをまっすぐ見つめ返した。

　なんだか猛もう烈れつに恥はずかしくて、先に顔をそむけてしまった。

　深呼吸を一つしてから、両りよう頬ほおをぴしゃりと叩いた。

　よし。

　やれる、じゃない。

　やろう。

　やるんだ。

「アジアン」

　声をかけると、あいつは仰ぎよう天てんしたように目を見開いてこっちを見た。

「邪じや魔ま。下がって、応おう援えんでもしてれば？」

　あいつの返事なんか待たなかった。

　振り返って、トマトクンとサフィニア、カタリには、見苦しくない程度のちゃんとした笑顔を向けることができたと思う。

「大だい丈じよう夫ぶだ」

　トマトクンの一言には、トマトクン自身だけでなく、サフィニアとカタリの思いまで注ぎ入れられているように感じられた。

　大丈夫だ。

　きっとトマトクンは、いろいろな意味をこめてそう言ったのだろう。

　だから、大丈夫だ。

　僕は、僕らは大丈夫なんだ。

　アジアンがなんだかちょっと心こころ許もとない足どりで歩いてきた。

　それにしても、なんて脆もろくて、そのくせ妙みょうに強い、でもやっぱり弱くて、ひどく不安定で、透すきとおった金属でできた、薄うすくて鋭するどい、とてもきれいだけれど、斬きり裂くのと同時に毀こぼれてしまう刃は物ものみたいな──安心して見ていられない、思わず目を覆おおってしまいたくなる、それでいて目を離はなせない、なんて面めん倒どうくさい、厄やつ介かいなやつだろう。

　みんながお前のそばにいるのは、お前が好きだからだ。

　仲間にそんなことを言われたんだと、あの日、アジアンが話してくれた。

　今はなんとなくわかる気がする。

　トマトクン以外の誰かが園長マスターのＺＯＯなんて考えられないように、昼飯時ランチタイムの頭領マスターも、たぶん、アジアンにしかつとまらない。

「僕は死なないし」

　すれ違う間ま際ぎわだった。

　アジアンが足を止めた。マリアローズは前を向いたままだ。アジアンがこちらを見ているのかどうかはわからない。どっちでもよかった。声が聞こえてさえいればいい。

「絶対、勝つから」

　会わせてあげたいよ。

　きみのことを大好きな、大事なきみの仲間たちに。

　僕は他ほかのみんなと違って何か特別なことができるわけじゃないし、口だけ達者で、生意気なだけが取とり柄えのガキにすぎないかもしれないけど、会わせてあげたい。きみは僕のせいで大切な人を失った。でも、その罪つみ滅ほろぼしなんかじゃない。何かをすれば、それで帳消しになるとも思わない。ただ、会わせてあげたい。

　すぅ、と息を吸う音がした。

　アジアンは前に向きなおった。

「ベティ、ヨグ」

　このタイミングで名を呼ばれるとは予想していなかったのか、二人とも意表を突つかれたような顔で振ふり返った。

「ボクはこの手に握にぎりしめているものを捨てたりしない。そのすべてを。決して。何があろうとも、ネ。そうしようと考えることも金輪際ない。そんなことはできないとわかったんだ。ようやくわかった」

　それからアジアンは、頼たのむ、と力強く言って、あとはもう振り返ることも立ち止まることもなく、まっすぐ歩いていった。

　その手には何が握られているのだろう。昼飯時ランチタイムと、あとは何が。

　本当に、そんなことは少しも考えなかった。それどころじゃなかった。

　七人は吸いよせられるように集結して、まだ動こうとしないダクゼルを見すえつつ、ベティとマリアローズを中心に、前には飛燕フエイヤンとピンパーネルが、右に荊王ジンワン、左にヨグがついて、後ろにユリカが控ひかえる隊列を組んだ。

「全体の指揮は僕に任せて。ベティさんには魔ま術じゆつに集中してもらいたいし」

「いいわよ。どうせ的外れな指示には従わないから」

「僕はちゃんと従いますよ。ふふふ」

「〝ピンクショット〟の武器を調達してきた」

「それは使えそうだね」

「怪け我がをしたら応急処置で痛みを飛ばしぇるわ。数秒でしゅむから、必要があれば言って」

「つーかオレァもォー万全だからよォ。いらねェー気ィ回さなくてオッケーな」

「あたしは今、普ふ通つうに特殊なチヤネ精神集中リングしないと魔術が使えないわ。空間転位の準備にも二十秒はかかるわよ」

「了りよう解かい。僕は状じよう況きよう次し第だいで爆ばく薬やく液を使うかも。そのときは合図するから。爆発して、かなり光と音が出るけど、びっくりしないでね」

　こちらの打ち合わせが終わるまで待ってくれていたのだとしたら、舐なめられたものだ。

　ダクゼルが高々と右手をあげた。

「──それでは、そろそろいいかげんよろしいですかな……？」

　相手がどう出てくるかなんてさっぱりわからなかった。どうせわからないのだから、いっそ頭の中をまっさらにして、即そく座ざに状況を把は握あくし、適切に対応することに集中したほうがいい。ともすると、緊きん張ちようのあまり身体からだがガチガチになってしまいそうだけれど、それが自覚できる程度には落ちついている。これくらいぜんぜん平気だ。高めろ。どこまでも。舐めるな。見せてやる。雑草の意地を。

「第六勝負シクススゲイムスタアアアァァァァァァァ──────────────────────────トッ……！」

　ダクゼルが右手を振りおろして跳びさがった。その瞬しゆん間かんだった。出てきた。わらわら出てきた。壁かべだ。生物的でグロテスクな紋もん様ようとも何とも言いがたい彫ちよう刻こくが施ほどこされた壁には、よく見てもかなりわかりづらいが、無数の穴が穿うがたれていたようだ。連中はそこにひそんでいたらしい。やつらはダクゼルと同じくらいか、あるいはダクゼルよりも小さかった。姿形はじつにバラエティーに富んでいて、どいつもこいつも地上で見られる動物とは似ていなかった。たとえ一部が似ていても、他の箇か所しよは違っていた。アンダーグラウンドの異界生物フリークスたちともまた違ちがう。ダクゼルもそうだが、なんというか、不自然なのだ。たとえば、胴どう体たいと同じくらい頭が大きい人間がいたら、顔の作りが人間そのもので、おかしいところはまったくなくても、異様に見える。やつらは皆みな、そうした不ふ

均きん衡こうさを備えていた。不調和な生き物たちだった。

　何しろ数が多いし、見分けなんかつくはずもないので、ぜんぶがそうではないかもしれないが、動物園事務所にアクゼルと一いつ緒しよに押しかけてきたやつらだ。

　あるものは壁の穴から勢いよく飛びだして床ゆかに落下し、こちらめがけて走ってくる。皮ひ膜まく状の羽を広げて飛んでくるやつもいた。壁から床へとぴょんぴょん跳とんでくるやつもいる。壁だろうと床だろうとかまわず這はってくるやつもいた。

　包囲されてしまった。いや、最初から包囲されていたのだ。連中は全周囲から襲おそいかかってきて、マリアローズたちを押し潰つぶしてしまおうとしていた。もちろん慌あわてた。どうしよう。どうすれば？　冷静にはなれなくても、見失ってはいない。目的だ。この勝負ゲイムに勝つためには、ダクゼルから首飾りチヨーカーを奪うばわないといけない。この状況における選せん択たく肢しは。大きく分けて二つだ。突とつ破ぱか、迎むかえ撃うつか。くそ、ダメだ。時間がない。考える余よ裕ゆうがない。

「──迎げい撃げき……！」

　マリアローズは叫さけびながら偽劫火の柄つかに手をかけた。ベティはもう特殊なチヤネ精神集中リングに入っているようだ。飛燕フエイヤンが両の拳こぶしを打ちあわせ、ピンパーネルは雌し雄ゆう一対ついの短たん剣けんを抜ぬいた。いやいやいや、とかつぶやきながら大おお斧おのを不器用に構えたヨグからは、相変わらず真しん剣けん味みが感じられない。ユリカは真後ろにいるので見えないけれど、最強伝説の持ち主だ。心配ないだろう。荊王ジンワンがバッグから例のブツをとりだした。やけに大きいバッグだと思っていたら、まさかあんなものを持ってきていたなんて。そう簡単に手に入るものではないはずだが、泉里センリ戦せんのあとに何挺ちようか市場に流れたという噂うわさを聞いたことがある。もしかして、そのうちの一挺か。

　とくにその道にくわしいわけでもないマリアローズが知っているくらいだ。どの機術士匠しよう合ごうにも属していない、いわゆる「はぐれ機術士」の中でも、〝ピンクショット〟はそうとう有名な部類に入るだろう。荊王ジンワンが手にしている、というよりも抱かかえている武器は、〝ピンクショット〟の最高傑けつ作さくにして、彼が失しつ踪そうした原因になったとも言われている曰いわく

付きの代しろ物ものだ。

　その機構から回転式連発弩どと呼ばれる。

　ラニングファイヤ、という名のほうが通りがいいかもしれない。

　荊王ジンワンはバッグを放るなり、レバーを回してぶっ放した。間断なく放たれる矢はおもしろいようにズバズバ命中した。それはそうだ。どこを狙ねらっても敵だらけで、的には事欠かない。ラニングファイヤは連射が可能なうえ威い力りよくもあるので、矢を食らった不調和生物たちはバッと吹ふっ飛んでバッタバタ床に落下した。的の後ろからまた的が現れて、焼け石に水の様相を呈ていしているような気もしないではないけれど、接近をためらうそぶりを見せる敵もいくらかいた。景気づけとしては十分だったし、ベティがさらに追い打ちをかけてくれた。

「爆条Ｍｅｘｅｓ雷來礼」

　サフィニアより年長なだけあって、同じ魔ま術じゆつでもやっぱり一日の長があるのか。もともと爆ばく雷らい索さくは多数の目標に向かって雷かみなりをぶちあてるという高度な要素魔術だし、一度に五つ、六つ、それ以上の標的をとらえてみせるサフィニアもかなりすごいと思うのだが、ベティはその上をいっていた。いや、上というよりも、ほど遠かった。ぜんぜん違う。まるで別物だ。あれはもう、索、つまり、綱つななんかじゃない。

　まるで稲いな妻ずまの網あみのようだった。

　それがピカカカカッとマリアローズたちを取り囲んで、何しろ網だけに、ラニングファイヤの射しや撃げきにも怯ひるまず迫せまってこようとしていた不調和生物たちを、一いち網もう打だ尽じんにしてしまった。

　もっとも、範はん囲いを広げたぶん、威力は弱まっていたのだろう。爆雷索の網にかかった不調和生物たちは瞬間的に感電しただけのようで、ブルンッと身体を震ふるわせて床に落ちたが、そのうち立ちあがってきそうだ。ベティも当然、そんなことは承知のうえで、あえてああいう爆雷索の使い方をしたのに違いない。そこには必ずメッセージがある。もしマリアローズがそれを理解できなければ、ベティに見かぎられてしまうだろう。期待されているのとは違う。たぶん、試験だ。これくらいわかりなさいよ？　わからないな

ら、あなたは無能だわ。単なる足手まとい。いなくてもいい、いいえ、いないほうがいい存在。そうじゃないことを、僕は証明してみせないといけない。僕にもできることはある。ちゃんと役に立てる。自分から言いだしたことだ。やると言った役目はきっちり果たしてみせる。

「──全員突とつ撃げき……！」

　叫びながら走りだした。スタートはほとんど同時だったはずなのに、あっという間に飛燕フエイヤンとピンパーネルに突つき放された。二人は競うように駆かけてゆく。ピンパーネルのほうが速いけれど、飛燕フエイヤンの走力もなかなかどうしてたいしたものだ。マリアローズと並んで走っている荊王ジンワンは矢を撃ちつくしたラニングファイヤを捨てて、また黒いバッグをかついでいた。ヨグもついてきている。もちろん、ベティも。ユリカもマリアローズのすぐ後ろにいるはずだ。

「ムハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ」

　標的はもちろん、むやみやたらと渋しぶい声で馬ば鹿か笑いしているダクゼルだ。あいつをしとめて首飾りチヨーカーを奪ってしまえばこっちの勝ちなのだから、あたりまえだ。ベティはそのために爆雷索で時間稼かせぎをしてくれたのだ。それほど長い時間を稼ぐことができたわけではないが、ダクゼルまでの距きよ離りは二十メーテルか、せいぜい二十五メーテルだった。ピンパーネルの足なら二秒かそこらだろう。ほとんど一いつ瞬しゆんといってもいい。

　実際、すでにピンパーネルはダクゼルを間合いにとらえつつあった。いや、とらえた。

　ピンパーネルは雄おすのグレアデをダクゼルめがけて突きだした。

「ムハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ」

　あたらなかった。かわした、なんて表現はもったいない。ダクゼルは笑いながら馬鹿の一つ覚えのようにただ跳びさがっただけだ。

　予想どおりだった。

きっとそうするだろうと思って準備していた。

タイミングもぴったりだった。

マリアローズは全身を引きしぼった弓みたいにしなわせた。そうして、ここが限界、というところで一気に前へ倒たおし、ベルトのホルダーから抜きとって両手の指に挟はさんでおいた小こ瓶びんを投げた。右手で二本。左手にも二本。瓶はおもりをつけて重くしてある。命中率にも自信があった。ちょっと遅おそいかな、と思いながら、マリアローズは叫さけんだ。

「━━爆ばく発はつするよ……！」ＤＯＤＯＤＯＤＯＨＨＨＨＨＨＨＨＮ……！「イヒャアッ」「て、おわあっ！」「━━ッ……！」

瓶はダクゼルの着地点付近の床ゆかにぶつかって割れたはずだ。ピンパーネルを追い越こしてダクゼルに襲おそいかかってゆこうとしていた飛燕フエイヤンは、間かん一いつ髪ぱつのところで床に飛びこむようにして伏ふせた。ピンパーネルも体勢を低くしてあとずさった。荊王ジンワンやベティ、ヨグも立ち止まった。ユリカが飛燕フエイヤンの名を呼んだ。その直後だった。

「アチィィィィィィィィ
チィィィィィィィィィィィィィィィィィィィィィィィ……！」

爆ばく煙えんの中から飛びだしてきた、というよりも、垂直に打ちあげられたかのようだった。

ダクゼルは空中で三本の足をバンバン打ちあわせながら、両手で掻かきむしるように身体中を叩たたいた。火を消そうとでもしているのか。でも、妙みようだ。火なんてどこにもついてないじゃないか。とにかくそんなことをしながら落下して、床に叩きつけられ、今度は「アヂッアヂッアヂヂッ」とわめきつつ石の床の上をゴロゴロ転げまわりはじめたダクゼルに、飛燕フエイヤンとピンパーネルが飛びかかっていった。なぜだか、これで決まるとはちっとも思えなかった。勘かんとしか言えないけれど、マリアローズは今まさに決着がつこうとしているのかもしれないその場面から目を離はなして、あたりを見まわした。はっとして、伏せて、と大声で言いながら、とっさに隣となりのベティを引き倒した。マリアローズたちのすぐ上を、羽のある不調和生物たちがすごい勢いで通りすぎていった。危なかった。いや、まだだ。まだ危ない。マリアローズは振ふり返りながら跳はね起きて、ちゃんと伏せてくれていたユリカに声

をかけつつ偽劫火を抜ぬいた。

「各自応戦……！」

　そんな指示にどれだけ意味があるのだろう。自分に局面を打開する力がないことはわかっている。わかってはいるものの、やっぱり悔くやしいし、もどかしい。僕にも力があれば。いつもじゃなくていい、ここぞというときにガツンとでかい仕事をやってのけられる決定力みたいなものがあれば。ないものねだりだ。トマトクンも言ってくれたじゃないか。こんな僕にだって長所が、取とり柄えがある。でも、そのあたりを生かすべく、状じよう況きようの把は握あくにつとめよう、冷静に、落ちついて、考えろ、考えるんだ、と念じたところで、こうなってしまえばもう無理だ。押しよせてくる。不調和生物どもが。波だ。波？　洪こう水ずいだ。洪水？　何でもいいのだが、腕うでだか足だかよくわからないものが五本くらいあるのっぺらぼうのイタチみたいなやつが正面から突っこんできたので、他ほかにどうしようもなくて、自分でもどんなふうに身体からだを動かしたのか不明だけれど、とにかく必死でよけた──と思ったらドンッと肩かたに何かがあたった。突き飛ばされた。なんとか転てん倒とうだけはさけようとした。こらえて、体勢を立てなおそうとしたところに、蠅はえのような顔をしたややいびつな裸はだかの子供みたいな不調和生物が突とつ進しんしてきた。無我夢中だった。ほとんど衝しよう動どう的な動作だった。偽劫火を振るいながらすっとそいつの脇わきをすり抜けた。おそらく、どこかにあたった。手て応ごたえはあった。どこにあたったのかなんてわからなかった。目の前に別のやつが迫っていた。近い。近すぎるって。うあああああ……！　叫んだことは覚えている。自分は何をしようとして、どうしたのか。そのへんは思いだせない。ドーンといって、ズサッ、グヌズズッ、バシッ、ズゥゥーン、みたいなかんじだった。本当にそんな感覚だった。

　苦しくて、痛い。腰こし。背中。息がうまくできない。それでも無理やり吸いこんだら、ひどくなまぐさくて吐はき気がした。フウ、フウ、フウ。呼吸する音が聞こえる。誰だれ？　僕？　違う。僕は潰つぶされている。押し潰されてしまいそうになっている。くさい。何、このにおい。毛っぽい。硬かたい、毛。獣毛。そっか。そういうことか。僕を下した敷じきにしている、こいつ──この不調和生物が体当たりしてきた。よけられなかった。とうてい間に合わなかった。それで、とっさに偽劫火を前に差し向けて受け止める恰かつ好こうになった。たぶん、そういうことなのだろう。偽劫火は

不調和生物にぶっ刺ささっている。どこだろう。お腹なかとか？　こいつがどういう姿形をしているのかよくわからないから、何とも言えない。それはともかく、抜けないんですけど。それはそうだ。こっちは下敷きにされちゃってるんだから。おかげで、息さえろくにできない。くさいし。身動きがとれない。てゆうか、こいつ、まだ生きてるよね？　動いてるし。それって結構、かなりやばくない？　大だい丈じよう夫ぶなの、僕……？　大丈夫――じゃないかも。

「んんんん！　んんんんん……！」

　口を開けると、少なくとも清潔ではなさそうな獣毛を食べる羽目になってしまう。鼻で息をすると、ひどい悪あく臭しゆうがダイレクトに嗅きゆう覚かくを刺し激げきしてたまらない。何も見えないし、何が起こっているのかわからない、その恐きよう怖ふもあったけれど、腹が立ってきた。なんでこんな。どうして僕がこんな目に遭あわないといけないわけ？　こいつ、何様のつもり？　くさいし。重いし。冗じよう談だんじゃない。どけ。どけったら。不調和生物を押しのけるために、全身の力をふりしぼった。僕は今、こんなことやってる場合じゃないんだから……！

「――むむむむむむむ……！　て、あれ……？」

　いきなり呼吸が楽になった。呼吸だけじゃない。重みも消えた。不調和生物の身体が持ちあげられて、ひっくり返されたからだ。次の瞬しゆん間かんには腕と腰をつかまれて引っぱり起こされていた。しかも、その拍ひよう子しに手放してしまった偽劫火をすかさず拾い、手て渡わたしてくれるというサービスのよさだった。礼を言うべきか迷ったが、荊王ジンワンはもうこっちを見ていなかった。なんというか、こういうときは妙に実用的な男だ。変態のくせに。助けられたわけだし、文句は言えないけど。足あし許もとに倒たおれている不調和生物はどうやら息も絶え絶えのようだ。そうでもなければ、こっちが息絶えていたかもしれない。余よ裕ゆうがあれば、自分を圧殺しようとしていた憎にくき敵の正体をつぶさに観察しつつ、その最さい期ごを見届けてやりたいところだが、そんなことをしている場合でもなさそうだ。マリアローズは石の床に打ちつけたらしい後頭部をさすりながら、仲間の姿を探した。さいわい皆みな、健在のようだ。見たところ、マリアローズみたいに無様なことにもなっていない。うっさいな、悪かったね、無様で。思わず頭の中でそんなふうに悪態をついてしまうくらい情けないけれど、今に始まったことじゃない。慣れている。慣れたくなんかないけ

ど。ともあれ、ベティは剣けんを手に持って、やつを見上げていた。見るからに高価そうなその剣は血ち塗ぬられている。剣の形をした魔道具なのかと思っていたが、普ふ通つうに斬れるのか。てゆうか、魔術士なのに、剣まで使えるんだ。それで切り抜けたんだ。棍こんを構えているユリカとは目があって、視線で互たがいの無事を確かく認にんしあった。ヨグは大おお斧おのをかついでやつを振り仰あおいでいる。ピンパーネルと飛燕フエイヤンはやつの近くにいるので、ほとんど真上を見ていた。

「……何だよ、あれ……」

「ヌハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ」

　降りそそいでくる高笑いは、まぎれもなくダクゼルのものだ。およそ二十メーテルの高さからマリアローズたちを見下ろしているあの一つ目もダクゼルのものだろう。その下に縦割れの口がある。胸がむかつく笑い声はあの口から発せられているに違ちがいない。

　ただ、ダクゼルのそれ以外の部分は埋もれている。何に埋もれているかというと、不調和生物だ。いや、正確に言えば、不調和生物たちだ。その群れだ。集合体だ。

　あの不調和生物の大群は、マリアローズたちに襲おそいかかってきたわけではなかったのだ。そうではなく、ダクゼルのもとに集結して、きつく抱だきあったり、手（？）と手（？）を握にぎりあったり、腕（？）やら足（？）やらを絡からみあわせたりして、とうとうあれを、あんなものを形成してしまった。残念ながら、マリアローズは下敷きになっていたので、その過程を目にすることはできなかったし、べつに見たかったわけでもないが、連中はあれよあれよという間にその共同作業を成し遂とげてしまったと考えるべきだろう。

　巨きよ人じんだった。

　まあ、どう考えても巨人ではないわけだが、シルエットは巨人だ。

　よく見ると、その外側には動物園事務所の窓を覆おおってみせた薄うすっぺらい生き物と同じか同種とおぼしき不調和生物たちが張りついていて、皮ひ膚ふのようになっている。連中ときたらやたら

と色しき彩さい豊かなので、色とりどりすぎて目がチカチカする、サイケデリックな巨人だった。

　その頭にあたる部分の真ん中に、ダクゼルの一つ目と口とその周辺だけが露ろ出しゆつしていた。

　ダクゼルは馬ば鹿か笑いを納めて無む駄だに重々しく名乗った。

「窮・極・合・身………………………………ッ」

　てゆうか、また改名するんですか。

　名前を変えることに何か意味があるんですか。

「ダァァァァァァァァァァァァァクゼェェェェェリオォォォォォォォォォォォン……！」

「──か」

　小こ猿ざるがゴックンと生なま唾つばをのみこんだ。

「かっけェ～……」

　いや。

　いや、いや、いや。

　それはないと思うんですけど。どう見ても、かっこよくはないよね？　その前に、あれ、敵だから。かっこいいとか言ってる場合じゃないから。ほら、実際、ダクゼリオンだっけ？　右足をゆっくりと持ちあげて、手始めに、みたいなかんじで踏ふみ潰そうとしてるしね？　標的は明らかに小猿とピンパーネルだしさ。喜んでていいの？　そうじゃないよね？　てゆうか、僕もだけどね？　呆あきれて物が言えない心境ではあるけれど、ここはやっぱり言わないと。黙だまって見ててどうするわけ？　そうだ。危ない。やばいって。小猿はともかく──、

「ピンパーネル……！」

　たぶん、注意をうながすまでもなかった。ピンパーネルはマリアローズが声を張りあげる前に、小こ柄がらな飛燕フエイヤンをさっと抱きかかえて横っ跳とびした。もっとも、急いで避ひ難なんする

必要はなかったかもしれない。

「威鶩虞Ｇａｘｉｓ滅崇Ｄｅｕｘ嵐怒」

　あれだ。あのときの魔術だ。真っ白だ。何も見えない。すさまじい音だった。耳が馬鹿になった。全身がびりびり痺しびれている。足がふらついて、というよりも足許がふにゃふにゃになった。まるで雷かみなりに打たれたかのようだ。もちろん、本当に打たれたらこんなものではすまない。今、ベティの魔術で本物の雷に等しい雷らい撃げきをお見み舞まいされたのは、ダクゼリオンだろう。あるいは、ダクゼルと言うべきだろうか。ベティはきっとダクゼルを狙ねらったはずだ。

　視力が回復しはじめるまで数秒、それからはっきりと物が見えるようになるまでさらに時間がかかった。

　ダクゼリオンは右足を上げたままの姿勢で静止していた。

　その頭部から煙けむりが上がっている。火の輝かがやきも見えた。どうなっているのか、煙のせいもあってはっきりと確認できるわけではないが、頭部の真ん中あたりがごっそりと抉えぐられているようだ。黒くろ焦こげになった残ざん骸がいがちらちらとあたりを舞まい、また、床ゆかに散乱してもいた。

「何でもそうだけど、でかければいいってものじゃないわ」

　ベティはぷっくりした唇くちびるをちろりと舐なめた。

「首飾りチヨーカーがちゃんと残ってればいいけど」

　……クフフフフフフフフフフフフフフフフフフフフフフフフフフフフフフフフフフフ。

　マリアローズはあたりを見まわした。何？　この声。誰だれが……？

　正直、認めたくなかったけれど、認めるしかなかった。ベティも眉まゆをひそめて唇の端はしを嚙かんでいる。さすがにショックを受けているようだし、悔くやしそうだ。

「ご心配なくウフフフフフフフフフフフフフフフフフフ」

　ダクゼリオンの頭部のくぼみから、何かがのっそりと身を乗りだしてきた。何か、じゃない。見ればわかる。

「無事。無事でございますウフフフフフフ。わたくしも、首飾りチヨーカーもね」

　煙の中で嫌いやみたらしく一礼してみせたのは、まぎれもなくダクゼルだ。

「親切心から申しあげておきますが、わたくしは数種の生物と秘宝〝冬の王マウラロード〟、さらに同じく秘宝〝叢雲テクノの宝珠クラウド〟をベースにして生みだされたパァーフェクトゥでオウヴァパゥワーなウルトラ・クリーチュアでございますウフフフフフフフフフフ。舐めんじゃねえぞォラ？」

「……〝冬の王マウラロード〟……〝叢雲テクノの宝珠クラウド〟ですって……？」

　ベティの声が揺ゆれた。

「そんなものが……」

「ほォォォォォご存じで？　ムフフフフフフフフフフフフ。さッすがァー。大おお仰ぎような魔ま術じゆつをお使いになるだけあって、物知りでございますなアアア。それでしたら、わざわざこれ以上くわしくご説明申しあげる必要はアアアございますまい」

　くぼみがふさがってゆく。ダクゼリオンの内部から不調和生物たちが迫せりだしてきて、ダクゼルを包みこもうとしている。あっという間だった。もうダクゼルは埋うもれてしまった。ベティの強力な魔術で吹ふっ飛ばされたぶん、いくらか目減りしたはずだが、何しろでかいのでよくわからない。見たところ、ダクゼリオンはもとどおりだった。〝冬の王マウラロード〟。〝叢雲テクノの宝珠クラウド〟。両方とも秘宝だという。魔導王時代の秘宝なのか。それらについての知識を持っているらしいベティに話を聞きたいところだけれど、それどころじゃないことは明白だった。

「ウハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ」

　ダクゼリオンが組みあわせた両手を振ふりかぶり、床めがけて振りおろした。巨きよ体たいに似つかわしくない素す早ばやい動作

だったが、やつが狙ったのはピンパーネルと飛燕フエイヤンだ。二人は左右に分かれてダクゼリオンの一いち撃げきをかわした。その衝しよう撃げきに耐たえきれなかったのだろう。ダクゼリオンの両手がグジャッと潰つぶれて崩くずれた。グッジョグジョに潰れた不調和生物たちを撒まき散らしながら、だが、ダクゼリオンは止まらなかった。

「クゥハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ」

　足だ。ダクゼリオンの豪ごう快かいすぎる右足の回し蹴げりはかなり低かった。床すれすれどころか床にふれていた。おかげで削れた。ダクゼリオンの右足は、そうして削られ、今も削られている部分を構成していた不調和生物たちの無残な残骸をグジャジャジャ飛び散らせつつ──、

　左方向に逃のがれていた飛燕フエイヤンに猛もう然ぜんと襲おそいかかった。

　なんてことだ。

　あれじゃあ跳んでも伏ふせてもよけられない。

「──飛燕フエイヤン……！」

　ユリカが叫さけんだ。

　ダメだ、と思ったときにはもう、飛燕フエイヤンは撥はね飛ばされていた。

　まるでボールみたいだった。

　飛燕フエイヤンはおそらく十メーテルほども空中を移動して床に叩たたきつけられ、何度も何度も転がったあげく、やっと止まった。

　息ができなかった。

　驚おどろきとか、後こう悔かいとか、絶望とか、いろいろなものがいっぺんに、一いつ緒しよくたに押しよせてきて、押し流されてしまいそうになったが、次の瞬しゆん間かん、むしろがっくりするほどほっとして、大きなため息が出た。

　飛燕フエイヤンが跳び起きて、頬ほおの真新しい擦すり傷を手でこすった。

「……クッソタレがァ！　いってェーじゃねェーかコンニャロ！」

　タフな小こ猿ざるだ。あれだけ盛大にぶっ飛ばされたのに、ダクゼリオンに向かってゆこうとしている。元気がいいのはいいことだけれど、無む謀ぼうじゃないのか。それを見たユリカまで、もう、あの子は……！　とか言いながら走りだしちゃったし。僕は僕で、どうしたらいいのかさっぱりわからない。ここはやっぱり、飛燕フエイヤンやユリカを止めたほうがいいのか？　でも、止めてどうする？　策は？　ない。何もない。困った。本当に困った。

「ピンパーネル、ユリカを掩えん護ごして……！」

　一応そんな指示を出してみたけれど、正しい判断なのかどうか、自信がない。やばい。このままだと動けなくなる。何もできなくなっちゃう。ダクゼリオンは。跳とんだ。うわ。ムハハハハ笑いながらジャンプした。きっとユリカと飛燕フエイヤンとピンパーネルを一気に踏ふみ潰してしまうつもりだ。僕は見ているだけだ。どうにかよけてくれとか、なんとか潰されないでとか思いながら、指をくわえて見ていることしかできない。どうしよう。呼吸が乱れる。ひどく汗あせをかいている。何もしてないのに。何もできないでいる間に、ダクゼリオンが着地して両足がグッチャグチャに潰れた。三人は。大だい丈じよう夫ぶみたいだ。うまく回かい避ひしたようで、ダクゼリオンの醜みにくく崩れかけた足を、飛燕フエイヤンが殴なぐりつけ、ユリカは棍こんで打ちすえて、ピンパーネルは雌し雄ゆう一対ついの短たん剣けんで斬きり刻んだ。でも、あまり効いていない。げんに、ダクゼリオンはムハハハハ笑いつつ三人に向かって両手をのばした。最初はちゃんと手の形をしていたのに、今はもう指も掌てのひらもクソもない。あの有様では何かをつかむこともできないだろうが、三人はいったん退いた。たぶん、どう対処していいかわからないからだ。いったいどうすればいいのか？　僕らの目的は？　わかっている。アクゼルから、いや、ダクゼリオンから、というかダクゼルから、とにかく首飾りチヨーカーを奪うことだ。問題はその方法だ。どうやって？　考えられることはあると思う。考えなければいけないこともある。間ま違ちがいなくあるはずなのに、何も浮うかんでこない。

　わからないよ。

　何をどうすればいいの？

「どうする」

　はっとした。いつの間にか、荊王ジンワンがすぐそばにいた。頭にきた。どうする？　知らないよ。僕に言わないでよ。僕が訊ききたいよ。教えてよ。わかってたら、とっくにどうにかしてるし。なんとか我が慢まんしたけれど、こんなときでも落ちつきはらっている荊王ジンワンの顔を見ているのがつらくて、目をそらした。

「あいにく俺は何も思いつかない」

　荊王ジンワンは少しだけ笑ったようだ。

「いっそお前を連れてここから逃にげるか」

「バカなこと言わないでよ」

　マリアローズはそう吐はき捨ててベティの姿を探した。ベティはさっきよりもダクゼリオンから離はなれていた。ヨグもその近くにいる。距きよ離りをとって何やら考えている最中といったかんじだ。ちらりと荊王ジンワンを見た。逃げるなんて冗じよう談だんじゃない。絶対にありえない選せん択たくだ。荊王ジンワンだってそんなことくらいわかっているだろう。わかっているくせに、わざとあんなことを言ったんだ。抜ばつ歯しフェチの変態に気を遣つかわれるなんて最悪だ。僕が超最低ＳＵＣＫだ。最低のクモソウ野フ郎オなりに、やれることはやらないと。そうだ。動け。動くんだ。どう動く？　小猿はともかく、ユリカとピンパーネルのことは心配だけれど、マリアローズが行っても助けにはならない。むしろ足手まといだろう。だったら。マリアローズは脇わき目めもふらずにベティとヨグの近くまで走った。ベティはこちらを見もしなかった。それでいて、知りたいことを要領よく、口早に教えてくれた。

「〝冬の王マウラロード〟は魔術ヴオイド無効化マジツクの秘宝よ。ダクゼルに魔ま術じゆつは効かないわ。少なくとも、その効力が切れるまではね」

「でしたら」

　ヨグがいきなり大おお斧おのの柄を両手持ちしてその場で回転しはじめた。え？　てゆうか、何？　何をするつもり……？　マリアローズだけじゃない。ベティもややきょとんとしている。その間も

ヨグはどんどん回転速度を上げていった。ついには大斧から手を放した。

「──えいっ！」

　なんだかちょっと気の抜ぬけたかけ声だったが、大斧のほうは高速で回りながらとんでもない勢いでグルグルピューッと飛んでいった。ヨグは眉まゆの上あたりに手でひさしを作ってその行方ゆくえを見守っている。マリアローズも少々呆ぼう然ぜんとしながら大斧を目で追った。

「あ」

「よし」

「無む駄だよ」

　ベティの言ったとおりだった。

　信じがたいことに、ヨグが投とう擲てきした大斧は物の見事にダクゼリオンの頭部に、その真ん中あたりに、つまりダクゼルに命中した。ダクゼリオンは突つっ立っていたわけではない。ちょこまかと逃げたり反はん撃げきしたりしている三人を相手に、忙いそがしく動きまわっていた。よくあてることができたものだ。感心するというよりも呆あきれて、それから驚おどろきながら失望する羽目になった。

「一部の魔導王が身につけていたとされる秘術、絶対Ａ魔術Ｍ物理Ｐ障壁フイールド。秘宝──いいえ、至宝というべきね。〝叢雲テクノの宝珠クラウド〟はその発動機ジエネレータらしいわ」

　大斧はダクゼルに命中したかに見えた。

　それなのに、何か透とう明めいな壁かべにでもぶつかったかのように跳はね返されてしまった。

「らしい、じゃなくて、ホントにそうだったみたいね」

「そんな冷静に……」

　頭に血がのぼって、ついベティをなじりそうになったけれど、これはもう完全に八つ当たりというものだろう。冷静で何が悪い。悪

いどころか、僕も冷静にならないといけない。

「俺は魔術をよく知らないが」

　だって、やっぱりついてきていた荊王ジンワンのほうがずっと落ちついていて、的確な疑問をベティにぶつけられるこの状じよう況きようは、なんだか悔くやしいじゃないか。

「魔術ヴオイド無効化マジックは絶対Ａ魔術Ｍ物理Ｐ障壁フイールドとやらに干かん渉しようしないのか」

「あくまで、あたしの知識や推測が正しいことを前提にすればの話だけど、しないとおかしいわね。両立はしないはずよ」

「何らかの方法で切りかえているんですかねえ」

　相変わらずヨグの口調はのんきだ。

「であれば、ベティの魔術と物理的な打撃を同時に加えるというのはどうでしょうか」

「簡単じゃなさそうね」

　ベティは苦笑いを浮うかべてみせた。たしかに、言うほど簡単じゃない。まず、魔術ヴオイド無効化マジックと絶対Ａ魔術Ｍ物理Ｐ障壁フイールドが同時に作動しないものだとしたら、ダクゼルはもちろんそのことを理解しているだろう。マリアローズがダクゼルなら、さっきみたいにヨグが大斧を投げつけ、それにあわせてベティが魔術を発動させようとしたら、どちらかを回かい避ひするために、あるいはタイミングをずらすために全力をつくす。対処法はそれだけでいい。それに、前提が間ま違ちがっている可能性もある。もし魔術ヴオイド無効化マジックと絶対Ａ魔術Ｍ物理Ｐ障壁フイールドが両立したら？　ありえない、と決めつけて作戦を立て、実行して、やった、成功した、と思ったら、やっぱり両立しました、ダメでした、ではどうしようもない。ベティの魔術はともかく、ある程度高い確度で物理的な打撃をダクゼルに加えるためには、どう考えても誰だれかが接近しないといけないのだ。その誰かが、仲間の誰かが、ベティの魔術のとばっちりを食うかもしれない。マリアローズ自身がその役目を引き受けられるのならいいが、たぶん無理だ。情けないかぎりだけれど、マリアローズにはその能力がない。不確実すぎる作戦のために、自分以外の誰かにリスクを

冒おかしてもらうことなんてできない。せめて、うまくゆけばなんとかなる、という確信が欲しい。でも、何かを忘れている気がする。すごく大事なことを。何だろう。忘れている？　違う。そうじゃない。忘れてはいない。ちゃんと覚えているはずだ。だから引っかかっている。ただ、それが何かわからない。わからない？　本当に？　わからなくない。考えろ。考えるんだ。何が引っかかった？　手がかりは何だろう？　叢雲テクノの宝珠クラウド？　知らない。さっき初めて聞いた名前だ。秘宝。至宝。違う。そうじゃない。秘術？　魔導王？　一部の魔導王が身につけていた……？

　絶対Ａ魔術Ｍ物理Ｐ障壁フイールド。

　そうだ。

　それだ。

　その言葉は知らない。でも、それは知っている。この目で見たことがあるからだ。

「全員集合……！」

　マリアローズは叫さけびながら走りだした。目的地はない。どこでもいい。ただ、打ち合わせが必要だ。そう長い時間は必要はない。皆みなが従ってさえくれれば。僕を信用してくれれば。あえて振ふり向かなかった。荊王ジンワンだけでなく、ベティも、ヨグも、きっとついてきてくれる。信じてもらいたければ、こちらも信じることだ。ベティには嫌きらわれている。ヨグにも軽んじられている気がする。それでも、この勝負ゲイムの間は我が慢まんしてくれるだろう。きっと、いや、絶対に協力してくれるはずだ。ユリカと飛燕フエイヤン、それからピンパーネルも、マリアローズの声を聞いてダクゼリオンから離はなれようとしていた。三人はマリアローズが向かう先に見当をつけて、そこめがけて駆かけてゆく。もちろん、ダクゼリオンが黙だまって見み逃のがしてくれるはずもないが、だいぶパンチやキックが空振りして床ゆかを殴なぐったり蹴けったりした結果、やつの手足はぼろぼろだ。というか、あの巨きょ体たいが、あのざまで、よくもあれだけ機き敏びんに動けるものだ。動けることは動けるものの、連れん繋けいをとって接近したり離れたりを繰くり返していた三人を今までとらえられず、それどころかだんだん間合いをつかまれて時間稼かせぎをされたあげく、取り逃にがしてしまいそうになっている現状は、やつとしても思わしくなかったのかもしれない。

「ンンムムムムムムムムムムムムムムムムムムムムムムムムムムムムムムムム……」

　ダクゼリオンは不意に立ち止まった。

「これでは埒らちが明きませんなアアアア。もそっと本気を出させていただきますかアアアア」

　いったいぜんたい何をしようっていうのか。当然、気になるし、目を離すつもりはなかったけれど、おかげで時間ができた。そっちのほうがずっと重要だ。相手の出方を見て、しっかりと適切な処置をして、しのいで、負けないことも大事だが、それだけでは意味がない。ダクゼルから首飾りチヨーカーを奪うばうまでこの勝負ゲイムは終わらないのだ。もちろん、誰一人として失うわけにはゆかない。そのためにも、なるべく早く決着をつけたい。あいつはこのあと一人でルヴィー・ブルームと戦わないといけないんだ。これ以上、重い荷物を背負わせたくない。もう十分だ。

　ダクゼリオンが両りよう腕うでを広げて頭上を振り仰あおいだ。

「まァァァァずはまァァずはまずはダクゼェェェリオン・いよいよクリク本格的なリアル補充サープリメントッ……！」

　号令一下、またぞろ壁の穴、穴、穴から不調和生物どもがバサバサギャアギャア飛びだしてきた。くそ。まだいたのか。マリアローズは、だが、驚かなかったというよりも、驚かないぞ、驚いてたまるか、だからどうした、そういうこともあるよね、うん、あるあるありうるわかってた、と自分に言い聞かせた。不調和生物はどいつもこいつもダクゼリオンに合流しようとしているみたいだし、今すぐどうこうということはない。それよりも、七人が集結できた。皆にこの作戦をどう説明するかについてはもう考えてあった。一から十までくわしく丁てい寧ねいに話す余よ裕ゆうはさすがにない。悪いけど、ここはいつものやり方でやらせてもらう。

「──というわけで、僕の言うとおりに動いて！　以上！」

「はイ」

「わかったわ」

「了りよう解かいだ」

　ピンパーネルとユリカ、荊王ジンワンは即そく座ざにうなずいてくれた。ベティはちょっと面食らっているようだ。うわぁ、と意味不明な声をもらしたヨグは、いったい何を考えているのやら。飛燕フエイヤンが目を見開いて首をひねった。

「へ？　つぅーか、とゆーわけってどぉーゆーわけなん？」

「そのへんは省略。時間がないから」

　マリアローズは乾かわいた唇くちびるを舐なめて湿しめらせた。新たな不調和生物どもの合流によって、ダクゼリオンは手足がもとの形に修復されただけでなく、最初よりも一回り大きくなったように見える。ただ、もう壁かべの穴から出てくる不調和生物はいない。そろそろ打ち止めか。マリアローズはピンパーネルの腕をとって引っぱり、要点だけを短く簡潔に伝えた。ピンパーネルは何も言わずにあっさりと首を縦に振った。マリアローズの中に迷いが生じたのはそのときだった。いいんだろうか。本当に、これでいいのか。自分で考えて、言いだしたことだ。今さらそれはない。他ほかに手があるわけでもない。思いつかない。しょうがないじゃないか。

　肩かたに手がふれた。

　どこまでもやさしい手だった。

　ピンパーネルは目め許もとをゆるめて唇を微笑ほほえませた。

　その手をぎゅっと握にぎって頬ほおをよせた。

　なんで自分がそんなことをしたのかわからない。

　でも、そうしたかった。

　ただそうしたかった。

　ピンパーネルは少しだけびっくりしたように砂色の目をしばたたかせたけれど、やっぱり何も言わなかった。

　マリアローズは無理やり笑え顔がおを作ってピンパーネルの手を放した。

　もう迷わない。

　あとはやるだけだ。

「──全力でダクゼリオンを叩たたき潰つぶす……！　ダクゼルは無視していいから！　ベティさんはできるだけ大きな魔ま術じゆつをお願い！」

　この期ごに及およんでグズグズするウスノロがいたらどやしつけてお尻しりを蹴け飛とばしてやるところだ。なんて、偉えらそうなことを言えた分際じゃないことはわかっているけれど、おっかなびっくり指示を出したって誰も従ってくれない。たとえ確信を持てなくても、自信満々のふりをして堂々と旗を振らないといけない。さいわい皆、一いつ斉せいに行動を開始してくれた。我先にギュンッと飛びだしていったのは飛燕フエイヤンで、そのすぐ後ろにユリカがついた。荊王ジンワンはバッグからとりだしたモトロール刀を手に二人の左側を突つっ走っていった。ヨグも飛燕フエイヤンとユリカの右側を兎うさぎみたいにピョコピョコ跳はねるようにして駆かけてゆく。遅おそいわけじゃない、むしろ結構速いのだが、なんだか不器用というか不自然な走り方だ。それはまあいいとしても、ヨグは例のやけにでっかい斧おのをぶん投げてしまったわけで、素す手でだ。徒手空くう拳けんで何をするつもりなのか。さっぱりわからないけれど、せいぜいがんばって、と応おう援えんするしかない。マリアローズは前に出ない。出ても邪じや魔まになるだけだ。魔術の準備に入ったベティの前に位置どって、いざというときは身体からだを張って彼女を守る。チラッと振ふり返った。ベティは魔術士衣のどこかに隠かくし持っていたのだろう、宝石だの何だのをちりばめた金色の鎖くさりを手に持っていた。あれは──人工アーテイ触媒フア魔道具クトか。ということは。それにしても、メッチャクチャ豪ごう華かな人工アーテイ触媒フア魔道具クトだ。作るのにいくらかかるんだろ。僕が気にすることじゃない。前を向いた。意識的に息をした。そうしないと呼吸ができなかった。くる。ダクゼリオンが。てゆうか、きてる。どんどん前進してきてる。ダクゼリオンの足音は巨きよ体たいのわりに大きくない。ドシン、ドシン、という地じ響ひびきの中に、シト、シト、というかんじの、やわらかい、重苦しい、ヌメヌメと染しみ入ってくるような、いやらしい響きがある。そんな音を響かせながら踏ふみだされたダクゼリオンの左足に、今、飛燕フエイヤンが突っこもうとしていた。突っこんだ。足。右足だ。光ってる。白く光ってる。「ラアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアァァァァァァ……！」ギュッと回転をきかせた白光りする右足の回し蹴げりだ。ボアアアァァン……！　爆はぜた。穴だ。ダクゼリオ

ンの左足、その足首の外側に、ボッコリ丸い穴があいた。「──威離ゃ離ゃ離ゃ離ゃ離ゃ離ゃ離ゃ離ゃ離ゃ離ゃ離ゃ離ゃ離ゃ離ゃ離ゃぁぁぁぁぁぁぁぁっ……！」その穴にユリカが極限クライマックス九手棍ナインボールを突っこんだ。その先せん端たんが大きな鎌かまみたいな形になっている。ユリカはそれで引っかきまわした。グッチャグッチャのメタクソに斬きって斬り抉えぐって斬り裂さいた。「ムオッ……！」ダクゼルが呻うめいた。体重をかけていた左足の足首が半分ほど、いや半分以上、それどころか五分の四くらい破は壊かいされて、バランスが崩くずれたせいだ。そのときだった。荊王ジンワンがダクゼリオンの左足の足首の内側にスッと入りこんで、モトロール刀を一いつ閃せんさせた。これで足首はもとの六分の五くらいの太さになった。「──ナアァム……！」ダクゼリオンは立っていられない。倒たおれる。ダクゼリオンから見ると左側に。マリアローズから見れば右方向に。切り倒されつつある大樹のように。でも、あいにくダクゼリオンは植物じゃない。「退いて……！」マリアローズが叫さけぶまでもなく、飛燕フエイヤン、ユリカ、荊王ジンワンはそれぞれ後退しはじめていて、ダクゼリオンは身をよじり、両手を床ゆかについてなんとか身体を支えた。その左手首に、何を思ったか、ヨグが飛びついてゆき、ちょっと、何するつもり、てゆうか危なっ──と目を見開いたマリアローズは、もっと両りよう眼めをいっぱいに瞠みはる羽目になった。「果たして、こんなことができるのか──」ダクゼリオンの左手の甲こうにシュタッとしゃがみこんだヨグは、やつの左手首の一部分に両手をあてて、手品を披ひ露ろうしてみせたのだ。「試ためしたことがないので、やってみないとわからないのですが……！」その現象を説明するとしたら、ダクゼリオンの左手首の一部が瞬間的に熱せられた、ということになるのかもしれない。するとどうなるかというと、不調和生物といえども生き物で、人間ほどではないかもしれないし、人間と同じくらいかもしれないし、人間以上かもしれないが、とにかくその体内には相応の割合で水分がふくまれていたようだ。水の体積は液体の状態よりも気体、水蒸気になったほうがずっと大きい。ダクゼリオンを構成している不調和生物の身体は、体積の増加に耐たえきれなくなった。破は裂れつした。「ムヌッ……！」「──うわわわっ！」もっとも、ダクゼリオンの左手首の外側に噴ふきだした水蒸気は、まさしくその場所にいたヨグをも襲おそった。ヨグは両手で顔面だの胸だの肩だのをわちゃわちゃ叩いたり払はらったりしながらダクゼリオンの左手から転げ落ちた。大だい丈じよう夫ぶ──なわけがないと思うけれど、ヨグの手品は無む駄だじゃなかった、と思いたい。左手首に痛手を負ったダクゼリオンの身体がぐぐぐぐぐっと傾かしいだ。それを見て、後退していた飛

燕フエイヤンやユリカや荊王ジンワンが足を止めた。三人は再度突とつ撃げきを敢かん行こうしようとした。「──ストップ、ストップ、ストップ！」マリアローズは叫んだ。いくらなんでも、もうちょっとかっこいい指示の出し方があるんじゃないかとか、そんなくだらないことを考えている暇ひまはなかった。「ムウウウウハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ」ダクゼルが高笑いをした。そのクソ笑いにあわせて、今にも倒れそうになっていたダクゼリオンが、そのまま、いや、さらに勢いをつけて倒れこみ、床に肩をついて足を天てん井じように向けた。逆立ちだ。逆立ちの姿勢で止まったのは一瞬だった。ダクゼリオンは思いっきり開かい脚きゃくした。大おお股また開きした。そうして両手で身体を持ちあげ、肘ひじを床につけた。肘の部分を足首と見なせば、両りよう腕うでが短めの足に見えないこともない。左右に広げた両足は両腕に見えなくもない。それから笑い声が収まったかと思うと、股こ間かんの部分がいきなりボーンッと盛りあがって、その真ん中にダクゼルの一つ目と縦割れの口が現れた。「──
ダァァァァァァァァァァァァァァァァクゼェェェェェェェェェェリオンッ！　大ッ！　変ッ！　形ッッッッッッッッッッッッッ
………………！」

　どこが大なんですか。いったいどこらへんが。という問題は置いておいて、ダクゼリオンの大変形とやらはおもしろくなかった。クソつまらない、という意味においても、こっちにとって望ましくない、という意味においてもおもしろくない。つまり、ダクゼリオンの核かくであるはずのダクゼルにとって、ダクゼリオンがダメージをこうむったところで痛くも痒かゆくもないだろうと思ってはいたけれど、それはダクゼリオンも同じなのだ。さっきはサプリメントだか何だかと叫びつつ不調和生物を補ほ充じゆうして、損傷を受けた箇か所しよを復元するばかりでなく、ボリュームアップしてみせたわけだが、そんなことをしなくても、ちょっと体形（？）を変える（？）だけで修復してしまう。どうやらダクゼリオンにはそういう機能があるようで、だとしたら、中ちゆう途と半はん端ぱなダメージは何の意味もない。ダクゼリオンはそのたびに大変形するだけだ。ユリカたちもそう理解したのだろう。だからこそ、三人の足が止まっている。それでも、行け、行って叩たたけ、と発破をかけないといけない立場にマリアローズはあるわけだが、正直、言いづらい。時間稼かせぎのためとはいえ、どうせ無駄なことを、危険を冒おかしてやれ、なんて、平気な顔で言うのは心苦しい。でも、ここは一つ心を鬼おににして、やってもらわないといけないんだから、と腹を決めるまでにかかった時間は、じつのところそう長くは

なかった。たぶん、一秒か二秒くらいだ。マリアローズは声を出そうとした。その間ま際ぎわだった。ダクゼリオンが変な形の元腕、現在の左足で「フンッ」とヨグを蹴け飛とばした。

　ヨグはポーンッと十メーテル以上ぶっ飛んで、床に叩きつけられた。

　硬かたいものが割れる、いやな音がした。

　マリアローズからそれほど遠くなかった。すぐそこだった。

　ちょっと自じ業ごう自得気味に水蒸気を浴びたヨグが、ダクゼリオンの足許でわちゃわちゃやっていたことを、すっかり忘れていたわけじゃない。ただ、少なくとも数秒間は失念していた。その事実にまず愕がく然ぜんとした。それから、仰あお向むけに倒れているヨグの左手の人差し指が、ビクッ、と震ふるえたきり、動かなくなったことに衝しよう撃げきを受けた。

　赤い。血だ。真っ赤だ。広がっている。血が。頭が。ああ。割れてる。割れちゃってる。頭ず蓋がい骨こつが。

　驚おどろいているし、ショックだし、あれ、もうだめだよね、と考えたりもしているのだけれど、なんだか、どう受け止めたらいいのかわからない。気まずい。こんなに重い、百メーテル×百メーテル×百メーテルの鉄てつ塊かいみたいに重すぎる気まずさは、そうそう味わえるものじゃないし、そう頻ひん繁ぱんに味わうべきものでもない。

　マリアローズはしきりと口の中を噛かんでいた。そんなことをしている場合じゃないことはわかっていたし、ヨグのほうを見ている三人も、そんなことをしている場合じゃないことはわかっているはずだし、振ふり返ると、ベティはさすがで、特殊なチヤネ精神集中リングの最中なのだろう、半開きの目は何も映していないかのようで、でもそれは思いっきり集中しているから、何も目に入らないし、耳に入らないだけで、ようするに何もわかっていないだけなんじゃないか。

　マリアローズは鼻をすすった。奥歯を噛みしめて、偽劫火の柄つかに手をかけ、握にぎろうとして、やめた。

「──警けい戒かい……！」

　そんな言葉しか出てこなかったのは、だけど、この際だから仕方ないじゃないか。言い訳したい気持ちも今は吹ふき飛ばしてしまいたい。吹き飛ばしてしまわないといけない。きっとみんな、似たような気持ちなんじゃないかと思う。ユリカ、飛燕フエイヤン、莉王ジンワンも前に向きなおった。ダクゼリオンがまた「ヌハハハハハハハハハハハハハハハハハハアアアア」とクソッタレ笑いを始めた。元脚あしだけに、さっきよりも腕が長い。あれだと、身体からだを屈かがめなくても元足の手が床ゆかに届くだろう。ダクゼリオンはその腕を勢いよく振りあげた。そして鋭するどく振りおろした。もちろん、ただ振りおろしただけじゃない。やつの両腕はだいたいユリカたちがいるあたりに狙ねらいをつけていた。当然、ユリカたちも黙だまっているわけがない。ユリカと飛燕フエイヤンは右へ、莉王ジンワンは左へと逃のがれた。三人がいたあたりの床がグジャンッと潰つぶれた。ダクゼリオンはすかさず両腕を振りあげて、また振りおろした。ユリカたちは逃にげる。跳とんで、転んで、必死で逃げる。「ダアハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ」グジャングザクグジャングザクグジャンッ「ムウハハハハハハハハハハハハハハハ」ドジャグジャグザジャグッ「ズハハハハハハハハハハハハハハハハハ」仕方ない。しょうがないんだ。それはわかっているけれど、もどかしい。マリアローズはただ見ていることしかできない。何度も何度も前に出ようとして思いとどまった。自分も出ないと、とか、ユリカたちを助けたい、とか、そういう気持ちよりも、ただ単に黙っているのがひたすらつらいのだ。何やってるんだ、僕。突つっ立ってるだけで。危なっ、やばっ、ちょっ、ユリ──あ、転んっ、あ、うわ、とか思ってるだけで。そんな歯がゆさと無力感に耐たえているのが、唯ゆい一いつ、今の自分にできることだなんて。くそ。くそ。クソッ……！　ダクゼリオン。ダクゼル。ダクゼルめ。あいつ、殺す。絶対、殺す。やっつける。滅ほろぼしてやる。いくらそんなふうに念じたところで、やつは相変わらずゲハゲハゲハゲハ高笑いをしながら、ザンザンザンザン床をぶち壊こわして、ユリカたちを追いこもうとしている。それにしても、ユリカたちはどうして左右に逃げるばかりで、下がってこないんだろう。あたりまえじゃないか。下がったら、僕らがいる。ベティが魔ま術じゆつの準備をしている。ユリカたちは、だから、踏ふみとどまっているんだ。左右に動きまわってダクゼリオンの注意を引きつけ、やつの腕をどうにかかわしている。でも、ダクゼルだってまるっきりアホというわけじゃない。ダクゼリオンがユリカたちにつきあっていたのは、結局、十秒か、十数秒、せいぜい二十秒とか三十秒とか、その程度の短い時間にすぎなかった。

「マハハハハハハハハハ小こ賢ざかしいですなアアアアアアアアア！　小こ五う月る蝿さいですなアアアアアアアア……！　正直申しあげて少々飽あき飽ァーきしてきましたなアアアア……！」

　ダクゼリオンが何十度目かに振りあげた両手を自分の足あし許もとあたりに叩きつけた。そうして丸めた背中や肩かたをブブブブブッと細かく震わせると、かぎりなく趣しゆ味みの悪い色とりどりの皮ひ膚ふがブツブツブツブツ粟あわ立だって、なんかあれ、わからないけど、すっごくやばいかんじがする、てゆうか、気持ち悪いんですけど——マリアローズがそう思った瞬しゆん間かんだった。ズズリョリョリョリョリョリョッ。ダクゼリオンの皮膚のブツブツが無数の突とつ起きとなり、それらがさらに育って、天てん井じようめがけて長く、長くのびていった。その急速度の成長はある高さで停止した。

「ダァァァァァァァァァァァクゼェェェェェェェリオォォォォォォォォンッ……！」

　今やダクゼリオンは、硬すぎて折れることも曲がることもない、まっすぐ、あまりにもまっすぐすこやかにのびている肩毛や背毛を生やしていた。なんていうか、毛深すぎだから。のっぺりしていることだけが取とり柄えだったのに、いきなりそんなに毛深くなられても。

「——非常にブリリアーンとてもスーパー神々ギガしいハーほどにド超絶ヒツ強烈なト・一斉フオルテイツシモ射撃ヴオックスレイ………………ッ！」

　あげく、その毛が、いや、あからさまに毛なんかじゃないけれど、そのすべてがまた成長を再開した。どうせなら、さらに高みを、上を目指して欲しかった。残念ながら、そうならなかった。これ以上は無理です、と言わんばかりだった。そのかわりに、ここからは下へ、百八十度までは転回しないけれども、百二十度から百七十度くらい転回して、下へ、床を目指します、とばかりに、猛もう然ぜんとそれらはのびてきた。すごい速度だった。豪ごう速そくだった。それは降ってきた。しかも、たくさんだった。一つ一つの太さはたぶん五サンチくらいだった。もしかしたら、もっと細いかもしれない。でも、数が途と方ほうもなかった。隙すき間まは？　最初にマリアローズが思ったことはそれだった。ベティを、と次に思った。マリアローズは振り返った。ベティをどうにかしようとした。目が眩くらんだ。何か雷らい鳴めいのような音が連続的に聞こ

えた。揺ゆれたのが足許なのか、自分の身体なのか、それとも世界全体なのか、まったくわからなかった。あ、と声をもらしたような気がする。それも定かではない。ズン、と何かが沈しずんで、衝撃を感じた。ふぅ、ふぅ、ふぅ。息がある。誰だれ？　僕だ。僕は、膝ひざをついている。床。そうだ。見上げると、あの毛が、毛じゃないけど、無数の細いものがしゅるしゅると縮んでゆく最中だった。頭を振り、立とうとしたとき、なぜか左ひだり腕うでがよく動かないことに気づいた。その途と端たん、左肩のあたりが徐じよ々じよに、だんだんと、少しずつ何かに蝕むしばまれてゆくような、絶望的で、なんとも悲しい痛みが襲おそってきた。あえて左腕を見なかった。立ちあがりながら、ベティを見た。ベティは立っていた。なんとか立っていた。無傷じゃない。脇わき腹ばらと左の脛すねがごっそり削けずられて、肉と骨がのぞいていた。出血もおびただしかった。それなのに、ベティはさっきまでと変わらず、目を半開きにして立っていた。そして今、カッと目を見開いて、人工アーテイ触媒フア魔道具クトの金きん鎖さを床に放った。

「其ＮＯ罪ＷＡ贖Ｕ為ＮＩ有ＲＵ物ＤＥＷＡ無ＫＵ只犯ＳＵ為ＮＩ犯ＳＵ罪ＮＩ抗Ｕ者ＴＯＴＥ無ＳＩ故ＮＩ汝ＷＡ真ＮＩ自由ＮＩＳＩＴＥ暴虐ＮＩＳＩＴＥ蒙昧ＮＡＲＵ哀ＲＥＮＡ咎人ＤＥ有ＲＵ也」

　集中してるんだ。痛みも何もまったく気にならないくらい、集中しきっている。マリアローズは右手で左腕を押さえて振り向いた。ダクゼリオンの肩毛と背毛はまだ生えっぱなしだが、百二十度から百七十度転回する前のところまで縮んでいる。ユリカは。飛燕フエイヤン。荊王ジンワンは。ユリカは棍こんを支えに起きあがろうとしていた。飛燕フエイヤンはそのユリカに手を貸そうとしている。荊王ジンワンは二人からだいぶ離はなれた場所にいた。立っている。無事なのか。よくわからない。僕はどうなんだろう。左手を動かそうとしたら、ドクッ、と自分の体内から液体が流れだす感覚があった。左腕を押さえていた右手を顔の前に持ってきてみたら、だいぶ濡ぬれそぼっていた。やばいなぁ、と思った。少しぼんやりしている。やばいなぁ。ほんとにやばい。

「もいっぺんいかせていただきますかなアアアアアアアアハハハハハハハハハハハ」

　ダクゼルのやつがあんなこと言って笑ってるし。

「ＯＨＨＨ放逐ＳＡＲＥＳＩ者ＹＯ追Ｉ立ＴＥＲＡＲＥＳＩ者ＹＯ

王者ＮＯ生贄ＹＯ覇王ＮＯ慰ＭＩ者ＹＯ全ＴＥＮＯ栄誉ＴＯ栄光ＷＡ汝ＮＯ罪ＷＯ清ＭＥＲＵＢＡＫＡＲＩＫＡ更ＮＩ是ＷＯ深ＭＥＲＵＢＡＫＡＲＩ也」

　でも、ベティは呪じゅ文もんの詠えい唱しように入っている。ここは我が慢まんだ。耐えろ。なんとしても。ぼんやりしてる場合じゃない。しっかりしろ。痛いとか言ってられない。ユリカ、荊王ジンワン、飛燕フエイヤンも、立とうとしてる。僕だって。僕だってやらないと。自分にできることをやらないと。

「──非常にブリリアーンとてもスーパー神々ギガしいハーほどにド超絶ヒツ強烈なト・一斉フオルテイツシモ射撃ヴオックスレイ………………ッ！」

　何ができるんだろう。僕に何が。あの細いものが、大量の細いものが襲いかかってくる。そんなときに僕は、いったい何をするべきだろう。ユリカ、荊王ジンワン、飛燕フエイヤンに声をかける。無む駄だだ。ベティを守る。できるだろうか。じゃあ僕は何を。マリアローズはふらふらと人工アーテイ触媒フア魔道具クトに向かって歩いていった。金鎖は穴だらけでグザグザのズタボロになった床ゆかに光こう輝きを放つ直径一・五メーテルくらいの円を描えがいていた。その光は、でも、黒い。黒い光なんてこの世界には存在しない。金鎖が放つ光はこの世界と接続された異界からもたらされたものだ。やがてその光はバァッと広がってもっと巨きょ大だいな円を描き、その円の中に複雑な紋もん様ようや文字列などが浮うきあがって、見事な魔法輪をなし、その中から異界の住人が現れるだろう。マリアローズは金鎖の手前で立ち止まって右手で偽劫火を抜ぬき、頭上を振り仰あおいだ。ああ。きた。くる。そうだ。やらせない。ダメだ。冗じよう談だんじゃない。やらせてたまるもんか。

　今、人工アーテイ触媒フア魔道具クトが破損してしまったら、魔ま術じゆつが発動しない。

　あれは当たりそうだ、あのコースからしてかなりまずい、と見当をつけたのかどうかも判然としない。とにかくマリアローズは、渾こん身しんの力をこめてその細いものに偽劫火を叩たたきつけたつもりだった。跳はね返されて、偽劫火が吹ふっ飛ばされたけれど、いくらかそれたような手て応ごたえがあった。でも、まだある。あれだ。マリアローズは無我夢中で別の細いものめがけて身体からだごとぶつかっていった。ガッ、とも、ゴッ、とも言いがたい音がして、視界が回転し、息がつまって、真っ暗になった。え？　なんで

真っ暗？　違ちがう。暗いんじゃない。黒いんだ。黒い、闇やみの、暗黒の光だ。僕はその中にいる──ってことは、ここは。ようやく自分がいる場所を認にん識しきした瞬しゆん間かん、下から、もともとは床でしかないはずの真っ黒い光の源から、さまざまな色あいの、でも、青とか赤とか緑とか黄とか呼ぶことはできない、見たこともない色の紋様が、文字列のようなものが、ブワアァッと目の前を、すぐ近くを、それから遠くを走りまわって贅贅贅贅贅贅贅贅贅贅贅贅贅贅贅贅贅贅贅贅贅贅贅贅贅贅贅贅贅贅入り乱れた。黒い光が見る間に膨ぼう張ちようした。その中で踊おどる魔術的な図案や呪のろ字がマリアローズを罪罪罪罪罪罪罪罪罪罪罪罪罪罪罪罪罪罪罪罪罪罪罪罪罪罪翻ほん弄ろうした。マリアローズは今、魔法輪の中に我虐帝髑髏也虐虐虐虐帝帝帝髑髑髏也虐帝髑髏虐帝髑髏虐帝髑髏也いるのだった。そのことは理解していたけれど、はっきり言って、え？　え？　え？　え？　というかんじだった。何がどうしてこれからどうなってしまうのか考える間もなかった。マリアローズの身体が浮きあがった。いや、そうじゃなく、マリアローズの足場が、真っ黒い光の源がグウウウウゥゥンと突つきあげてきて、その結果、その上にいるマリアローズの身体もドゥイイイイイィィィィィィィィンと上方へ移動しているのだった。何？　何？　何？　何？　思わず「きゃあっ……！」と悲鳴をあげてしまった。そりゃあ悲鳴くらいあげるよ。当然じゃないか。黙だまってるなんて、無理。絶対、一億パーセント不可能。この状じよう況きように置かれたら、誰だれでも、みんな同じだと思うし。

　だって、見てよ、これ。てゆうか、つかまらないと。しがみつかないと。落ちちゃう。落ちたら死んじゃう。高い。高いってば。高すぎ。てゆうか、何これ？　僕、何につかまってるわけ？　これ──ぬらっとしていて、それでいて、張りがあって、筋張っていて、おかげで手をかけてしがみついていられるわけだけれど、何これ？　てゆうか、どこ？　ここ……？

　虐亞亞。

　耳をつんざくというよりも、魂たましいを激げき烈れつに揺ゆさぶられる絶ぜつ叫きようだった。意味もわからず泣きたくなった。号泣したいくらいだったが、がっちりつかまっていないと落ちる、

という意識がかろうじて涙なみだを押しとどめた。てゆうかさ。魂だけじゃなくて揺れてるんですけど。ものっすごい揺れまくってるんですけど！　動いてる!?　もしかして、動いちゃってる!?　たとえば、高層寺院みたいな大きさの暴れ馬に、虱しらみ程度の大きさのマリアローズが命いのち懸がけでしがみついている。そんなふうだった。間違いなく馬なんかじゃないけど、何だよ、何なんだよ、これ!?　肉、みたいな。筋肉、みたいな。なんか臭くさいし。ぬちょぬちょしてるし。虐亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞とか言ってるし。なんとなくわかってるけど。認めたくないだけで。ひょんなこと（？）から魔法輪の中に入りこんでしまい、ベティがついに召しよう喚かん魔術を発動させて、おそらくそこから贄にえの園のおぞましい住人が、蠅はえたかり姫ひめや万眼王や悼いたみの君みたいな大物が現れて、僕が上にいるっていうのに、やつは、いや、こいつはかまわず容よう赦しゃなくドーンと現れくさって、とっさに僕はこいつにしがみついて、今もしがみついている。なんとなくそんな気がしないでもないけれど、やっぱり認めたくない。だって、危ないじゃないか。危険なことこの上ないじゃないか。なぜなら、ベティはただ気まぐれでこの大物野や郎ろうを召喚してみたわけじゃない。そんなはずがない。間違いなくダクゼリオンにぶつけるために召喚したのだ。ということは、大物野郎はダクゼリオンに挑いどみかかるはずだ。てゆうか、もう突っこもうとしている、突っこんじゃってる、なんて、いやあああああぁぁぁぁぁぁぁ……！

「──ドオオオオオオオオオオオオオオオオオオアアアアアアアアアア……!?」虐亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞「ひいいいいいいっ……！」

　ガッシィィーンといってグワッシャーンとなってドワガラガッシャャャーンみたいなかんじだった。もう何がなんだかわからない。わかってたまるか。冗談じゃない。ふざけるな。いいかげんにしろ。てゆうか、お願いします。もうマジでほんとにお願いします。助けて。揺れまくりで、すごすぎて、動かなかったはずの左手が動いてしまっているくらいだから、そうとうなものだ。そのあたりからも、どうか察して欲しい。これ以上は無理だ。しがみついていられない。振ふり落とされる。とりあえず、泣いていい？　いいよね？　許されるよね……？

「──マリア……！」

　名を呼ぶ声が聞こえたので「はい？」と返事をしてみたけれど、

その直後にグワラングァングワラングァン揺れて舌を嚙かんでしまった。痛ッとか思っている暇ひまはなかった。ガッツリ口を閉じてギッチリ目をつぶって、助けて助けて助けてと念じつづけながら、でも、この状況下で頼たよれるものは自分だけだ。だって、これだけ助けを求めても、誰も助けてなんかくれないんだもの。そりゃあみんなそれぞれ事情があるだろう。人にはできることとできないことがある。しょうがないんだろうとは思う。思うけれど、ちょっとひどくない？　みたいな埒らちもないことを考えているのか考えていないのか、とにかく渾身の力をこめて大物野郎にしがみついていると、ふと気づいた。大物野郎の表面は、どうやら筋肉みたいなぬらぬらして弾だん力りよくのある組織だけで覆おおわれているのではない。もっと硬かたい部分がある。それは白い。形はさまざまだが、それが筋肉めいた組織のあちこちから、突きだしたり盛りあがって顔を出したりしている。マリアローズの尻しりの下や指の先、足のあたりにもそれはあって、いい引っかかりになってくれている。そのおかげもあって落ちずにすんでいるのだが、いつまでもつか。何回も同じことを思っているような気もするけれど、これ以上は本当に無理だ、もう本格的にしがみついていられないって言ってるのに、懲こりずにグラグラグラグラ揺れてるし。何をそんなに張りきっちゃってるわけ？　うわわわわとか口走りながらなんで、説得力ないっていうか、言葉に出しては言えないんだけど、忠告していい？　たぶん最後の忠告になると思うんだけど、もうやめようよ。だってさ、だって、あまりにも激しい運動はかえって身体からだによくないみたいだし……！

　まさか、マリアローズの声にならない、だが、心の底からの忠告、いやむしろ、心からの祈いのりと願いを聞き入れてくれたのか。

　止まった。

　眩暈めまいがするほど、ほっとした。

　そのせいで力が抜ぬけて落ちてしまいそうになり、慌あわてて全身に力をこめなおした。

「マリア……！」

　また、声が。

　マリアローズは顔を振り向かせて下を見た。高い。床ゆかまで十

メーテル以上、たぶん十五メーテルはある。もっとか。高いところは好きなので、それでどうこう、ということはなかったけれど、大物野郎の足あし許もと、と言っていいのだろうか、足らしきものがあるようには見えないが、ともあれそのあたりに、ユリカと飛燕フエイヤンと荊王ジンワン、三人の姿を認めて、彼らが何をしようとしているのか、マリアローズにどうすることを求めているのか理解した途と端たん、涙るい腺せんから何かがあふれてきて、視界が曇くもった。や、わかるけどね？　飛燕フエイヤンと荊王ジンワンが二人がかりで布を広げてさ、その近くにユリカがいて、僕の名前を呼んで、わかるよ？　何しろって言ってるのかくらい、そりゃわかるけど、無理だと思うんだよね、やっぱり。この高さだしね？　僕だって、体重は軽いほうだけど、羽みたいにふわふわ落下するほど軽いわけじゃないしね？　そんな布じゃ受け止められないと思うよ？　マリア、今よ、早く、マリア、とかユリカは言うけどさ、決められないよ？　決断なんてできないよ？　できっこないよ？　こんなに高いんだよ？　僕はたしかに高いところが好きだけど、だからって、高いところから落ちて死ぬのが好きなわけじゃないんだよ？　そんなのあたりまえだけど、でも、このまま大物野郎につかまっていたら、いつか振り落とされることは間ま違ちがいないわけで──ああ、もう、わかってるけど、やらないといけないってことは、お父さん、お母さん、先立つ不孝をお許しください──って、とっくに先立たれてるから、いっそ放しちゃえ。えいっ。

　腹を決めて手足の力をゆるめたのと、大物野郎がまた突とつ進しんを開始したのと、どっちが早かっただろう。知ったことか。それどころじゃない。

　落ちる。落ちてる。落ちちゃってる。

　ユリカが、右、もっと右、前、もうちょっと左、とか叫さけびながら荊王ジンワンと飛燕フエイヤンを誘ゆう導どうしている。荊王ジンワンはまあアレとしても、アレって何だろう、飛燕フエイヤンまで結構真しん剣けんな顔つきで、らしくない、と思った。それにしても、想像していたより落下の速度はゆっくりだ。何かを考える余よ裕ゆうなんてないんじゃないかと思っていたのに、そうでもなくて、それがまたかえっていやらしい。あっという間に終わってしまえば楽なのに、すぐに結果が出てしまえばあきらめがつくのに、理想を言えば、あきらめる前に、あれ、終わってた、みたいな展開が一番望ましいのに、そうならないものだから、内臓がぜんぶ上のほうに引っぱられて、頭から血の気が引いて、なんか、ダメそうだ

な、なんてことを考えてしまう。そう考えると、ものすごく怖こわかった。やだよ。これでお終しまいなんていやだ。絶対、やだ。でも、終わりは確実に迫せまっている。いくらゆっくりでも、何百メーテルも落ちるわけじゃない。もうすぐそこだ。

　頭を下にして落下していることに気づいて、いけない、と思い、身体を丸めた。

　ユリカの声が聞こえて、その声は巨きよ大だいな鉄板で背中をぶん殴なぐられたような衝しよう撃げきにかき消されてしまい、首がぐらぐらして、頭がぐるんぐるん回って、何かに受け止められ、しっかりと受け止められて、でも、後頭部が何かにあたって、あぐっ、というかわいらしい声がして──あ、大だい丈じよう夫ぶみたい……？

　右手で目をこすって、荊王ジンワンと飛燕フエイヤンに見下ろされていることを知ったけれど、なんで大丈夫なんだろ。受け止めてもらったからだ。ユリカが受け止めてくれたから。てゆうか僕、ユリカを下した敷じきにしちゃってる。小さいユリカを、下敷きに。なんてことを。

　荊王ジンワンがさしのべてくれた手をつかんで、なんとか身体を起こした。飛燕フエイヤンはユリカを抱だき起こしたみたいだ。まだ頭がゆらゆらしていていまいちはっきりしないけれど、振り向いて「あり、が──」そこまで言ったところで声を失った。ああ、ユリカの顔が。ユリカの輝かがやかしいくらいに愛らしい顔が。右目から右みぎ頬ほおのあたりがボッコリ腫はれ、唇くちびるが切れて、鼻血が出ている。後頭部だ。痛いわけだ。これがあたったんだ。僕の後頭部が、ユリカの顔面に。なんてことだ。泣いて土下座して謝りたいところだったけれど、ユリカは素す早ばやく袖そでで顔をふいて、でも、鼻血は止まらず、ひどい有様なのに不思議と、いや、不思議でも何でもない、ユリカなんだから当然だ、やっぱり向日葵ひまわりみたいに明るい笑顔を浮うかべてみせた。

「平気よ、これくらい。何でもないわ」

「うん」

　そんなふうに言われたら、うなずく以外に何ができるだろう。マリアローズは下の歯で上唇をギチッと嚙かんで、あふれでてきそうな諸もろ々もろを無理やりこらえた。左手はほとんど動かない。肩

かただ。たぶん、骨までいっている。これでよくしがみついていられたものだ。冷や汗あせが出るくらい痛いが、自分だけじゃない。みんな痛い。少し離はなれた場所にいるベティなんて、脇わき腹ばらと脛すねだけじゃなく、右胸にも傷を負っていて、口から血を流しながら、それでも召しよう喚かん魔ま術じゆつに集中している。荊王ジンワンだって右足を引きずっているし、飛燕フエイヤンは元気そうだけれど、見た目は満まん身しん創そう痍いだ。こいつなんてもう、頭から足の先まで、あますところなく血まみれだし――って。

「虐ぎやく帝てい髑髏どくろ。あんなものを呼びだすなんて、いやあ、さすがは〝垂れ目ベテイ・のザ・ベドウテルーピングィアイズ〟と讃たたえるべきでしょうね。ここはやはり」

「や、あの、やはり、じゃないから。てゆうか、なんで？　なんできみ、ここにいるの？　おかしくない？　ねえ？　これってどう考えてもおかしいよね？　ね？」

　マリアローズは同意を求めてユリカ、荊王ジンワン、飛燕フエイヤンを見まわした。返事はなかったが、三人とも呆ぼう然ぜんと血まみれの男を見つめている。それが答えだった。男は、ヨグ・フローヨ・メイドルフ・サイケングレンマイセルヒは、眉み間けんに右手の中指と薬指をあてて首を振ふってみせた。

「いつまでも常識という名の檻おりの囚しゆう人じんでいることに甘んじていては、この先に広がっている無限の荒こう野やを世界の果てまで歩いてゆくことなどできませんよ？」

「いいよ。行けなくても。行けって言われても行かないから。無限なのに果てがあるとか、完全に矛む盾じゆんしてるし」

「これは一本とられましたね。ははは」

　のんきに笑っている得体の知れない血だるまヨグになんてかまっていられない。そのヨグが口にした名前なので、でまかせかもしれないし、当てずっぽうかもしれないが、虐帝髑髏、だったか。ベティが召喚した贄にえの園の住人とダクゼリオンが正面からガッツンガッツンやりあっている最中だ。マリアローズはユリカたちと一いつ緒しよにベティのそばまで移動し、固かた唾ずをのんでその熾し烈れつな、でたらめでむごたらしい、めちゃくちゃな決けつ闘とうを見守った。どう考えても、それ以外にできることは一つもなさ

そうだった。虐帝髑髏はダクゼリオンにひけをとらないくらい巨大な剝むきだしの筋肉と骨の塊かたまりで、しがみついていたときは気づかなかったけれど、ところどころから腸みたいな長い臟器や黒っぽい液体をピューピュー噴ふきだす血管のような管状のものが飛びだしている、といった姿をしていた。その塊から突つきだしている、ひときわ大きな、先が尖とがって湾わん曲きよくしている肋あばら骨ぼねみたいな形をした数十本の骨が、どうやら手足のかわりのようだった。虐帝髑髏はそれらを駆く使しして前進、または後退、あるいは方向転てん換かんし、さらにはダクゼリオンに向かって突きだしたり、斬きりつけたりしていた。実際の光景をありのままに表現するとしたら、虐帝髑髏はダクゼリオンに虐亞亞ドーンと突っこんでいって、その勢いのまま尖った骨でグザグザ串くし刺ざしにして、グジョグジョ引っかきまわし、ダクゼリオンは「グヌヌヌヌヌヌヌヌヌヌヌヌヌウウウウウウウウウウ」とか呻うめきながらもがいたり、虐帝髑髏の身体からだを押し戻もどそうとしたり、無理に骨を引き抜ぬいたりして、なんとか逃のがれようとしているが、果たせていない、といったかんじになるだろう。つまり、優勢だ。虐帝髑髏が押している。ダクゼリオンが「フンヌウウウウウウウウウウウウウウウウウウウアア！」と雄お叫たけびをあげて虐帝髑髏の筋肉をつかみ、引きちぎっても、虐帝髑髏は虐亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞と苦鳴の叫さけびをあげるだけでびくともしない。いや、だけ、と言っていいのかどうか、ものすごく恐おそろしい叫び声ではあるのだが、何しろ永遠に懊おう悩のうと苦痛と絶望と自他に向けた破は壊かい衝しよう動どうに囚とらわれて解放されることがないらしい贄の園の住人だ。気の毒といえば気の毒な話だけれど、痛いとか苦しいとかつらいとか、そういった感覚で虐帝髑髏が怯ひるむことはまずないだろう。虐帝髑髏はむしろそれを求めているかのようだ。というか、間ま違ちがいない求めている。ダクゼリオンが虐帝髑髏の身体から一本の尖った骨を力ずくで引っこ抜いて、それを虐帝髑髏にブッ刺さした。虐帝髑髏は虐非非非非非非非非非非非非非非非非非非非非非非非非非非非非非非非非非非と喚わめきながらひとしきり身をよじったあと、ほれ、とってみろ、とでも言わんばかりに、尖った骨をくいっと曲げてダクゼリオンの前に差し向けてみせた。「—ウヌヌヌヌヌヌ……！　特大小生意気なアアアアアアアアアア……！」特大なのか小さいのか、いったいどっちなんだよ、と思わなくもなかったが、ダクゼリオンは尖った骨を握にぎってぶっこ抜き、それでもって虐帝髑髏をブサブサ刺した。腐非腐

非腐非腐非……！　それは虐帝髑髏の笑い声に違いなかった。笑い声は、だが、そのうち虐非非非非非非非非非非非非非非非非非非非非非非非非非と泣き叫ぶ声に変わった。マゾだ。とんだ重度のマゾヒストだ。でも、ただのドＭじゃない。いきなりだった。

　虐帝髑髏の、球といってもかなり崩くずれた球体だが、そんな形をした身体が、その真ん中くらいのところから、ばくっと縦に裂さけて開いた。見ようによっては、口を開けたように見えなくもない。だとしたら、でかい口だ。そうとうでかい口だと言わなければならないだろう。

「──ノオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオォォォォォォォ……！」

　ダクゼルが態度と声で拒きよ絶ぜつの意を表したが、当然のことながら虐帝髑髏は気にしなかった。ダクゼルの口も縦に裂けていることを考えれば、ちょっと皮肉だ。虐帝髑髏の口らしきものはダクゼリオンの胴どう体たいにガブッと嚙みついた。あいにくそのまま嚙みちぎってしまうことはできなかったが、かぶりついたままガジガジ咀そ嚼しやくした。

「わたわたわたわたわたくしを食べ食べ食べ食べ食べ食べないでエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエ……！」

　今、虐帝髑髏はダクゼリオンをがっちり嚙みしめていて、二体の動きが止まっている。

　チャンスか。

　マリアローズはベティをちらりと見た。依い然ぜんとして集中は維い持じしているようだけれど、顔色がだいぶ悪い。傷も深そうだが、かなり出血している。ユリカがこっちに視線をよこした。治ち療りようしたほうがいいか、という表情だ。医術式は集中の妨さまたげになるだろうか。わからないけれど、もし集中を破ってしまったら、一気に形勢が逆転する。ダメだ。首を横に振るしかない。でも、ベティの体力がいつまでもつか。わからない。決められない。だけど、決めないと。僕が決めないと。左肩が痛い。それがどうした。決めないと。決めないと。

　歯を食いしばってから息を吐はいて、叫ぼうとした。妙みようだ、と思った。

たしかに、虐ぎやく帝てい髑髏どくろはダクゼリオンを食べてしまおうとしている。そう。ダクゼリオンを。何が妙なのか。ダクゼルは今も「キィィヤアアアアアアア」とか「やアアアアアめエエエエエエエエエエエてエエエエエエエ」とか叫んでいる。あれだ。あのダクゼルの言い様だ。食べないで。わたくしを食べないで。

「──なアアアアアアんちゃって」

急にダクゼルの悲鳴がやんだ。

「ダァァァクゼリオンッ！　雄々しくヒロイツク猛ウ々エしウいエ嘔吐ヴオのよミツうなト・素晴ブレブレらしいブレイブ衝撃波ワンダフオー……ッ！」

何だ。あれは。どこだ。ダクゼリオンの頭部、ちょうどダクゼルがいるあたりだろうか。そこから発せられた、光──火花みたいなものをバッチバチバチバチ撒まき散らしながら放射された青白い光の奔ほん流りゆうは、音もなく一いつ瞬しゆんで消え失うせてしまった。

もっとも、消えたのは光だけではなかった。

光にふれた虐帝髑髏の上半分も消し飛んでいた。

虐帝髑髏はまだ半分残っているが、ダクゼリオンの胴どうにかじりついていた口も半分しかない。その顎あご、と呼んでいいのかどうかわからないが、あれを口だとしたら、顎と呼ぶしかない部分の力がゆるんで、虐帝髑髏の身体全体が、ずる、と沈しずんだ。

「わたくしに楯たて突つくとはよき度胸でしたアアアアア、が──相手がいかにも、いかにも、いかにもオオオオオオ悪わろし、悪し、悪オオオオオしイイウフハハハハハハハハハハ──」

そのままへたりこんでしまうかと思われた虐帝髑髏は、だが、見事に持ちなおした。いや、見事以上だった。

「ハ……？」

虐帝髑髏の両りよう脇わきから、そんなものを隠かくしていたなんて、と歓かん喜きをこめて叫びたくなるような、鋭えい利りで長大で凶きよう暴ぼうそうな二本の骨が迫せまりだして、鋏はさみみたいに猛もう然ぜんと左右から襲おそいかかり、ダクゼリオンの首

を、ジョッキン、と叩たたき斬きった。さらに、他の尖とがった骨がーいつ斉せいに動きだして、ダクゼリオンの身体を突つき刺し、突き破やぶって、引きちぎりまくった。

「──ぅ……ぁ……」

　ベティ。ベティの声だ。見れば、ベティの表情はひどくゆがんでいて、額から汗あせが噴ふきだしている。目の下に尋じん常じようではないほど濃こい隈くまが浮うきあがり、荒あらい呼吸にあわせて口から血がごぼごぼ流れだしているのに、それでもまだベティは集中しつづけている。だけど、もう無理だ。いくらなんでも無茶だ。

　虐帝髑髏の足あし許もとから黒い光があふれた。

「──ヌウウハアアアアアアアアアアアアアア
アァァァァァァァァァァァァァァ……」

　ダクゼリオンの首が後ろに落下する。

　虐亞亞亞。

　虐帝髑髏は底なし沼ぬまにのみこまれるようにして黒い光の中へと落ちこんでゆく。

　マリアローズは叫さけんだ。

「──ピンパーネル……！」

　ダクゼリオンの首が床ゆかに叩きつけられて転がった。

　虐帝髑髏はもう消え去ろうとしている。

　ピンパーネルは思いもよらない方向からダクゼリオンの首に迫った。

　マリアローズから見て、正面だ。そのもっと先にはルヴィー・ブルームがいる。ようするに、ピンパーネルはいつの間にかダクゼリオンの背後に回りこみ、どこかに身をひそめて、マリアローズの合図を待っていたのだ。

芯しんを失ったように崩れ落ちたベティをヨグが抱だきとめた。

ダクゼリオンの生首から飛びだして、床に尻しり餅もちをついたのはダクゼルだろう。

マリアローズは息をのんだ。

ピンパーネルが一いち陣じんの砂すな嵐あらしとなって雌し雄ゆう一対ついの短たん剣けんを手にダクゼルへと突とつ進しんしてゆく。

「──ハヌウ……！　このダクゼルを……！」

ダクゼルが縦に裂けた口をいっぱいに開いたように見えた。

心臓が止まった。瞬間、本当に、止まった。

光だ。あの、光。大量の火花をまとった青白い光がピンパーネルめがけて放たれた。

声も出なかった。

ああ──、

でも、消えてない。

ピンパーネルはまだいる。しかも、止まらなかった。ピンパーネルはダクゼルに飛びかかっていった。だけど、ピンパーネルは──光が、あの光が、さっきよりもだいぶ弱かった、そう、考えてみれば、ぜんぜん弱かったから、それで大だい丈じよう夫ぶだったのかもしれないけど、大丈夫なんかじゃ、ない。

身体からだの前面が黒くろ焦こげだった。真っ黒で、ここからでは、目も、鼻も、口も区別がつかなかった。服も何もなかった。それなのに、ピンパーネルは動いていた。ダクゼルに襲いかかった。右手の雄おすのグレアデを突きだした。弾はじき返された。「阿あ呆ほうオオオオオオオオオウ……！　このダクゼルにそんなものがアアアアアア」ダクゼルのバカ笑いはすぐに凍こおりついた。左手の雌めすのリレッザだ。ダクゼルを守る透とう明めいの、目に見えない魔ま術じゆつ的な障しよう壁へきが、雄のグレアデを跳はね返した絶対Ａ魔術Ｍ物理Ｐ障壁フイールドが、雌のリレッザに斬りつけられて、斬り刻まれて、割れた。木こっ端ぱ微み塵じんになっ

た。「──アアアアアアアァァァァァァァァァァン……!?」

「うううううううううあああああああああああああああああああああああああ……！」

　ピンパーネルはダクゼルに体当たりして、押し倒たおし、のしかかった。あんな声は聞いたことがなかった。ピンパーネルがあんな声をしぼりだしながら雄のグレアデと雌のリレッザを振ふるったことは、今までただの一度もなかった。マリアローズは走りだした。視線の先ではピンパーネルがダクゼルを解体していた。すぐによく見えなくなって、顔をぬぐった。もう、いいから。もう、いい。ピンパーネル……！　くそ、くそ、僕は、僕は、僕は……！

　ダクゼリオンの残ざん骸がい、不調和生物たちをよけ、跳とび越こえながら、わきあがってくるのは後こう悔かいと自分自身への罵ば倒とうだけだった。ダクゼルの絶対Ａ魔術Ｍ物理Ｐ障壁フィールドを破ることができるのは、ピンパーネルしかいない。雌のリレッザは、かつてレディ・麟りん霊れいの絶対Ａ魔術Ｍ物理Ｐ障壁フィールドを破は壊かいした。本物の魔術士殺しだ。だから、マリアローズたちはベティを中心としてダクゼリオンを叩き潰つぶし、ピンパーネルがダクゼルを直接攻こう撃げきできるような状じよう況きようを作る。そのときがきたら、ピンパーネルにダクゼルをしとめてもらう。名案だとは思わなかった。ただ、それしかないと思った。こっちがうまくやれば、ピンパーネルはきっとやってくれる。絶対にしとめてくれる。信じていた。でも、不安があった。本当に、心の底から信じていたのに。問題はこっちがうまくやれるかどうかで。それなのに、あの不安は何だったのか。まさか、これか。これなのか。ピンパーネル。ああ、ピンパーネル、どうしよう。

　ピンパーネルはまだダクゼルの上にまたがっていた。

　原形をとどめないくらい、ばらばらになったダクゼルの上に。

　雌雄一対の短剣は床に転がっている。

　名前を呼ぼうとした。声が出ない。なんでだよ。なんで。どうして。

　動かない。

　ピンパーネルが、ぴくりともしない。

　近づいて、肩かたに手をふれたら、黒く焦こげた皮ひ膚ふがずるっと剝むけて、ピンク色の肉が見えた。慌あわてて手を引っこめると、動いた。動いてくれた。ピンパーネルがこっちを向いた。

　顔が──でも、黒い。真っ黒だ。何がなんだかわからない。

　違ちがう。

　よく見ろ。あるじゃないか。

　ちゃんとある。

　目も、口も。

「マ……リア、さ……こ・れ」

　ピンパーネルは焼け焦げた木みたいな右手を持ちあげた。首飾りチヨーカーだ。首飾りチヨーカーをマリアローズに手て渡わたそうとして、だが、がくんと右みぎ腕うでの力が抜ぬけた。首飾りチヨーカーは床に落ちた。

「──ピン、パ……」

「ワ……タシ」

　白い歯がのぞいた。

「だい・じょ……ブ……で……」

　ピンパーネルはあんなにゆっくりと倒れていったのに、どうして僕は手を出して支えることさえできなかったんだろう。なんでいまだにぼうっと突つっ立って見下ろしているだけなんだろう。ようやく許しを乞こうように跪ざまずいて、でも、まだふれることすらできずにいる。

　首飾りチヨーカーがすぐそばに落ちていた。硬こう貨かのような部分には目を象かたどった紋もん章しようが刻まれている。僕のと一いつ緒しよだ。そんなことを考えながら首飾りチヨーカーを拾いあげた。ピンパーネルはこんな物のために。でも、ピンパーネルが命いのち懸がけで。命懸け……？　何を言っているんだろう。僕は、何を。

頭の前のほうが痺しびれている。ああ、何も考えられない。考えたくない。

何の意図もなく、首飾りチヨーカーをぐっと自分の胸に押しつけた。思いきり、強く押しつけた。その拍ひよう子しに、硬貨のような部分同士がふれあった。あっという間だった。とけてしまった。首飾りチヨーカーの硬貨のような部分以外が黒い粒りゆう子しとなって飛散し、それらが空気中にとけこんでわからなくなってしまうと、あとはもう跡あと形かたもなくなった。手の中には硬貨のような部分が二つ、残された。何だよ、これ。何だっていうんだよ。なんだか、バカにされているような、からかわれているような気がしてならなくて、硬貨のような物体を握にぎりしめ、床ゆかに叩たたきつけようとした。それはいかにも無意味な行こう為いだった。僕はいったい、何をやってるんだ。どうすればいいんだろう。この気持ちを、どうすれば。

教えてよ。

ねえ。

お願いだから。

影かげが差して、顔を上げると、黄玉トパーズの瞳ひとみに見下ろされていた。トマトクンはマスクをずらしてピンパーネルのそばにしゃがみこみ、ためらうそぶりも見せずにその身体を仰あお向むけにした。肩に手を置かれた。サフィニアだった。泣いてしまいそうになった。我が慢まんした。トマトクンは焼け焦げたピンパーネルの首筋に、おそらく頸けい動どう脈みやくがあるあたりに手をあてながら、口に耳を寄せた。手の中にある硬貨みたいな物体を、わけもなくこすりあわせた。トマトクンが一度目を閉じてから、うなずいた。

「まだ息はある。大だい丈じよう夫ぶだ」

　でも、と言いかけた。でも、何？　何だっていうんだよ？　でも、なんて、でも、とか、僕は、もう、ダメだ、と思った。限界だ。こらえきれない。目の前がぐじゃぐじゃになった。声を抑おさえることもできなかった。サフィニアが後ろから首に両手を回してきた。ぎゅっと抱だきしめられた。頰ほおにサフィニアの頰が押しあてられた。だって、だって、だって、と繰くり返し言いながらサフィニアの腕にしがみついた。そのうち何を言ってもちゃんとした言葉にはならなくなった。歯の根があわない。身体からだが粉々に砕くだけてしまいそうだ。サフィニアに名前を呼ばれた。マリア。マリア。だって、ピンパーネルが。ピンパーネルがね。動かなくて。だって。倒たおれて。真っ黒焦げで。僕は。だって。トマトクンが眉まゆをつりあげて吼ほえた。

「馬ば鹿かなことをぬかすな！　ピンプがこの程度で死ぬものか！　息があれば大丈夫だ、ピンプは死なん！　死ぬわけがない！　━ユリカ……！」

「はい……！」

「治ち療りようだ！　急げ！　絶対に死なせるな！」

「まかしぇて！　ヨグしゃん、ベティしゃんもこっちに運んで！　飛燕フエイヤンも手伝ってあげて！　他ほかの人も！」

「わかりました」「おうッ……！」「わかった」「おっしゃ！」

「二人同時に看みるわ！　交こう互ごに！　みんな怪け我がをしているでしょうけど、目め途どがちゅくまでちょっと我慢して！」

　我慢。我慢、する。できる。我慢なんて。痛いとか、そんなのどうでもいい。僕は我慢できる。でも、ピンパーネルは？　僕が我慢することで、ピンパーネルがどうにかなる？　そういう問題なんだろうか。僕は何をすれば？　徒労だ。何のために。ダメだ。埒らちもない。気が遠くなる。逃にげようとしている。逃げるな。逃げてどうする。息をして。呼吸を整えて。歯を食いしばれ。うなずいてみた。何度もうなずいた。サフィニアが抱きしめてくれている。ユリカは目をつぶってピンパーネルの胸に手をあてていた。数人がかりで運ばれてきて、床に寝ねかされたベティが、あたしは平気だから、と切れ切れの声で言いながら起きあがろうとした。ダクゼリオンを構成していた不調和生物たちの死し骸がいが、そこらじゅうに転がっている。まだ生きている不調和生物たちは、潮が引くように壁かべ際ぎわへと退いていた。

　あいつは一人で歩いていった。

　まっすぐ歩いていった。

　歩ほ廊ろうの果てにいるあの男が立ちあがるまで、足を止めなかった。

「キサマを殺すためなら」

　あいつの声は静かだった。

　どこまでもつめたく澄すんでいた。

「ボクのすべてを捧ささげてもかまわない」

「嬉うれしいことを言ってくれるね」

　あの男は岩の台座からゆったりとした足どりで下りてきた。

「アジアン。じつに嬉しいよ。私のためにその身を捧ささげてくれるなんてね。おまえの口からそんな言葉を聞くことができるとはね。だが、アジアン。それはあたりまえのことだ。しごくあたりまえのことにすぎないのだ、我がmai愛し子よ-dear」

「冗じよう談だんでもそんな呼び方はしないでもらおう」

「なぜだい」

「不ふ愉ゆ快かいだ」

「知っているよ、アジアン。おまえがいやがるだろうことはね。もちろん知っているとも。だがね。私としては、やはりこう言わずにはいられないな。アジアン。我が子を我が子と呼んで何がいけないのかな？」

「何……？」

　あいつの声が揺ゆれた。

　あの男とあいつとの距きよ離りはもう十メーテルくらいだ。

「アジアン」

　あの男は黒く、赤く、禍まが々まがしく金色に輝かがやく両りよう眼めを細め、両りよう腕うでを広げてみせた。

「おまえは正真正しよう銘めい、私の子だ」

「嘘うそだ」

「嘘ではないよ。本当だ。母親はいないがね」

「キサマは、何を言っているんだ」

「事実だよ、アジアン。揺るぎのない真実だ。生き物はね。大まかに分けると二種類の方法で生せい殖しよくする。有性生殖と無性生殖だ。簡単に言えば、配はい偶ぐう子を用いるのが有性生殖で、用いないのが無性生殖ということになるかな。人間はむろん有性生殖だ。私もね。こう見えて人間だから、普ふ通つうに子孫を残そうとしたら、有性生殖を行うしかない。私の精子と雌めすの卵子が受精して受精卵となり、新たな個体が発生する。そうしてもよかったが、もっといい方法を見つけた。私にふさわしい、私の目的にかなった方法だよ、アジアン。何だと思う？」

「何を──キサマは、言っているんだ」

「rebnaxxntquesrexxinmmgという。共通語に訳すのは少々難しいね」

「……まさか」

　そうつぶやいたのはヨグだった。

　あの男はヨグを一いち瞥べつしただけで、すぐあいつに禍々しい双そう眼がんを向けなおした。

「私はその方法をある悪あく魔まから学んだ。悪魔の、すべてではない、ごくごく一部だが、この方法で生殖する。素す晴ばらしい技術だよ。何が素晴らしいか。それはね。この方法で産まれた個体が、子を望む親にとって完かん璧ぺきな子となるために回かい避ひしえない偶ぐう然ぜん性を理論的には完全に排はい除じよできるからだ。親個体を、つまり私自身を基き礎そとした発生体に、手を加える――これを操作し、改変し、改良することで、望ましい個体をつくりあげることができるのだ。あくまで理論的には、だがね。実現するためには多くの困難が待っている。試行錯さく誤ごの連続だったよ」

「キサマは」

「アジアン、おまえにはね、たくさんの、大勢の、とてつもない数の、兄が、姉が、兄とも姉とも呼びがたい者たちがいる」

「何を――」

「アジアン、おまえも知っている者たちだ」

「言って」

「穢けがれし者どもの国は」

「何、を」

「あの国の民たみは」

「キサマは――」

「一人の例外もなく」

「な」

「見ア棄バてンらドれウ路ラの見棄てアバられ子ダンたちさえも」

「にを」

「すべて、すべてだ、アジアン、全員だよ。もともとはおまえをつくりあげるために、アジアン、我がmai愛し子よ-dear、おまえがこの世に生を受けるために、私の手によって産みだされた者たちなのだよ。もちろん、おまえがあの場所から逃げだすために殺した見棄てアバられ子ダンたちも、最前、勝負に敗れて息絶えたバシルドもそうだ」

「──言って……」

「皆みな、私の子だ」

「キサマは……！」

「もっとも、おまえができあがったあとは修モ道ン士クたちが無様な生き物を勝手に生産しているだけだがね。あの施設はもう用済みだ。とはいえ、あの子らにも生きる権利はある。おまえもそう思わないかい、アジアン？　他ひ人と事ごとではないのだからね。おまえもああだったかもしれないのだからね。おまえも完璧とは言いがたいが、ある程度までは望ましい成功例で、あの子らはまったくの失敗例だ。違ちがいはそれだけだよ。その違いこそが、何よりも大きいのだがね」

「…………………………………………」

「アジアン」

「………………………………」

「どうしたんだい、アジアン。傷つけてしまったかな。傷ついたような顔をしているね」

「……………………」

「だが、どうして傷つくことがある？　おまえがあの子らを毛け嫌ぎらいしていたから？　蔑さげすんでいたから？　こんな自分でも彼らよりはマシだと思い、みずからを慰なぐさめていたから？　それなのに、実際は紙かみ一ひと重えの同類にすぎないことが判明したから？　それとも、大嫌いな私の子だという事実が、隠かくしようのない、揺るぎない真実が、アジアン、おまえにとってはそれほどまでに痛手なのかい、アジアン？」

「…………」

「ああ、かわいそうに、アジアン」

「言いたいことは、それだけか」

「いいや、まだあるよ」

　ルヴィー・ブルームは唇くちびるの両りよう端たんをつりあげてみせた。

「第六勝負シクススゲイムはおまえたちの勝ちだ。ここまでは全勝だね。見事だよ。私の目もく論ろ見みは物の見事に外れてしまった。〝踊り羊ダンシングシープ〟が敗れることは万が一にもないと思っていたし、魔術士を失ったおまえたちがアクゼルに勝利する見込みはないはずだった。ところが、おまえの魔術士は想像以上だったね。さらに、魔術士殺しを持つ者がいるとは計算外だったよ。いや、素敵だ。本当ならここで、おまえの目の前で、おまえ以外の参加者プレイヤを皆殺しにする予定だった。そうなったらディオロットがしゃしゃり出てくるかもしれないが、とくに問題ない」

　トマトクンはピンパーネルのそばにしゃがみこんだまま、ルヴィー・ブルームをにらみつけている。

　二人の視線が一瞬、絡からみあって、反発しあった。

「木で偶くの坊ぼうだ。今のディオロットでは私を殺せない」

「問題ない」

　声を残して、アジアンが消えた。

　ふたたび現れたときにはもう、泣き叫ぶスクリーミング・短剣ダガーを抜ぬいてルヴィー・ブルームに迫せまっていた。

「──ボクがキサマを殺す……！」

「アジアン」

　ルヴィー・ブルームは右みぎ腕うでの手首と肘ひじの間くらいの場所で泣き叫ぶ短剣を受け止めていた。その刃やいばはしっかりと食いこんでいる。白い衣服はもちろん、皮ひ膚ふを破り、肉を断って、あの深さだと、骨にまで達しているはずだ。それなのに、出血していない。あれは血じゃない。透とう明めいだ。傷口から無色透

明の粘ねん液えきのようなものがあふれだして、したたっている。

「親に手をあげるとは、悪い子だ」

「仲間はどこにいる」

「勝負ゲイムを始める前に教えてあげようと思っていたのに、おまえが焦あせるからだよ、アジアン」

「どこにいる」

「上だ」

　そう言われても、ほとんど密着しているこの状態でルヴィー・ブルームから目を離はなすわけにはゆかない。アジアンは接近したときと同じくらいの勢いで飛びすさって振ふり仰あおいだ。

　今まで気づかなかったのは、クライスト式建築独特の意い匠しようのせいだろうか。歩ほ廊ろうの天てん井じようは高い。とても、とても高い。じっと見ていると視覚がかき乱されて、距きよ離り感かんも形態の把は握あくもめちゃくちゃになってしまいそうになるので、床ゆかから天井まで何メーテルくらいあるとか、大おお雑ざつ把ぱにも言えないのだが、ダクゼリオンや虐帝髑髏が自由自在に暴れまわっていたことから考えると、三十メーテル以上はあるだろう。あるいは五十メーテル、ひょっとしたら、それ以上かもしれない。

　注意深く観察しなければ、天井の一部にしか見えなかった。

　しばらく凝ぎよう視ししていると、その形がじわじわと浮うきあがってくる。

　何かいる、とわかる。

　ある、ではない。

　いる、だ。

　長い胴どう体たいから首と四し肢し、それに尻尾しつぽが突つきだしていて、天井に吸いついているその姿はまるでヤモリのようだが、この距離で、あの大きさだ。おそらく、とてつもなくでかい。ヤモリなんかであるはずがない。

「アジアン」

　ルヴィー・ブルームは巨きよ大だいヤモリを指さし、首を傾けてみせた。

「オロバルザスという。私がつくりあげた者の中ではもっとも大おお柄がらの部類だ。おまえの仲間はオロバルザスの腹の中にいる」

　床を踏ふんでいるアジアンの足に力がこめられた。また飛びだそうとしている。その寸前に、ルヴィー・ブルームが手をあげた。

「安心しなさい、我がmai愛し子よ-dear。腹の中といっても、餌えさとして与あたえたわけではない。オロバルザスの腹ふく腔こうには中空の器官があってね。おまえの大切な仲間たちはその中にいるのだ。皆、すこやかで穏おだやかな眠ねむりについていたのだが、どうやら目覚めてしまった者がいるようで、今は少しばかり賑にぎわしいよ」



「みんなに何をした」

「眠りのときには、誰だれしもが幸福な夢を貪むさぼっていたいものだろう？」

「キサマ……」

「生き物としてはあまりにも脆ぜい弱じやくだが、性能は瞠どう目もくに値あたいする。なかなかの傑けつ作さくだと思わないか、アジアン。おまえも見ただろう？　おまえの願望が、欲望が、希望が形となって、おまえを捕とらえる夢に、アジアン、おまえもしばし身を任せていたのだろう？　私のお気に入りだ。ナジは、ほら──」

　ルヴィー・ブルームが左手を持ちあげた。その袖そでの中からもそもそと這はいだしてきて、白い掌てのひらの上にのったのは、あの生き物だった。真っ黒い、毛むくじゃらで、丸っこく、尻尾のあるあの生き物は、しかし、一匹ぴきではなかった。二匹、三匹、四匹、五匹。どんどん袖の中から出てきて、ルヴィー・ブルームの手の上に、肩かたの上に移動し、一いっ斉せいに見開いた。

　目だ。虹こう彩さいは赤あか錆さび色で、黒い瞳どう孔こうが縦に裂さけている。

　一つ目だった。

「たくさんいる。愛らしいだろう？　性質も穏おん和わで忠実だし、愛あい玩がん動物としても──」

　同時だった。少なくとも、同時にしか見えなかった。

　あるナジは縦に両断された。あるナジは横に真っ二つにされた。あるナジは目玉の真ん中に穴を穿うがたれた。

　五匹のナジは、死し骸がいというよりも塵ごみ屑くずのような有様に成り果てて、床に落ちた。

　いつの間にか、アジアンがルヴィー・ブルームの目の前に立って、その喉のど元もとに泣き叫ぶ短剣の切っ先を突きつけていた。

「人を嬲なぶって嘲あざ笑わらう。それしかないのか。ルヴィー・ブルーム。キサマは哀あわれだ」

「おまえは私だよ、アジアン。本当はわかっているのだろう？　認めたくないのかい？」

「認めたくないんじゃない。認めない」

「今に認めざるをえなくなるよ」

「認めない……！」

　アジアンが繰くりだした泣き叫ぶ短剣を、ルヴィー・ブルームは左腕で防いだ。その直後だった。ルヴィー・ブルームは左手をのばしてアジアンの右手首をつかんだ。アジアンはすかさず膝ひざ蹴げりを叩たたきこもうとしたが、これはルヴィー・ブルームの右手にたやすく止められた。それなら、とばかりに頭ず突つきをお見み舞まいするべく、反動をつけるために身体からだをのけぞらせたアジアンの腰こしに、ルヴィー・ブルームの右腕が巻きついた。アジアンは抱だきよせられた。

「踊おどろうか、アジアン」

「──く……！」

　アジアンはルヴィー・ブルームの顔面に額をぶつけようとした。あたらなかった。かわされてしまった。アジアンの首筋に、ルヴィー・ブルームが唇くちびるを寄せた。アジアンは身をよじりながら、左手でルヴィー・ブルームの頭を殴なぐろうとしたのだろうが、果たせなかった。アジアンの左手はルヴィー・ブルームの右手にとらえられた。アジアンは押し倒たおされた。

「やれやれ、だ」

　ルヴィー・ブルームは両手でがっちりとアジアンの両りよう腕うでを押さえつけ、股こ関かん節せつから腿ももまでを両足でしっかりと固定してしまった。アジアンは動けない。身動きすることくらいはできても、あのままだとそれ以上の抵てい抗こうは無理だ。

　たとえものすごく着やせするタイプだったとしても、ルヴィー・ブルームは筋きん骨こつ隆りゆう々りゆうといった身体つきではないのに。背はアジアンより高いものの、体格に途と方ほうもない差があるかといえば、そんなことはないだろう。それにもかかわらず、とてつもない怪かい力りきの持ち主なのか。でも、アジアンだってああ見えてかなり力がある。それを遥はるかに上回っているのか。それだけか。違ちがうような気がする。たぶん、そういう問題じゃない。

　いずれにせよ、あのアジアンが子供扱あつかいされている。それは否定しようのない事実だ。

「質問してもいいかい、アジアン。私を殺す？　どうやって？　おまえにできるのかい？　この様ざまで？　可能かな？　不可能に思えるね。私は無理だと思うよ。今のままではね。可能性はゼロだ。ゼロ。ゼロ。ゼロ。ゼロだよ、アジアン」

「黙だまれ……！」

「わざわざ教えてあげないといけないのかい。丁てい寧ねいに、丹たん念ねんに、教えてあげないとおまえはわからないのだね、アジアン。おまえは子供だね。もう少し大人になったのではないかと、成長したのではないかと期待していたのにね。残念だよ、アジアン」

「──キサマに……！」

　アジアンは全身を床ゆかに押しつけるようにして、ルヴィー・ブルームをはねのけようとしたのだろう。それが功を奏したのかどうか。きっと違う。ルヴィー・ブルームはみずから離はなれた。飛び離れた。文字どおり、本当に飛び離れたのだ。

　アジアンの両手両足を解放して、飛びあがった──その前か、それと同時か、後かはわからない。

　背中だ。

　ルヴィー・ブルームの背中に、白い衣服を突つき破って、筋のある、半はん透とう明めいの、白はく濁だくした、あれは、羽だ。いや、鳥の羽とは違う。翅はねだ。昆こん虫ちゆうの翅に似ている。

　大きな、ルヴィー・ブルームの身体ほどもありそうな翅が四枚、その背中に現れて、高速で羽ばたいていた。

　飛んでいる。

「我がmai愛し子よ-dear」

　垂直に十メーテルばかりも上じよう昇しようして、停止し、ルヴィー・ブルームはその禍まが々まがしい瞳ひとみでアジアンを見下ろしていた。

「私はおまえの親だ。おまえは私のものだ。私自身のようなものだ。アジアン、私はおまえを愛しているよ。だから、教えなければ

ならないのなら、教えよう。それでは駄だ目めだ、アジアン。駄目だよ。馬ば鹿かな子だ」

　アジアンは立ちあがりもせずに目を見開いてルヴィー・ブルームを見上げている。

　ルヴィー・ブルームは両手で自分の胸を掻かきむしるような仕し種ぐさをした。いや、実際、黒い爪つめが白い衣服に食いこんで、たやすく引き裂さいてしまった。

「威鷺虞Ｇａｘｉｓ」

　声。この声は。ルヴィー・ブルームの声なのか。そうじゃない。ルヴィー・ブルームの口は動いていない。それよりも、これは。この呪じゆ文もんは。聞き覚えがある。どこで？　ここだ。この怪かい虫ちゆうの坩堝るつぼガンズゲイルで聞いた。呻うめき声がした。ベティだ。ベティが押しとどめようとするヨグの手を振ふり払はらって身体を起こした。

「滅崇Ｄｅｕｘ嵐怒」

　雷かみなりだった。雷らい光こうと雷鳴がほぼ同時に視覚と聴ちよう覚かくとを引き破った。あるいは、打ち砕くだいて木こっ端ぱ微み塵じんにした。真っ白だ。焼きついている。何も見えない。今は。そうなる前に、たしかに見た。落雷を。雷はルヴィー・ブルームが浮ういている地点よりもさらに高い場所からまっすぐ落ちた。さながらそれは光と音の瀑ばく布ふのようだった。

　やがて激しい息づかいが聞こえてきた。

　ば、とか、な、とか、何か言おうとして言えずに途と切ぎれてしまう声が胸を衝ついた。

　間もなく目を覆おおっていた白い膜まくが晴れた。

　ベティが立ちあがろうとして、へたりこんだ。

「……雷らい獅じ子し……どうして……」

「あいにく、私には魔ま術じゆつの才能がないのだよ」

　ルヴィー・ブルームが空中で肩かたをすくめながら唇くちびるの

両りよう端たんをつりあげてみせた。

「なぜか世間では魔術士ということになっているようだが、私は魔術を使えない」

　あの男はいったい何を言っているのだろう。魔術を使えない、だって？　でも、あれは魔術だ。ベティが口にした、雷獅子、というのが名前なのか。そう。ベティが使ってみせた。あれと同じだった。まったく同じ呪文だった。ルヴィー・ブルームだ。雷獅子を使った。違う。呪文を詠えい唱しようしたのはルヴィー・ブルームじゃない。ルヴィー・ブルームの口は動いていなかった。声も違った。

「持つべきものは友、という言葉を知っているかい。陳ちん腐ぷだが、私は真理だと思うよ」

「……古い、魔術なの。ずいぶん、古い……もう、失われてしまった……あたしが……それを、見つけ、て──」

「ベティしゃん！」

　血を吐はきながら咳せきこみはじめたベティにユリカが飛びついて、飛燕フエイヤンとヨグを加えた三人がかりで強ごう引いんに寝ねかせた。

「そう、古い魔術だ。我が友が編みだした」

　禍々しい眼めが伏ふせられた。自分の胸のあたりを見つめているようだ。

「せっかくだから紹しよう介かいしよう」

　奇き異いというよりも奇き怪かいと言うべきだろう。ルヴィー・ブルームがみずから衣服を引き裂いたため、喉のどから腹までが露ろ出しゆつしている。そこにありうべからざるものがあった。

　顔だ。

　人間の、顔だ。

　人の顔を象かたどった白い面を、胸の真ん中に何らかの方法によって嵌はめこんでいるのか。その顔は、目と鼻と口を備えている

が、眉まゆはなく、瞼まぶたを閉じている。ちょうどルヴィー・ブルームの肌はだと同じ色だ。まるで死に顔のような、作り物の面めんのように見える。そう見えなくもないが、違う。そうじゃないことはわかっている。面なんかじゃない。動いていた。あの唇が。あの顔の口だ。呪文を唱えた。雷獅子。あの顔が魔術を使った。顔が？　顔が、魔術を……？

「我が友、ギュンツァーだ」

「腐くされ外道め」

　トマトクンがルヴィー・ブルームをねめつけて吐き捨てた。

　ギュンツァー。知っている。少しでも魔術や歴史をかじったことがあれば、まず知っているはずだ。〝鴉大帝グレイト・クロウ〟ギュンツァー。魔導王だ。巨鳥〝摩訶鴉マカガラス〟の背に乗って天空を翔かけまわり、みずから産みだした人造生物の大軍勢を率いて、現在、中部諸ミツ国域トランズと呼ばれている地域の半ばを支配していたという。あれがギュンツァー？　あの顔が？　とうてい信じられるものではないが、疑う根こん拠きよといえば、そんなことはありえない、という生理的な嫌けん悪お感かんや恐きよう怖ふにも似た理り屈くつのつかない思いだけだ。

「相変わらず口が悪いね、ディオロット」

　ルヴィー・ブルームは低く喉を鳴らした。

「これは、あの無様な戦いでひどく傷ついた彼が望んだことなのだよ。生存と、その向こうにある不死を求めてね。以来、彼はこうして私とともにある。彼が生きていると言えるのかどうかについては、微び妙みようなところだがね」

「そうやって貴様は……！」

　トマトクンが大剣の柄に手をかけた。今にも飛びだしそうな勢いだ。でも、そんなことはどうでもいい。いいはずがないけれど、それどころじゃない。ずっとそれどころじゃなかった。目をそらしていた。見てしまうと、呼吸が千ち々ぢに乱れる。心臓が凍こおりついたようにつめたくなって、それなのに狂くるったみたいに暴れまくる。汗あせが出る。止まらない。瞼が痙けい攣れんする。頬ほおが、顎あごが、肩が、指が、身体中が。何も制せい御ぎよできなく

なる。だから見ないようにしていた。僕が見ようと見まいと、変わらないのに。そんなことはわかっているのに。無む駄だだ。ぜんぶ無駄だ。何もかもが。ああ、と僕は声をもらして、右手で髪かみの毛をつかんで強く引っぱり、ガチガチ鳴って鳴り止やまない歯の音を聞いて、もう一度、ああ、と言った。口をきつく閉じて、鼻で息をした。自分がなんでそんなことをしているのか、さっぱりわからない。違ちがうような気がする。今、僕がしないといけないことは他ほかにある。それが何なのか、見当がつかない。足が震ふるえている。奇き妙みような震え方だ。足あし許もとが、足首が、膝ひざが、ばらばらの方向に、別々の速度で揺ゆれている。ようやくわかってきた。何をしないといけないか、じゃなくて、何をしたいか。というよりも、そうせざるをえない。抑おさえられない。とてもじゃないけど、こらえることなんてできない。できっこない。ああ。

　倒たおれている。床ゆかにしがみつくような恰かっ好こうで、あいつが倒れている。身にまとう黒衣は、ところどころ焦こげたり内側から破は裂れつしたように裂さけたりしていて、裂け目からは細いかすかな煙けむりが立ちのぼっていた。髪の毛も、ぜんぶではないけれど焼けていた。頭皮にも裂れつ傷しようが走っていた。顔はうつむけられているので見えない。耳は赤黒かった。あれは皮ひ膚ふの下を流れている血の色じゃない。何かはわからないけれど、違う。あいつは動かない。ぴくりともしない。なんだか、ああしていると、あいつじゃないみたいだ。そうだ。あれはあいつじゃない。別人だ。人じゃない。そうじゃなくて、何かはわからないけれど、違う。だって、あいつだったら、動かないはずがない。動かないあいつがあいつであるはずがない。そう思う。信じてさえいる。それなのに、僕の口は言う。その名を呼ぼうとしている。叫さけばずにはいられない。

「アジアン……！」

　最初に動いたのは、あいつの左手だった。左ひだり腕うでというべきか。動いた？　そう、動いた。一いつ瞬しゆん、左腕全体が倍ほどにも膨ふくれあがった。大きさだけじゃなくて形までもが、腕とは表現しがたいようなものへと変じたように見えたのは、気のせいか、それとも目の錯さつ覚かくなのか。とにかく、左腕が一気に身体からだを持ちあげた。そのときにはもう左腕はもとの左腕だった。右手が近くに落ちていた泣き叫ぶ短たん剣けんを拾って、肩が、背中が、ぶるぶる、ざわざわと、うごめくように震えた。声が

聞こえた。低い声だった。やめろ。やめろ。やめろやめろやめろやめろやめろ。呻うめきながら、何かに対して、やめろ、と言いながら片膝立ちになって、ゆっくりと立ちあがるあいつの姿を、ルヴィー・ブルームは薄うす笑わらいを浮うかべて眺ながめていた。

「言ったろう、アジアン。私はおまえを知りたいのだ。おまえのすべてを私の前にさらけだして欲しい。ここで。おまえを知る者たちの前で。おまえが欺あざむきつづけてきた者たちの前で」

　アジアンは何も言わない。肩かたで息をしている。言えないのか。声が出ないのか。違う。さっき、やめろ、やめろ、と繰くり返していた。だからそれがどうしたっていうんだ。そんなことはどうでもいい。

　生きている。死んでいなかった。それだけで十分だ。何の問題もない。そう思いたかった。無理だ。だって、アジアンは虫の息だ。どう考えても、瀕ひん死しの重傷を負っている。むしろ、僕がルヴィー・ブルームに言いたいくらいだ。やめてよ。もうやめて。死んじゃうよ。本当に死んじゃう。やめてくれるなら、何でもする。土下座でも、何でも。ああ、眩暈めまいがする。無駄だ。僕がいくら心をこめて頼たのんだところで、やめてくれるはずがない。あたりまえだ。でも、何かないだろうか。何か方法は。誰だれか。誰か、お願いだから。なんでだよ。どうして誰も何もしてくれないの？　誰も、何もできないの？　人質がいるから？　あのでかい生き物の腹の中に、人質が。でも、本当だろうか。嘘うそをついているんじゃないのか。かといって、本当か嘘か確かめるすべがない。何もない。打てる手立てがない。

「ボクは」

　アジアンは何度か荒あらい呼吸をしてから、深く息を吸いこみ、吐はきだした。

「欺いてなんか……いない」

「そうかな」

　ルヴィー・ブルームが右手をアジアンに差し向けた。その瞬間だった。袖そでがはち切れた。腕だ。腕がのびた。腕、だろうか。あれが、腕？　少なくとも、人間の腕とは思えない。それは節くれ立っていて、表面がきらきらした純白の繊せん毛もうに覆おおわれ

ていた。長いせいで細く見えるが、マリアローズの胴どう回まわりくらいはありそうだ。たしかに長い。それはルヴィー・ブルームの肩口からまっすぐのびて、その先せん端たんに生えた五本の真っ白い鉤かぎ爪づめのようなものがアジアンをがっちりとつかんでいた。一本は首の付け根、一本は右肩に、もう一本は左の脇わきの下に食いこんで、あとの二本は脇わき腹ばらを両側からぐいぐい締しめつけている。ルヴィー・ブルームの背中には翅はねがあるし、胸には魔ま導どう王おうの顔が浮きあがっているので、今さら驚おどろきはしなかった。驚くとか驚かないとか、そういう問題じゃないし、あれは何だ、と詮せん索さくしている場合でもない。

「私にはそう思えないな、アジアン」

「あ━がっ……！」

　音が聞こえた。ここまで聞こえた。軋きしんで、折れる音だ。砕くだかれる音だった。アジアンの右手から泣き叫ぶ短剣がこぼれ落ちた。右肩が。ああ、鎖さ骨こつが。どこまで。あんなに深く、深くまで食いこんでいるなんて。そんな。アジアンの左手の五本の指が、空気を引っ掻かくように動いて、止まった。左の脇の下から斜ななめ上を目指す鉤爪はとどまることを知らない。どこまでも、どこまでも。もうだめだ。それ以上は。腕が。左腕がちぎれてしまう。脇腹を締めつけている二本の鉤爪は背中でガチガチ嚙かみあっていた。悲鳴があがった。アジアンじゃない。ベティだ。他の誰かも叫んでいる。何か叫んでいる。誰だろう。僕？　僕かもしれない。僕だ。たぶん、僕だ。勝てんぞ、とトマトクンが歯嚙みしながら言った。このままじゃあ勝てん。何だよ、それ。勝てないとか、そんなのあたりまえじゃないか。見ればわかることじゃないか。圧あつ倒とう的だ。勝負ゲイム？　これが勝負ゲイムだって？　違う。絶対に違う。これは勝負ゲイムでも真しん剣けん勝負でもない。あの男は嬲なぶり殺しにしようとしているだけだ。さんざんアジアンを弄もてあそんだあげく、用済みになった玩具おもちゃみたいに壊こわして、殺そうとしている。そんなの間ま違ちがっている。そんなことは許されない。許しちゃいけない。マリアローズは駆かけだした。誰かに止められそうになったけれど、振ふり払はらって走った。腹の底からふりしぼったような苦痛の叫び声が鼓こ膜まくをつんざいた。アジアンの左腕が、ぼとり、と床に落ちた。ハハハハ。ルヴィー・ブルームが嗤わらった。うつろに響ひびく嗤わらい声だった。鉤爪がゆるんで、あの腕とも他ほかの何ともつかない腕が引っこんでゆき、アジアンの身体が、頼たよりなくひしゃ

げた身体が、崩ほう壊かいするように倒れた。駆けよって、左腕を拾って、くっつけようとして、混乱している、と思った。しっかりしないと。僕はしっかりしないと。血だ。血が。左腕。とれてる。なんで、こんな。血が。しゃがみこんでいた。アジアンのそばに。それから、ひどく傷ついている腰こしのあたりには体重をかけないようにまたがって、首に手をあてた。鉤爪のせいで皮膚が破られ、抉えぐられて、血管が損傷して、今もだくだく血が噴ふきだしているほうじゃなくて、その逆側に手をあてて、でも、自分が何をしているのかわからなかった。アジアンは薄うす目めを開けていた。意外ときれいな顔をしている。雷らい獅じ子しを、雷の直ちよく撃げきを受けたのにしては、きれいな顔だったけれど、血まみれだった。唇くちびるが動いた。声は聞こえない。屈かがみこんで、アジアンの口に耳をよせた。

　だ。め。だ。き。ちゃ。い。け。な。い。ま。り。あ。だ。め。だ。

　身体からだを起こして、アジアンの首の後ろに右手をさしこんだ。持ちあげることはしなかった。不用意に動かしてはいけないような気がした。アジアンによく見えるように、薄うす青あお色の瞳ひとみにちゃんと映る位置に顔を移動させて、首を横に振ってみせた。ダメじゃないよ。いけなくなんかない。ダメじゃない。ひとりにはしないから。きみはひとりぼっちじゃないから。僕がちゃんとここにいるから。

　誰だろう。

　僕を呼ぶ声がする。何人もが僕を呼んでいる。大声で呼んでいる。

　きみの目に僕の姿が映っている。顔がゆがむ。きみは首を振ろうとする。

　マリア。マリア。マリア……！

　きみの声は聞こえないのに、なぜか聞こえた。

　僕は振り向いて、顔を上げた。

　そんなことじゃないかと思っていたんだ。強がりじゃなくて、本当に。

迫せまっていた。

白い鉤爪を生やした真っ白な腕うでが、すぐそこにあった。

僕は、でも、その鉤爪をにらみつけて目をそらさなかった。もしかしたら、僕は惑わく乱らんしているのかもしれない。正直、何がなんだかわかっていない。それでも、二言はない。僕はここから逃にげたりしない。ひとりきりにはしない。何があっても、絶対に。

アルカーディア。

耳慣れない、そんな言葉が聞こえたような気がした。

あるいは幻げん聴ちようかもしれないけれど、それにしては知らない言葉だった。

でも、そのあとにつづいた声は──、

それは間違いなく、よく知っている声だった。

「ボクに従え」

後ろのほうから何か黒いものがワッとわきあがってきた。それはまたたく間に視界を覆ってしまい、何も見えなくなった。それだけじゃない。この感かん触しよく。肌はだにふれている。あちこちに。それどころか、ほとんどすっぽりと包みこまれている。それは硬かたいともやわらかいとも言いがたい、爬は虫ちゆう類るいの表皮のようにつめたく、しっとりしていて、えらくなめらかな、不思議な肌ざわりだった。物ではないと感じた。これは生きている。生き物だ。動いているから、ただそれだけの理由でそう感じたわけじゃない。伝わってくる。それがふれている場所から、囁ささやき声のような、それでいて音とは違う、かすかな振しん動どうのような、生命の、意思の響きとでも言うべきものが。くすくす。くすくす。うふふふふ。ふふうふふふ。何？　何だよ、これ……？　笑ってる？　どうして。何を。何が、おもしろくて。くすくす。ふふふふふ。やめてよ。やめて。くすくす。くふふうふふふ。くすくすくす。笑うな。笑うな。笑うな……！

光が生まれて、広がっていった。

黒いものはあっという間に引いてしまった。

　ルヴィー・ブルームが浮ういている。その右腕は細切れになって床ゆかに散乱していた。身体の一部として残っているのは、せいぜい一メーテル程度だ。すっぱり切断されたのではないだろう。かなりグジャグジャな断面からは、透とう明めいな粘ねん液えきがしたたり落ちている。

　やつは唇の両りよう端たんをつりあげていた。白目が黒くて黒目が赤い、これ以上ないくらい不ふ吉きつな両りよう眼めにたたえられている輝かがやきがどんな感情の表れかなんて、わかるはずがない。あの化物が考えていること、思っていることなんてわかりたくもない。

　僕は振り返った。薄青色の瞳がなぜか無色透明に見えた。何も映さず、ただどこまでも透すきとおっていて、底もうかがえないような目だった。黒いものはまだそこにあった。肩かた口ぐちから何十本、それ以上の黒くて細いホースのようなものがあふれてうごめき、その中の何本かはもがれてしまった左腕に絡からみついて、くっつけようとしているようだった。僕がさっきしたみたいに。ユリカのように医術式を使えるのでもなければ、それは無む駄だな行こう為いのはずなのに。そのはずなのに、左腕は接着されつつあった。人差し指が動いた。それから、親指が。薬指、小指、中指も動いた。左手がぎゅっと握にぎられて、開かれると、これで役目は終わったとばかりに黒くて細いものたちが戻もどっていった。右腕へと。彼らはまるで、我々こそが右腕なのだと主張しているかのようだった。それを行動で示そうとしていた。黒くて細いものたちは縮んだり絡みあったりしながら次し第だいに形を整えていった。それはたしかに右腕だった。明らかに黒くて細いものたちの集合体ではあるけれど、形は右腕に違いなかった。手もちゃんとあった。五本の指も動くようだった。あの日、見るな、と叫さけんだ。でも、僕は見てしまった。これだった。

「どうやら、使いこなせているようだね、アジアン。アルカーディアを従わせることができるようになったのだね」

　アジアンは答えなかった。下がっていて、とうつろな声で僕に言って、それでも僕が動かずに、動けずにいると、僕をよけて、僕には少しもふれずに、僕の傍かたわらを通り抜ぬけていった。それでも、僕の後ろにいることは間ま違ちがいなかった。今、振ふり向けば、まだすぐそこにアジアンの背中があって、手をのばせば届くだろう。そうするべきなのかもしれない。そうしないと、きっと後こう悔かいする。そう思っているのに、身体が動いてくれなかっ

た。ためらう気持ちがあって、どうしても消えなかった。

　拒こばんでいたからだ。

「ボクは」

　アジアンが、透きとおった目で、僕を拒きよ絶ぜつしていた。

「自分がキサマに生みだされたものだということは知っていた。そう思っていた。彼らもボクの同類なんだろうと。わかっていながら、彼らを蔑さげすんでいた。あそこにいたくなかった。ボクは違うと思っていた。ボクだけは。彼らの姿を思いだすだけで、ボクは違うということが確かめられるような気がした。錯さつ覚かくだ。ボクも同じだ。変わらない。親だか子だか何だか知らないが、所しよ詮せん、ルヴィー・ブルーム、キサマに生みだされたものだ。でも、このいのちをキサマに感謝したことは、一度も、ただの一度たりともない。これからもない。あるのは憎にくしみだけだ。ボクを、ボクのようなものを生みだしたキサマは、死ぬべきだ。滅めつ却きやくされるべきだ」

「それをアジアン、おまえがやろうというのかい」

「ああ」

「私し見けんだが」

　何かが張り裂さける音がした。僕は振り向いてルヴィー・ブルームを見上げた。服だった。やつが着ていた丈たけの長い上衣が、無数の細かい布きれとなって宙を舞まっていた。やつは今や半はん裸らだ。上半身には何も身につけていない。右みぎ腕うでだけじゃなかった。変わったのか。それとも、正体を現したのか。いずれにせよ、その上半身は人間とは似ても似つかないものに成り果てていた。やつ自身の頭部とギュンツァーの顔だけがもとのままで、他ほかの部分はすべて、人間の肌とはまるで異なる質感の、金属とも思われない、でも、硬そうな、節のある何かで覆おおわれていて、きらきらと輝く真っ白い繊せん毛もうがその上にびっしりと生えていた。グジャグジャに斬きり刻まれて短くなった右腕の先が、粘液を振りまきながらゴリュンゴリュンと激しく上下左右に暴れまわり、やがてそこから何かが顔を出した。比ひ喩ゆでも何でもなく、それは本当に顔のようだった。目がある。複眼だ。複眼を構成している個眼の一つ一つは透明で、黒い裂け目のような瞳どう孔こうが一い

つ斉せいに広がったりすぼまったりした。顎あごは逞たくましく、開け閉めするたびにぬらぬらと輝く牙きばがのぞいた。虫だ。明らかに、虫だ。それでいて、あの複眼はまるで人のようだった。見るべきものを見て、何かを考えている。そんな印象を受けた。あの生き物はこっちを観察している。そうして必要な情報を収集し、的確な判断を下すだろう。何を企たくらんでいるのか。きっと狡こう猾かつだ。聡そう明めいですらあるかもしれない。

「やはりおまえには無理だと思うよ、アジアン」

「勝手に思っていればいい……！」

　アジアンは跳とびあがって右腕を突つきだした。右腕がほどけた。黒くて細いものたちの群れとなって、ルヴィー・ブルームに襲おそいかかっていった。やつは上じよう昇しようして逃のがれるつもりのようだ。速い。ただ、黒くて細いものたちも負けていなかった。急速度でどこまでものびていって、やつをとらえようとしている。もう少しだった。あと少しのところで、ギュンツァーが魔ま術じゆつを発動させた。風だ。ルヴィー・ブルームの足あし許もとに球状の竜たつ巻まきが発生して、今まさに肉にく薄はくしようとしていた黒くて細いものたちを吹ふき飛ばした。竜巻の球は、それだけでは飽あきたらなかった。アジアンめがけて落下していった。アジアンは黒くて細いものたちを右腕に戻しながら、横っ跳びしてこれをよけた。そうかと思ったら右腕をほどいて、のばしにのばした黒くて細いものたちで一度床を打ちすえてから、勢いよく振りあげた。黒くて細いものたちは互たがいにきつく絡みあって、長い長い槍やりのような形になった。アジアンはそれを突きだした。何度も、矢や継つぎ早ばやに繰くりだしたが、ルヴィー・ブルームは姿勢を変えることもなく、翅はねだけ動かしてそのすべてをかわした。かする気配もなかった。アジアンがわざと外しているかのようですらあった。むろん、そんなはずがない。やつが速すぎるのだ。まるで、消えては現れ、現れては消えているように見えた。そうしながら、まさか、だんだんとアジアンに近づこうとしているのか。間違いない。距きよ離りは確実につまっている。アジアンが黒い槍をほどいて、左方向に逃にげようとした。その瞬しゆん間かんか、直前だった。ルヴィー・ブルームの姿がかき消えた。

「私に憑依させているアグナクウィアラはね、アジアン」

「──う……ぐぁ……」

　後ろだ。ルヴィー・ブルームはアジアンの後ろにいる。腕だ。複眼の顔を生やした右腕が、アジアンの腹部から突きだしている。

　複眼がアジアンを見てまばたきをした。やつの顎はくちゃくちゃと何かを咀そ嚼しやくしていたが、それを吐はきだして、まるで嘲あざ笑わらうようにカタカタ牙を嚙かみ鳴らした。

「とても利口で、驚おどろくほど素す早ばやく、なおかつタフだ。身体からだは決して大きくないが、絶大な力で怪虫ガウンドたちの頂点に立っている、彼女は女王なのだよ」

　あれが、あの複眼の主が、怪虫ガウンドの女王アグナクウィアラとやらなのか。

「──そ……れ、が……！」

　黒くて細いものたちがざわざわと揺ゆれ動いて、アグナクウィアラか、後ろにいるルヴィー・ブルームに襲いかかろうとしたのだろうが、できなかった。その前に、アグナクウィアラが上顎と下顎をいっぱいに開いた。口こう腔こうの奥から、それは飛びだしてきた。舌にしてはずいぶん細長かった。しかも、一本ではなく四本で、凶きよう暴ぼうだった。アグナクウィアラの四本の舌は、アジアンの額と、左の眼球と、右みぎ頰ほおと、喉のど仏ぼとけのあたりに突き刺さった。アジアンは、あ、ぐ、が、と声をもらしながら身体を震ふるわせた。アグナクウィアラが喉の奥から、あふふふふふふふ、と声とも息ともつかない音を出した。アジアンが震える左手で舌を握にぎった。喉仏に刺さっている舌だった。引き抜ぬこうとしたが、抜けなかった。びくともしなかった。

「あまり私を失望させないでおくれ、我がmai愛し子よ-dear」

　アグナクウィアラがあふふふ嗤わらった。四本の舌が、アジアンの額から、眼球から、頰から、喉仏からすっと抜けて、アグナクウィアラの口の中へと戻もどっていった。

「こんなに歯は応ごたえがないと、まるで私がおまえを虐ぎやく待たいしているみたいだろう？　私も気分がよくないよ。何より──」

　ルヴィー・ブルームはアジアンから右腕を引き抜いて、首を左右に振ってみせた。

　アジアンは支えを失ったように膝ひざをついた。

「おもしろくない。愉たのしませてくれと私はおまえに言ったはずなのにね。言うことを聞けないのかい。悪い子だね、アジアン。悪い子だ」

　果たして、その声は聞こえているのだろうか。

　アジアンは目を見開いている。左目の真ん中には穴が穿うがたれて、そこから何種類かの液体が入り混じって流れだしていた。顔は上を向いて、口が開いている。額の穴と右頬の穴から流れでる血が合流して首へと伝い落ちていた。喉仏の穴からも血があふれでている。黒くて細いものたちは動かない。

「お仕置きをしないといけないね、アジアン」

　ああ──、

　ここは静かだ。

　どういうわけか、静かすぎる。

　ユリカがはっとしたように、あるいは取り繕つくろうように頭を揺すってからベティとピンパーネルを見比べ、結局、ピンパーネルの胸に手をあてた。ピンパーネルはぴくりともしない。まだ意識がないようだ。助かるのか。わからない。楽観はできない。とてもできない。飛燕フエイヤンはフードを目ま深ぶかにかぶってユリカを見つめている。荊王ジンワンはアジアンとルヴィー・ブルームのほうに顔を向けてはいるけれど、どこか呆ほうけたような目つきだ。ヨグは死人みたいな顔で床ゆかに寝ねているベティのそばで床に片膝をついている。何を考えているのか、その表情からうかがい知ることはできそうにない。サフィニアはなんだか気まずそうにしている。トマトクンはまだ大剣の柄に手をかけているものの、さっきまでの迫はく力りよくは感じられない。もっとはっきりと、今の心境を包み隠かくさず正直に態度で表しているのはカタリだ。カタリは放心したように床に座りこんでいた。何やねん、これ。聞いてへんで。こんなんちゃうやろ。きっと、そんなふうに感じているに違ちがいない。

　同じだ。

　まったく同じ気持ちだ。

　思ってもみなかった。ここまで何もできないなんて。

子供扱あつかいどころじゃない。赤子だ。赤ん坊ぼう以下だ。それくらい差がある。

こんなことは想像していなかった。正直、どうにかなるんじゃないかと思っていた。ここまで、ルヴィー・ブルームのところまでくれば、なんとかなるだろうって。アジアンがなんとかするだろうって。意地でもなんとかするに違いないって。

あっさり打ち砕くだかれた。

もう何も残っていない。

希望も、気力も、尽つきてしまった。

もとより希望なんて、あると思っていただけで、そう勘かん違ちがいしていただけで、本当は最初からなかったのかもしれない。

何もかも無む駄だだった。

どうにかこうにかここまでやってきて、わかったことはそれだけだった。

たったそれだけだった。

「この場所はなかなかに見事だろう」

ルヴィー・ブルームは歩ほ廊ろうを見まわして、かすかに首を傾かたむけた。

「アグナクウィアラの威い光こうの賜たま物ものでね。怪虫ガウンドたちがよく働いてくれた。天てん井じようの高さはどれくらいあると思う。八十七メーテルだよ。すごいだろう。オロバルザスは頑がん丈じようだが、さすがにあの高さから落ちてしまったら無事ではすまないはずだ。もちろん──」

アジアンの頭がほんの少しだけ揺れた。

「中にいる者たちもね」

ルヴィー・ブルームは鉤かぎ爪づめが生えている左ひだり腕うでを高々とかかげた。

「おまえがあまりにも不ふ甲が斐いないからだよ、アジアン。お仕置きだ」

「──や……」

　アジアンが天井を仰あおいだ。立ちあがろうとした。アジアンはまだ声を出せる。動けるんだ。まだ終わっていない。でも、終わろうとしていた。まさしく何もかもが無駄になろうとしている。天井だ。オロバルザス。あの巨きょ大だいなヤモリみたいな生き物だ。天井に吸いついていたオロバルザスが、空中に身を躍おどらせた。身投げした。そんな。なんで。そんなこと。ダメだ。それはダメだ。落ちちゃう。落ちてくる。八十七メーテルだって？　無事ではすまない？　あたりまえだ。そんな高さから落下して硬かたい床に叩たたきつけられたら、どうなるか。考えるまでもない。ぺしゃんこになって、粉々になる。潰つぶれて、木こっ端ぱ微み塵じんになって、飛散する。ああ、でも、無理だ。どうしようもない。止められない。方法がない。オロバルザスが落ちてくる。真上じゃない。少し外れている。下した敷じきにはならないかもしれないけれど、もう終わりだ。あの中にいるのか。本当にいるのか。一いつ瞬しゆんそんなことも考えた。いなければいいと思う。じつは昼飯時ランチタイムの人たちは別の場所に閉じこめられている。そうだったらどれだけいいか。根こん拠きよのない、都合のいい、むなしい願いだ。期待なんて持てなかった。持てるはずがなかった。何もできなかった。僕には、何も。アジアンは、でも、何かしようとしていた。立ちあがって走りだした。僕の身体からだは動かなかった。ぴくりともしなかった。オロバルザスが落ちてくる。大きい。なんて大きいんだろう。アジアンはその落下地点へと向かっていた。もうさしかかろうとしていた。だけど、もうダメだ。もう終わりだ。もういい。もうたくさんだ。もう無理だ。それなのにアジアンは、左腕を振ふりかぶって、何か叫さけんだ。ジャシュギシュ。たぶん、そんな言葉だった。知らない言葉だったけれど、おそらくそれは名前に違いない。名を呼ばれて、アジアンの左腕が膨ふくれあがった。倍じゃない。三倍でもない。それどころじゃない。当然、袖そでなんか跡あと形かたもなくなった。アジアンの左腕は黒かった。漆しつ黒こくの鱗うろこに覆おおわれた獰どう猛もうな生き物のようだった。左の肩かたから先が巨大な真っ黒い蛇へびと化したかのようにも見えるが、その先せん端たん、頭部は、蛇のそれとは違っていた。上うわ顎あごも下顎も長く突つきだしていて、黒い杭くいのような牙きばがびっしりと並んでいた。その双そう眼がんは毒々しいまでに紅あかかった。まるで竜りゆうのようだ。首と頭だ

けの、ただし、首は長い、とても長くて逞たくましい、竜のようだった。そんなものがアジアンの左肩から生えていた。左腕のかわりに。ということは、あれが左腕なんだ。右腕があの黒くて細いものたちであるように。不意に思いだした。匂においでわかるのかもしれないネ。その点については━ごめん、ひょっとしたらボクのせいかな。蜥蜴とかげとはちょっと縁えんがあるんだ。縁。蜥蜴。黒い、鱗。もしかして、それが、ジャシュギシュ？　黒くて細いものたちが、アルカーディアであるように？　わからない。何のことだか。目の前で起こっていることをただ見ているだけで精せい一いっ杯ぱいだった。アジアンの左腕は、ジャシュギシュは、落下してくるオロバルザスに僘惡惡惡惡惡惡惡惡惡惡惡惡惡惡惡惡怨と吼ほえながら食らいついていった。首だった。オロバルザスの首に、ジャシュギシュは大口を開けて、がぶりと噛かみついた。だが、八十七メーテルの高さから落ちてきたのだ。その衝しよう撃げきも相まって、オロバルザスの首は潰れるようにちぎれ、ジャシュギシュも上顎と下顎の境目が裂さけた。受け止めることはできなかった。ただ、落下はそこでいったん止まった。首より上を失ったオロバルザスの身体が、後こう肢しから床ゆかに落ちた。後肢には巨体の体重を支える力がなく、押し潰されるようにぐにゃりと曲がった。尻尾しつぽも同じだった。

　オロバルザスはものすごい音を立てて床に倒たおれこんだ。仰あお向むけだった。

　ジャシュギシュが勝ち誇ほこったように僘羅僘羅僘羅僘羅嗤わらい、アルカーディアがざわざわと揺ゆらめいた。

　アジアンが振り返った。

　左の眼球に穿うがたれていた穴は、もうふさがりかけていた。

　あの瞳ひとみだった。

　どこまでも透すきとおっていて、底のない、何も受け容いれない、何も求めない、そこには何もない、そんな目をしていた。

「オオオオオ」

　透とう明めいな目に何も映さないまま、アジアンは獣けもののような声をもらした。

　理性も、意思も、わずかな知性も、感情さえも感じさせない。

　それは、ただの声だった。

　うつろな音にすぎなかった。

「オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ」

　その声にあわせて、ジャシュギシュとアルカーディアが嗤い、さざめいている。彼らは明らかに喜んでいた。歓かん喜きにわいていた。

　突とつ然ぜんだった。

　アジアンの唇くちびるが笑う形にゆがんだ。

「アハハハハ」

　笑い声が弾はじけた。場ば違ちがいな、底そこ抜ぬけに明るい笑い声だった。でも、その両りよう眼めはあくまで透明なままだった。アジアンは動きだした。速くて目で追いきれなかった。風が吹ふいた。マリアローズは悲鳴をあげてしゃがんだ。上だ。アジアンがすぐ上を通りすぎていった。跳とび越こえていったのだ。振り返ると、アジアンの身体はほとんどアルカーディアにくるまれていた。黒くて細いもののかたまりの中から、不ふ吉きつなほど朗ほがらかな笑い声が途と切ぎれることなくわきあがり、ジャシュギシュが突きだしていた。どうやらジャシュギシュはルヴィー・ブルームに食らいつこうとしたようだが、標的はすでに空中にいる。アルカーディアが、ジャシュギシュが、ルヴィー・ブルームを追ってのびあがった。爪つま先さきに届きそうだった。とらえるかに見えた。その瞬間、ルヴィー・ブルームの姿がぶれて、消え、さらに五メーテルほども高い位置に現れた。この時点で、アルカーディアはもう高さ五メーテルくらい、直径三メーテル程度の円えん錐すいに近い形をしたかたまりとなっていたが、その嵩かさをいっそう増大させた。あっという間にジャシュギシュをものみこんだ。アルカーディアは黒い柱と化してルヴィー・ブルームに迫せまった。ルヴィー・ブルームが唇の両りよう端たんをつりあげてわずかに目を瞠みはった。黒い柱のてっぺんが盛りあがって、裂けた。そこからあの笑い声とともにアジアンが飛びだした。アジアンはジャシュギシュを突きだしたが、ルヴィー・ブルームがまた消えた。三、四

メーテル離はなれた場所に現れ、アジアンに向かって左ひだり腕うでをのばした。アジアンはよけなかった。五本の鉤かぎ爪づめがアジアンの両側頭部に、首に、両肩に食いこんだ。アジアンはそれでもアハハハ笑っていた。笑いながら、アルカーディアの中へと引っこんでいった。ルヴィー・ブルームの左腕もろともだ。ルヴィー・ブルームは左腕を引こうとしたが、動かなかった。動きを封ふうじた。そう思った瞬しゅん間かん、空間自体が斬きり裂かれるような鋭するどくも重々しい音がした。魔ま術じゅつだ。ギュンツァーが魔術を発動させたのだろう。柱と化していたアルカーディアが、皮を剝はぐように外側からどんどん千切りにされていった。ルヴィー・ブルームが左腕を引っぱると、今度は抜けた。アルカーディアは、黒くて細いものたちが集まってできた柱は、斬り裂かれながら崩くずれて丸い形となり、転がるようにして逃にげた。そうして十メーテル、いや、二十メーテルくらいだろうか、ルヴィー・ブルームから距きょ離りをとると、アルカーディアの中からアジアンが現れた。アルカーディアはみるみるうちにアジアンの右腕となった。ただし、形だけだ。黒くて細いものたちが寄り集まって、右腕に擬ぎ態たいしただけだ。左腕のジャシュギシュは擬態せず、その獰猛そうな形態を保ったまま、一・五メーテルくらいまで縮んだ。アジアンはルヴィー・ブルームを見上げてアハハハ笑った。

「残念だよ、アジアン」

　ルヴィー・ブルームが眉まゆをひそめてため息らしきものをついた。

「おまえが出来損ないなのだとしたら、とても残念だ」

「アハハハハハ」

　アジアンはただ笑うだけだった。ずっと笑いつづけていた。何の意味もなくただ笑っているかのような、笑うこと以外には何もできない笑い人形のような、正気を失っているとしか思えない、からっぽな、風音のような笑い声だった。

　これ以上、聞きたくない。聞いていられない。あの声を聞いていると、一秒ごとにだんだんと心臓が縮まってゆく。そのうち限界まで小さくなって、ついには破は裂れつしてしまう。両方の耳をふさごうとした。左手が動かなかった。せめて目をそむけた。仰向けに倒れているオロバルザスのそばにトマトクンがいた。大たい剣けんでオロバルザスの脇わき腹ばらに斬りつけながら、何か怒ど鳴なっ

ている。手伝え、とか何とか。トマトクンが何をしているかなんて考えなかった。ただ手伝えと言われたから、ふらふらとそっちのほうへと歩いていった。トマトクンは何度も大剣を振ふりまわして、オロバルザスの腹を少しずつ、何箇か所しよも割さいてゆく。そうしてできた裂さけ目の一つにカタリが飛びついて右手を突つっこんだ。誰だれか、誰かおれへんのか。そう怒鳴ったカタリの表情が変わった。どうやら、カタリの手が中から引っぱられているようだ。痛ッ、いだだだだだ、痛いわボケ。カタリの左腕を、荊王ジンワンがつかんで引いた。別の裂け目には、ヨグが首を突っこんでいた。飛燕フエイヤンとサフィニアの二人は、ピンパーネルとベティを治ち療りようしているユリカのそばから離れる気はないようだ。荊王ジンワンに力を貸すことにした。荊王ジンワンと一いつ緒しよにカタリの左腕を引っぱった。カタリが悲鳴をあげた。かまわず引いた。手て応ごたえがあった。カタリの右手は別の誰かの手にきつく握にぎりしめられていた。その手首まで見えた。肘ひじまで出た。肩かたまで。とうとうねばっこい体液か何かにまみれた男の顔が現れた。ひどくゆがんだ顔だった。表情ではなく、顔自体がゆがんでいた。何色ともつかない体液で汚よごれているが、白はく髪はつのようだった。もっとも、年老いているわけではなさそうだった。右目は青く、左目は黒かった。男はカタリの手を放して、そこからは自力で裂け目から這はいだしてきた。床ゆかに降り立つと、ものすごい形相であたりを見まわして、悪態をついた。何だこりゃあ。ああ？　いってぇ何だってんだよ。ふざけやがって。冗じよう談だんじゃねぇぞベティ何だてめぇその様ざまは。なんでくたばってやがんだよ塵屑ゴミクズ女アマが……！　死んどらんがな！　カタリがそう怒鳴ると、男は、たりめぇだろうが、あの女がそうやすやすと死ぬか、と怒鳴り返して舌打ちをし、あらためてカタリや荊王ジンワンを見た。それから、てめぇらは、とつぶやいて口ごもり、また舌打ちをして、裂け目を顎あごで示してみせた。中にまだいる。大勢だ。どいつも息はあるはずだ。何がどうなってやがるのかは今はいい、俺の言うとおりにしろ。手を貸せ。お前じぶんにゆわれんでもわしらはな、とカタリがふたたび裂け目に手をかけた。荊王ジンワンもカタリにつづいた。白髪の男がこっちを見た。にらみつけるような、それでいてまっすぐではない、恨うらみがましいのにどこか鋭さに欠ける眼まな差ざしだった。その視線が何の抵てい抗こうもなく受け止められていることに、いくらか驚おどろいているようでもあった。実際、僕は平然としていた。何かが起こっていることはわかっていた。ちゃんとわかっているはずだった。それなのに、何も起こっていないかのようだった。これは夢だと思いながら、夢の中をむなしく旅しているような心地ここちだった。それよりも遥

はるかに実感がなかった。あの笑い声すらも今は遠かった。聞こえていないふりをしようと思えばできそうな気さえした。そうしようとした。

　男は違った。

　笑い声の主を求めて、僕から目をそらした。

　男は首をひねって歯を食いしばり、青い右目をすぼめて黒い左目を見開いた。

「──アジアン、なのか……？」

　縮まっていた心臓が急激に膨ぼう張ちようして、大量の血液を送りだすようになった。そんな感覚だった。血流の音がはっきりと聞こえた。胸が破れそうだ。身体中が震ふるえた。自分がどうしてそんなことをしているのかわからなかった。それよりも、なんできみはそんなこと、そんな言い方するのさ。だって、きみは昼飯時ランチタイムの人なんでしょ？　仲間なんじゃないの？　違ちがう？　違わないよね？　それなのに、なんで？　わかるはずじゃないか。あの声はあいつの声じゃないか。聞けばわかるじゃないか。すぐにわかるじゃないか。それなのに、アジアン、なのか、なんて。それはないよ。疑うなんてあんまりだよ。あんな姿だからって、そういう言い方はないよ。ひどいよ。ひどい。そうだ。僕は憤いきどおっていた。白髪の男につかみかかって、そのことを言いたかった。うまく言えなかった。声にならなかった。僕はただ男の胸むな倉ぐらをつかんで揺ゆさぶりながら、ああ、とか、うう、とか、せいぜい、だから、とか、なんで、とか、そんな切れ切れの言葉を繰くり返すことしかできなかった。男はびっくりしたような、訝いぶかしそうな、戸と惑まどっているような顔で僕を見つめていた。僕はなんだかとても焦あせっていた。言いたいことが言えないからだろうか。男がなかなかわかってくれないからか。もどかしくて、苦しくて、どうすればいいかわからなかった。ああ、だけど、違う。そうじゃない。そうじゃなかった。僕はわかっていた。こんなことを言える立場じゃないんだ。そんな資格、僕にはない。

　あの目。あの透すきとおった何も映さない目。僕を拒こばんだ目。僕は拒きよ絶ぜつされた。

　でも、僕は……？

あのとき振り返った僕は、どんな顔をしていただろう。どんな目でアジアンを見ただろう。

アジアンじゃない、何か別のものを見るような目で見てしまった。

いいや、そんなことはない、と言いきれるだろうか。

驚いてはいたと思う。でも、そんなつもりはなかった。本当に違う。違うよ。絶対、違う。誓ちかってもいい。弁解しようとすればいくらでもできるけれど、アジアンはそう感じたかもしれない。僕に拒まれた、と感じさせてしまったかもしれない。

おそらくアジアンは、それを一番恐おそれていた。だから、あれを力と呼ぶことができるのなら、その力をひた隠かくしにしていた。いつか、お前は本気を出してないみたいだからな、とトマトクンがアジアンに言った。これを手加減というなら、お互い様だろう、とも。トマトクンは持ち前の嗅きゆう覚かくで、最初から何かを感じていたのかもしれない。アジアンは、でも、いつまでも隠しとおすことはできなかった。

僕だ。

僕を助けるためだ。

今日、ついさっき、それだけじゃない。あのときもだ。地中砦とりでアヴァシーからの帰り道、悪党に襲おそわれたとき。それから、地上に出てきた蜥蜴とかげ人と戦ったとき。僕のためだ。いつも僕だ。僕のせいだ。

それなのに、僕は。

違うのに。

そんなこと思ってないのに。これっぽっちも思ってなんかないのに。

男の胸倉から手を離はなしてうつむいた。奥歯を嚙かみしめて顔を上げ、向きなおってアジアンの笑い声を聞いた。その姿を見た。

アジアンの右みぎ肩かたからアルカーディアが床ゆかめがけて奔ほん流りゆうのごとくあふれた。アジアンの身体からだがアルカー

ディアによって持ちあげられた。どんどん持ちあげられて、上空にいるルヴィー・ブルームに肉にく薄はくした。ジャシュギシュがルヴィー・ブルームに食らいつこうとした。紙かみ一ひと重えの差だった。身体をひねったルヴィー・ブルームのすぐ脇わきをジャシュギシュが通りすぎていった。ルヴィー・ブルームはすかさずジャシュギシュを左手の鉤かぎ爪づめでわしづかみにして、アジアンの身体ごと、もちろんアルカーディアも一いつ緒しよに振ふりまわした。アジアンはそれでも笑っていた。床に叩たたきつけられても笑いつづけた。

「そろそろ飽あきてきたよ、アジアン。欠伸あくびが出そうだ」
「煩傳無類Ｋａｄｅｕｘ菩隆無頼ＳｅｎＪｙｎ峩洋ＶｉｎＴｉｅｎ溥雷曇天菩提外天新天阿雷ＤｅｆＲｅｆＨＯ」

　ルヴィー・ブルームの声とギュンツァーが呪じゆ文もんを詠えい唱しようする声とが重なった。魔ま術じゆつが発動した。連続的な雷らい鳴めいが耳をつんざいて、雷光が視界を切り裂さいた。稲いな妻ずまの束が渦うず巻まきながらアジアンに襲いかかった。アルカーディアが傘かさのように広がってアジアンを守ろうとしたが、黒くて細いものたちが削けずり滓かすみたいになって次々と吹ふき飛ばされた。傘をはぎとられて無防備になったアジアンは、かろうじて頭をかばおうとしたようだ。ジャシュギシュの左ひだり腕うでで頭を抱かかえて床に伏ふせたアジアンを、幾条もの稲妻がこっぴどく打ちすえた。衝しよう撃げきでアジアンの身体が跳はねあがった。何度も何度も跳ねあがった。雷かみなりがやんだ。静せい寂じやくは一いつ瞬しゆんだった。

「……ククククククククククク」

　アジアンの背中が小刻みに震えだした。そこらじゅうに散乱しているアルカーディアの欠片かけらがうごめきはじめた。右肩の付け根に残っている黒くて細いものたちがざわざわ揺れて、それらをかきわけるようにして、中から、奥から、何か出てきた。青白い、死者のような、血の気がなく、唇くちびるまで白い、それは一首だった。人間、なのか。女のようだ。いきなり肩から生首が飛びだした。そんなふうに見えるが、違う。あれは死んでない。生首じゃない。女は瞼まぶたを開けた。光こう沢たくのない、真っ黒い穴のような目だった。唇を舐なめた青あお紫むらさき色いろの舌はぬらぬらしていた。見れば、黒くて細いものたちは、アジアンの肩の奥からあふれだしてはいるものの、女の頭から生えているようでもあった。髪かみの毛にしては太すぎるが、まるで髪の毛みたいだった。

女は不意にケタケタ笑いだした。ジャシュギシュも身をよじって傲羅傲羅笑った。アジアンもアハハハ笑った。笑いながらゆっくりと起きあがった。黒衣は焼け焦こげ、引き裂かれてぼろぼろだった。のぞいている皮ひ膚ふも同じだった。弾はじけて肉が見えている箇か所しよもあった。目は白はく濁だくしていた。唇の端はしから唾だ液えきが垂れた。アジアンは笑っていた。女も、アルカーディアも笑っていた。ジャシュギシュも笑っていた。アルカーディアの欠片が寄り集まって絡からみあい、くっつきあって、アジアンの右肩めがけて移動していた。それらはやがてアルカーディアの顔を覆おおいつくした。アジアンはジャシュギシュで床を叩いて跳とんだ。アルカーディアを逆巻かせ、それを足場にしてさらに跳んだ。何の工く夫ふうもなく、闇やみ雲くもに、ただひたすらまっすぐルヴィー・ブルームに突つっこんでいった。ルヴィー・ブルームはよけなかった。先せん端たんからアグナクウィアラの頭部が突きだしている右腕でアジアンの顔面を殴なぐった。アジアンは吹っ飛ばされたが、アルカーディアに受け止められた。アルカーディアを踏ふみ台にして、アジアンはまた跳んだ。今度は先にジャシュギシュがルヴィー・ブルームに襲いかかった。ルヴィー・ブルームは左手の鉤爪でジャシュギシュの喉のど首くびを引っつかみ、アジアンに右腕を差し向けた。アグナクウィアラが口を開けて、喉の奥から細く鋭するどい槍やりのような舌を突きだした。四本の舌がアジアンのこめかみと顎あごと頬ほおと喉に突き刺さった。ギュンツァーが何か短い呪文を詠唱した。三日月のような形が浮うかびあがって、ジャシュギシュが傲啞啞啞啞啞啞と吼ほえた。三日月はジャシュギシュを両断していた。ルヴィー・ブルームは鉤爪を食いこませていたジャシュギシュの半分を投げ捨てた。アジアンの身体がずり落ちて、アグナクウィアラの舌が抜ぬけた。アジアンはアルカーディアともつれあいながら落下して、床に墜つい落らくした。笑い声がやんだのはその瞬間だけだった。アジアンは血を吐はきながら、噴ふきだしながら、唾液を撒まき散らしながら、また笑いだした。

「私も胸が痛むよ、アジアン」

　ルヴィー・ブルームはむしろ不ふ愉ゆ快かいそうで、苛いら立だっているようにも見えた。

「手塩にかけたおまえをこの手で処分しなければならないとはね。だが、やむをえない。おまえは私がおまえに憑依させたものたちをおまえの力にしなければならなかった。言いくるめて、あるいはねじ伏せ、どうにかして従わせなければ、アジアン、おまえは、ほら

―」

　ルヴィー・ブルームが捨てたジャシュギシュの半分が這はってゆく。笑いつづけているアジアンに近づいていって、猛もう然ぜんと食らいついた。アジアンに。アジアンの腹に。

「喰くわれてしまう」

　アジアンは笑いながら絶ぜつ叫きょうした。ジャシュギシュは上うわ顎あごと下顎を激しく動かしてアジアンを咀そ嚼しやくしているようだった。最初はそう思われたが、様子がおかしかった。ジャシュギシュの口はアジアンの身体にめりこんでいた。くっついている。同化しつつあった。ジャシュギシュはアジアンの体内へと潜もぐりこんでいった。そうして左腕から、ギュンツァーの魔術で切断された左腕の断面から顔を出した。もとの場所に戻もどったジャシュギシュは、アジアンに何かうながすようにひとしきり身をくねらせてから、ルヴィー・ブルームに向かって傲惡惡惡惡惡惡惡惡惡惡惡と吼えた。出来の悪い操あやつり人形のようなぎこちない動作で立ちあがったアジアンは、もう笑っていなかった。一いつ切さいの表情を失っていた。息をしているのかどうかさえ疑わしい、弛し緩かんしきった、詰つめ物をする前の剝はく製せいみたいな顔をしていた。それなのにジャシュギシュは、活力を持てあましているかのようにとぐろを巻いたり床に身を打ちつけたりしながら傲羅傲羅傲羅傲羅笑っている。アルカーディアもまた顔を出してケタケタ笑いはじめた。

　喰われてしまう。

　憑依させたものたち。

　ローガンと自分は似ていた、とアジアンは言った。自分の中に、自分じゃない、他ほかの何かを感じていた、と。それは、何なの、と訊きいたら、アジアンは首を横に振ってみせた。わからない、という意味だと思った。違ちがったんだ。そうじゃなかった。アジアンはたぶんわかっていた。自分の中にいる、自分じゃない、他の何かのことを。

　もしかしたらローガンは、もう一人の自分、制せい御ぎょできない自分が、自分の中に、心の中に棲すみついていて、それを抑おさえることができなくなり、その結果、あんな終わり方を選んだのかもしれない。アジアンに止めてもらおうとしたのかもしれない。も

うそうするしかなかったのかもしれない。

　アジアンの中にはあいつらがいた。

　ジャシュギシュが。

　それから、アルカーディアが。

　喰われてしまう、とルヴィー・ブルームは言った。文字どおりの意味ではないかもしれないけれど、あいつらは喰らおうとしている。

　おそらく、アジアンの身体からだだけじゃない。

　心も。

　魂たましいまでも。

　そうして、アジアンを自分のものにしてしまおうとしている。

　アジアンがアジアンじゃなくなってしまう。

　もうそうなりかけている。

「せめて、アジアン、かわいそうなおまえがおまえでなくなる前に」

　ルヴィー・ブルームがゆっくりと上じよう昇しようしはじめた。

「私がこの手で滅ほろぼしてやろう、我がmai愛し子よ-dear」

　何かしようとしているんだ。何をするつもりなんだ。

　どうでもいい。知ったことじゃない。それよりも大事なことがある。もっと大切なことが。やらないといけないことがある。

　僕は駆かけだした。トマトクンに名前を呼ばれた。カタリにも、ユリカにも、サフィニアにも、荊王ジンワンにも。もちろん僕は止まらなかった。何があっても、絶対に止まるわけにはゆかなかった。あいつは僕から見て左を向いていた。少しだけ顔を上げて、でも、その目にはルヴィー・ブルームだけじゃなく、何も、何一つ映っていないだろう。ジャシュギシュはルヴィー・ブルームをにらみつけて、傲羅傲羅傲羅傲羅笑いながら激しく身をよじっている。

アルカーディアの髪かみの毛なのか何なのか知らないけれど黒くて細いものたちは、しゅるしゅるざわざわとのびて、殖ふえて、あいつの右半身をほとんど覆おおいつくしていた。それでも僕はためらわなかった。恐おそれなかった。怖こわくなんかない。回りこんで、あいつの前で足を止めた。

　あいつの目はもう濁にごっていなかった。澄すみきっていた。それでいて、やっぱり何も映していなかった。光を反射しない硝子ガラス玉のようだった。

　目だけじゃない。

　あれだけ火傷やけどしたり傷ついたりしたはずの顔は、汚よごれてはいるものの、きれいに治っていたけれど、口は半開きで、よだれまで垂らして、まるで抜け殻がらみたいだった。

　何も思わない。何も考えていない。何も感じていない。

　それなのに、あいつは跳とぼうとしていた。

「アジアン……！」

　喉のどが引き裂さけてもよかった。僕はこれ以上ないくらい大きな声であいつの名を呼んだ。

　跳ちよう躍やくしようとしていたあいつの動きが、止まった。

　顔は、目は、動かなかった。

　まだあいつの目には僕が映っていない。

　でも、声は聞こえたはずだ。僕の声が届いたはずだ。

　僕が足を踏ふみだすと、ジャシュギシュが毒々しいまでに紅あかい双眼をこっちに向けて、威い嚇かくするように傲啞啞啞啞啞啞啞と吼ほえた。黒くて細いものたちがのびてきて、僕の額を、頰ほおを撫なでた。腕うでに、首に巻きついてきた。アルカーディアが顔を出して穴ぼこみたいな目で僕をねめつけた。それがどうしたっていうんだ。僕は怖くない。ちっとも怖くなんかない。

　僕は一歩一歩あいつに近づいていった。

もうあいつはすぐそこにいる。

こんなにも近くにいるのに、あいつは僕を見てくれない。

胸が締しめつけられた。目め頭がしらが熱くなって、瞼まぶたが細かく痙けい攣れんして、鼻の奥がつんとした。我が慢まんして、唇くちびるを噛かんだ。思いっきり噛んだ。鼻をすすって、手て袋ぶくろを外して、右手をのばした。あいつの顎あごをそっとさわった。唇の端はしまで指をそっと動かして、唾だ液えきをぬぐった。

あいつが口を閉じた。

唇を動かして、呻うめき声のようなものをもらした。

「ねえ」

僕はあいつの頬をさすって、人差し指と中指で耳たぶをはさんだ。

「聞こえてるよね。僕の声」

どうすればいいだろう。

「僕は」

どうすればきみは僕を見てくれるだろう。

「僕は……」

きみがきみだってわかってくれるだろう。

「僕は、きみがどんな姿でも、もしきみの正体が犬でも、猫ねこでも、異界生物フリークスでも、大ゴ脂ツ羽キ蟲ーでも──大ゴ脂ツ羽キ蟲ーだったら、さすがにちょっとやだけど」

僕がちょっとだけ笑うと、首に巻きついている黒くて細いものが強く締めつけてきた。

「それでも、僕は、きみを」

腕も締めつけられている。呼吸ができない。苦しい。目が眩くらむ。気が遠くなりそうだ。これじゃあ声が出ない。でも、言わないと。これだけは伝えないと。今、きみに伝えないと。

「嫌きらいには、ならない。アジアン、きみのことを嫌いになんか、なれないよ」

　薄うす青あお色の瞳ひとみがゆっくりとこっちを見た。

　開ききっていた瞳どう孔こうがだんだんと縮んでいった。

　焦しよう点てんがあった。

「マリア」

　途と端たんに呼吸が楽になって、膝ひざから力が抜ぬけた。

　尻しり餅もちをつきそうになった僕を抱だきとめたのは、ジャシュギシュの漆しつ黒こくの鱗うろこに覆われた左腕と、アルカーディアの黒くて細いものたちが寄り集まって形を整えた右腕だった。それは、でも、まぎれもなくアジアンの腕だった。

　アジアンは僕を立たせて、それから少しずつ腕に力をこめた。

　僕はあらがわなかった。じっとアジアンを見つめていた。

　アジアンの目はちゃんと僕を映していた。

　このままでいたかった。

　ほんの少しの間だけでいいから、このままで。

　もっとも、そんな悠ゆう長ちようなことをやっていられる状じよう況きようじゃないことはわかっていたつもりだったけれど、やっぱりぜんぜんわかってなかったのかもしれない。てゆうか、僕はいったい何を。なんでアジアンに抱きしめられちゃってるわけ？　しかも、正面から、抵てい抗こうもしないで──や、いや、いやいやいや、なし、今のぜんぶなし、緊きん急きゆう非常事態っていうか、事情が事情だったからしょうがなくっていうか、仕方なくやむをえずっていうか、とにかく、離はなれないと──その前にアジアンがはっと息をついて、目を見開き、振ふり仰あおいだ。つられて僕も見上げた。

「ほう」

　ルヴィー・ブルームは禍まが々まがしい双眼を瞠みはっていた。

唇の両りよう端たんがつりあがっている。

「通じあうものでもあるのか。いいよ、アジアン。かまわない。私をもっと愉たのしませてくれるのなら、できるものなら、やってみるがいい……！」

　なんかまたわけのわからないことをほざいているのはいいとしても、や、よくないけど、その下半身は何なの？　しばらくっていうか、ちょっと見ない間に、いくらなんでも変わりすぎじゃない？　ひどくない？　まったくさっぱり人間っぽくないだけじゃなくて、でかいし。なんかこう、やめてよ、と言いたくなるくらい大きな生き物の背中からルヴィー・ブルームの上半身が突つきだしている、みたいなかんじで、その生き物っていうのがどこからどう見ても、疑いを差し挟はさむ余地がないくらい──、

　竜りゆうだった。

　黒い鱗のジャシュギシュは顔がなんか竜っぽい、程度だったけれど、あれは違ちがう。真しん珠じゆのような鱗とクリーム色の長い毛に覆おおわれている、見事な成竜だ。たぶん、白色竜ステルシアの一種だろう、なんて言っても、見たことがあるわけじゃない。実際に見たことがあったら、おそらく今ごろ生きてはいない。白色竜ステルシアは長じても小こ柄がらだが、闘とう争そう心しんが非常に旺おう盛せいで、ものすごく獰どう猛もうらしい。その姿は秀しゆう麗れい壮そう美びと評してもいいくらいだけれど、たしかにそんなかんじがする。ひしひしと伝わってくる。まあ、この場合、あれが何色竜だろうと大差ないと言えば大差ないかもしれない。白色竜ステルシアは口を開けていた。口こう腔こうの中は灰色で、ずらりと並んだ牙きばは真珠の光こう沢たくを宿している。どうやら思いっきり息を吸いこんでいるようだ。その喉のどの奥に何か光の渦うずみたいなものが見えた。さて、ここで問題です。白色竜ステルシアは何をしようとしているのでしょうか。

「──気吹ブレス！」

「タナトゥス……！」

　アジアンが鋭するどくそう叫さけんだ。抱きすくめられて、胸に顔を押しつける恰かつ好こうになり、何も見えなくなって、心臓の音を聞いた。すぐに轟ごう音おんがかき消した。

　クソ重かった。いきなり体重が十倍になったかのようだった。地面が激しく震しん動どうした。下の方向に身体からだが押しつけられて、でも、きつく抱きしめられていたから、しゃがみこまずにすんだ。直接的な衝しよう撃げきは感じなかった。

　僕は守られていた。

　しっかりとくるまれて、ぎゅっと抱きとめられていた。

　これ以上ないくらい、かばわれていた。

　アジアンが僕を守っていた。

　目に見えない重みが失うせて、大きな鳥が羽ばたくような音がした。

　僕は顔を上げた。

　アジアンは薄青色の瞳を少しだけ細めて、口くち許もとをゆるめてみせた。

「大だい丈じよう夫ぶかい」

　一応、うなずいてはみたものの、どうして大丈夫なんだろう。あれは間違いなく気吹ブレスだった。白色竜ステルシアの気吹ブレスをお見み舞まいされて、なんでぜんぜん平気なんだろう。

　ようやく気づいた。

　翼つばさだ。

　アジアンの背中に二枚の翼がある。

　あれは、闇やみ色いろの羽根に覆われたその翼を、僕のことを守ってくれた美しい翼を、広げてたたむ音だったんだ。

　アジアンはあたりを見まわした。ユリカは一心不乱にピンパーネルを治ち療りようしている。そのそばにいる飛燕フエイヤンとサフィニアは呆ほうけたような顔をしていた。ピンパーネルの隣となりに横たわっていたベティは上半身を起こしている。驚おどろいている様子はなく、呆ぼう然ぜんとしているようにも見えない。どこか少し投げやりな笑えみさえ浮うかべている。オロバルザスの体内

からの救出作業は中断されていて、トマトクンとカタリ、荊王ジンワンは三者三様の表情でこっちを見ていた。ヨグの姿は見あたらなかった。白はく髪はつの男は青い右目をすぼめて黒い左目を大きく見開き、ただでさえゆがんでいる顔をもっとゆがめていたけれど、アジアンと目があうと、にい、と唇くちびるの片かた端はしだけでなく顔の半分をつりあげてみせた。凄すごみがあって怖こわいのに、なぜか惹ひきつけられる、苦く笑しようとも嘲ちよう笑しようとも微び笑しようともつかない笑顔だった。

「やけに恰好いいじゃねぇか、アジアン」

　アジアンは不敵で、挑ちよう発はつ的で、それでいて安あん堵どしたような、晴れ晴れとした、ぞっとするほどあでやかで、なまめかしい笑みを男に返した。それから僕を見て、なんでこんなにやわらかで穏おだやかでやさしくてあたたかいんだろうと首をかしげたくなるような輝かがやきを瞳ひとみの奥にともし、そっと静かに手を放した。

「決着をつけてくる」

　僕から言うことなんて何もなかった。もう言葉なんていらなかった。だから、ただ見守った。アジアンは黒い翼を羽ばたかせて飛んだ。すぐだった。あっという間にアジアンは白色竜ステルシアの鼻はな面づらの先に達した。白色竜ステルシアは口を開けて前進し、その強力な顎あごで獲え物ものをとらえ、一撃で嚙かみ砕くだいてしまおうとしたけれど、アジアンはあっさりすり抜ぬけた。そのままくるくる回転しながらルヴィー・ブルームに突とつ進しんしていった。

「──アジアン……！」

　ルヴィー・ブルームはアジアンの名を叫びながら両りよう腕うでを繰くりだした。それよりも早かった。アジアンは右腕のアルカーディアを解放した。右腕がほどけて、右みぎ肩かたからあふれだした黒くて細いものの量はとんでもなかった。まるで濁だく流りゆうみたいだった。真っ黒い濁流がまたたく間にルヴィー・ブルームの両腕をがんじがらめにした。間かん髪はつを入れず、アジアンは左腕のジャシュギシュを解放した。のびて、膨れあがった左腕は、竜に似た頭部を備えて二本の腕を持ち、漆しつ黒こくの鱗うろこに覆われている、まるで蜥蜴とかげ人のような姿となってルヴィー・ブルームに襲おそいかかった。ルヴィー・ブルームも黙だまっていな

かった。尻尾しっぽだ。下半身の白色竜ステルシアが身体を曲げて尻尾を振ふりまわした。ジャシュギシュは白色竜ステルシアの尻尾に痛打されてぶっ飛ばされた。アジアンは、でも、すぐさまアルカーディアとジャシュギシュを引っこめて自分の腕に戻もどしながら、スッと滑すべるようにルヴィー・ブルームの頭上へと移動した。そこから翼を広げて、きりもみ状態で急降下した。振り仰ごうとしたルヴィー・ブルームの顔面に、アジアンの両足がめりこんだ。



　ルヴィー・ブルームは墜つい落らくした。床ゆかに激げき突とつして、下半身の白色竜ステルシアは即そく座ざに起きあがって吼ほえたが、上半身はしばらくぐったりしていた。やがて起きあがったものの、鼻がへし折れて、前歯も砕け散り、顔中血まみれだった。それでも何か言おうとした。言わせなかった。何も言わせなかっ

た。アジアンはルヴィー・ブルームの背後に回りこみ、解放したアルカーディアを突つきだした。寄りあわされて槍やりのように先が鋭く尖とがった黒くて細いものたちは、簡単に貫つらぬいて、突き破った。ルヴィー・ブルームの胸の真ん中、ちょうどギュンツァーの顔が浮きあがっていたあたりから、今は黒い槍が突きだしていた。ルヴィー・ブルームはそれを見て、また何か言おうとした。言わせなかった。何も言わせなかった。解放されたジャシュギシュが、後ろからルヴィー・ブルームの頭にかぶりついた。アジアンはほとんど無表情だった。ジャシュギシュはたやすく、あっという間にルヴィー・ブルームの頭を嚙みちぎり、嚙み砕いて、のみくだした。ルヴィー・ブルームの首に嵌はめられていた首飾りチヨーカーがこぼれて落ちた。首から上を失ったルヴィー・ブルームの上半身はがくがく痙けい攣れんしていた。アグナクウィアラは力を失った。白色竜ステルシアも横向きに倒たおれようとしていた。アジアンは白色竜ステルシアの背を蹴けって飛びあがった。その直後だった。ぐったりしていたはずの白色竜ステルシアが、いきなり猛もう然ぜんと首をもたげてジャシュギシュに嚙みついた。小こ柄がらでも成竜だ。ひとたまりもなかった。白色竜ステルシアはジャシュギシュからアジアンの左肩までを丸かじりして、食いちぎった。アジアンは少しだけ顔をゆがめ、右手で左肩を押さえて逃のがれた。その間に白色竜ステルシアは体勢を立てなおし、ルヴィー・ブルームの上半身も、首から上をなくしたのにもかかわらず、力を取り戻したようだった。

「うぅぅぁぁあああああじあぁぁぁん」

　声がわきあがった。白色竜ステルシアからだ。白色竜ステルシアの首のあたりからだった。

　それはずるずると這はいだしてきた。

　白い、どこまでも、病的なまでに白い肌はだの、髪かみの毛まで白い、唇と爪つめは黒く、両りよう眼めは黒と赤と金色に禍まが々まがしく彩いろどられた、あの男の上半身だった。

「アジアン。油断したね、アジアン。おまえは一いつ瞬しゆん、気を抜いた。私をしとめたと思ったのだね。残念だが、あれは私ではないよ。私はここだ。ここにいる、と言いたいところだが──」

　しかも、次々と、あちこちから、とっさにはとても数えきれないほどだった。

あれもあの男だ。

あれも。あれも。あれも。あれもそうだ。

白色竜ステルシアの身体からだはルヴィー・ブルームだらけになった。

「おま」「おまえ」「おまえは」「おまえは」「どれ」「どれが」「どれが」「どれが」「どれが」「本」「本」「本物」「本物の」「わ」「わ」「わ」「わた」「わた」「私」「だと思う、アジアン？」「アジアン？」「アジアン？」「アジアン？」「アジアン？」

「まるで化物の見本市だネ」

「それは私に言っているのかい。それとも、アジアン、おまえ自身に？」

「両方サ」

アジアンは目をすぼめて、フッ、と笑った。

「でも、ボクのほうがひどい」

もっと口くち汚ぎたなく罵ののしってもよかった。百万の恨うらみ言ごとを連ねる権利があるはずなのに、アジアンはそうしなかった。腹だ。出し抜けに、アジアンの肋あばら骨ぼねの下あたりがガバッと横に裂さけた。そこには何もなかった。内臓も、肉も、骨もなく、血も流れなかった。ただの穴だった。黒々とした、果ての見えない空くう洞どうだった。

「ずっと何も食べていないから、さぞかし腹を空すかせているだろう」

アジアンの口調は淡たん々たんとしていた。

「食欲を満たせ、ヤヌゥ」

「──アジアン、おまえは」

数十、もしかしたら数百のルヴィー・ブルームが一いっ斉せいに禍々しい両眼を見開いた。何かつづけて言おうとしたのだろうが、

声にならなかった。聞こえなかった。風だ。風が吹ふいた。強風だ。風向きはあの穴の方向だった。あの穴めがけて猛もう烈れつな風が吹いていた。アジアンが黒い翼つばさを羽ばたかせて白色竜ステルシアに近づくと、白色竜ステルシアもアジアンに吸いよせられた。ルヴィー・ブルームたちの顔がゆがんだ。風のせいだった。白色竜ステルシアが四し肢しを踏ふんばった。尻尾はこらえられなかった。尻尾の先が穴に吸いこまれた。先っぽはともかく、太さからして、すぐつっかえてしまうはずなのに、そうならなかった。白色竜ステルシアの尻尾はどんどん穴にのみこまれていった。尻尾が付け根まで吸いこまれてしまうと、尻しりが、それから後肢が、砕くだかれ、強ごう引いんに圧縮される音を立てながら穴にのみこまれた。白色竜ステルシアは雷らい鳴めいのような咆ほう哮こうを発したけれど、それはもはや悲鳴にしか聞こえなかった。白色竜ステルシアはもう半分ほど穴に吸いこまれてしまっていた。アグナクウィアラと同化した首から上がないルヴィー・ブルームの上半身も、たくさんのルヴィー・ブルームも一いつ緒しよにのみこまれた。ついに白色竜ステルシアの前ぜん肢しまで吸いこまれてしまうと、残ったルヴィー・ブルームたちは真しん珠じゆのような鱗うろこやクリーム色の毛にしがみついて、口々に何か叫さけびはじめたが、やはりほとんど聞きとれなかった。そうしている間にも、白色竜ステルシアの首は勢いよく穴にのみこまれていった。ルヴィー・ブルームはすさまじい勢いでその数を減らしていった。穴のこちら側にいる白色竜ステルシアはもう頭部だけだった。その鼻はな面づらに、新しくルヴィー・ブルームが生えた。上半身だけではなかった。全ぜん裸らで、全身だった。ルヴィー・ブルームは白色竜ステルシアの鼻面を蹴け飛とばして、一人、逃れようとしたのだろう。遅おそかった。その前に白色竜ステルシアはすっかり穴に吸いこまれてしまい、ルヴィー・ブルームの足も穴にのみこまれた。膝ひざまで。腰こしまで。胸まで。ルヴィー・ブルームは両りよう腕うでをアジアンの腰に回して、なんとかこらえようとした。無む駄だだった。ルヴィー・ブルームの両りよう肩かたが押し潰つぶされるようにゆがんだ。吸いこまれた。それでもまだルヴィー・ブルームはあきらめなかった。両手を穴の縁ふちにかけて、いったんのみこまれた顔を突きだした。喘あえぎながら、眼球だけを動かして、ルヴィー・ブルームはアジアンを見上げようとしたのかもしれない。でも、あの角度ではたぶん見えないだろう。

「ア、ジ……アン、おまえは」

「さよならadieu、父さんdad」

「さ──」

　ルヴィー・ブルームがこらえられたのはそこまでだった。一瞬でのみこまれてしまい、見えなくなった。穴が閉じた。何事もなかったかのように、最初から穴なんて存在しなかったかのように、きれいに閉じてしまい、跡あと形かたもなくなった。

　アジアンは黒い翼をゆっくりと羽ばたかせて舞まいおりてきた。

　その途と中ちゆう、左肩の付け根からジャシュギシュが突つきだして、見る間に左腕となり、アルカーディアも右腕になった。

　床ゆかに降り立つと、黒い翼はアジアンの背中に吸いこまれるようにして消えた。

　アジアンは天てん井じようを仰あおいで、深々と息を吐はきだし、ゆっくりと床に腰を下ろしてうなだれた。

　僕は歩きだした。

　何かが足にふれた。

　よくも残っていたものだ。首飾りチヨーカーだった。壊こわれているけれど、硬こう貨かのような部分はある。そこには鍵かぎが象かたどられていた。僕は首飾りチヨーカーを拾って、また歩きはじめた。

　アジアンは身じろぎもしなかった。

　すぐ前で足を止めると、ようやく顔を上げて僕を見た。何か言いたそうに唇くちびるを動かしたけれど、それだけだった。僕も何をどう言えばいいのかわからなかった。わからないまましゃがんで、さっき見つけた首飾りチヨーカーをアジアンの首飾りチヨーカーに押しつけた。二つの首飾りチヨーカーは、硬かたい音を立てて床に落ちた硬貨のような部分だけを残して、あとは黒い粒りゆう子しとなって飛び散り、少しずつ空気にまぎれていって、やがてわからなくなった。

　なぜだか、ほんの少しだけ笑ってしまった。

　そのあとで気づいた。

　終わった。

　やっと終わったんだ。

「おいこら、アジアン！　のんびりくつろいでねぇで、てめぇもさっさとこっちきて手伝いやがれ！」

　白はく髪はつの男の怒ど鳴なり声が聞こえた。

　僕は立ちあがってアジアンに右手を差しだした。

「行こ」

　薄うす青あお色の瞳ひとみがためらうように揺ゆれた。僕は微び動どうだにしなかった。アジアンがこの手をつかむまで動くつもりはなかった。

　アジアンは泣きだす寸前みたいに目を細め、唇を噛かみしめながらその両りよう端たんを少しだけつりあげて、かすかにうなずいた。

　アジアンの手が僕の手をそっと握にぎった。

　僕はアジアンの手をきつく握りかえした。

epilogue

いつから目覚めていたのか判然としない。泥どろ沼ぬまのような眠ねむりはおぼろげな覚かく醒せいと入り混じってほとんど区別がつかず、何が現実で何が夢かもわからなかった。

これは現実だろうか。試しに上体を起こしてみた。関節に何かねばりけがあるものを塗ぬりたくられてでもいるかのようだ。身体からだ全体が、頭から指先にいたるまで、細さい胞ぼうの一つ一つに熱で溶とかした鉛なまりをつめこまれているみたいに重く、熱っぽい。

彼は自分の部屋の寝しん台だいに寝ねかされていたようだ。全身に、目や鼻び孔こう、口以外の顔にまで、白い布がびっしりと巻きつけられている。どうやらその下には湿しつ布ぷがあてられているらしい。痛みには慣れているので耐たえられるが、身体のところどころを襲おそう無数の針に刺さされているような、刃は物もので引っかきまわされているような感覚からすると、表皮やその下の組織がだいぶ損傷しているのだろう。医術式の中でも、再生治ち療りょうはもっとも困難な部類に入るという話を聞いた覚えがある。格段に時間がかかるとも。肩や胸は痛むが、顔や喉のどにかけてはそうでもない。どうやらそのあたりはおおかた治ち癒ゆしているようだ。

窓際に置かれた椅い子すには、彼の敬愛する主で、仲間で、友でもある男が腰を下ろしていた。腕組みをして頭こうべを垂れている。膝に毛布がかけられていた。眠っているようだ。

窓のカーテンは開けられている。外は明るい。午後の日射しだ。

目を細めていたら、ドアのノブが回る音がして、銀糸を細くのばしたような髪かみの魔ま術じゆつ士しが部屋に入ってきた。彼女は彼を見て目を見開き、何か声を出そうとした。彼は右手を持ちあげて唇の前で人差し指を立ててみせた。男だけではなく、金きん髪ぱつの少女が、いや、女性というべきだろう、やはり彼の大切な仲間が、彼の寝台に突っ伏ぷして静かな寝息を立てている。もちろん、銀ぎん髪ぱつの魔術士も彼の大事な仲間だ。

彼の意図を察したようで、彼女はそっとドアを閉じて忍しのび足で寝台に近づいてきた。囁ささやきかけてきた声もひそやかだった。

「まだ……寝ていないと……」

　彼は曖あい昧まいにうなずいた。

　あのとき彼は、みずからの命が絶たれるとは微み塵じんも思っていなかった。そもそも彼は一個の道具であり、道具は道具としての役割を果たして、いつか潰ついえるものだ。道具は運命を考えない。彼はいつか死ぬだろうが、最さい期ごまで死を覚かく悟ごすることはない。彼にはその必要がない。彼は死を恐おそれたことがないし、これからも恐れないだろう。それでも死ぬわけにはゆかないと、あの瞬しゅん間かん、彼は思った。彼は死ななかった。そして彼のそばには仲間たちがいる。

「今、呼んで……きますね。マリアと、カタリさんを。みんな、ピンパーネルが目を覚ますのを……待っていたので……」

　今度はしっかりとうなずいた。彼らの顔が見たかった。ジナ。わたしは生きている。

　祝花ノリカは赤ん坊ぼうを抱だくのがうまいようだ。部屋の隅すみに座っている彼女の腕うでの中で、ユーリィはときおり笑い声を発することはあっても泣きだすことはなく、だいたいじっとしている。その前であぐらをかいている雷切ライキリは、何度かユーリィにふれようとしたが、そのたびに手を引っこめた。白妙シロタエとチェリーとボダダグは、祝花ノリカの邪じや魔まをしないようにそのそばでじっとユーリィを見つめている。椅子に腰こしを下ろして優ゆう雅がに足を組み、女だてらに口くち髭ひげをしごきながらずっと目をつぶっているジャン・スタンバックは、いったい何をしにこの部屋へきたのか。カイはジョゼと取っ組みあいをしている。もちろんカイは手加減しているだろうが、ジョゼはなかなか勇ゆう敢かんだ。女の子なのに、カイと張りあえるように育ってしまっていいのか。カイも女だ。かまわないだろう。ここにはいない父親も気にしないはずだ。それとも、自分の娘むすめのことになると、意外とそうでもないのか。わからないが、母親のリリアはソファに座って編み物をしながら、たまにユーリィとジョゼに目をやって、静かに、穏おだやかに微笑ほほえんでいる。

「ローガンに会ったんだ」

　そう切りだすと、リリアの手が止まった。リリアはゆっくりと、少しずつ息を吐はきだして、いくらか距きょ離りを置いて隣となりに座っているアジアンに顔を向けた。

「元気だった？」

「ああ。とても、ネ」

「そう」

「ボクが、この手で」

　どう言おうか迷った。事実は一つだし、言わなければならないことは決まっているのに、ふさわしい言葉を選ぶことが、このときがくるまでとうとうできなかった。今、これから口にする言葉も適当ではない気がして仕方なかった。

「あんなことしかできなかった。ボクには。他ほかに方法が思いつかなくて」

「いつかは」

　リリアも自分の言葉に確信を持つことができていないようだった。瞳ひとみを揺ゆらして、だが、視線は決してそらさなかった。

「それは、あの人の役目だったのかもしれないのよ。あの人はもういないから、あなたがやるしかなかったんだと思うわ」

　クラニィがいれば、とは言わなかった。クラニィがいれば、絶対こんなことにはならなかった。そんなことはわかりきっている。誰だれよりも、リリアが。ボクだって。

「きっと、寂さびしくないわね」

　リリアは空の果てに亡なくした者たちの影かげを探すように窓のほうへと目をやった。遊んでいるうちに痛い思いでもしたのか、ジョゼが泣きだして、アジアンめがけて走ってきた。追いかけてきたカイはおろおろしている。アジアンはジョゼを抱きあげた。ジョゼは今に泣きやんで、やがて笑いだすだろう。何度も泣いて、数えきれないほど笑うだろう。

　合成骨材コンクリートの壁かべに背をもたせかけた。壁には大小二つの四角い穴があいている。闇やみ市いちではとくに珍めずらしくもない壁店と呼ばれる個人商店だ。

「景気はどうだ」

「あーまーどっちかってーとそれなり、どっちもどっちでぼちぼちってとこですかねぇー。先日お譲ゆずりしたブツは役に立ちました？」

「それなりにな」

「そりゃーよござんした。ボッキーもこれにて商人あきんどでおますからねえ。お客様あっての商売なんで持ちつ持たれつってーことで一つ。えへへ。お安くしときましたでげしょ。せめて値段分はねえ、お役に立ちましたのならボッキーとしても恐きよう悦えつ至し極ごくでありやんす」

「あれは複製品レプリカだろう」

「レアものでげすよ」

　壁店の中にいる男は微び妙みようにはぐらかして答えた。食えない男だ。

「量産できるなら、俺が買い受ける」

「いやいやいや。そんなそんなそんな。ボッキー一いつ介かいの機術士でげすよ。そう大きな仕事はできませんてば。それにですね。ひょっとしたらボッキー、この街を出るやもしれず」

「故郷にでも帰るのか」

「いやっはっは。帰る故郷なんぞございません。親兄弟は誰も生きとりませんでね」

　一いつ瞬しゆんだが、男の声に暗い響ひびきが交じった。右手の中指で色眼鏡サングラスのブリッジを押しあげながら、機術士匠し

よう合ごうに所属していない、いわゆるはぐれの機術士である男の境きよう遇ぐうを想像した。機術を学ぶためには、誓ちかいを立てていずれかの機術士匠合に加入しなければならない。機術士匠合を抜ぬけるためには、両手の指を切り落として鉛なまりで固め、さらに喉のどを潰つぶすことを強しいられるとも聞く。匠合を脱だつするということは、機術を捨てるということだ。機術を捨てずに匠合の管理から離はなれようとする者は追われる身となる。手段を選ばない、冷れい酷こく非情な、血も涙なみだもない追っ手たちが、誓いにそむいた者の命を容よう赦しやなく奪うばうのだという。

「ここ以外にあるのか、〝ショコラット〟」

「それってボッキーみたいなはぐれっちが安心して商売できる場所が他にあるのでせうか、というような意味で？」

「ああ」

「ここぁー悪かないですよ、実際ボンサイ。お陰かげ様さまで所場代もリーズナボーなプラァーイスにダァーウンダウンしていただきましたしねえ。お得意様も上客からウンコたれからトンデモナシまで各種取りそろえておりやすし」

「女によう房ぼうだけじゃなく愛人もいる」

「たはっ。そんなことまでご存じで？　さすがは王龍の頭目マスターにして龍州連合の頭脳、司し令れい塔とう、御大将、荊王ジンワン様ですな。こいつぁーかにゃわねぇーまいったまいった。へっへへへへ」

　壁店の中にいる男は、しばらくわざとらしい下げ卑びた笑い声を立てていたが、一つ息をついて口調をあらためた。

「こんなオレにもね。夢だの希望だの野心だのがあったんすよ。そのために失ったものだってたくさんある。もう取り戻もどせやしませんが、また夢を見るのはオレの自由です。それでまったまた何か失っても、ね」

「そうか」

「いや、こりゃー柄がらにもなくくだらねえことくっちゃべっちまったな。ボッキー糞くそ真ま面じ目めさと天才っぷりだけが取り柄なのに。ソーリーホーリーベリーロンリー」

荊王ジンワンは壁を軽く叩たたいて〝ショコラット〟の壁店を離れた。

この闇市を首しゆ尾びよく手中に収めてから、まださしたる時間はたっていないが、行き交かう者たちの大半は荊王ジンワンの姿を目にすると慎しん重ちように道をあける。全員が荊王ジンワンの顔を知っているわけではないだろうが、王龍の象しよう徴ちようである黄金龍の刺し繡しゆうと、Ｓ＊Ｋシリアル・キラーズの連中がシリアルキラーの衣服を身につけていることは、かなり知れ渡わたっているようだ。

それだけに、もしかしたら、どこかにひそんで虎こ視し眈たん々たんと荊王ジンワンの命を狙ねらっている者もいるかもしれない。

瞬間、その手の刺し客かくかと思ったが、違ちがった。

向かって左側の建物の屋根から身軽に飛び降りてきた小こ柄がらな男は、シリアルキラーの服を着ていた。

「いッよォッ、ジン！　一人かよ！」

「ああ」

「いーんかァ？　王龍の頭目マスターがよォ。一人ッキシでブラブラぶらついてて」

「お互たがい様だ」

「オレァ手下どもがゾッロゾロついてきてたんだけどよォ。チャキッと撒まいてきた。うっぜーンだもんアイツら」

「お前を心配しているんだろう」

「イ・ラ・ネーッつの。オレァ鬼おに強ェーしよォ。つーかジン、何してんの？」

「用があってな。このあとは会合がある。お前も出ることになっているはずだが」

「あー。あったっけそんなん。でもさァ。オレ暇ひまなんだよねサイキン。ユリィもミスター・ピンパーのアレでつきっキリンだしよォ。ほんでもってサッパシ遊んでくンねェーしよォ。身体からだ

余ってんの。余りまくりなの」

「だったら、俺と遊ぶか」

「ふぇっ？」

　飛燕フエイヤンは大きな目を丸くして素すっ頓とん狂きような声をあげた。

　荊王ジンワンは右手の中指で色眼鏡サングラスの位置を直して歩きだした。とっさに口をついて出た言葉だ。たいした意味はない。

「冗じよう談だんだ」

「──しかし、いろいろあったんだな」

「あったね。いろいろ。なんか、ありすぎなんじゃないのっていうくらい」

「というかな」

　ベアトリーチェは眉み間けんに縦たて皺じわを刻んでため息をついた。

「だいたいお前は巻きこまれすぎなんだ。何でもかんでも首を突つっこむからじゃないのか。わたしのときだってそうだろう。いや、責めてるわけじゃない。そうじゃないんだ。お前には感謝してる。でもな。お前を見ていると──まあ、いつも見ているわけじゃないが、こんなふうに話を聞いていると、あぶなっかしくてしょうがないんだ」

「……もしかして、心配させちゃってる？」

「当然だ！　お前は、わたしの、その──」

　ベアトリーチェは口ごもって天てん井じようを見上げ、唇くちびるをへの字に曲げた。

「と、友だち、だからな。友だちのことを心配して何が悪い。あた

りまえじゃないか。人として。わたしは人なんだからな」

「ありがと」

「やっ、やめろ、礼なんて、気持ち悪い！　なんだか変だぞ、お前！　どうしてそんなに素す直なおなんだ！　お前らしくない！」

「ちょっとさあ、修しゆ羅ら場ばっていうのかな、そういうのを経験して、僕も大人になったのかもね。お礼くらいはさらっと言える程度に」

「本当に」

　急にベアトリーチェが声をひそめて、探さぐるような、うかがうような目つきになった。

「本当に、それだけか？」

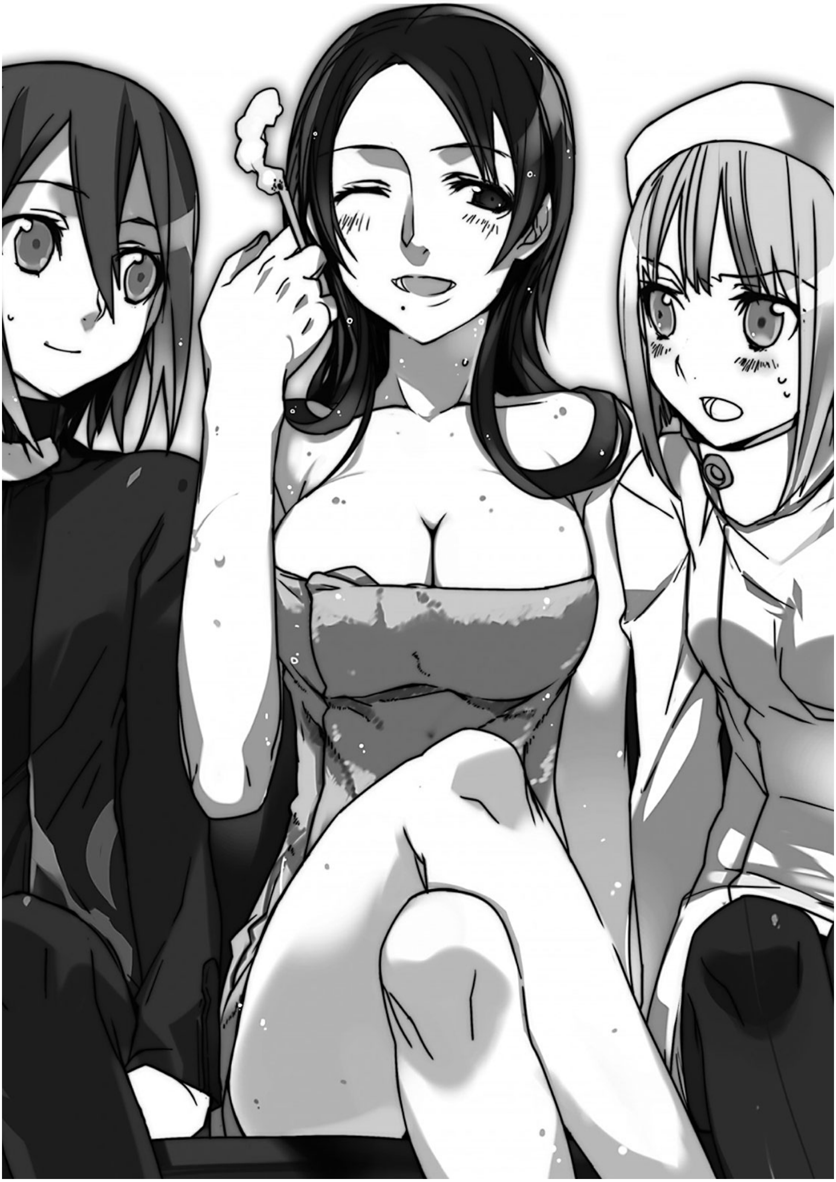
「それだけって？」

「だから……」

　ベアトリーチェは言いよどんで、黙だまりこんでしまった。なんだか気まずい雰ふん囲い気きになりかけた。ちょうどいいタイミングだった。ずっと聞こえていたシャワーの音がやんだ。

　アサイラムの奥にあるモリーの私室は、バスルームとキッチンが備えつけてあって、広々としてはいるけれど、大きなベッドとソファ、それからローテーブル以外には何もない。自分の部屋に仕事を持ちこまないことに関しては徹てつ底ていしている。モリーにとって、ここは寝しん食しよくと休息のためだけの場所だ。

　バスルームからタオルを一枚巻いただけの姿で出てきたモリーは、ソファに座っているマリアローズとベアトリーチェの間に無理やり割りこんできて、ローテーブルの上に置いてあった煙草たばこの箱に手をのばした。正直、煙草の煙けむりは好きじゃないけれど、一日の仕事を終えてシャワーを浴び、さっぱりしているというよりもちょっとぐったりしているモリーに、吸うな、とは言えない。マリアローズはモリーがくわえた煙草にライターで火をつけてあげた。



「ふうぅぅぅぅ。両手に花状態で、入浴後の一服。至福のときね」

「母様。髪かみがぬれっぱなしじゃないですか。ろくにふいてないでしょう。このままだと風か邪ぜひきますよ」

「リーチェがふいてくれたらいいじゃない」

「甘えないでください」

「ケチねえ」

「ベアトリーチェ、バスタオルってどこにあるの？　そのままにしといたら、ほんとに風邪ひいちゃいそうだし」

「これ、使う？」

　モリーが自分の豊満な胸から足の付け根あたりまでをかろうじて隠かくしているタオルを指さした。マリアローズは眉まゆをひそめて頭を掻かいた。

「それとったら、裸はだかになっちゃうでしょ」

「生まれたままの姿になるだけじゃないの。わたしはまったく恥はずかしくないわ。むしろ誇ほこらしいくらいよ」

「や、僕が恥ずかしいから」

「タオル、とってくる。マリアローズ、それまでお前は母様が素っ裸にならないように押さえていてくれないか」

「え？　押さえるの？　それはそれで、かなりまずくない？」

「……う、そ、そうだな。タオルはバスルームにある。すまないが、とってきてくれ」

「つまーんなーい。押さえられたーいー。押ーさーえーつーけーてー。最近忙いそがしすぎて、そういうこともめっきりないんだからー」

　結局、マリアローズがバスタオルとバスローブを持って戻もどってきたときには、全ぜん裸らのモリーが床ゆかの上でベアトリーチェを組み伏ふせている、という、なんとも名状しがたい光景を目もく撃げきする羽目になった。てゆうか、バスローブがあるなら、最初から着てくればいいのに。

　救出したベアトリーチェと二人がかりで、いやがって暴れるモリーにバスローブを着せたり、髪をふいてあげたりするのにもずいぶん手間どった。それに比べれば、三人でキッチンに立って簡単なものを作り、できあがった料理とモリーが飲む酒をローテーブルに

運ぶくらいの一仕事は、なんてこともなかった。

　食事をしながら、積もる話に花を咲さかせた。本当に積もりすぎていて、いったいどれだけ咲かせればこの花は尽つきるのやら。モリーがシャワーを浴びている間も、ベアトリーチェには少しだけ話したけれど、一から十までくわしく語ろうと思ったら、いくら時間があっても足りないだろう。

　まあ、何から何まですべて話せるわけでもない。話そうにも、自分の中でまだ整理がついていないのか、うまく言葉にできない出来事もあった。その気になれば、話せないこともないのかもしれないけれど、もろもろの事情により意図的に端折はしょった、どうしても端折らざるをえなかったこともある。

　とくに、ジェードリからエルデンに戻ってきたあとの一件については、どうも喋しゃべりづらかった。それで適当にごまかそうとすると、なぜかそのあたりに次々と突っこみが入った。とりわけモリーの追及は厳しくて、頭のいい人って怖こわい、と心底思った。ベアトリーチェのやや感情的な訊じん問もんにもたじろがされた。

　とうとうしどろもどろになったマリアローズは、あ、そうだ、と手を打って自分の背負い袋ぶくろの中を漁り、小さな包みを二つとりだした。

「話すのに夢中ですっかり忘れてたよ。ジェードリで買ってきたんだ。はい。お土産みやげ」

　二人は少々不満げだったものの受けとって、包みをといた。亀かめと巻き貝を象かたどった細工物はなかなか好評だった。うまい具合に話題をジェードリ旅行に引き戻すこともできた。

　そのうちすっかり夜が更ふけて、じゃあそろそろ、と食器を片づけようとしたら、モリーに腕うでをつかまれた。

「まだいいじゃない。どうせ今日は泊とまっていくんでしょう」

「え？　泊まって？　や、そんなつもりはないけど──てゆうか、僕、モリーのとこに泊まったことはないよね？」

「まだないわね。今日が初めて」

「あ、うん、や、でも」

「泊まっていきなさいよ。わたしのベッドは大きいし、三人で寝ねても余よ裕ゆうがあるわよ」

「三人？」

　マリアローズはベアトリーチェと顔を見あわせた。ベアトリーチェの頬ほおがみるみるうちに真っ赤に染まった。やっぱり帰ったほうがいいのかもしれない。でも、帰りたくないという気持ちもあった。たしかに訊きかれると答えに窮きゅうすることもあるけれど、もっと話したい。二人の話も聞きたい。僕はモリーが好きだし、ベアトリーチェのことも好きだ。それがどういう好きなのか、うまく説明できる自信はないけれど、素す直なおになろうと思った。

「じゃあ、泊まってこうかな」

「そうしなさいよ」

「そ、そうか。うん。そうだな。せ、せっかくだし、泊まっていけ。うん」

「僕はソファに寝ればいいわけだし」

「だったら、わたしも君と一いつ緒しよにソファで寝ればいいわけね」

「か、母様はベッドで寝てください！　しっかり身体からだを休めないと！　ソファにはわたしが寝ますから！」

「え？　僕と一緒に？」

「ん？　あれ……？」

「やっぱり三人でベッドに寝て、朝までくんずほぐれつしましょうよお」

「し・ま・せ・ん！」

「そ、ソファにはわたしが一人で……そうしたら、マリアローズは母様と……あれ？　わ、わたしはいったいどうすれば……!?」

リキエルはミルクをストローで飲んでいる。

ダリエロはウオッカだ。酒なら何でもいけるクチだが、腰こしを据すえて飲むときは、香こう草そうを漬つけた薄うすい黄緑色のウオッカをとめどなく胃に流しこむのがダリエロの流りゆう儀ぎだった。酔ようためというよりも、自分自身を痛めつけようとしているかのようだ。

ベティも今夜は浴びるほど飲むつもりだった。マッケンレー。クラニィが好きだったウイスキーだ。苦味が強いし、独特の癖くせもある。最初、ベティの口にはあまりあわなかったが、いつの間にか慣れていた。慣れるほど飲んだということだ。

そう。だいぶ飲んだ。

ずいぶん飲んだはずなのに、どういうわけか酔いが回ってこない。

今日のミケランジェロは静かだ。

カウンターの席には、ベティと、その右にリキエル、左にダリエロが座っているだけだが、他ほかに客がいないわけではない。やや個性的な女性従業員たちによる接客も通常どおり行われている。それなのに、やけに静かだ。

ただそう感じられるだけだろうか。

ダリエロも、リキエルも、あたしも、口をきかないから。

誰だれも喋ろうとしないから。

今にもカウンターの奥のキッチンからローガンが出てきそうな気がする。ローガンはなんだか少し困っているような笑え顔がおでたわいのないことを言って、ダリエロに罵ば声せいを浴びせられ、リキエルが冷静に、短い言葉で反論する。ダリエロはむきになって何か言い返し、ベティは呆あきれて肩かたをすくめるだろう。それを見て、ダリエロが突つっかかってくる。ローガンが、まあまあ、と止めに入ったくらいでは収まりがつかない。クラニィがいれば、軽い皮肉と的を射た批評でうまくいなしてくれるだろう。あいつはたまに微笑ほほえみながら、ただ見ているだけだろう。

「やっぱり、ちょっと酔ってきたのかしらね」

「はっ」

　ダリエロがグラスのウオッカを飲み干して叩たたきつけるようにカウンターに置き、口の周りを手の甲こうでぬぐった。

「ザルのてめぇがその程度でかよ」

「俺は下戸だ」

「黙だまりやがれ、独う活どの大木。てめぇには言ってねぇ。勝手に話に入ってくるな。つーかな、リキエル。前々から疑ってたんだが、てめぇ、マジで飲めねぇのか」

「そうだ」

「ほぉ。そいつぁ妙みようだな。さっきからてめぇがチューチュー飲んでやがるミルクだがよ。どうも変な味がすると思わねぇか」

「む……」

　リキエルは仮面の下にストローを差しこんで、ミルクを一吸いした。

「やや甘みが強い」

「リキュール混ぜさせといたからな。何たらミルクとかいうあつらえ向きの白いやつがあってよ。てめぇみてぇな野や蛮ばん人じんは知らねぇだろうが」

「俺は」

　リキエルはミルクのグラスをカウンターにそっと置いて椅い子すを立った。何をするのかと思ったら、いきなり腕うで立たて伏ふせを始めた。

「俺は。俺は。俺は」

「……おい、何なんだ、この塵屑ゴミクズ野郎。誤作動起こしてやがるぞ」

「さあ……」

「俺は。俺は。俺は。俺は。俺は。俺は。俺は。俺は」

　リキエルの腕立て伏せはどんどん速度を増していった。赤銅色の逞たくましすぎるほど逞しい裸はだかの上半身が赤みを帯びて、汗あせが噴ふきだしている。湯気さえあがりはじめた。いつまでつづけるつもりなのか。いいかげん止めようとしたら、リキエルは急に腕立て伏せをやめ、床ゆかにあぐらをかいてうなだれた。その隆りゅう起きした肩が小刻みに震ふるえているのは、呼吸が乱れているせいだろうか。どうやら違ちがうようだ。

　鼻をすする音がした。

　しゃくりあげるような音も聞こえだした。

　呆あっ気けにとられていると、リキエルはいきなり立ちあがって椅子に腰を下ろし、ダリエロの前に置いてあったウオッカの瓶びんを引っつかんで、まだミルクが三分の一ほど残っている自分のグラスにドバドバそそいだ。

「……おい、そいつはまずいぞ、おそらく。やめといたほうがいいんじゃねぇのか」

「胃の腑ふに入れば同じことだ」

「いや、そりゃあそうだけどよ」

「怖こわいのか。腰こし抜ぬけめ」

　リキエルは仮面の奥で、ふん、と鼻を鳴らして、ストローで一気にミルクウオッカを吸いあげた。

「……まずい」

「たりめぇだろうが。だから言ったじゃねぇか」

「お前のせいか、ダリエロ」

「はあ？」

「お前のせいだな」

　リキエルがゆらりと立ちあがると、ダリエロも椅子から腰を浮う

かせて唇くちびるを舐なめた。始まるのか。馬ば鹿からしくて制止する気にもなれなかったが、その必要はなかった。

「誰のせいでもない」

　リキエルは低くそうつぶやいて、また腕立て伏せを始めた。

「下戸なんかじゃねぇ。ただの酒乱じゃねぇか。ふざけやがって」

　ダリエロはまた椅子に腰を落ちつけて、グラスにウオッカをついだ。

「あぁーあぁーやってられねぇな。辛しん気きくせぇ、くそまずい酒だぜ、畜生フアツク。肴さかなになるような話もねぇしよ」

「あんたが何か話してよ」

「冗じよう談だんじゃねぇ。なんで俺が。だいたい話すことなんざ何もねぇんだよ」

「話したいことはあるんじゃないの」

「ねぇな」

「嘘うそばっかり」

「てめぇ」

　ダリエロが素す早ばやく手をのばしてきて、抱かかえこむようにベティの首に腕をからめた。

　酒くさい息が頬ほおにかかっても、ベティは顔をしかめなかった。じっとダリエロを見つめかえした。

「戯たわけたことばかりぬかしてやがると、やっちまうぞ」

「やれるものならやってみなさいよ」

「やれねぇとでも思ってるのか」

「どうかしら」

　ダリエロの青い右目と黒い左目には、別々の感情が宿っているよ

うに見えることもある。

　この男はへそ曲がりで、狡こう猾かつなのに愚おろかで、人として最低なのに、なぜか人を惹ひきつけてやまない。縛しばられることを何よりも嫌きらい、どこかへ飛んでゆくためなら手に入れたものすべてを打ち壊こわしてしまうこの男を、いったい何が繫つなぎ止めているのだろう。

　ダリエロは先に目をそらしてベティから離はなれ、グラスを呷あおった。

「意い気く地じなしね」

　ベティはふっと笑った。

「でも、そういうあんたは嫌きらいじゃないわ」

　ダリエロは軽く頭を振ふると、グラスを額にあてて目をつぶり、そうかよ、と呻うめくように言った。氷どころかぬるい酒さえ入っていない空のグラスで、熱を冷まそうとでもしているかのようだった。ウオッカの瓶の中身は残り少ない。ベティが追加を注文したら、余計なことを、とダリエロは怒おこるだろう。それもいい。手をあげようとしたら、出入口のドアが開いた。女性従業員たちが、いらっしゃいませ、と出で迎むかえようとしたのだろうが、彼女たちの声は途と切ぎれた。かわりに甲かん高だかい声が店内に響ひびき渡わたった。

「だりゅりぇろー！」

　名を呼ばれたダリエロが、びくっと身体からだを震わせて振り向いた。

　ミシーリャが犬みたいに四つん這ばいで駆かけてきて、ダリエロに飛びついた。

「だりゅりぇろー！　ぱんぴょろりりょんぷりゅりゅぽー！」

「ばっ──ちょっ、おい、やめろ、ミシーリャ！　つーかてめぇ、なんでここに……」

「誰だれかに教えたの？　あたしたちとここで飲むって話」

「い、いや、言ってねぇ。俺が誰と何しようが勝手だろうが。なんでわざわざ」

「てぃろりんぴゅりゅんぽろりゅんしゃー」

「ああ？　においでわかっただと……？」

　ミシーリャだけではなかった。少し遅おくれて、よく見知った者たちがぞろぞろとミケランジェロに入ってきた。あー、いたいた、とこっちを指さしたのはナツコだ。ナツコに手を引かれて、ヴィクトリアが申し訳なさそうに頭を下げている。祝花ノリカもなんだかすまなそうにしていた。その後ろには仏ぶつ頂ちよう面づらの雷切ライキリもいた。クララもいる。リー・ブラックに、リョーヨルカとシャマニも。レイジ兄妹もいた。ヘンドリクに、寂星ジヤクセイ、それから──あいつまで。昼飯時ランチタイムの、全員ではなかった。たまたまn'ebulaで顔をあわせた者たちが、ナツコあたりの提案で、連れ立ってやってきた。そんなかんじだった。仲間たちはカウンターのあいている席や近くのボックス席を占せん領りようして、次々と注文の声をあげた。

「あたしねぇ、カシスソーダ！　あ、今日はダリエロの奢おごりでいいぃーんだよねぇ？」

「ああ？　てめぇ、ナツコ、この糞くそビッチが。いきなり現れて、何わけのわからねぇことほざいてやがるんだ。犯おかして殺バラすぞ」

「いやん。暴力ハンターイ。犯すだけにしといてぇー」

「今日は俺が持とう」

　リー・ブラックがそう宣言すると、あちこちで拍はく手しゆと歓かん声せいが起こった。

　資産家のリーは、いつもではないが、気が向いたときだけやけに気前がいい。おそらく他ほかの客のぶんも支し払はらうつもりだろう。ダリエロは抱だきついて離れないミシーリャに辟へき易えきしているのか、ゆがんだ顔をさらにしかめている。リキエルはまだ腕うで立たて伏ふせをつづけていた。そのリキエルが座っていた椅い子すに──ベティの隣となりに、あいつが腰こしを下ろした。

「ボクはマッケンレーのカスクストレングスをストレートで」

「それって」

　ベティは思わず薄うす青あお色の瞳ひとみに見入ってしまい、言いかけた言葉をのみこんで首を振った。

「なんでもないわ」

「そう」

「今日はね。三人で潰つぶれるまで飲むつもりだったんだけど」

「邪じや魔ましてすまなかったネ」

「いいのよ」

　また今度にすればいい。人は皆みな、明日をも知れぬ身だとはいえ、今くらいは明日のことを、明後日あさつてのことを、一年先に仲間たちとすごしている未来を信じたかった。その結果、裏切られたとしても、信じるものもなく、あてどなく、ただ身一つで荒こう野やをさすらうよりはましだろう。あたしは魔ま術じゆつ士しで、同時に一人の人間だ。そのことに、もっと早く、失う前に気づくことができていればよかったのに。

「いいの」

　夜も更ふけた鉄てつ鎖さの憩いこい場をそぞろ歩きながら、吹ふき渡る風に冬のにおいを嗅かいでいた。

　寒さを感じることはあっても凍こごえ死ぬことはないのだが、彼は一応、コートを羽織っている。容よう貌ぼうも体格もおおよそ平均的だから、服装と振る舞まいにさえ気をつけていれば、まず誰も彼に目をとめない。こんな夜は少し首をすくめるような姿勢で歩いて、たまにコートの襟えりをかきあわせてみたりもする。できるだけ同じ場所を通らないようにするのもコツの一つだ。もし誰かにあやしまれても、気づかないふりをしていたほうがいい。人間はたくさんいる。不夜の城であるクァラナドとは比べるべくもないが、この時間帯でも営業中の露ろ店てんがいくらかあるし、行き交かう人の流れが完全に途と絶だえることはない。彼もその中の一人だ。暇

ひまを持てあまして夜半の鉄鎖の憩い場をほっつき歩いている、ただ擬ぎ態たいが得意なだけのニンゲンにすぎない。

　酒に酔よった二人の男が、肩かたを組んで何か喋しやべりながら彼のそばを通り抜ぬけていった。彼は足を止めて彼らの後ろ姿をしばらく眺ながめていた。

　遠くの露店の陰かげで、襤ぼ褸ろをまとった小男がうごめいている。おそらく彼は、このエルデンでもっとも顧かえりみられることが少ない者たちの一員だ。彼らは第六区にあるラビッシュバレーやその周辺に住みついていて、エルデン中から塵を収集して回っている。塵屋ダストマン、あるいは、死人フオーレンとも呼ばれる彼らの生態はあまりよく知られていない。下水道に住みついている溝鼠族ブラウニグよりも謎なぞの多い人々だ。

　耳を澄すますと、遠くの歌声が聞こえた。昼夜を問わず楽器を演奏しながら声を張りあげて、投げ銭で生計を立てている、もしくはなんとか立てようとしている者も珍めずらしくない。

　どこかの街角には、追い剝はぎの機会をうかがって暗がりに身をひそめている者もいることだろう。

　一夜の慰なぐさめを求めて金で買った女の腕うで枕まくらにすがる男も、そのうち目を覚ますはずだ。

　朝がくれば、我が子を抱いて眠ねむる父母の眠りも等しく破られる。

　この吹き溜だまりの国で、人は酒色にふけって、けなしあい、騙だましあって、ときに何かを守り、裏切って、誰だれかを愛し、いたわって、愛しあい、傷つけあって、あるいは盗ぬすみ、奪うばって、殺し、子をなし育てては捨てている。

　君臨すれども統治せぬ王を戴いただくサンランド無統治王国は、一見、弱肉強食のヒトの世界と似ていなくもない。

　あるいは、あえてそのようにつくられたのか。

　それでいて、じつは似ても似つかないくらい、違ちがいすぎるほど違う。

「願わくば、せめて時が満ちて前兆のオーメ時代ネイジが終わるま

で、僕の愛する者たちと彼らの愛する者たちに幸多からんことを」

　彼は冷えた夜空を仰あおいでひそやかに祈いのりの言葉をつぶやいた。そして、父よ、あなたに呪のろいあれ。生まれいでしときより絶えたことのないこの呪いさえ、あなたの目には壊こわれた愛としか映らないのかもしれないが。

　何もする気になれなくて、ただベッドに寝ね転ころんで細工物をもてあそんでいた。

　透とう明めいな石のようなものでできた部分の陰いん影えいや光こう沢たくと、ちりばめられている小さな宝石の輝かがやきが、光の加減で微び妙みように、さまざまに変化する。どう光をあててもモチーフである薔ば薇らから離はなれることなく、むしろ色とりどりでいろいろなイメージを持つ薔薇という花を表現していた。初めて見たときから手のこんでいる細工物だと思っていたけれど、これはもしかして定価の九万八千ダラーに見あうだけの、いや、それ以上の価値がある逸いつ品ぴんかもしれない。

　体温を吸ってあたたかくなった薔薇の細工物を、なんとなく額の上にのせてみた。

　馬ば鹿かなことをしていると思い、指でつまんで遠ざけたり近づけたりしてみた。

　握にぎりしめてベッドの上でごろごろしていると、ため息が出た。

　目をつぶって、頭の中をからっぽにしようとしたけれど、うまくゆかなかった。身体からだを起こして、反動をつけてベッドから降り、薔薇の細工物を机の上に置いた。位置が気に入らなくて、置きなおした。少し離れて眺めてみると、やっぱりなんだか違う気がした。もう一度、位置と角度を変えてみた。どうもしっくりこない。ここじゃないんだ。この細工物のあるべき場所はここじゃない。結局、抽斗ひきだしにしまうと、疲つかれを感じてベッドに腰かけた。すぐに立ちあがって、出入口へと向かった。引っ越こしの準備も少しずつ進めないといけない。その前に気分転てん換かんをしよ

う。つめたい風にあたって、憂ゆう鬱うつなんか吹き飛ばしてしまおう。

　ドアを開けた。

「やあ」

　聞きたくないし、本来、ここで聞こえるはずがない、聞こえるようなことがあってはならない声を聞いて、見たくない、ここで見えるようなことがあってはならない姿を見て、顔面の筋肉が引きつった。あとずさりすると、あいつは進みでてきて、でも、部屋の中までは入ってこなかった。あたりまえだ。勝手に入られては困る。そんなことは許さない。絶対に。てゆうか、どういうこと？　わからない。こいつの考えてることが、ぜんぜん、さっぱり。あのときはシリアスっていうか、もうちょっとマシなかんじだったのに。なんでこうなるかな。

　とりあえず、これ見よがしに深々とため息をついてみせた。効果はなかった。やつは平然としている。きっと心臓に剛ごう毛もうが生えまくっているんだ。そうに違いない。

「何。何の用」

「ボクもいろいろ考えたんだけどネ。まずはこうするべきだという結論に達したんだ」

「どういう結論さ」

「簡単なことだヨ」

　やつは両手に抱かかえた真っ赤な薔薇の花束の香かおりをかいで、うっとりしたように目を細めながら、首を左右に振ふってみせた。

「とにもかくにも正式に、堂々と、まっすぐに、ボクの激しく、熱く、真しん摯しな思いを、この花を贈おくるとともに、あらためてキミにはっきり伝えようと──」

「いらない」

「えっ」

「なんで驚おどろくわけ」

「だ、だってキミは、その──あのとき、ボクのことを」

「嫌きらいになれない、とは言ったけど、それ以上でもそれ以下でもないから」

「照れる必要はないヨ？」

「や、これっぽっちも照れてないし。見ればわかるでしょ？　というわけなんで、今すぐ帰って。さよなら」

「久しぶりに会えたのに、帰るなんてそんな」

「久しぶりってほどじゃないだろ」

「せめて、部屋に招き入れてお茶くらい飲ませてくれてもいいはずだヨ。ボクはそう思う。そう思いたい」

「あれ。なんか強気だね」

「そうじゃないヨ、マリア。強気とか弱気とか、そんな問題じゃない。ボクはただ、こんなにもキミを、マリア、ああ、マリアマリアマリア、キミだけを、強く、途と方ほうもなく強く求めているんだ。そのことをどうかわかって欲しい。抑おさえきれないんだ極限愛ラヴ・マツクス」

　相変わらずの陶とう酔すいしきったようなうっとうしい口調と、めったやたらに大おお袈げ裟さな身振り手振りの端はし々ばしにうかがえるわざとらしさの意味に、僕はずっと気づいていなかったんだ。

　いろいろ考えたんだけどネ、か。

　無理しなくていいのに。

　たしかにあの日以来、会っていなくて、次に顔をあわせたときのことを思うと気が重かった。どこかで出くわしたら、自然に挨あい拶さつできるだろうか。何を話せばいいのか。考えれば考えるほど胸が苦しくなって、少なくともこっちから顔を見に行くことはないだろうし、あっちも気軽に「やあ」という具合にはゆかないだろうから、もしかしたらあいつと会うことはもう二度とないかもしれな

い。それならそれでしょうがない。そんなふうに思ったりもしながら、心のどこかで否定していた。

　あいつはきっと会いにくるだろう。

　僕は行けない。

　だから、あいつはくるだろう。

　まるで何事もなかったかのように。

「じゃあ、お茶だけね」

「へ？」

「お茶。飲むの？　飲まないの？　どっち？」

「あ──いや、ええと……いいのかい？」

「ダメ」

「そ、そう」



　一いつ瞬しゅんだけだったけれど、アジアンは目を伏ふせて、

がっかりしたというよりも傷ついたような顔をした。それでも唇くちびるだけは無理やり微笑ほほえませていた。

　何だろう。

　肋あばら骨ぼねがきゅっと縮んで肺や心臓を圧あつ迫ぱくした。何かに胸を押されたわけでもないのだから、そんなはずがない。でも、胸が痛くて、苦しくて、それなのになぜか、かすかに甘かった。ほんの少しだけ甘い痛みだった。

「嘘うそだよ」

「え」

「入れば？　ただし、お茶だけだからね」

「あ、ああ」

　アジアンはうなずきながらも少し目を見開いて、ぼんやりしている。こういうときは、わりとかわいいんだけどね。ふとそんなことを思ってしまった自分自身に腹が立って、アジアンが部屋に入ってくる前にドアを閉めてしまいたくなった。我が慢まんするのが大変だった。

『薔薇のマリアX．黒と白の果て』了

　あとがき

　僕ぼくは高い場所が苦手です。小さいころは屋根から飛び降りたり橋の欄らん干かんの上を歩いたりして遊んでいたので、そうでもなかったような気がするのですけれど、いつの間にかダメになっていました。もっとも、何が何でもダメ、というわけではなく、落下してしまう危険性がまずない場合はわりと平気なのです。ものすごく高い建物でも、窓越しに下を見る程度なら何ともありません。だから大だい丈じよう夫ぶかもしれないと思ったのです。

　担当Ｋ氏に誘さそわれて、東京ドームシティのラクーアにあるサンダードルフィンというジェットコースターに乗ってみることにしました。ジェットコースターは小学生のときに一度、乗ったきりで、どういうものかよく覚えていなかったのですが、とりあえず危険はないだろうと考えたのです。死にはしないだろう。だから大丈夫に違ちがいない。

　どこが大丈夫なんだよ。バカ。

　まず八十メートルの高さまで上がって、そこから落ちはじめた瞬しゆん間かん、僕は目をつぶってしまいました。死を覚かく悟ごしました。早く終わって欲しい。早く終わらないと死ぬ。何回も死ぬ。実際、僕の精神は何度も死にました。ひどい体験でした。あのときのことを思い返しただけで、汗あせが出てきます。胸が締しめつけられます。とても苦しいです。

　もういい。もうやだ。二度と乗らない。僕の感想はそれだけです。まったく理り不ふ尽じんです。なんで僕があんな目に遭あわないといけなかったのでしょう。僕が何か悪いことをしましたか。償つぐないきれない罪を重ねてきたのですか。締しめ切きりを破りましたか。

　じつは、今回は破りました。正確に言えば、書いている途と中ちゆうで間に合いそうにないとわかったので、のばしてもらったのです。その結果、少々お待たせすることになってしまいました。半年ぶりの『薔ば薇らのマリア』で、今までで一番分厚くて、セブンス

編の終わりです。『Ver0』から蒔まいてきた種のいくつかが花を咲さかせて散ってゆきました。ただ、まだ蕾つぼみのままの花もあります。芽を出してさえいない種もたくさんあります。少なくとも、咲かせる予定の花はすべて咲かせたいと思っています。先は見えませんが、力のかぎり前を向いて歩いてゆくつもりです。これからもおつきあいいただければ幸いです。

それでは、ＢＵＮＢＵＮさんをはじめ、本書の制作、出版、販はん売ばいに関かかわったすべての方々、そして今、本書を手にとってくださっている皆みな様さまへ、全開の感謝と愛をこめつつ、是美三々さんが愛と熱情をこめて「ビーンズエース」で描かいてくださっている漫まん画が『薔薇のマリア②』もよろしくお願いします、と宣伝して、筆を置きます。またお会いしましょう。

二〇〇八年七月

十文字　青

追つい伸しん　一いち迅じん社しや文庫で『ANGEL＋DIVE』という本を出しました。『薔薇のマリア』とは少し毛色の違うお話ですが、よろしければ読んでみてください。続きが近々出ます。

カバーイラスト / BUNBUN

カバーデザイン / 朝倉哲也 + design CREST

MAP製作 / On Graphics

薔ば薇らのマリア

X．黒くろと白しろの果はて

十じゆう文もん字じ　青あお

平成25年9月30日　発行

発行者　宍戸健司

発行所　株式会社角川書店

〒102-8078　東京都千代田区富士見2-13-3

http://www.kadokawa.co.jp/

本電子書籍は下記にもとづいて制作しました

角川スニーカー文庫『薔薇のマリア　X．黒と白の果て』平成20年8月1日初版発行

平成21年3月20日3版発行

BOOK☆WALKER